ワールドメイカー

星屋佑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ワールドメイカー

【Ｎコード】
Ｎ９９１９Ｇ

【作者名】
星屋佑

【あらすじ】
――トレジャーハンター、仕事屋、賞金稼ぎ、それに旅行者…。目的もチームワークも何もかもバラバラな初対面の五人は、変人の天空王にまんまと乗せられて、天空王子誘拐事件の解決を任されてしまう。王子をさらった犯人達の目的は？そして、エドルが予知夢に見た、天高くそびえる巨大な塔の意味は？シリアスのような、ギャグのような、なんとなくな異世界ファンタジー。

一章の登場人物

一章に出てくる主な登場人物を紹介します。

※ご注意！※
物語の真相に迫るようなネタバレはないと思いますが、ネタバレが嫌な人は読まない方が無難です。

・エドル
トレジャーハンターをしている翼人族の少年。十八歳。（逃げ）足が速い。
金目のものに目がなく好奇心も旺盛だが、身に余るような危険は避ける、常識人といえば常識人。根が明るく感情表現豊か。頭を使うことは苦手なようで、そこらへんは連れに任せている。言う事は言うが、世渡りは上手い方だろう。周りに巻き込まれさえしなければ、だが…。

・リシェルア
エドルと共にトレジャーハントをしている魔界人の少女。十五歳。炎の魔法が得意。
あまり目立つような行動や言動を取らず、相方のサポート役を務

めている。スローペースで優しく温和な娘だが、意外とはっきりものを言う面も。
もともと愛らしい顔立ちな上に、おっとりとした雰囲気や、常に浮かべている柔らかい笑顔が男心をくすぐるのか、街中で声をかけられやすい。

・ディオ・ライアネイズ
月傷の銃士とあだ名され、銃の腕と共にその悪名をとどろかせる亜魔界人の仕事屋。二十歳。
仕事屋とは、厄介事や危険事を高額の報酬と引き換えに請け負う者のこと。仕事屋をして生計を立てている者は、ろくな事をやっていない人物が大半だということで、一般市民からは蔑まれている。
額にある、「月傷」のあだ名の元になった傷跡を除けば、全身どこをとっても非の打ちどころがない絶世の美青年。しかし内側は天然のサディストだったりあまのじゃくだったり無愛想だったり口が悪かったりするため、周りに敬遠されがち。

・クリティス・シェリィ
世にも珍しいエルフ族の女剣士。レイピアを優雅に操る。
賞金の掛けられた犯罪者を追って捕らえる、所謂賞金稼ぎをしている。本名は世間にあまり知られておらず、もっぱら「氷海」というあだ名で呼ばれている。
才色兼備で、情報収集や頭脳プレーに長ける。ぶっきらぼうで感情を表に出す事が少ないが、人当たりは悪くなく、また常識人でもある。欠点といえば、話が長くなる事ぐらいだろうか。

・エリス
謎の少女。
観光旅行をしている十六、七歳ぐらいの少女だという以外はまったくの謎。適当な行動と適当な物言いが目立つという以外は謎。お

菓子と買い物が好きという以外は謎。謎だといったら謎なのである。
ちなみに、一番好きなお菓子はアップルパイ。

・天空王ゼルヴァス
天空界を神の名の下に治める王。娘と息子（エイナ　アスロイ）を持つ。妻である王妃は亡くなっている。
変人との噂が絶えず、掴みどころのない語り口調で人をからかうのが好き。しかし人民を想う心は人一倍で、人望もあるようだ。現在の悩みの種は、からくり（機械）好きの娘が度々引き起こす爆発事故。

・天空王子アスロイ
天空王の実の息子。十歳。
気が弱く泣き虫で、歳の離れた姉王女に逆らえない。高い魔力を持つが、それを振るう事を恐れる心優しい少年。

・クォード
謎の組織「希望の箱」に所属して何か企んでいる男。二十代。
頭脳明晰でクール。何かに熱中すると周りが見えなくなるタイプ。

・ルエイド
クォードの弟。兄と共に「希望の箱」に所属している。二十代。
主に兄の補佐を務めるが、やや過激な性格で兄に心配をかけている。

・クロウ
「希望の箱」に雇われた殺し屋。三十代。
酒が大好きで、稼いだ金をほとんど酒代につぎ込んでいるため、よく金欠になるらしい。

第一章　プロローグ

夢を見た。

最近、同じような夢を繰り返し見ている。
妙にはっきりした夢で、起きたときに一瞬、それが夢であったのか現実であったのかわからなくなってしまうほどだ。
エドルには、これが予知夢というものであることがわかっていた。
そういう明瞭な夢を今まで何度か見たことがあるし、その数日後に夢の内容と同じ事が起きるというのも知っていた。
どうにも、そういうものを受信しやすい体質らしい。しかし、自分自身はあまりこの事を気にしていなかった。
何より、これから先の出来事を知ることができるから、便利だったのだ。

途方もなく高い塔を、遠くからじっと見ている夢だった。
島の真ん中に突き立つ、巨大な塔。かなり距離を置いて眺めているというのに、てっぺんははるか上空の雲の中に隠れている。まるで、無限に伸びているのではと疑うほどだった。
しかし、たったそれだけの夢だというのに、起きた後の気分はいつも、信じられないほど悪かった。実際には見たことも聞いたこともない塔だというのに、この、憎くて仕方のないものを視界にいれてしまった時のような気分は、一体なんだというのだろう。
少なくともその点は、今までの予知夢とは違っていた。

「今日は、特に最悪だな…。
なんだよ、おれに恨みを持ってる奴が、呪いでもかけてんじゃねーだろーな」
「あら、エドル。おはよー」
起き上がって頭を掻いていると、横からこちらの寝ぼけ顔を覗き込んでくる少女が一人。
「…はよ、リシェルア」
三歳下の相棒、リシェルア。いつも、気の抜けるほど柔らかな微笑みを浮かべている。
朝の日差しが眩しくて、目を細めていると、「はい」と水の入った木製のカップを差し出された。そばにある泉で汲んできたのであろうきれいな水が、太陽の光を反射している。
「目、覚めるわよー」
「おう。ありがー―」
穏やかに流れる時間に思わず顔を緩め、カップに口をつけて。

「って、そうじゃねえええええええええ!」

冷水によって覚醒したその瞬間、頭の中によみがえったのは――
今自分たちが置かれている、非常に残念な状況だった。

出会い

木の上の巣で子育てに励む親鳥や小鳥の鳴き声が、耳触りで仕方がない。降り注ぐ朝の日差しも木の葉のざわめきも、何もかもがうざったい。

エドルは今、不機嫌なことこの上なかった。昨晩の夢が原因の一つではあるのだが、それ以上に、この状況が一番彼を悩ませていた。もう、今日で三日目なのだ。この果てのない樹海をさまようのは。

「そんなに焦っても、どうしようもないわよー」

そう言って、のんびりと寝袋を畳んでいるリシェルア。

「どうにかしなきゃなんねーんだよ！いつまでたっても出れねーじゃねーか！」

手荷物の中の食料はもはや乏しく、あと二日も迷えばその先にあるのは飢え死にだ。かといって、コンパスもなければ地図もない。

「だから、やめておきましょうって言ったじゃないー。お金がないからって、地図もなしにこんな樹海に入るなんて、無謀が過ぎるわー」

「し、仕方ねーじゃん…てっとり早くもうけるには、遺跡の宝物をくすねるしか…。

だって、仮にもおれらはトレジャーハンターを名乗ってるんだぜ？魔獣退治とか人から面倒事引き受けるとか、仕事屋まがいのことはしたくねーし」

こんな危険な状況に陥っているのは、ほぼエドルの自業自得であった。

トレジャーハントの旅の途中で持ち金が尽き、金を稼ぐには一発当てるしかないと、ほとんど何の準備もしないままに、樹海に飛び込んでしまったのだ。この樹海には、誰も荒らしていない遺跡が眠っているとかで、トレジャーハンターの腕がうずいたというのも理由

の一つ。
「後先顧みずに行動するから、こんなことになっちゃうんじゃない」
「……」
「あたしは何度も止めたわよー？」
「ご、ごめんなさい…」
笑顔のはずなのに、威圧感。たまらずエドルは、頭を下げた。
しょうがないわねえ、とため息をつくリシェルア。
「助けはもとより期待できないから、待っていても埒が明かないのよねー。なら、やっぱり歩くしかないのかしらー」
「だよなあ…。腹は減るけど、そうするしか…」
二人は身体を起こすと、身なりと荷物を整えて、あてもなく進み始めた。朝食は、もちろん抜きだ。
「せめて、樹海の外に出れればいいんだよな。遺跡に着かなくても」
本当のところは、偶然遺跡にたどり着いて宝と一緒に悠々と帰還…というのが一番好ましいのだが、そんな都合のいいことが平気で起こるのならば、とうの間に樹海を抜け出せているはずだ。
エドルは一人、肩を落とした。
「……エドル」
その肩を、リシェルアが後ろからそっと叩く。
「なんだよ、慰めならあとに…」
「何かいるわ」
文句を言おうと振り返ると、草むらを見つめる横顔があった。その視線の先に、「何か」がいるらしい。
魔獣かもしれない。山や森にはたいてい、人を襲う獣が多く棲みついている。特にこの物騒な樹海は、人里から離れているせいで魔獣の退治屋も滅多に入らないから、格好の巣窟になっていた。
これまでにも、何度も凶暴なものと出くわしている。危険な遺跡に入るのが生業であるので、エドルもリシェルアも、剣や魔法での戦いには慣れているのだが。
エドルはさっと身がまえて、腰からダガーを抜き出した。リシェル

アが、長い銀の杖を片手に呪文を呟いている。
しかし。

「っくしゅっ…
あ、やば。」

「「?!」」
注視している場所から、なんともかわいらしいくしゃみが聞こえてきた。今までの行動を止めて、二人は顔を見合わせる。
魔獣ではない。草むらに隠れているのは、人間だ。しかも、隠れているつもりでうっかりくしゃみをしてしまうような、間抜けな人物だといえる。
「…今更取り繕っても無駄だからなー。さっさと出て来い」
拍子抜けしたエドルは、ナイフをしまうと、気だるい声色で相手に声をかけた。しばらくすると、何やら独りで文句をつぶやきながら、赤銅色の髪をした少女が草むらから立ち上がった。

2

「名前は？」
「…エリス・アルカディア」
むっつりした顔でエドルをにらみ、少女は低音で答えた。
彼女の体には、丈夫な縄が巻きついている。草むらから現れたところを、エドルがすかさず縛ったのだ。
「っていうか」
つん、と顔を逸らすなり、彼女は不満げに言う。
「何で地図はないくせに、縄は持ってるわけ？意味わかんない」
「うるさいそれには触れるな！
それより！何でそこでおれらの様子うかがってたんだよ？！」
「それに」
こちらの話など聞く気もないのか、エドルの声にかぶせるように話を続ける少女。
「あたし、別にあんたたちに何もする気ないし。ほどいてくんない？」
「どうだか。何もする気がないんだったら、なんで隠れて盗み聞きする必要があるんだ」
「まったく、この平和な時世に、ものものしいったら…」
「人の話聞けって！」
怒鳴っても、エリスと名乗ったこの少女は怯む素振りすら見せない。後ろ手に縛ってある縄を、なんとかしてほどこうと懸命に動いているだけだ。
「エドル、ほどいてあげましょうよー」
リシェルアが、そっと耳打ちをしてきた。それを耳聡く聞いていたエリスは、ぱっと明るく顔をあげる。
「君の方が、話が分かりそうじゃない。ほどいてよー」
「その代わり、樹海の外まで案内してもらえばいいのよ」

「…顔に似合わず腹黒いなあ…」
束の間に呆れた顔に変化した、エリスの顔。原因の少女は、うふふ、と食えない笑みを浮かべた。エドルも、意地悪く口元を引き上げる。
「わかったよ。案内すればいいんでしょ、案内すれば」
ねばるかと思うと、案外早く降参の声が上がった。
数秒後に解放された彼女は元気よく立ち上がり、急にエドルがしていたような、嫌な笑顔を作ってみせる。騙されたかと身構えた二人だったが、彼女が持ちかけてきたのはこんな話だった。
「約束通り、案内はするよ。
でもさあ、無実の女の子を縄でふん縛っておいて挙句に案内しろーだなんて、恐喝も良いとこだと思わない？ほら、あたし何にもしてないじゃん」
「う」
確かに、こうして何もしてこない以上、彼女はエドル達に危害を加えようとする人間ではないことが判明しているわけだ。このままでは、エリスの言うとおりこちらが悪人になってしまう。
「そっちが、ま、紛らわしいことしてっから悪いん…」
「へーえ。そういうこと言うわけ。別にいいんだけど？このままあたしだけで森の外に出ても」
「……」
「あ、でも、しばらくしたら、警察官のオジサンたちが、あんた達のこと探しに来てくれるかもねー。事情聴取とかで、ごはんも食べさせてくれるかもよ？」
しかも、出る所には出てやる、と言いたいらしい。
今度はこちらが観念する番だった。
「…つまり、どうしてほしいんだよ…」
「素直でよろしい。
見たところ、戦いに関してそこそこの腕はあるんでしょ？
お金はきちんと払うから、あたしの護衛、引き受けて」
「護衛？」

驚いて、エドルは改めてエリスの身なりを見た。すると、とんでもないことがわかってしまった。
このいかにも気丈な娘は、まったくもって丸裸同然だった。もちろん同然、であって丸裸なわけではなく、服は着ているのだが。
それ以外の、いわゆるこういう樹海に立ち入る際の装備、というものが全くなっていないのだ。
魔獣が出るというのに、武器のたぐいが一切見当たらない。魔法で戦うのが大半のリシェルアでさえ、短剣の一つや二つは常備しているというのに。荷物といえば手持ちの小さなバッグぐらい。おまけに服も、ありふれた綿製の上衣とスカート。アクセサリーが少し。まるで近所の商店街にでも出かけるかのような格好だった。
「……お前、一体何しにここに来てんだ？」
思わず、エドルは尋ねていた。
「観光」
その問いに、何の悪びれもなく答えるエリス。悪びれたところで誰も咎める者などいないのだが。
「観光って、こんなとこでお前、信じられねー…」
これはもう、引き受ける引き受けない以前の問題だった。もしこのまま一人で危険な場所をうろつかれて、後日遺体発見の報が耳に入ってこようものなら、寝覚めが悪くなってしまう。
それに、今頭を悩ませている最大原因の、金も支払ってくれるというのだ。それだけでもありがたい話だった。隣りのリシェルアも、引き受けろと言いたげにエドルを見ている。
「なんか、うまく乗せられた感じはするけどな…まあいいや。引き受けてやるよ」
「道案内も、よろしくねー」
エリスは二人の返事を聞くと、
「これで、問題は丸く収まったってことだね。
エドル、リシェルア。これからよろしく！」

空で燦然と輝きはじめた朝の太陽も、かくやと言わんばかりの、まばゆい笑顔を浮かべたのだった。

エリスの案内に従って森を抜け、たどり着いたのは非常に活気のある街だった。
それもそのはず、ここは天空界で一番の都市である王都ヴィシェナ。天空界全域を治める天空王が居住している、天空城の城下町だ。天空界のはるか下界に位置する魔界や亜魔界からの観光客が絶えることなく訪れ、それに伴った観光業も商業も盛んである。
「…って、誰が天空界に案内しろって言ったんだよ！」
買い物袋をいくつも手に提げたエリスに向かって、エドルは怒鳴り声を上げた。
自分もしっかり天空城下を観光し、宿まで取っておいてから言う事でもないのだが。
「樹海の外には出れたじゃん」
「そうだけど！おれたちが言う「樹海の外」っつーのは、こんな仰々しいとこでも何でもなくて、ただ単に樹海と地続きの魔界の大地の…」
「うっさいねー、後からごちゃごちゃ言わないでよ。フツーに樹海の外に出るより、こっちに来た方が早かったんだってば」
魔界や亜魔界には、いたるところに天空界へと上る「道」と呼ばれる装置がある。太古に作られた、魔力で動く機械――古代装置の一つだ。エドル達が迷っていた樹海の中には、それが設置してあったのだ。
「それに、あたしもここに来たかったし」
「何だよそれ。つまりおれたち、お前の観光に付き合わされただけってことか！」
「「付き合わされた」？あんたの頭の中には、どうやら鳥より小さい脳みそが詰まってるみたいだね？」
くわえていたアイスの棒をこちらに突き付けてくるエリス。

「あたしの護衛するって言ったのはついさっきだよ?付き合わされたも何も、とーぜんのことでしょ!覚えてないの?」
「なっ…」
反論しようと口を開けるが、エリスの言う事はもっともだ。自分たちで行く先を指定したわけではなくて、すべて彼女に任せてしまったのだから。
つまり、完全にエリスに乗せられてしまっていたのだ。
「今頃気づいたって、もう遅いんだから。諦めてあたしの護衛をしてなよ」
「……わかったよ。ただし、」
人差し指を立てて、エドルは真面目な口調で言う。
「おれらの本業はトレジャーハンターだ。お前の観光にも付き合ってやるけど、もしめぼしい遺跡や何かが見つかったら、そっちにも行かせてもらうからな」
「まあ、別にいいけど…その場合、あたしはどうしていればいいわけ?」
「好きにしろ。どっかで待ってるなり、ついて来るなりすればいい」
本当は、ついて来られると面倒なのだが、あえてそれは言わなかった。言うと逆に、むきになってついて来そうな予感がしたのだ。何せ、これだけ気の強い女なのだから。
彼女が頷くのをみとめると、さっそくエドルは、くつろいでいた宿のソファから身を起こす。
「どこ行くの?」
不思議そうにこちらを見上げてくるエリス。エドルの考えを鋭く察したリシェルアが、微笑んだまま答えた。
「城下のはずれの、歓楽街よー。仕事屋とか傭兵とか、あたしたちみたいなトレジャーハンターとか、ちょっとアブナイ仕事をしてる人たちが良く集まるところ…って言えばいいかしら?」
非公式な稼業を営む者たちを客としている情報屋や、荒くれ者の集まる酒場、果ては風俗店や闘技場。そのような場所が密集した地域

は、ちょっと大きな街になれば自然と出来てくるものだ。神聖なる天空の王都であっても、それは例外ではない。
「少なくとも、一般人が寄りつけるような場所じゃねーのは確かだな」
一般人、という単語を強調して、暗についてくるなと伝えたつもりだったのだが。
「ふうん。じゃあ行く」
アイスの棒をゴミ箱へと放り投げると、まったく動じていない素振りでエリスは立ち上がった。
「まじかよ」
「いいでしょ？あんたたちが護衛、してくれるんだし」
にやりと笑った彼女に、エドルはつくづく、敵わないと落胆した。
「…言っとくけど、観光するような場所なんてねーからな。行ったって、楽しいとは限んねーぞ」
負け惜しみのように言ってみても、目の前の強気な表情は変わらない。
「さあ、どーだか。案外、スリル満点でいい感じかもしんないしー」
「エドル。ここまで言うんだし、連れて行ってあげましょうよ」
「…はいはい…」
リシェルアまでもが擁護を始めて、完全にこちらの勝機はなくなった。
エリスの好奇心の強さも、気の強さと同じくらい困りものだと、エドルはこれからの行く先に、不安を覚えずにいられなかった。
むしろ、何か起こるという確信さえあったのだった。

2

いざ歓楽街へ来てみても、エリスは怖気づくこともない。
筋肉隆々としたいかめしい傭兵、抜き身の刃物を手にした仕事屋、この地を歩く女は皆遊女と言わんばかりの目つきで眺めてくる浮浪者。そういった者たちの間を、器用にすり抜けて、エドルたちについてくる。
「…それにしても、今日はいやに人が多いな」
怪しい雰囲気をまとった店が無数に立ち並ぶ大通りにも、少しマニアックな武器を扱う店が点々とする裏通りも、そして、そんな店の内部でも、仕事屋たちが所狭しと歩き回っている。まるで、祭りでもあるかのようだ。
「もしかしたら、何か大きな儲け話があるのかもしれないわねー」
「なるほど、みんなそれ目当てってことか。…調べてみる価値はありそうだな」
うまく大金を儲けることができれば、エリスの護衛で金を稼ぐ必要はなくなる。この問題児と、別れることができるわけである。
「あったとしても、競争率は高そうだけど…」
「聞いてから考えるさ」
もの珍しそうに周囲を眺めている呑気な少女を横目で見やって、ほくそ笑む。
「こんな機会、もう来ないかもしんねーだろ。とっととあんな奴放って、のびのび宝探ししてーからな」

「天空王子が、誘拐されたらしい」
裏通りに店を構え、武器屋を装った情報屋。店主に相当の額を握らせ、やっとの思いで吐かせた話は、とんでもないものだった。
驚きの声を上げて、銃弾よけの強化ガラスが客と店主とを隔てるカ

ウンターに、エドルは身を乗り出す。
「北の都市フレーデに、姉王女と視察に行く最中に、さらわれたんだと」
店主も、こちらに顔を近づけた。
「朝廷としては、公にするわけにはいかないだろう？そんなことしたら、城下だけじゃなく天空界中、もしかしたら魔界亜魔界まで巻き込む騒ぎになるかもしれん。
そこで朝廷の人間が、オレらみたいな情報屋とか仕事屋に、わざと触れ回ってるんだよ。
天空王子を見つけ出した者に、百万コイル渡すってな。…ただし、行動は隠密にするっていう条件付きだが」
指でガラスの向こうに弾いてやった金貨を受け取りながら、店主は声をひそめた。
「ここだけなんだが、一番怪しいのは、姉王女の側近じゃないかって話だ。姉王女を差し置いて弟君に王位を継承させるのを、良く思ってない奴らもいる。王女自身は納得しているが、そいつらにしてみれば面白くないだろう。
そんなわけだから、もしこの仕事に興味があるなら、ここいらで話を聞くよりも、直接王宮に忍び込んで調査した方が確実だ」
「王宮に忍び込むって…ムリだろ」
天空城の警備は、魔界や亜魔界の小国の警備とは、量も質もわけが違う。そもそも、一国を治めるのと一世界を治めるのとでは、規模がまったく違うのだから。
「そう…そこなんだよ」
金貨を指先で弄びながら、店主は苦笑を洩らした。
「外でうろついてる仕事屋たちはみんな、城に入っちまえばこっちのもんだって、わかってるんだ。わかってるんだけど行動に移せなくて、かといって諦めるに諦めきれずに、いつまでも滞在してる。そういう連中さ。
――中には、相当名を上げてる奴も混じってるぜ。そいつらを出し

抜いて英雄になるか、他の連中と同じ運命を辿るかは、あんた次第だ」
ニッと口端をつり上げ、店主は挑戦的な笑みを浮かべた。そんなこと言われても、とエドルは頭を抱える。
「おれはトレジャーハンターだぞ？できるかよ、そんなん」
「ん？なんだあんた、富豪とか王族から財宝盗むのが日課なんじゃないのか」
「それはただのこそ泥じゃねーか！おれのは、そーゆートレジャーハントじゃねーって！」
エドルのトレジャーハントは、遺跡から宝を見つけ出す程度のものだ。もちろん、入るときには堂々と正面から行くし、大体は誰のものでもない遺跡だから、宝を持ち去って売ったって、誰も文句を言う者はいない。
「まあ、オレが知ってるのはここまでだ。嫌なら、他の無難な宝探しの話でも探すんだな。
…ところで」
手の中の金貨を懐にしまい込むと、急に怪訝な顔をして、店主は店内の一点に目を向けた。
「あの二人。一人はあんたの相方だったな。確か、リシェルアとかいう…。
もう一人の娘は見ない顔だが、ありゃ誰だ？なかなか上玉じゃないか」
その先では、リシェルアとエリスが剣のレプリカを見ている。年頃の少女が、このむさくるしい場所で並んで佇んでいる図は不自然で、他の男性客の視線も集中していた。
「あんたが良けりゃ、ウチが引き取ってやろうか？
最近、大手の店が人手不足に困ってるみたいでな。そこに売り飛ばせば、喜んで大枚はたいてくれそうだ」
下卑た表情を浮かべる、カウンター越しの商売人。
いくらエリスが気に食わないとはいえ、人間を売り買いするという

行為はもっと気に食わない。エドルは彼に軽蔑の視線を送ると、言い捨てた。

「おれは、人身売買にはキョーミないんでね。それに、あんなはねっ返り、店側に面倒がられて良い値はつかねーって」

「ちょっとエドル。まだー？」

こんな話のネタにされているとは知らずに、噂の娘は店の入り口で急かしている。

適当に返事をしていると、背後の店主が鼻で笑った。

「そんなお真面目にやってちゃ、この世の中で生きてくには、苦労するぜ？」

「もう、十分苦労してるっつの」

振り向きもせずにそう応えて、エドルはさっさと店の外に出た。

「もう、十分苦労してる…かー」

たった今の、自分の言葉を反復して呟いてみる。

それならば。

「苦労ついでにこの話、乗ってみてもいいかもな…」

自分を不思議そうに見てくる少女たちを気にもせず、一人、強気に微笑んだ、その時だった。

通りに散らばりせわしなく歩いていた人々が、急に動きを止めて、同じ方向を見るなりざわつきはじめたのだ。

3

裏通りの向こうから、誰かがやってくるらしい。
取り締まりに来た警官か役人かと思ったが、そばにいた傭兵らしき男たちが話しているのを聞く限り、違うようだ。
「……しょうと、ひ…が…」「何で…まさか、奴らも…」「しかし…」
気になってエドルが耳をそばだてようとすると、傭兵たちは黙ってしまった。彼らだけではない。他の者もみんな、何かを憚るように静まってしまう。
「！あれ…」
リシェルアの指さした方角から、噂の人物と思われる人間が二人、ようやっと姿を現す。
遠目からみるとその二人組は、何のことはない、普通の男女だった。
一人は、長い銀髪を背中で束ねた美青年。
いや、美青年なんてものではない。こちらに近づけば近づくほど、麗しい顔立ちに目をひかれ、引き締まった細身に羨む気持ちも失せるほどだ。およそ戦場を駆けているとは思えない、場違いな容姿だった。ホルスターに下がった漆黒の銃と、額の三日月型の傷がことさら特徴的である。
彼の少し後ろからついてくるのは、エルフの女性だった。
見た目は二十歳前後だが、エルフは長寿種族であるので実年齢はもっと高いだろう。氷を思わせる美貌が、ミステリアスな雰囲気を醸し出している。身体の弱いエルフ族は皆、概して戦を避ける傾向にあるのだが、彼女は違うようだ。腰のレイピアの鋭く輝く刃が、鞘に納まっているというのに見える気がする。
ここが舞踏会の会場であれば、絶世の美男美女の登場に、誰もが頬を緩めていたことだろう。
…が、しかし。

「うっわ。空気悪っ」
エリスが小さな声で呟いて、顔をしかめた。
場の空気が張り詰めていて、息苦しいほどだ。それもそのはず、注目の的になっているかの二人が、真っ黒に染まったオーラが今にも噴き出してきそうなほど不機嫌だったからである。男の闇色の瞳と女の紫色の目には、視線だけで人を射殺せそうな力があった。
彼らの歩みを呆然と見つめていると、リシェルアが耳打ちしてくる。
「あの人たち、見たことある気がするわー。どこでだったかしらー？」
「見たことある気がするわー、どころじゃねーよ。どこのダウンタウンでも、ポスターやチラシで一度は目にする顔だぜ…どっちもな」
エドルは、彼らがいったい何者なのか、知っていた。ここで立ち尽くしている連中も、きっとどこかしらであの顔ぶれを見ているに違いない。だから、突然の登場に声も上げられずにいるのだ。
「月傷（げっしょう）のディオと、氷海（ひかい）だ」
「誰、それ？なんか仰々しい名前だねー」
たった数年で名を上げた、天才銃士ディオ。仕事屋でもある彼は、どんな危険な仕事でも単身で引き受けてこなし、同業者の間で一目置かれている存在だ。表ではそうもてはやされているが、裏ではかなり極悪非道なことも行っているらしく、彼を恨み、あるいは妬む者も少なくない。
氷海は、本名を隠し活躍する賞金稼ぎである。彼女に狙われた賞金首は確実におちるといい、エルフの戦士は稀有であることもあいまって、よく噂のタネになっている人物だった。氷海の異名は、魔界に実在する海の名前からついている。海と言ってもほぼ年中凍っている場所なのだが、彼女の冷酷冷淡さをそれにたとえて、いつの間にかそう呼ばれていたようだ。
「って、お前、知らないのかよ」
呆れて横目でエリスを見やると、彼女は「知るわけないじゃん」と

腕を組み、胸を張る。
「あたしはまっとうな、いたってフツーの女の子だしぃー。そーいう世界の話には疎いんですぅー」
「あー…はいはい」
「それにしても」
険悪になりかけたエドルとエリスの間に割って入って、話を転換するリシェルア。
「あの二人、いつもは単独で行動してるはずよねえ？どうして一緒にいるのかしら？」
「さあ。仲良くなったんじゃないの？」
あの雰囲気の悪さを見ておきながらそんな事を言えるエリスを、心底うらやましいとエドルは思った。
ともすれば、さらに余計な事を言いそうな彼女の口を、塞ごうとした時にはもう遅い。
「だ・れ・が・仲良くなったって？」
背後から、影が落ちてきた。その殺気を帯びた気配に、一瞬呼吸が止まる。
振り返ると、天からの授かり物としか言いようのない、整いすぎた顔立ちがあった。闇色の目が自分たちを睨み下ろしている。
「あんたたち二人」
「おま、え、エリス！」
期待を裏切らず平然と答えたマイペースな少女の顎を、ディオが片手ですくい上げる。それを目撃した周りのギャラリーがいっそうざわついたのに気づいて、エドルは頭を抱えたくなった。
「言っとくけど。俺達は別に、仲良しこよしで一緒に歩いてるわけじゃねえんだよ。誤解しないでもらいたいね」
「あっそう。てっきり、痴話喧嘩してる最中のカップルかと思ったんだけど」
顎にかかっていたその手を、エリスは容赦なくはたき落とした。
「おい、エリス！」

眉間に更にしわを寄せたディオの視線が、刃物のように彼女に突き刺さる。このままでは、何をしでかすかわかったものではない。
「――誰かと思えば、疾風烈火のトレジャーハンターコンビか」
すると、一触即発のこの場に、氷海も近づいてきた。
「ああ、疾風のエドルと烈火のリシェルアかよ。どおりで見たことのある顔だと思ったぜ」
「…どーも。高名なお二人に名前を覚えていただいて、光栄だな」
こちらを向いたディオに警戒しながら、エドルは嬉しくなさげに応じた。
疾風烈火は、二年ほど前から呼ばれ始めた異称だ。あちこちの宝を疾風のように持ち去り、戦う姿は風のように素早い（足の速さには自信があるのだ）エドルと、火炎の魔法に長けたリシェルアを、誰かがそう呼んだことから、今ではその名の方でよく通っている。
「なるほど、お前らがこの女の護衛をしてるってわけか。じゃあ、後でよっく覚えさせとけよ。俺があの冷血エルフに持ってる感情なんか、殺意ぐらいしかないってな」
覚えさせておけと言われても、エドル達はエリスの保護者などではないのだが、反論したところで聞く耳を持たないだろう。仕方なく適当に相槌を打っていると、今度はその後ろの氷海が反応した。
「私の方も、別に好きで貴様のような非道とつるんでいるわけではないのだが」
まったくの無表情であったが、発した言葉の節々から迷惑そうな思いがうかがえる。
ディオが、剣の切っ先のような目を彼女へと移した。
「はあ？天空王子誘拐に俺が絡んでる可能性が高いからって、証拠もないのに付きまとってんのはてめえだろうが。大迷惑被ってるのは俺だろ。まるでてめえが迷惑してるみたいな言い方してんじゃねえよ」
「そう聞こえたのなら悪かった。訂正する。私も、貴様のような人非人とはいつまでも一緒にいる気はない。是

非とも早々に自首してくれれば、お互い、これ以上嫌な思いをしなくて済むと思うのだが」

「どうやら、はなっから俺の話なんて眼中にないらしいな」

凄絶な睨み合いを始める、月傷と氷海。今にも殺し合いが起こりそうな凶悪な雰囲気に、とても第三者が介入できそうもなかった。

だがしかし、エドルやリシェルアが怯んでいても、この怖いものも身の程も知らない少女は別格だ。

「あーもう。真昼間の道端で、そういう不景気な空気を振り撒かないでよね。あんたらなんかよりあたしたちの方が迷惑なんだけど。ほら、周りにいた人たち、みんな逃げちゃったじゃん」

一体、誰のせいでこうなったのだと問い詰めたいエドルだった。

「あら、ホントだわー」

あんなにいたギャラリーが、トラブルの匂いを嗅ぎ取ったか、いつの間にか忽然と姿を消していた。道行く人もほとんどおらず、空っ風が吹いている。

「何で逃げる必要があるんだよ」

「あんたみたいに、街のど真ん中で発砲しようとしてるような危険人物の傍に、誰も近づきたくないっつーの。巻き込まれるのが嫌なんだよ…もちろん、おれらも」

「意気地なし共が」

不満げにしながら、銃から手を離す月傷の銃士。エリスが止めていなかったら本当に撃っていたのかと思うと、エドルは少し恐ろしくなった。

「さすが、月傷…戦場の悪魔とか人食い銀狼とか言われてるだけあって、性格悪いな…」

「……なんか言ったか、疾風？」

「いえいえ」

再び睨まれて、エリスの背後に隠れるエドル。盾にされたエリスは迷惑そうにこちらを見て、尋ねてきた。

「ところでエドル。さっきあんたが聞いてきた儲け話とやらって、

もしかして天空王子の誘拐事件のこと？」
「え、ああ、そうだけど」
「そりゃ丁度いいじゃない。
氷海あんた、その事件について何かいろいろ知ってそうだね？良かったら教えてくれない？」
「貴様に教える義理などない」
図々しく聞き出そうとするエリスを、見事に突っぱねる氷海。それはそうだろう。競争率も報酬も高いこの事件の貴重な情報を、ただで他人に漏らす者はいない。
しかし、そのようなことに配慮もしないエリスは、むっと口を尖らせた。
「そんなこと言わずにさあ」
「断る」
「ていうか、お前誰だよ。さっきから馴れ馴れしく割って入ってきやがって…」
ディオにそう訊かれると、自称フツーの女の子は、急に晴々しい笑顔を浮かべて咳払いをした。待ってましたと言わんばかりだ。
「な、なんだよ」
それを見て、月傷はあからさまに焦りだす。どこかの国の姫君だとか、こんなりだが実は名高い仕事屋だったとか、そんな展開を想像してしまったのだろう。
その様を小気味よく思いながら、しかしエドルは、本人が自己紹介を始める前に答えていた。
「エリス・アルカディア。ただの旅行者」
「何だ…思わせぶりな素振りしやがって」
安堵したのかがっかりしたのか、ディオは大きく肩を落とす。
「エドル、あんたねえ…っ！確かに、確かにその通りだけどっ！もうちょっとこう、その身も蓋もない言い方を…っ」
「あらあら。落ち着いてー」
何やら不平を並べているが、それは無視。

「いろいろと話しこんじまったけど、もう、おれらに用はねーだろ？それじゃ、これで。おれらも暇じゃねーしさ」
エドルはリシェルアとエリスの腕を掴むと、月傷や氷海の応答も聞かずに足早にその場を立ち去った。
「あっちょっと！アイツら、絶対事件の事いっぱい知ってるって！聞きだしちゃおうよ！」
「いいって、そんなの」
あんな危険人物の傍にいては、命がいくつあっても足りない。
「ああいうのとは関わらない方がいいって、おれの本能が言ってるんだよ。事を複雑にしたくねーだろ？」
「エドルってば、いっつもそういうのに巻き込まれやすいのよねー」
「うるせーリシェルア」
事あるごとになぜか厄介事に巻き込まれ、疾風の他についたあだ名は「災厄招き」。別に、自分が問題を引き起こしているつもりはないのだが。
今回だって、エリスの護衛という面倒事がすでにあるというのに。だから、誘拐事件ぐらいは楽してさっさと解決したいのだ。
「あたしは面倒事、大歓迎だけど」
「お前…」
エドルは、大きくため息をついた。月傷と氷海の姿が見えなくなったのを確認して立ち止まり、エリスの方に向き直る。
「好奇心旺盛なのは結構だけどな。一般人がこういう世界に余計な首突っ込むと、いつか痛い目に遭うぞ」
いくら空気の読めない彼女でも、いつもとはうって変わった真面目な口調と表情から、その真剣さを感じ取ったのだろう。目を丸くして、息を呑んだ。
「……うるさいな」
だが、まるで母親に怒られた子供のようなすねた表情を見せ、反論してくる。
「あたしが何しようと、あたしの勝手じゃん。あんたにそんなこと

言われる義理はないよ」
「あのな。おれだって、こんな忠告をお前にしてやる義理はねーんだよ。
親切で言ってやってんじゃねーか。それに、護衛を頼んでるんだったら、自分も少しは行動を慎め」
「親切？どうだか」
ふん、とそっぽを向くエリス。
「どうせ、あたしが邪魔なんでしょ？
そりゃあそうだろーねー。トレジャーハントをしたいのに、ムリヤリ護衛なんてさせられちゃうんだもんねー。お金に困ってるからって、引き受けたのはそっちなのにねー？」
そう言い捨てると、エリスはくるりと踵を返した。思わぬ行動に、エドルは慌てる。
「ど、どこ行くんだよ！」
「決まってんじゃん。あんた達の邪魔になったら迷惑だろうから、退散してんの。
ここからは、あたしとあんた達は別行動。契約はなかったことにするっていうわけ。じゃあね」
脇目ももふらず、エリスはさっさと歩いて行ってしまった。その後ろ姿を、呆然と見送る二人。
「…ちょっと、言いすぎたかなー？」
「さあ…どうかしらー？
でも問題なのは、あたしたちのお金稼ぎの手立てがなくなっちゃったってことよねー」
「！！」
言われてやっと、その重大さに気付く。リシェルアが、笑顔のままで呟いた。
「その、天空王子誘拐事件…絶対解決しましょうねー」
「わ、わわわわかってるよ！
と、とにかく、じょ、情報を集めないとな！」

優しいはずの声音に何かどす黒いものを感じて、すかさず何度も首を振る。
こうしてエドルは、必ず事件を解決し報酬をもらう事を、余儀なくされたのだった。

4

さて、こちらは、エドル達が慌てていなくなった後の月傷のディオと氷海の二人。
エドル・リシェルアコンビとエリスが離別していたちょうどその頃、彼らは、街のはずれのさびれた道路を歩いていた。
「おい」
何度事件の関与を否定しても、疑ってついてくるエルフの賞金稼ぎ。
ディオは足を止め、振り返る。
「いい加減、とっととどっか行け。
俺が天空王子さらったっていう証拠は、どこからも出て来ないじゃねえか」
「別に、貴様がさらったと決めつけているわけではない。ただ、天空王子がさらわれたであろう現場に貴様がいたようだから、何かしら関係があるのではと思っているだけだ。
…確かに、根拠は何もないが」
平然とした態度と表情で、そう答える氷海。ディオはそれに少しいらだちながら、
「俺はたまたまあそこにいただけだって、何度言ったらわかるんだよ。根拠もないのに無実の人間付け回すな」
「無実？」
氷海は、鼻で笑い飛ばした。こちらが眼光を鋭くすると、軽蔑の眼差しを向けてくる。
「約三日間監視してきたが、貴様の挙動の悪さには呆れるばかりだ。以前からあんな調子で過ごしていたのか？そうなら、たとえ今回の事件に関与していなくとも、間もなく刑務所行きだろうな」
「るっせーな。お前がうざくて、腹が立ってたんだよ。これでも、自重してるつもりだけど」
「…貴様は本当に、自重という言葉の意味をわかっているのか？」

さらに呆れ返って、ため息をつく氷海。
「いいか。今から、この三日間で貴様がどれだけの事をしてきたか、教えてやろう。
三日前の昼には…」
腕を組み、彼女はディオが頼みもしないのに、その所業を一から語り始めた。しかし、こちらにはそんな話を聞く気などない。おまけに、つい先ほどから感じる物影の視線が気になって、仕方がなかった。
「なんだ、建物の陰になにかあるのか」
気づいて声を掛けてくる氷海に頷き、銃に手をやる。
「出て来い」
構えて、物影の人物に命じる。
「だから、街中で銃を出すのはやめろと」
「こっちは命狙われてんだぜ?正当防衛だ」
「はあっ?誰も、あんたの命なんか狙ってないし!」
ディオの発言を全否定しながら、突然飛び出してきたのは、
「…あれ、お前さっき、疾風烈火のコンビと一緒にいた…
……誰だっけ」
「ほんっと、失礼な奴だね…!」
「エリス・アルカディアだろう」
氷海が代わって答えると、エリスは満足そうにうなずいた。
「二人はどうした」
「ふんっ。あんなバカ、もう知らないもーん」
「喧嘩でもしたのか…まあいいや」
ディオはここで、やっと銃を下ろしてホルスターに収めた。警戒を解き、少女の強気な瞳を見つめる。
「ところで、俺になんか用か?
あいにく、彼女の募集はしてねえよ。俺が超美男子だからって、一目惚れしてコクってきても…」
「自惚れも大概にしなよ。そんなことよりさ」

ディオの冗談を遮って、エリスは二人に詰め寄った。
「あんた達、あたしの護衛する気ない？」
疾風烈火を見限って、今度は自分たちに鞍替えをする気らしい。そう呟くと、エリスは「人聞きの悪いこと言わないでよね」とむくれた。
「鞍替えじゃないし。どうせあいつら、困ってあたしに平謝りしにくるだろうから、それまでの中継ぎを頼みたいと」
「余計悪い」「帰れ」
きっぱり断ると、ちょうど氷海のツッコミと重なってしまった。やっぱ仲いいじゃん、と口元を歪めるエリスに、あからさまに嫌な顔を向けてやる。
「てめえ、いい加減にしろよ。
氷海に付きまとわれてるってのに、挙句お前までくっついてくるだと？」
「うんっ」
「死ね」
大きくうなずくエリスに再びディオは銃を抜く。今度はうるさい氷海も、止めてこなかった。
「ちょ、ちょっと！いきなり人畜無害の女の子に銃口を向けるのは、どうかと思うよっ？ほらほら、人来てるし！」
あわてて、通りの向こうから歩いてくる一般市民を指さすエリス。そちらを見やって確認すると、ディオは舌打ちをした。
「ね、お願い。お金はちゃんと払うからー。誘拐事件調査の邪魔もしないしー」
「そう言う奴は、決まって足を引っ張るんだよな」
「確かに」
顔を見合わせ、頷き合うディオと氷海。エリスは、「ひどーいっ」と頬を膨らませた。
「ひどいも何もない。その話は却下だ」
「受けてくれるまで、付きまとってやる！」

「く・る・な」
しつこい我が儘少女を睨み下ろし、声を低めて脅しにかかる。
「お前みたいなひ弱な一般人が、こういう世界に首突っ込もうなんて考えるな。ケガじゃ済まなくなるぜ」
「どいつもこいつも、同じ事言うんだねー。大丈夫だってば」
「ディオ」
痺れを切らした氷海が、会話を遮った。
「放っておけ、時間の無駄だ。行くぞ」
「何でてめえが仕切ってんだよ。つーか、ついてくんなって何度言えば…」
「いいのか？」
抑揚の薄い、波立たぬ水面の声で氷海は問う。
「天空城で調査をすれば、貴様の無実を裏付ける話が出てくる可能性もある。そうなれば、私が貴様を付け回す理由がなくなるだろう？」
「……だから、手伝えってか。
…無実の証明ができたら、本当にいなくなってくれるんだろうな？」
頷く氷海。
ディオはしばらくその表情に乏しい顔を伺っていたが、結局嘘か真実かを見抜く事はできなかった。しかし無実の証拠があれば、それ以降ディオに付きまとってきたところで、向こうに利益はない。
そう判断すると、何も言わずに氷海の後ろについて歩き始めた。
後ろから、エリスの怒鳴り声が届く。
「こら、無視するなーっ！
あたし、ついてくからねっ？いいよねっ？
返事しないってことは、いいってことだよねーっ？！」

5

エリスと別れたエドルとリシェルアは、翌日から、さっそく情報集めを開始した。
下町の情報屋は大方回り、そこら中にいる仕事屋たちの話を盗み聞いたりもした。しかしながら、三日目にしてとうとう行き詰ってしまった。
「…考えてみれば、こんなスカスカの財布で動き回ろうなんて、とんだ間違いだったよな…」
喫茶店で一休みする余裕すら、二人の持ち金は許してくれない。
裏通りの道端で、二人は途方に暮れていた。
「しかも、これといった情報はなかったわねー。みんな、姉王女エイナの側近が怪しいって言うだけだったわー」
天空城の朝廷の人間達は、どうやら一般市民に事件が漏れるのをかなり警戒しているようだ。街には、あまり天空王子誘拐の情報は流れていないらしい。
「矛盾しすぎじゃねー？解決してくれって言ってるのは、ほかでもない朝廷の奴らなのに」
「でも、仕方ないわよー。この状況でどれほどの情報を得られるかが、仕事屋の腕の見せ所ってことじゃないかしらー」
「…おれら、トレジャーハンターだぞ」
「あら。この仕事をするって言ったのはエドルで…」
「あーあーわかってるって！」
リシェルアからの耳に痛い話を遮って、エドルはため息をついた。
その時だ。
「あっれー？お二人とも、こーんなとこで何やってるわけー？」
聞き覚えのある高い声が、二人の元までやってくる。エドルにとっ

てそれは、今一番聞きたくないものだった。
「まっさか、まだ街で情報収集とかダサいことやってんの？
こっちはもう、天空城に潜入する方法を見つけたっていうのに」
振り向けば、意地の悪い笑顔を浮かべて二人を眺めているエリスがいた。
「…どういう意味だよ、それ」
「あれ、知らなかったっけー？
あたし今、ディオや氷海と一緒に行動してるの。どっちも性格は悪いけど、頭はよく回る奴らでさ。まさかあんな方法を使おうだなんて…」
含みのある言い方と大げさな身振り手振り。挑発してきているというのは明らかだった。
むっとすると同時に、悔しさと焦りとが湧いてくる。
「うるせー！こっちはこっちでやってんだから、お前にはカンケーねーだろ！ちょっかいかけてくんな！」
「そんなマイペースにやっててていいわけ？こっちは、今夜城に潜入しちゃうんだよ？」
「うぜー！」
エドルは傍の建物の壁を拳で殴り、優越感あふれる憎たらしい顔を睨んだ。
「余計なお世話なんだよ！からかいに来ただけなら、その口閉じてさっさと帰れ！」
「からかいに来たわけじゃないし。
謝るんだったら一緒に行動してあげてもいいよーって、言いに来ただけ」
「却下だ！！」
自分でも強がりだとは分かっているのだが、プライドが折れることを許さない。リシェルアが何か言いたげにしているが、それはあえて無視しておくことにした。きっと後で、文句を言われるに違いない。

「あっそ。後で後悔しても知らないからねー」
ありきたりな捨て台詞を吐いて、エリスは帰って行った。帰り際にべーっと舌を出すことも忘れない。
「くそー…何だったんだあいつ」
「エドル…」
案の定、呆れた表情を見せて声をかけてくるリシェルア。その視線を振り払うように頭を振って、エドルはきっぱりとこう言い切った。
「今夜、城に潜入するぞ」
「ええっ？」
目を見開いて、リシェルアは口を開けたまま固まってしまった。それから、あわてて尋ねてくる。
「どうやって入るか、考えてるのー？」
「考えてるわけねーじゃん。でもまあ、なんとかなるだろ」
今度こそ、声も出せずに動かなくなった相方。
「とにかく、奴らに先を越されるわけにはいかねーだろ」
真面目な顔を作って、説得を試みる。文句や皮肉を言いつつも、いつもついてくる相方の、
「本当に、エドルって行き当たりばったりっていうか…」というぼやきは、またもや聞かないことにした。

6

夜の天空城は、驚くほど静かだった。空にかかった満月が、城の周辺をまんべんなく照らしているが、不思議と人の姿は見当たらない。

「なんで衛兵すらいないんだよ？」

エドルとリシェルアが侵入路として選んだ城の裏門には、見張りの兵士がいなかった。表門は何十人という単位で巡回していたというのに、この手の抜きようには疑問が沸く。

「表門から堂々と入る侵入者なんているわけねーよ。フツーは裏門から入るのが定石じゃねーか。

意外とアホだったのか、ここの警備の連中は」

「定石どおりに裏口から入ろうとしてるエドルも…」

「そんなことはともかく」

リシェルアの毒舌をさえぎって、エドルは裏門の扉に手をかけた。さすがに鍵が開いているという不用心なことはなかったが、扉の高さは低く、乗り越えてしまえばその先の裏庭に行けそうだ。

「裏庭にも、警備はいないみたいだな。

なんでこんなにズボラなのか、怪しいっちゃ怪しいけど…好都合だぜ」

にやりとエドルはほくそ笑み、鉄格子の扉を身軽に越えた。後に続くリシェルアにも手を貸してやり、難なく侵入に成功する。

「見たところ、エリスたちもまだ来てなさそうだし。おれらが一番乗りだな」

「まだ城内にも入ってないのに、気を抜いちゃだめよー？」

「わかってるっつの」

相方の忠告を受け流し一歩前に足を進めた時、こちらに近づいてくる気配に気がついた。

まだ何か言おうとしていたリシェルアの口を塞ぎ、すぐさま植込みの中に身を潜める。しかし、隠れるのが遅かった。

向こうはエドルたちに感づいたらしい。ゆっくりと、植込みへ寄ってくる。
知られているのなら隠れる必要はないと、エドルは素早く飛び出しナイフを抜いた。間髪入れずに斬りつけるが、手ごたえがない。避けられたと思った瞬間、今度は銀色の光が視界の隅に入った。
「うわっ！？」
あわてて身をよじると、光はエドルの脇腹をかすって、空を切り裂いていく。細く鋭い、剣の刃だった。
「エドル！」
「気をつけろ、リシェルア！二人いる！」
遅れて出てきたリシェルアに小声で注意を促すと、ふと、闇の中で相手の動きが止まった。
その隙を逃す手はない。軽快に大地を蹴り、気配に向かって休む間もなく攻撃を繰り出した。
「なっ…ちょ、ちょっと待て、待てって！」
「誰が待つか――って、あれっ？」
エドルの斬撃をかろうじて避けていた相手が、焦りの混じった声をかけてくる。その低音に、聞き覚えがあった。
手を止め一応間合いを取ってから、よく目を凝らしてみる。
「優しき灯火、闇夜を照らす」
状況を察したリシェルアが、呪文を唱えて杖の先端に魔力の火を浮かべた。彼女が杖先を前方に向けると、ようやっと相手の姿が現れる。
三日前に歓楽街で対面した、月傷と氷海だった。
「な…なんだよ、あんたらだったのか…。兵士に見つかったかと思ってたぜ」
安堵のため息をついていると、相変わらずの無表情で剣を収めて、氷海が問う。
「お前たちも潜入捜査に来ていたのか」
「まあね。あんたらには負けねーよ」

「こちらこそ、と言いたいところなのだが」
彼女は、残念そうにため息をついた。
「…迂闊だった」
何が、と問う間もなく、四人の周囲に現れたのは無数の警備兵。今の一瞬の交戦を、察知されてしまったようだ。
「何かと思えば、同業同士がこんなところで仲間割れか？間抜けなものだ。
さあ、大人しくついてきてもらおうか」
兵士長の嘲笑に言い返すこともできず、エドルたちは黙って従うしかなかった。

7

四人が連れてこられたのは、拘置所でも牢屋でもなく、謁見の間だった。
その奥の玉座に座っていたのは、額に天空王族の証である銀の六紡星を掲げた中年の男。普通はこの時間、とっくに床についているはずの人間だ。
「ゼ、ゼルヴァス天空王…!?どうしてここに!」
ディオが、驚愕の声を上げた。
「レスター聖教会に視察に行ってるはずじゃ…」
「視察に行こうとしたのだがな。
こんな事もあろうかと思って、考え直して途中で引き返してきたのだよ」
含みのある口調と、笑い声。
しかし、エドルとリシェルアには、一体何の事なのかわからなかった。
「視察?そんな予定があったのか?」
「天空王が視察に行くというから、その分警備が手薄になると考えて、私たちは今日の潜入を決行したのだ。
…お前たちは、そんなことも知らずに潜入しようとしていたのか。
とんでもない強運だな。
いや、結果的には、運がなかったのかもしれないが」
天空王が、エドルたちを引き立ててきた警備兵を下がらせた。今、謁見の間にいるのは、天空王とエドルたちのみ。
「いいんですか、警備の兵を下げてしまって。おれたちが王に、危害を加えないとは限りませんが」
エドルが挑むような視線を投げかけても、王は適当な返事を投げ返してくるだけだ。
「まあ、その時は何とかするさ。

それよりも、本日我が城へ潜入捜査を決行した勇気ある仕事屋諸君に、折り入って引き受けていただきたい事があってね」
「…どうして俺たちが、潜入捜査をしにきた仕事屋だと知ってるんです？」
「有名じゃないか、君たちは。
月傷の銃士ディオ・ライアネイズにエルフの賞金稼ぎ、氷海。それからトレジャーハンターの疾風のエドルと烈火のリシェルア。
なんとも豪華なメンバーだな。さすがといったところか…」
「……」
天空王のとりとめのない言動に不信感を拭えない四人だったが、向こうは天空界の最高指導者で、こちらは不法侵入者だ。口応えのできる立場ではない。
「ところで、引き受けてもらいたい事があるとおっしゃっていましたけど、あたしたちを裁くおつもりはないんですかー？」
「たかが不法侵入だからなあ…しかしまあ、そこは、今からの君たちの返答次第だ」
不法侵入を「たかが」と言い放った天空王に、思わず四人は呆気にとられてしまう。下手をすれば不法侵入から暗殺沙汰になる可能性もあるというのに、相当肝の据わった人間だ。
咳払いを一つして、王は真剣な表情を見せる。
「誘拐された私の息子を、エヴァスタ旧天空教会から連れ戻してほしい」
「…はい？
連れ戻すも何も、おれたちはそのための情報集めに、ここに潜入したわけなんですけど」
「だから。改めて、この私から依頼しているんだよ」
王は姿勢を崩して背もたれに寄りかかり、長い髪をこめかみからかき上げた。
「城の者を動かせば大事になってしまうからもちろん駄目だ。たぶん外では何十何百という数の仕事屋が動いてくれているのだろうが、

歓楽街でうろついているだけの彼等には、この事件の解決は間違いなく無理だろうな。
だから、改めて君たちに依頼をすると同時に、情報提供をしているというわけだ。
つまり君たちは、選ばれた人間だというわけだ！これはすごいぞ！誇って自慢しても良いことだぞ！」
「…はあ」
にっこりと微笑み称える王に、四人はやはり疑念を隠せない。どうにも馬鹿にされているような気がしてならなかった。
「なんだ。嬉しくないのか？」
「いえ、気高き天空王に僭越ながら直接ご指名いただいて、光栄に余りあるんですが。
どうにも、事のいきさつが不自然な気がして…」
「たまたま潜入してきた俺たちを、こんなにあっさり信用して事件の解決を依頼して情報まで提供して、本当にいいんですか？」
予期せぬ方向に、事が上手く進み過ぎている。何か裏があるに違いない。
氷海が、鋭い紫の瞳を光らせた。
「いくら私たちの名を知っていても、素性の知れない人間たちであることも承知しているはず。それでも私たちを選ぶ理由はなんだ？」
「そう、もちろん承知している。
しかし、君たちにはこの依頼を引き受けない理由はないし、不法侵入をしている以上、ここでこの話を断るのは不都合だろう？
私にとっては、それだけで十分なのだよ」
「つまりそれって」
エドルは、呆れた顔で天空王を見た。
「ようはなんやかやの理由をつけて、絶対途中で依頼を放棄させないようにしたかっただけで、本当は誰でも良かったってことじゃ」
「うーん…まあ、そうとも言えるな」
「…なるほど。つまり、全部罠だったということか」

情報屋に天空王子誘拐事件の情報が大規模に流れていたことも、王が視察に行くという偽情報も、すべては確実に事件を解決させる仕事屋をおびき寄せるための、天空王の策略だったのだ。

「誰でもよかったと考えるか、選ばれたと考えるかは君たちの自由だ。

さて、この依頼、引き受けてくれるかな？」

再び微笑んだ天空王は、まさにまんまと罠にかかった獲物を見据える者の顔だった。

どちらにしろエドルたちに断ることはできないわけだが、確認しなければならないことがある。

「あの。そうすると、報酬はどうなるんですか？」

「報酬？まあ、金が欲しいというのならそれでも構わないのだが…その代わり、此度の不法侵入の裁きは受けてもらうことになるが？」

「……そ…そうっスよねー…」

話を聞けば聞くほど、天空王の手の内で転がされているのがわかって、頭や胃が痛くなるだけだ。

四人は顔を見合わせると、しぶしぶ頷き合った。

「交渉成立だな。

期待してるぞ、君たち」

一体、これから何が待ち受けているのか。

不安げな四人とは裏腹に、何やら楽しそうな王の笑顔がとてもまばゆく見えたのは、差し込んできた朝日のせいだけではなさそうだ。

8

四人は、呆然としたまま天空城を後にした。
情報収集という当初の目的は果たされたが、なぜかややこしい話になってしまった感じは否めない。
「結局、情報と不法侵入罪の免除を餌に、天空王の手駒にされちまったってわけかよ…」
おまけに、実質報酬は皆無なのだ。エドルは頭を抱えるのを通り越して、今すぐ泣きわめきたい気分だった。
「やりきれねー…」
「やりきれねえのはこっちだボケ」
ぶつぶつ文句を言っていると、ディオがいかにも不機嫌な、トーンの低い声でそう漏らした。
「せっかくこれで、あのしつこいエルフと離れられると思ったのに、それどころか期間延長を言い渡されたようなもんだ。おまけに今度はてめえらも一緒。
しかも――」
さらに何か言いかけた時、天空城の門前に、見覚えのある少女が姿を現した。朝の太陽に負けないぐらいの元気な笑顔が、四人のもとへと低かったテンションを最低値にまで引き下げる。
「―あの女も、くっついてくるしな…」
「おおっ!?みんな揃って、潜入捜査はどうしたのっ?」
「お前こそ、こんなところに何しに来てるんだ」
相手の質問は無視して、つっけんどんにエドルが聞く。すると、エリスは少し不満げな表情で答えた。
「あんたたちが潜入捜査をしているところを、こっそり眺めに来たんだけど。その調子だと、もしかして失敗しちゃった?」
「んー…一応、成功はしてるんだけどー…予想外の展開になったっていうかー」

リシェルアが、歯切れの悪い口調でごまかした。まさか、すべて天空王の罠でしたとは言えない。そんなことをこの少女に言ったが最後、酸欠になるまで笑われてしまう。

「はっきりしないねえ。で？結局何か掴めたの？」

「詳しい話は後でする。こんなところでは誰に聞かれてもおかしくない。場所を移す」

「はいはい」

エリスは踵を返し、皆の先頭に立って歩き始めた。その後ろで、ディオがエドルたちに尋ねる。

「…で？あのうるさい奴はこれから、どうするつもりだよ」

「どうするって言われても…」

エドルがどもると、リシェルアがため息をついて言う。

「あたしたちにはどうとも言えないわー。でも、気の強い彼女の事だから、これからもついてくるんじゃないかしらー？」

「なんの関係もないのに、首を突っ込み過ぎてるんだよ、あの女。いい加減目ざわりだ」

能天気に鼻歌を歌いながら前を進むエリスを、射殺さんばかりの目つきで睨むディオ。それをなだめるように、リシェルアは続けた。

「エヴァスタ旧天空教会は魔獣もたくさん出てくる危険な場所だから、説得すれば諦めるかもしれないわー。とにかく、相談してみましょうよー」

「気が強いうえに怖いもの知らずだからな…どうだか」

二人の会話を聞きながら、エドルは内心、諦観しきっていた。

裏通りの、誰も客のいないさびれた喫茶店を選んで席に着くと、五人は適当に朝食を注文して、話し合いに入った。

「問題は、天空王子の居場所はわかったけど、犯人の正体がいまいちよくわからないってとこだよな」

エドルが質素なパンをかじりながら呟く。

それに、ディオが面倒そうに答えた。

「犯人なんか誰だっていいっつーの。天空王子が奪還できれば」
「相手がどの程度の規模の集団なのかという情報は、必要だ。まさか一人の人間の仕業ではないだろう。
天空王子をさらうぐらいだから、身代金目当てなどの低レベルなものでもなく、最大で、天空王家転覆を謀ることができるような団体が相手ということになる」
紅茶のカップを優雅に揺らして、物騒なことを言う氷海。エドルの顔が嫌そうに歪んだ。
「例えば、どっかの国の軍隊とか？
やべーだろ、それ。そんなん相手に、この人数で挑むってのか」
「いや、さすがにそこまでとは言わないが…まあ、相手にも戦いのできる人間が揃っていることは予想できるな」
「ちょっとちょっと」
いきなり話を遮って、エリスが頬を膨らませた。
「あたし、ぜんっぜん話についていけないんですけどー。一から説明してよね」
「お前、ほんっと空気の読めねえ女だな」
「しょーがないじゃん！天空王の話、あたしだけ聞いてないんだし」
「夜は眠いから、潜入捜査なんかしないって言ったのはそっちじゃねえか。文句言うな」
「一緒にするって言ったって、どうせ許してくれなかったでしょ！」
言い合いを始めるエリスとディオ。氷海がうるさそうにしながら紅茶を飲み干す。
「天空王子はエヴァスタ旧天空教会にいると、天空王に直接聞いた」
「ぶっ！！」
自分を落ち着かせようとジュースを口に含んでいたエリスは、氷海の説明を聞くなりそれを噴き出した。
「ちょ、汚ねーっ！そんなにおおげさな反応、求めてねーよ！」
「はあっ！？エヴァスタ教会跡！？よりによって！？」
「そ、そうだけどー…そんなに驚くところなのー？」

怪訝な表情で、エリスを見る一同。彼女は数回咳をした後、
「だって…あそこ、魔獣だらけじゃん。どこもかしこも崩れてて危ないし、地下は浸水してるし、じめじめしてるし汚いし」
「聖地に対して、汚いとか言うなよ…。
仮にも、今の創造主教の元なんだぞ、天空教は。そんなこと言って創造主のバチが当たってもしらねーからな」
天空教とは、大昔、エヴァスタ教会を本拠地として天空を信仰の対象としていた宗教である。現代にはもう残っていないが、そこから派生し、世界を創造したといわれる存在を崇拝する「創造主教」が今でも続いている。そのためエヴァスタ旧天空教会は、創造主教の信仰者の聖地になっているのだ。
「一番罰当たりなのは、その場所を天空王子誘拐の拠点に選んだ犯人だけどな」
聖地と言っても、教会そのものは朽ち果てて久しく、魔獣の住処となっている。教会どころか、教会のある谷にすら、滅多に人は寄り付かない。それを良いことに、誘拐犯たちは拠点にしたのだろう。
「嫌だったら来なくていいんだぜ。お前の好奇心を刺激するような楽しいことはないだろうし、こっちにとっても足手まといだし」
ディオがそう言って鼻で笑った。しかし笑われた当人は表情も変えず、あっさりと言ってのけた。
「別に嫌だなんて言ってないし。あんたたちが邪魔くさがろーが、あたしはついてくよ。もしかしたら、案外面白いことが起こるかもだしね」
「……」
ディオは、先ほど「説得したら諦めてくれるかも」と発言していたリシェルアの方を恨めしげに見た。しかし、彼女はちょっと困った顔をしたものの、呑気に紅茶に砂糖を入れる作業を続けている。
エドルはすでに、これ以上は無駄と言わんばかりの呆れ顔だし、氷海はまったく眼中にないのか、話に加わろうともせずにサラダをつついていた。

「はあ。勝手にしろ」
とうとうディオも、両腕を椅子の背もたれに投げ出して降参した。
勝利を収めたエリスは「やった！」と握り拳を掲げる。
すると、いつの間に入ってきていたのか他の客の、押し殺した笑い声が聞こえてきた。エリスははっと我に返り、あわてて姿勢を正す。
「…他の客が来てたのか…ここで話を進めるのはまずいんじゃね？」
「っつーか」
けだるそうに乱れた前髪を額から掻き分けると、ディオが言い放った。
「敵の情報うんぬんとか、行けばわかるだろ。ぐだぐだ話し合ってる時間があったら、とっとと解決したいんだよ俺は」
「投げやりだなー…」
「うるさい。
今日のうちに乗船券を手に入れて、明日の朝に出発。はい決定」
コーヒーを一気に喉に流し込んで、ディオは立ち上がった。
「どこに行く気だ」
「どこに行こうが俺の勝手じゃねえか。いちいちてめえに報告しなきゃなんねえ理由でも？」
氷海の問いにも耳を貸さず、ディオは喫茶店を出て行った。
「…あの野郎…メシ代置いていかなかったぞ…」
「ほんと、協調性のない奴だねー。自分勝手っていうか」
「お前が言うなっ！」
いい加減、この場のよどんだ空気にうんざりしていたエドルは、それを払うように声を荒げた。
「あーもう、どいつもこいつも！」
「まあまあエドル、他のお客さんに聞こえちゃうわよー」
「……仕方ない。
行けばわかるというのはもっともだ。ぶっつけ本番になってしまうが、作戦は現地で考えよう」
氷海も、ナプキンで口元を拭って席を立った。

「船の券は各自で購入。明日の朝、一番の船で発つ」
「りょーかーい。
寝坊するんじゃねーぞ…特にエリス」
「なっ！するわけな、ないじゃんっ失礼な！」
名指しで忠告されたエリスは、焦って噛みながら反抗した。その拍子に飲みかけのジュースをこぼしそうになっている滑稽な様子に、エドルたちは呆れるしかなかったのだった。

9

案の定、寝坊をして遅れてきたエリスを口々に罵りながら、一行は王都の近くの港町から船に乗った。隣の大陸に着いて山の麓まで行き、そこにあった小さな村で一泊すると、山を越えて、エヴァスタ旧天空教会のある谷へ。

エヴァスタ旧天空教会が見えたときには、すでに夕日が山の向こうに落ちてしまっていた。ふくろうの静かな鳴き声だけが、不気味に谷に響いている。

教会の傍までやってくると、一行は一旦森の木の陰に身を潜めた。旧教会の外に人影がないのを確認し、入口に集合する。

「昔、火事に遭って焼け落ちたって聞いたけど…案外、建物自体はしっかり残ってるんだな」

夜闇の紛れて尖塔の錆びた風見鶏がぎこちなく回っているのを、エドルは感慨深げに眺めた。

「外側はまだ綺麗なものだが、内部は見る影もなく崩壊している。一番危険なのは地下だ。浸水や魔獣だけではなく、いつ天井が落ちてくるかわからないというのがやっかいだ」

「へえ、氷海お前、来たことあるのか？」

「私に追われていた馬鹿な賞金首がここに立てこもったことがある。私が見つけたときにはすでに、魔獣にやられていたが」

どさ、となにか重いものが落ちる音がして、二人は振り向いた。一番後ろでエリスが、地面に座り込んでいる。

「ねえ、もぉ疲れたよー」

「うるっせーな、さっきから！お前それ、今日何回言ったか覚えてるか？」

「知らないよ、そんなのー」

足を投げ出し、まるで駄々っ子のように首を横に振った。

「ちょっとここで休もうよー！もう動けないー！」

「あまり大声を出すな。中にいる犯人たちに感づかれる」
「だって！」
「しっ」
リシェルアが、唇に人差し指を当ててエリスを黙らせた。崩れた教会の入り口を、うかがうようにじっと見ている。
「どうした？」
「泣き声が聞こえたような気がして」
「セイレーンじゃなーい？」
先ほどから面白くないことばかりで完全にむくれてしまったエリスが、ヤケクソ気味に言い捨てた。
「最近のセイレーンは歌じゃ人間を騙せなくなってきたから、人の泣き声を真似するようになってるんだってさ。あーやだやだ。世も末だよねえ」
「まじかよ」
「何騙されてんだよエドル。海の魔物のセイレーンが、こんな山奥にいるわけねえだろうが。
エリスも、いかにもあり得そうな嘘つくな」
「ちっ」
ディオの冷静なツッコミで、からかわれていたことに気づくエドル。舌打ちをするエリス。
二人が言い争いを始めようとしたところで、構っていられないという表情の氷海が動いた。
「何、もう行くの？」
「それが本当に人の泣き声だとしたら、天空王子の可能性が高い。王子はまだ、八歳だというからな。
なにかあってからでは遅いだろう？」
一応入口の壊れた扉の奥を確認して、人がいないか確かめると、氷海は他の四人が来るのを待たずに入って行ってしまった。
「あっ、おい待てよ！」
その後ろ姿が闇に消えるのを、慌てて追っていくエドルたち。

内部は、ところどころの崩れた天井から月の光が入ってくるだけで、明かりもなく真っ暗だった。
廊下の終わりにあった礼拝堂で、一行は立ち止まる。
「地上部はほとんど壊れてて、使い物になってねえな」
「そうねー。やっぱり、王子がいるのは地下かしらー」
「えーっ？あんな汚いとこいくの？服汚れちゃうじゃん」
「じゃあ帰れ」
「…そんなマジな顔で怒んないでよ。言ってみただけだってば」
「地下への階段は、ここだな」
部屋の隅に向かった氷海が、床に取り付けられていた石造りの扉を持ち上げた。重厚な音を立てて開いたその扉は蝶番が新しく、最近補修された跡があらわになっている。
「こっから先は静かに――」
「ひゃあああああああっ」
注意しようとした傍からエリスの甲高い悲鳴が上がった。同時に、どん、という鈍い音も聞こえてくる。
「！？」
魔獣でも出たかと四人は振り向いたが、そんな影は見当たらない。それどころか、エリスの姿も忽然と消えていた。
「エリス！どこだ！」
「いったあ…ここだよー」
閉鎖された場所から話しているような、くぐもった声が返ってくる。リシェルアが、魔法で明かりをつけて礼拝堂を照らしだした。
すると、並んだ長椅子の間の床に、大きく口を開けた落とし穴が。
「大丈夫ー？」
「怪我はしてないけど…」
穴の内部に明かりを向けて、声をかけるリシェルア。中から、いつもより比較的テンションの低い声が、穴の壁を反射して響いてきた。
「馬鹿だろ、お前」
「うるさいっ早く助けてよ！」

きちんと反論してくるところをみると、どうやら元気そうだ。
「穴の深さはどのくらいなんだ」
「うーん…あたしが落ちても怪我しない程度ってとこ」
「じゃあ、早く登ってこい」
「はあ!?怪我しない程度とは言ったけど、登れるとは言ってないよ!無理だってば!」
「なら、一生そこにいろ」
「あんたって、ほんっとサイアクだよね…ディオ」
「本当に登ってこれないのー?」
エリスは唸って、リシェルアの掲げる明かりの中で、壁に手をかける。しかし、その細い腕と華奢な手つきに、補助もなく登ってくることは無理に思われた。
「こりゃ、ダメそうだな…」
「…やはり、お前はそこにいろ」
「ちょ、氷海までひどっ」
「お前の為でもある」
氷海は一度、地下へと続く床の扉に目を向けて、エリスを説得し始める。
「地下では犯人たちと衝突する可能性が考えられる。怪我では済まないかもしれないだろう。
だから、そこで待っていろと言っているんだ。後でちゃんと迎えに来る」
途端に、信じてたまるかという目で氷海を睨みつけるエリス。
「ウソつき」
「失礼な。
私には、人を置き去りにして野垂れ死にさせる趣味はない。どこぞの月傷と違って」
それでも信じられないのか、エリスは口を尖らせて俯く。
ディオが、この暗闇の中で光っているのではないかというほど鋭い目つきで氷海を見ていた。それを視界に入れないようにしながら、

エドルもエリスに向かって叫ぶ。
「ちゃんと戻ってくるって！」
「……しょーがないなあ。
絶対戻ってきてよね」
両腰に手を当てて、エリスはジト目で四人を見上げた。
「はいはい」
リシェルアが、にっこり笑ってそこに手を振る。すると安心したのか、エリスは穴の底に座り込んで待機の姿勢を取った。
「大人しくしてろよー」
「余計なお世話だよ。早く行きなって」
そっけない態度で見送る彼女を後にして、四人は地下への道へと降りていった。

10

「騒音女がいなくなって安心したぜ」
暗い通路を手さぐりで歩いていると、ディオが清々したという口調で呟いた。
「あの調子で騒がれたら、いつ連中に気づかれるかわかったもんじゃねえよ」
「足手まといになるからな」
それに、抑揚のない声で応じる氷海。
「適当に説得して、待たせておくことにした」
「お前、そっちが本音かよ」
その冷淡さが彼女の異称の元になったという話を、エドルはたった今思い出していた。
「……待って。何かあるわー」
右側の壁を探って歩いていたリシェルアが、足を止める。
「扉みたい」
「中に人は？」
扉に耳を押し付けて、リシェルアは頷いた。
「……声が聞こえるわ」

「どういう事だ！！」

突然、扉の奥から轟音のような怒鳴り声。驚いたリシェルアが顔をしかめて、扉から離れる。
「失敗だと？！馬鹿な！あれは正統な天空王族の血筋を引いているはずではないのか！」
「もちろんそうだ。ゼルヴァス王の実の息子だからな。今回の場合は血筋云々の問題じゃないんだよ。あれがまだ、幼いっていうのが原因らしい」

木製の扉は薄く、しかも中にいる者たちは興奮しているのかかなりの声量で話していたため、会話の内容を聞き取るのは容易だった。
「ちっ…！これなら、姉の方にするべきだったか…」
「どちらにせよ、この計画は破棄したほうがいいな…時間をかけすぎた。王子ももう、用済みだな。
王の差し向けた仕事屋の連中が、間もなくここにやってくる」
「もう来てるっつの」
部屋の中にいた声の主が、さっと顔を青ざめさせてこちらを向いた。話に夢中になっていて、エドルたちが部屋に侵入したことを知らなかったようだ。
「…来たか」
「死にたくなかったら大人しくしろ。ただし、命の保証はどっちにしたってねえけどな」
ディオが、銃口を二人の男に向けて凶悪な笑みを浮かべた。一歩でも二人がその場を動けば、倫理道徳に構わず撃つつもりらしい。
「額の傷に、黒い銃…。なるほど、王もとんでもない輩を味方につけたな…」
「俺の事を知ってるんなら、俺を相手にした人間がどういう末路を辿ったかも知ってるだろ？
遺言か命乞いか、どっちでも好きな方をする猶予くらいはやるぜ」
まるっきり悪役じみたディオの問いかけに応えもせず、犯人のうちの一人、黒い髪の男が、憎々しげに四人を睨む。
「計画は失敗、王の手先には見つかる…まったく、散々だ！」
「話を聞かせてもらったが、かなりお粗末な計画だな。
おまけに、どれほどの規模の連中かと思えば、たった二人だったとは予想外だ。目的はなんだ？身代金か？」
氷海が剣先を突き出して問うと、黒髪の男は鼻でそれを笑い飛ばした。
「たった二人？身代金？
貴様らの推察も、たかが知れているな」

突如、二人のまわりに魔法陣が描かれ光ったかと思うと、数匹の魔獣が現れる。もう片方のローブの男が、召喚の魔法を使って呼び出したようだ。相手にしても、エドルたちの実力であれば時間をかけることなく片づけられそうな数・種類だが、犯人たちを捕える際には邪魔になりそうだった。

「ここにいるのは確かに俺たち二人だけだが、別の計画を進めている仲間は大勢いる。

それにこの計画なんて、潰れたところで大本の計画に支障はない」

「身代金などという安っぽい目的なんて、もとから抱いてないということだ…

「希望の箱」をなめるな！」

言い捨てるなり、魔獣を盾にして後ろにある扉に逃げ込む犯人たち。

「あ、こら待て！」

四人は魔獣を思い思いの方法でさっさと倒してしまうと、その先の部屋へ飛び込んだ。

しかし、二人の姿は見えない。他の扉も見当たらず、いくら部屋の中を探しても二人は見つからなかった。

「くっそー…たぶんどっかに隠し通路でもあるんだろうけど、探してる間に逃げられるだろうな、こりゃ」

「しかし、べらべらと語ってくれたおかげで奴らの正体はわかった」

「希望の箱か…」

頷く氷海。

「私も宗教団体の一つとしか覚えがないが、それを調べるのは私たちの役目ではない。天空王の方に任せておけばいいだろう。

私たちは、天空王子の居場所を見つけなければ」

「だな。用済みだって言ってたし、ここに置き去りにされてるかもしんねー。

…それにしても」

エドルが、部屋を見回して首をひねった。

「ここ、何のための部屋だ?緊急時の避難場所にしては、やたら装

飾が凝ってるけど」
天井や壁一面に描かれた壁画は時間の経過を経てはげ落ち、あるいはところどころに穴が空き、そこから地下水が少しずつ漏れ出て床を濡らしていた。放置されてる調度品は湿気にやられてぼろぼろで、既に使い物にはならない。
それでも、そこそこの広さを持ったこの部屋は、何か神聖さを帯びていて美しかった。地上部の礼拝堂と比べても、壁画も調度品も質がまるで違う。
殊に皆の目を引いたのは、入口の正面の壁に彫られている、太陽を象ったレリーフだった。レリーフそのものに金が張られ、無数の宝石が埋め込まれている。
「何のための…って、見てわかんねえのかお前」
「わかんなくて悪かったな!だって、礼拝堂は上にあったからここは違うだろうし…」
助けを求めるようにリシェルアを見ると、彼女はレリーフを眺めて感嘆のため息を漏らした。
「ここも、たぶん礼拝堂よー。
ただし、地上の礼拝堂が天空を崇める場所だとするなら、こっちは太陽を崇める場所ってところかしらねー」
「太陽?太陽を天空教が崇めてたなんて、聞いたことねーなあ。だって、天空教は空そのものを崇めるから「天空教」って言うんだろ?」
「……お前、やっぱ馬鹿だよな」
再び軽蔑の視線を投げられ、エドルは怒りにまかせてその相手を睨みつける。
「「神聖なる太陽」の伝説、知らねえのか」
「……知らねー」
顔をしかめたまま小さな声で答えると、リシェルアがフォローするように説明し始めた。
「天空王族の直系の人は、代々、額に銀の六紡星の形の紋章を埋め

込むのは、エドルも知ってるでしょう？」
「それがどう関係してくるんだよ」
「天空族の頂点に立つ天空王族が、どうして最上級の黄金色を避けて銀色を使っているか…」
錆びた燭台の光に照らされて神々しく輝くレリーフに触れるリシェルア。
「それは、天空王族のさらに上に、黄金色の太陽に例えられるものがいるからなのよー」
「天空王族の上…？神の一族か？」
天空界の上空に存在すると言われる、神々の住まう大地、神界。普通の人間には神の一族に会う事はおろか、神界に近づくことすら叶わないが、唯一天空王族だけが、神族と交流できるという。
神族については謎が多く、天空王族の権威を主張するために創られた架空の存在だとも言われていた。
「ううん」
しかし、リシェルアはかぶりを振る。
「違うわ、もっと上。神は神でも、神の一族の長、創造主よー」
「創造主？…なるほど」
現代にも続く創造主教といえば、元は天空教から派生した宗教だ。
「創造主を、太陽に見立てて信仰してたわけか」
創造主は、神族よりもはるかに曖昧な存在である。世界を創り、自らの血と肉と魔力から神族の祖先を生み出したというが、現在まで生きているのか、もう死んでいるのかもわからない。どんな姿をしているかも知られていない。
ただ漠然と、その存在だけが伝説や口承に謳われている。
「地方や人によって創造主の姿は違って語られるけど、どこでも共通して言われてることがあるのよー。
それが、「創造主は黄金色の瞳を持つ」っていう、神聖なる太陽の伝説。この部分から、創造主は少なくとも人間、あるいは動物の姿をしてるって考えられてるわ」

「金色の目が、太陽に例えられる理由ってわけか」
「……ところで、エドル」
納得して何度も頷くエドルを、呆れどころか軽蔑すら混じった目で見て氷海が尋ねる。
「貴様は話を聞きながら、どさくさにまぎれて何をしている」
いつの間にかリシェルアの隣りに立ち、まばゆい宝石で彩られたレリーフに手を伸ばしていたトレジャーハンター。リシェルアはただ触れるつもりで手をかざしていたのに対し、彼の指の動きは明らかに不審だ。
「……いいじゃねーか、宝石の一つや二つ」
ばれたと気づくや否や、エドルはふんぞり返って開き直った。
「他のトレジャーハンターの奴らがこれに手を出さなかったのが、不思議なぐらいだぜ」
「当たり前だ。手を出したら、天空王族に目をつけられるからだよこのボケ」
「エヴァスタは、魔獣が出るから放置気味になってるけど、朝廷の管理下に置かれてる建物なのよー。そんなことしたら、本当に泥棒になっちゃうわー」
「し、知ってるってのそんなん！悪かったって、取らねーよっ！」
皆に叩かれて、しぶしぶレリーフから離れるエドル。それでもまだ、
「あんだけあるんだから、一個ぐらい取ったってバレねーだろ…」
と未練がましく呟いていた。
「さて、そろそろ天空王子を捜さねえとな。…連れていかれた可能性もあるけど」
四人は、本来の目的を思い出し頷き合って、まず部屋中を隈なく捜索した。しばらく調べていると、犯人の二人が逃げるのに使ったと思われる隠し通路を発見したが、もちろん二人の影も形もない。まっすぐ続いた通路と階段が地上に延びているだけで、隠し部屋の類も見つからなかった。
「やはり、王子は置いて行かれた可能性が高いな。少なくともこの

部屋には、隠し部屋が見つからない。逃げる途中で連れ去ったわけではないということだろう」
「じゃあ、どこにいるんだよ。上の階にはいなかったぞ」
「地下もあらかた捜したしー…」
行き詰まり、黙りこくってしまう四人。
「…仕方ない。一旦戻るぞ」
「どこに？」
氷海はため息をついて、さも面倒くさそうに答えた。
「エリスが、退屈しすぎて文句を言いだしそうなのでな」

11

「って、いねえええええ！！」
あの気まぐれ少女が待っているはずの落とし穴の中は、なぜかもぬけの殻だった。一番最初に覗き込んだエドルは、穴の淵に膝をついてうなだれる。
「待ってろって言ったのに！つーか、どうやって出たんだあいつ！」
「まあ、これで引っ張り上げる手間は省けたな。その代わり、どっかで魔獣に殺されてるかもしれねえけど」
不吉なことを言い出す月傷の銃士を、エドルは思わず睨みつけた。
「変なこと言うなよー…」
「でも、あり得るわねー」
「リシェルアまで…」
あの気丈な娘に限ってそんなことはないと思い込む。しかし、ディオやリシェルアの推測を後押しするかのように、突然静寂を割って聞こえてきたのは――咆哮だった。
「これは、魔獣か？」
「マジかよ！」
教会を揺るがすほどの大音量からして、並の大きさの魔獣ではないことがうかがえる。エドルは、さっと顔色を変えた。
氷海が、咄嗟にエルフ特有の長い耳を床に押し当てた。何をしているのかと周囲が問う前に立ち上がると、エドルを見るなり穴を指差す。
言わんとしていることがわからず首を傾げると、彼女は、古代装置の動きよりも機械的な口調で命じた。
「エドル、行け」
「どこに」
「ここの下に」
「は？」

エドルは、確認のためにもう一度、氷海の指が示す先を見た。穴は黒々とした空間を見せるのみで、明かりで照らさなければ底なしのようにも感じられる。
「おれに、ここから落ちろと？」
「落ちろとは言っていない」
いつもの涼やかな表情と口調で首を振り、穴に向けていた指をおもむろにエドルに向ける氷海。
「その、背中の翼は一体何の為にあるんだ」
「えっ」
思わず、ぎくりと身体を竦ませる。
ディオが彼の背後に回り、十七歳の少年にしては比較的小さめの背中を確認した。そこには、たたまれた純白の翼が生えている。左右とも、呼吸に合わせてわずかに膨らんだり、収縮したりしてその存在を主張していた。
魔界のとある島には、翼人族と呼ばれる、人の姿をしていながら翼を持つ種族が住んでいる。エドルは、その島の出身だったのだ。
「そう言えば、そこらで見かける翼人はみんな、足で歩くより飛んでることの方が多いんじゃねえかってぐらい飛び回ってるけど…お前が飛んでるとこは見たことねえな。
何で？」
「そ、それは、あの」
どうあがいても目立つその大きな翼を、必死に隠そうと両手で押さえる翼人の少年。
相方が、笑いながら含みのある言葉を投げかけた。
「いろいろと、理由があるのよー。ね、エドルー？」
「そ、そ、そうそう。いろいろと…はは、は」
ごまかすために乾いた笑い声を立てるエドルとは対照的に、リシェルアは楽しそうだ。
「…まあ、使えないというのなら仕方ないが」
問い詰めるのも良いが、今はそんな事をしている場合ではないこと

も事実。氷海は腑に落ちないという顔をしながらも諦める。
「しかし、エリスが落ちても怪我をしない程度というのだから、お前が飛び込んでも平気なのではないか、疾風？」
彼が身軽で運動能力が高いことを強調するためか、わざわざ異名で呼ぶところが恨めしい。エドルは観念して、氷海の言葉に従うことにした。
「はいはい、わかったよ。降りればいいんだろ、降りれば」
散々渋った割にはためらいなく飛び込み、難なく着地する。
頭上から、氷海が尋ねてきた。
「何か、入口のようなものはないか？」
「はあ？落とし穴の中に？」
「あったとしたら、そこからエリスが出た可能性がある」
落とし穴なのに出口を作ってしまったら、本末転倒というものだろう。半信半疑で、エドルは壁や底を丹念に探ってみた。
「あ、れ？」
指先に、周囲の土壁とは明らかに違うものが触った。上から明かりを注いでいるリシェルアに声をかけ、手元を照らしてもらうと、
「これ、もしかして、扉か？」
ノブもなければ引き手もない。ただ、壁に板を取り付けてあるだけだった。
しかし、耳を近づけてみると風の通る音がする。
「あったか？」
振り返ると、いつの間に降りてきたのか氷海が立っていた。降りられるのなら自分が降りれば良かったのに、と詰め寄ると、「もし見当違いで何もなかったら上るのが面倒」と平然と返されてしまった。
扉と壁の隙間に指を引っ掛け、扉をこじ開ける。生温い風が吹き付けてくるのと同時に、先ほどと同じ魔獣の咆哮が、確かに奥から響いてきた。
「どうやらこの穴は…落とし穴ではなく、地下へのもう一つの入口だったようだな。使用時には、梯子でも掛けて降りてくるのだろう」

「てことは、エリスはともかく、天空王子がこの先にいるかも」
「ついでに、魔獣もいるだろうな」
「あらまあ」
ディオとリシェルアがも降りてきて、扉の奥の通路を感心したように眺めていた。
「少なくとも、さっきの二人よりも手ごたえのある奴だと、殺り甲斐があっていいんだがな」
銃を片手に低い声で言った時の月傷の表情を、しばらくは忘れられないだろうとエドルは思った。

12

四人が通路を抜けて目にしたのは、かなり危険な光景だった。
縄で縛られ涙目になって震えている天空王子らしき少年と、その前に巨体を佇ませている一匹のドラゴン。そして、一番手前で仁王立ちになってそれを見据えているエリス。
エドルたちが来た気配を感じるや否や、エリスは身体ごとこちらを振り返って開口一番、怒鳴った。
「おっっっそっ！！」
その剣幕に思わず、エドルはたじろぎ半歩下がった。
「待ちくたびれてここに来ちゃったじゃん！
で？！犯人は捕まえたのっ？」
「う…えっと、逃げられ…」
「はっ？！あんたらほんっとマヌケだね！」
あまりの言われように反論しようとしたが、ドラゴンの威勢のいい咆哮に打ち消されてしまった。
真っ黒な体躯の向こうで、天空王子が丸い目をこちらへ向けて何か訴えている。
「とりあえず、あのドラゴンを何とかするのが先ねー」
氷海の視線が、床の、少々粗雑に描かれている模様に落とされた。
「魔法陣が描かれているということは、もともとここにいたのではなくて、召喚されたのだろうな。
先の、魔獣を召喚していたあの男の仕業か」
「あたしがここに入ったときにはまだいなかったんだけど、あの子のところに行こうとしたら出てきたの。もしかしたら、彼に近づいた時に召喚されるようになってたのかも。
あたしとしたことが、うかつだったね」
そう言いながらも、申し訳なさそうな態度を一切取らないところが、やはりエリスといったところ。

あらゆる獣の頂点に君臨する、まごう事なき地上最強の生物、ドラゴン。百年に一個の卵しか産まないこの獣は生息数が非常に少ないものの、長寿とその圧倒的な強さで、他の獣に命を脅かされることはほとんどない。その姿に神々しさを見出し、各地に竜信仰の風習が存在するほどである。

「おれら四人でかかれば、ドラゴンと言えどどうってことないだろうけどな」

「天空王子がいる。あまりドラゴンを暴れさせては、彼にも被害が及ぶ」

氷海が、剣を抜いて構えた。

「奴が炎を吐く前に蹴りをつけなければ。こんな狭い部屋で火を吹かれたら、天空王子どころか私たちもひとたまりもないぞ」

「そうだな。とっとと終わらせるか。

エリスは邪魔だから、どっかに隠れてろ」

ディオも銃口をドラゴンの頭に向けながら、エリスを見たが。

「さて、あんたたちも来たことだし、ようやっと反撃に入れるってわけだね」

彼女は呑気にそう呟くなり、やおらドラゴンに向かって、平然と歩み始めたのだ。

「何やってんだお前ーっ！」

「何って、ドラゴンを倒すに決まってんじゃん。

いーい？あんたたちが囮になってドラゴンを引き付けるんだよ。そしたらあたしがあいつの背後から、魔法でカタをつけるから」

「な、お、おま」

ツッコミどころが多すぎて、どこからさばけば良いのかわからず戸惑うエドル。

しかしその間に、氷海が眉をひそめてエリスに問いかけた。

「…魔法…？

貴様まさか、魔法が使えるのか？」

それを聞いて、エドルははっと我に返った。

エリスを見やると、きょとんとした瞳とかち合う。
「使えるけど」
「うっそだろ？お前、ただの旅行者だって自分で言ってたじゃねーか」
「ただの旅行者だけど、魔法が使えるの。なんか文句、ある？」
むっとした表情を見せて、エリスは不機嫌に顔を逸らした。
「な、なんで今まで隠してたんだよ？」
「は？隠してなんかないけど」
あっけにとられる四人。
確かに、隠してはいない。彼女は今まで魔法を使えるとは一言も言っていないが、使えないとも言っていない。まったく戦いに関する知識のないものだと思い込んでいたのは、エドルたちの方なのだ。
「とにかく、わけわかんないこと言ってないでドラゴンを引きつけてよ。あんなに尻尾をぶんぶん振りまわされてると、背後に回れないじゃん。
真正面から魔法使ったって、不意打ちになんないし」
「……」
四人は釈然としない思いを抱えながらも、彼女の言う通りにドラゴンの注意を引きにかかった。
リシェルアが炎の玉でドラゴンをかく乱し、ディオが銃口から魔力の弾丸を撃ち出してドラゴンの硬い鱗に傷を与えていく。氷海も剣をふるってドラゴンにエリスの存在を気付かせないようにし、エドルはエリスの移動を補助していた。
「本当に、使えるのか？」
「まだ疑うわけ？それは、今からあんたの目で確かめなよ」
ドラゴンの後ろを取った二人は、短く会話を交わした。
「ただ、」
エリスが、隣りのエドルに聞こえるか聞こえないかの声量で呟く。
「こんなに近くにいたら、あんただとちょっと耐えられないかもね」

え。

疑問の声を出そうとしたとき、エドルは、急に自分の身体が床へと引っ張られるような感覚を覚えた。

その力に負けて、膝から崩れ落ちてしまう。まるで肺になにか詰まってしまったかのように呼吸が浅くなって、酸素を取り入れるのに精いっぱいだ。

体中に走る戦慄。震えながら、遠くにいるリシェルアに助けを求めようと顔を上げると、彼女は驚いた表情でこちらを見ていた。

その時、気を散らしたリシェルアにドラゴンの爪が迫るのが見えた。叫ぼうとしても、声が出ない。めまいがして、視界が真っ暗になった。

もう、駄目かもしれない。

消える意識の片隅でそう思った直後、誰かが頭の中で、囁くように言った。

「フィーレ」

その言葉が、エドルの認識できた最後の物事だった。

13

この間と同じ、そびえ立つ塔の夢だった。
どうやらこの塔は、小さな島に建っているようだ。周囲に海しかない、その孤島の雰囲気は不気味だが、そこに降り立とうとしている自分の心には、悲しみにも似た憎しみ以外、何の感情もなかった。

エドルが目を覚ました時、一番最初に目に入ってきたのは、心配そうに顔を覗き込んでくるリシェルアの顔だった。
「あ、エドルー。大丈夫ー?」
記憶の一番最後に残っている彼女は、確かドラゴンに襲われているところだったが…怪我一つなくぴんぴんしているところを見ると、無事だったのだろう。
ゆっくりと上半身を起こすと、今度はディオと氷海の二人を見つけた。ディオは椅子に姿勢を崩して座り、氷海は窓際に寄りかかっている。
「ここ、どこ?」
「山の麓の村。谷に行く前に寄ったところよー」
閑散とした、見覚えのある素朴な部屋。エヴァスタ旧天空教会に向かう途中で泊まったのと、同じ宿だろう。
窓の外を見ると、夕陽の強い光が寝起きの目に眩しかった。どうやら、気を失ってからかなり時間が経っているようだ。
「あなた、丸一日気を失ってたのよー」
「そんなに?」
氷海が頷いた。

「ドラゴンとの戦いの最中、いきなり倒れて以来、ずっと」
「倒れたお前を、いったい誰がここまで運んだと思う？」
怒りのこもった低音が聞こえて、エドルはびくっと背筋を伸ばした。
「……すいませんでした」
「帰りの荷物持ち、決定」
うげ、と言葉にならない声をあげて、顔をしかめる。
荷物持ち役を任された者は、旅の途中でエリスが買い込んだ大量の服飾品や菓子を、代わりに運んでいかなければならないのだ。
「そういえば、エリスは？」
「村に着くなり、買い物するとか言いだして飛び出したまんまだ」
「あっそう…」
人が気を失っているというのに、薄情なものである。
「それと、」とディオが、思い出したように付け足した。
「天空王子は無事だ。隣りの部屋で寝てる」
「衰弱してたから、まだお休みしてもらってるのー。でも、怪我ひとつなかったわー」
安心してため息をつき、エドルは肩や首を回して身体の調子を確かめた。倒れる直前はあれほど気分が悪かったというのに、今はそれが嘘のようだ。
「結局、おれが倒れた原因は？」
「魔力にあてられたのだろう」
氷海が窓の外を見ながら答える。しかし、「魔力にあてられた」という言葉の意味が、エドルには理解できなかった。
「当てられ…？なんだ、それ」
「自分の持ってる魔力よりも強い魔力を傍で感じると、身体が拒絶反応を起こして、気分が悪くなっちゃうのよー。
強いって言っても、相当強大じゃなきゃ滅多に起こらないみたいだけど…」
「そう。それに、被害者本人が持っている魔力によっても左右される。

つまり、リシェルアのように普段から魔力を使って鍛えているような者は、多少強い魔力にあてられたところで何ともない。しかし、ディオのようにもともと魔力の弱い亜魔界人な上、まったく魔法を使わないというのであれば起こりやすい。

あの場にいたのがお前ではなくディオだったら、丸一日眠り続けるだけでは済まなかっただろうな」

「強い魔力…」

不意に、倒れる直前に聞こえた、知らない響きの言葉を思い出すエドル。あの時、あの言葉を発していたのは。

「…エリスか?!」

「んー?呼んだ?」

その名を口にした途端、前触れもなく開く部屋の扉。噂をすればなんとやら。

今度は一体何を買ってきたのか、紙袋がいくつも彼女の手元で揺れている。

「おれを失神させたのはてめえかーっ!」

「はあっ?何それ意味わかんない!

あたしは魔法使っただけだし。魔力が弱くて勝手に倒れたのはそっちじゃん!」

エリスは怒号を突き放すと、床に紙袋を無造作に置いた。自分も座り込み、がさがさと中身をあさり始める。

土産品らしき、よくわからない絵や宣伝文句が書かれたパッケージたちの間から、明らかに毛色の違う美しい石が転がり出てきた。

「あ、あった。ハイ、これ」

「んあ?」

その透き通った石をエドルに手渡すエリス。

恐る恐るエドルが受け取ると、それは魔法石だった。淡い緑色の光を放つ、リョクギョクという名前の。装飾は施されていないが、研磨された傷一つない多面体が夕陽を反射している。

「お、お前、これどこで…」

驚いて、見開いた目をエリスに向けた。
「村の宝石店で買ったの」
「まさか、見舞い品のつもりで？」
「まあ、そんなとこ。
もちろん、ただの見舞い品ならそんな高いものじゃなくて他の物にするけど」
そう言って、エリスはエドルの持っていた緑色の宝石を手に取った。
「これには、あたしの魔力が込めてあるの。もしあたしがあんたの傍で魔法を使っても、当てられなくなる。
持ってるだけで効果があるから、落としたりしないでよ」
「お、おう」
改めてリョクギョクを受け取って、エドルはまだ戸惑いながら、床の荷物を片付け始める彼女の後ろ姿を見つめていた。
「本当は、ただのガラス玉に魔力を込めるだけでも良かったんだけど…気分が悪くなるならまだしも、倒れちゃうなんてよっぽど」
「…弱いって言いてーのか？」
「その通り」
見下したような笑みで、顔だけで振り返るエリス。
「だから、ガラス玉よりたくさん魔力を込められる、正真正銘の宝石をあげることにしたの。
感謝してよね」
土産品を一通り片付け終えると、彼女はディオに近づき人差し指を突き付ける。
「特に、ディオ。あんたは、あたしが魔法を使うときは傍にいない方がいいかもね。魔法を使わない亜魔界人が当てられたら…」
「安心しろ」
忠告を受けたディオは、椅子の上で足を組み替えながら鼻で笑い飛ばした。
「天空王子を城に送れば、この仕事は終わりだ。そこの冷血が言ってた容疑も晴れたし、お前らと一緒にいる理由もない。

お前が次に魔法を使う頃には、俺はいねえよ」
「…なるほど。じゃあ心配ないね」
エリスは何故か柔らかく微笑むと、「天空王子の様子を見てくる」と言って部屋を出て行った。
しばらくして、閉まった扉を睨むように見つめていた氷海が、顎に手を当てて呟く。
「…怪しいな」
その言葉が意外で、エドルは「は？」と首を傾げた。
「エリスが？」
「ああ」
窓枠に手をついて、寄りかからせていた腰を上げエドルの方へ向き直る氷海。夕陽が沈んで深い藍色の立ち込める部屋の中で、彼女の表情はよく見えない。
エリスのどの辺が怪しいのかしばらく考え込み、エドルは思い立った事柄を確かめるように述べていく。
「…魔法の件は、あいつが意図的に隠してたわけじゃない。おれたちが、使えないもんだと思い込んでただけじゃねーか」
「それはわかっている」
「じゃあ、旅行者だって言い張ってるのが信じられないとか？ありゃ確かに嘘っぽいな」
「…元々そんな話、私は信じていないが」
リシェルアが、サイドテーブルの上にあったマッチで、壁に掛かっている燭台に火を灯していく。徐々に明るくなっていく部屋の中で、氷海は形の良い眉をひそめていた。
「特に、今回のことではっきりした。あの女、間違いなく旅行者などではない。
そもそも、」
表情はおろか口調にすら感情を乗せることのなかった冷静な賞金稼ぎが、珍しく少し興奮気味にまくしたてた。
「あれほどの魔法力を持つというのに、なぜお前たちに護衛などさ

せているんだ。あの強大な力があれば、旅の途中で出くわす魔獣やならず者など相手ではない。
ドラゴンを、一撃で倒すような力だぞ」
「い、一撃?!」
エドルは身を乗り出して目を見開いた。
確認のためにリシェルアを見ると、彼女も頷いている。
「しかも、呪文はたった一言」
魔法の呪文には、長ければ長いほど威力も持続時間も比例して増すという法則がある。炎の魔法を強力にしたいのであれば、多くの魔力を注ぐだけではなく、火に関する語句を連ねた呪文をできるだけ長く唱えれば良い。
逆に言えば、呪文が短ければ短いほど魔法は弱くなる。それでいて大きな威力を出すには、大量の魔力を注がなくてはならない。
「あれだけの魔力を放出して倒れもしないなど、異常としか思えない。普通は力尽きていてもおかしくないというのに」
「お前が倒れてる横で、仁王立ちしてたぜ、あの女。超いい笑顔で」
エドルへのからかいと、エリスへの皮肉のこもった言葉を投げかけるのはディオ。
「あいつが何者だろうが興味はねえし、知りたいとも思わない。でも、警戒するなっつーのはムリな話だな。万が一にでも敵対するようなことになったら、面倒だ」
「ちょ…敵対って」
今まで散々怒らせたりすねさせたりしたが、エリスがエドルたちを攻撃したことは一度もない。
それは言いすぎだろ、とたしなめても、ディオは反省の色もなしに無視して立ち上がり、ドアノブに手をかけた。
「俺は王都で離れるから、どうでもいいさ。奴が化け物だろうと何だろうとな。
気をつけんのはお前らの方だ。忠告してやったんだから有り難く思え」

「……」
ディオが部屋を出るのと同時にエリスが入れ替わりで入ってきた。
あまりにも完璧なタイミングですれ違ったので、エドルは思わず、今の話をエリス本人に聞かれていたのではと冷や汗を流していたが、二人はそれを露知らず、何事もなかったかのように行動している。
「…？何かあった？」
「いや、な、何も」
硬直しているのをいぶかしんだエリスが首を傾げるも、エドルはそれを不器用に流して顔を逸らす。
「ふうん。
あ、天空王子はまだ寝てたよ。寝顔が超可愛かった！」
「そ、そうか」
「…エリス――」
今まで顔を伏せていた氷海が、口を開いた。
「お前は、」
しかし、途中で声を詰まらせ、思い直したのか黙りこくってしまう。
焦れたエリスはいきなり「あーもう！」と大声を上げた。
「何なのみんなしてっ！隠し事するならもーちょっと上手くやってよね！
逆に気になっちゃうじゃん！」
「うっ…」
「言うか隠すか、きっちり決めてから態度に示しなよっ！」
清々しいまでにそう言い放つと、エリスは再び部屋を出て行った。
今のうちに決めてしまえ、ということなのだろうか。
エドルは大きなため息を吐くと、何か言いかけてやめてしまったエルフを見やる。
「何を聞こうとしたんだよ」
「決まっているだろう。あの女の正体だ」
「まさか、直接「お前化け物なのか？」って聞くつもりだったのか？思い切った奴だな」

「結局、聞けなかったが」
氷海は窓の向こうの街明かりを眺め、聞き洩らしてしまいそうな薄い声で呟いた。
「……私は、期待しているのかもしれない」
「期待？」
エドルが尋ね返しても、彼女は黙って横に首を振るだけ。
「…いや。
とにかく、ディオの言う通り面倒なことに首を突っ込むことにならないとも限らない。
今までの話はなかったことにして、いつも通り振る舞うのが一番良いな」
「あ、ああ」
それきり、氷海は何も語らなくなってしまった。ずっと、どこか遠くを伏し目がちに見つめている。
エドルとリシェルアはそれに、ただ顔を見合せて、肩を竦めるしかなかった。

市民に見つからないようにローブで身を隠した天空王子を連れ、五人は王都ヴィシェナに戻ってきた。
王子は、本当にあの度胸の塊のような天空王の実の息子なのかと疑うほど気の弱い、臆病な少年だった。幼い大きな瞳を潤ませながらおずおずとエドルたちについてくる。
下の身分である五人の誰に対しても常に敬語で、逆にこちらが恐縮してしまうほどだ。フードの陰から隣りを歩くリシェルアを見上げては、「まだですかぁ…？」と弱々しい声で尋ねていた。
「もう少しですよー。あとちょっとだけ我慢してくださいねー」
いつもの柔らかい微笑みでなだめるリシェルアのさらに隣りでは、エリスがフードの中の童顔に熱視線を送っている。
「あー…ホント可愛いー…」
「…そうか？
俺は、将来天空界を担う天空王候補者がこれだと、不安なんだが」
「もう、ディオったら」
困った顔で、つっけんどんな態度の月傷を睨むリシェルア。
「そうだな…天空王の変人ぶりと比べてどうかって聞かれると、悩むところだよな」
「エドルまで。そういう事言っちゃダメよー」
「あわわ、喧嘩はやめてくださいぃー…！」
「うふふ…泣きそうな顔もたまらないよーう……あっ」
表情をとろけさせて王子を眺めまわしていたエリスが、突然我に返った。
「ごめん、あたし、ちょっと買い物！」
「は！？いきなりかよ！
あ、おい！」
忙しなく目的を告げると、彼女はあっという間に身を翻して雑踏に

紛れてしまった。
エドルは伸ばした片手を、所在なさげに彷徨わせ、引っ込める。
「な…なんだ、アイツ」
「知るか。ほっとけ」
「……お前たちは、王子を城に送れ」
すると今度は、氷海がエリスの背中を追って、一行から抜けようとしたのだ。
「ちょ、待てーっ！なんでお前までっ」
「奴を追う」
そう言い残すと、さっさと人込みをすり抜けて同じく姿を消してしまう氷海。
置いてけぼりを食らってしまった四人は、呆然とするしかなかった。
「あ、ど、ど、どう、しましょうぅ…」
戸惑って、エドルのシャツを引っ張る天空王子。彼をないがしろにして二人を追うわけにもいかない。
「仕方ないわー。とりあえず、王子をお城にお連れしないと…」
「そうだな…」
後ろ頭を乱暴に掻き、エドルはしぶしぶ天空城へと足を進めた。

「まったくお前という奴は、こんなにあっさりと誘拐されてしまうなんて、情けない！」
やっと城に帰還した幼い天空王子を出迎えたのは、安堵の声やねぎらい、慰めの言葉などではなく、天空王という父親の叱責だった。
「次代の天空王という立場にありながら、犯人共を足蹴にするどころか魔法の一つも食らわせて来ないとは何事だ！」
もし天空王が誘拐されていたとしたら、そんな事をしていたのだろうかと、想像のつきないエドルたちだった。
「で、でもぉ…ぼ、暴力はいけないと思って」

「確かに、何も罪のない者にむやみに力を振りかざすことはいけないことだが、その状況であれば話は別だ。天空王族、ひいては神界におわす神の一族に害を為さんとする悪党共には、我々が直々にその愚かさを思い知らせてやらねばならん！」

「そ、そんなぁ…」

「まあ、そこまでしなくとも、手加減さえすれば立派な正当防衛になる。

自分の身ぐらいは自分で守れなくては、天空王に即位したときに大変なんだぞ。暗殺者や侵入者と日々戦わなくてはならんのは、お前もよく知っていることだろう」

ちら、とエドルたちに横目を向ける天空王。その意図するところを察して気まずくなった三人は、そっとその視線から逃げるように目を逸らした。

「お前には、もっと自己防衛術を学ばせる必要があるな…。これからも同じことが起こるようならば、エイナに監督をさせる」

「ひいっ…！」

王子の顔色が、姉の名を耳にした途端に可哀想なほど真っ青になった。

「…なんで姉王女に監督…？」

「さあ…」

顔を見合せ首を傾げていると、説教が済んだのか、ようやっと天空王がこちらを向いた。

「さて、お前は部屋に戻っていなさい。私はまだ、彼らと話をしなければならん」

「はい…」

しょげたままの天空王子は従者を伴ってとぼとぼと謁見の間を退出した。その後人払いが綿密に行われる。

「希望の箱…か」

四人という人数にはあまりに広すぎるこの広間に静寂が訪れると、天空王の低い呟きが重く響いた。

「ええ。王子をさらったのは身代金目当てではなく、何らかの計画のためと」
「『姉の方にしておけば良かった』とも言っていたのだな？」
「はい。つまり、王子ではなくエイナ王女様であっても構わなかったということだと考えられます」
「ふむ」
肘掛けを人差し指で叩きながら、表情を消して何かを考え込む天空王。しばらくして、思い出したように近況報告を始めた。
「アスロイ…いや、息子の誘拐を手引きしたのは、娘の世話係だった」
やっぱりか、と呟くのはエドル。
「世話係だけではない。以前、息子に王位を継がせると決めた際に反対した側近たちも、今回の事件に関わっていたようだ。ちなみに、その疑いのある者たちには既に取り調べを受けさせ、お前たちを送り出した後に拘置所へと送った。これで、しばらくは息子の身も安全だろう」
「早っ！」
「ふふん、私の行動力をなめるな。これでも昔は、猪突猛進ゼルヴァス君と…い、いや、今のは忘れてくれ」
ゼルヴァス王は、咳払いで三人の白い目をごまかすと、真面目な顔を作り直した。
「彼らは、外部の者に煽られた実行犯にすぎん。おまけに、実行した直後に主犯に裏切られたと、皆口を揃えて言っていたそうだ」
「王子の王位継承を取り消すためだって希望の箱の連中に持ちかけられて、誘拐したあとに結局約束を破られたわけか」
頷く天空王。腕組みをし、困ったように眉尻を下げる。
「まったく、そんな口車に乗せられてだまされるようなデキの悪い者たちが、この城で勤務していたとは…。やるならやるで、外部に頼らず利用し返すぐらいの頭は持ち合わせ

ていなかったのか」
「残念がる部分が違うと思うんですが」
エドルが思わず突っ込みを入れたが、王は聞こえなかったのか聞かなかったふりなのか、それを無視して話を転換する。
「とにかく、これで城の方はなんとかなったが、問題は希望の箱だな。
さらった後に息子を殺してしまわなかったという事は、おそらく王家転覆が目的ではあるまい。その計画とやらのために、息子か娘を利用する必要があったのだろう」
「そもそも、希望の箱とは一体どういったものなのですかー？」
王の話を遮り、尋ねるリシェルア。
氷海は、宗教団体の一つだと言っていた。しかし、彼女もそれ以上の事は知らないという。エドルも、名前すら聞いた覚えがなかった。
天空王は、再び大きく息を吐き、厳かな声で答える。
「宗教団体だ。しかし、ただの宗教団体ではない。もしかすると、宗教団体という言葉は不適切かもしれん。
彼らが信仰している存在は、無いのだから」
「っ！」
ディオが鋭く息を呑んだ。その仕草に驚いてエドルは顔を上げたが、彼は気付かず食い入るように天空王の顔を見ている。
「人類という存在を誇り、神などの信仰の対象とされる存在を極端に嫌う。あまりおおっぴらに活動をするような団体ではなかったのだが、ここにきて大胆な行動に出たな…
天空界だけではなく、魔界でも亜魔界でも、広く活動しているようだ」
「希望の箱は、他の世界だと違う名称を使っているのでは？」
ディオの唐突な質問に、天空王は不思議そうに首を傾ける。
「ん…？いや、私は他の世界の状況はよくわからないのでな。他の世界で活動している彼らの事も、ほとんど知らない。
もしかして、希望の箱について何か知っているのか？ディオ・ライ

アネイズ」
「…いえ。俺も、人類崇拝を行っている団体としか」
俯いた端正な顔立ちを、銀色の前髪が影を落として隠した。
急に訪れた沈黙に戸惑いながら、エドルは彼らを交互に見つめる。
それから、重苦しい空気を払拭するために、わざとらしく明るい声をあげた。
「い、いや、でもさ。とにかく、これでおれたちはお咎めなしってことになったんだよな?
天空王子も無事に保護したし、後の事はおれたちには関係ない。ハイ、これで一件落着!」
「一件落着?一体どこが一件落着なのかな?」
玉座に腰かけた最高権力を持つ策士がとても楽しそうに微笑んだ。
それを見たとたん、エドルの胸の内に嫌な予感と、早くも諦めとが浮かんだ。
「事件が落着したかどうかを決めるのは君たちではない。私だよ。
君たちにはもう少し付き合ってもらう」
「天空王子を救出するっていうのが依頼内容のはずですが?連中を制裁するのは契約外の話です」
「全くその通りだ。もちろん依頼内容を遂行してくれたのだから、不法侵入の件はなかったことにしてやろう。
つまり、王子救出の件と希望の箱追跡の件とは、別だと思ってくれていい」
三人は、その言葉に顔を見合わせた。
「報酬は?」
「そうだな…一人二百万コイルでどうだ」
それほど悩むでもなく淡々と天空王から告げられた数字に、エドルたちは目を丸くした。
天空王子誘拐事件の解決に、朝廷が提示していた金額は百万コイル。
今回は、その二倍を出すというのだ。
「ほ、本当に二百万ですか?」

「本当だ。私は人をからかうのは大好きだが、嘘をつくのは嫌いなのでな。
希望の箱の正体と目的を掴み、奴らを捕えるか倒すかして再起不能の状態にしてくれれば、二百万コイルを与える。
さあ、どうする？」
「引き受ける」
真っ先に頷いたのは、なんと、今まで自由の身になりたいと散々愚痴を言っていたディオだった。
「え、えええええっ！？」
これには、驚いて大声を上げるしかなかった。リシェルアもぽかんと口を開けて、少し不機嫌そうなディオがこちらを向くのを眺めている。
「んだよ、悪いか」
「だって、おま、さっきまでしつこいぐらい、こんな仕事嫌だって言ってたじゃねーか！」
「そりゃ、何の得にもならねえ仕事なんて、もう受ける気はねえよ。報酬が出るってんなら話は別だ。こっちは仕事屋だからな。しかも上がりは二百万。こんなうまい話はそうないね」
そう言いのけて、横目でエドルを見るディオ。
「で？そっちはどうするんだ。
お前らがいても邪魔だから、引き受けないって言うんならありがたいんだがな」
「ふざけんな。ぜってー引き受ける！いいだろリシェルア？」
「いいわよー」
「それでは、みんな引き受けてくれるというわけだな」
予想通りとでも言いたげな余裕のある笑みを浮かべる天空王。ディオが小さく舌打ちをしたのは、彼の手の内で踊らされるのが嫌なのか、それともエドルたちとまた一緒になるのが嫌なのか。
「見たところ氷海がいないようだが、別れたのか？
まあ、いい。途中で人数が増えても、きちんと全員分の報酬を用意

しよう。安心しなさい」
「随分太っ腹というか…。
その金がどこから出てるのかは知りませんが、もし市民に泣かれるようなことになっても恨まないで下さいよ？」
エドルの皮肉にも、天空王は相変わらず食えない笑顔を向けるだけ。
「こっちにも、いろいろと事情があるのだよ。手を抜くわけにはいかないのでね…」
エドルたちに向けられた言葉だというのに、なぜかそれは、本人たちにはほとんど聞こえないような声量で、独り言のようだった。
別れの挨拶もそこそこに立ち去る三人の背に向けて、天空王が呟く。

「その分、期待されているというわけだ。選ばれた英雄諸君」

2

「…で？俺たちが天空王子を送って天空王に報告している間、てめえらはどこで何してた？」
「商店街でお買い物ー！」
「おかいものー、じゃねえんだよ！」
夕時の買い物客で混み合う街中で、謁見を終えたエドルたちと買い物袋を山ほど手にしたエリスたちは、ばったりはち合わせた。
問い詰めるディオと、無邪気にそれに答えたエリスが口喧嘩を始めると、途端に場が騒がしくなる。
「…ディオは、この件が終わったら別れるのではなかったのか？」
二人を眺めていたエドルに、エリスに持たされたらしい買い物袋をうっとうしそうに整理しながら、氷海が尋ねてきた。
「あー…実は天空王から仕事を依頼されちまってさ。結局おれらもあいつも、それを引き受けることにしたんだ」
「仕事？」
「天空王子をさらった希望の箱の連中を、探し出して粛清しろって。二百万くれるらしいぜ」
「ほう」
ワインレッドの美しい瞳を細めて、氷海は興味深げに相槌を打つ。
「お前はどうする？」
「またあの非人道と一緒というのはいささか気に食わないが…仕方ない。
お前たちが行くというのなら、私も行くしかないな」
エドルは、先ほど謁見の際にディオにも向けた訝しげな視線を彼女に向けた。
本来は一匹狼であったはずのドライな氷海が、「エドルたちが行くから」という理由で参加するのが信じられなかったのだ。
「な、なんだよディオもお前も…なんか気持ちわりーな」

「勘違いするな。興味があるのはお前ではなくて、お前たちについてくるあの女の正体だ」
鋭い視線の先にいるのは、甲高い声でディオに怒鳴り散らしている、いまだ謎の多い魔法少女。
「エリスか…。
あいつの後を追って行って、なんかわかったのか？どうせお前、あいつの正体を掴むためについて行ったんだろ」
静かに首を振って、残念そうにため息をつく氷海。
「後をつけていたのだが、本当に買い物をしているだけだった。
行った場所は商店街と裏通りと繁華街の喫茶店。商店街では主に服を買っていて、裏通りでは菓子やアクセサリー類を眺めていたな。
喫茶店では一休みして紅茶とケーキをぱくついていた。
道端で荷物を増やし過ぎて動けなくなっていたところを、仕方なく私が助けたのが約五分前。それまで奴は、私が後をつけていた事を気付いてもいなかった」
「お前……ホントにストーキングしてたんだな、ずっと…」
彼女の良くわからない執念におののいていると、エリスとの壮絶な舌戦を繰り広げていたディオがやおらこちらを向いた。
彼は氷海をひと睨みして、舌打ちをする。
「てめえも来るのかよ…」
「それはこちらのセリフなのだが。
ついさっきまで愚痴をこぼしていた貴様がいきなり手の平を返したように依頼を引き受けてくるとは、どういう風の吹きまわしだ。これだから金の亡者は…」
「はあ？賞金稼ぎのてめえが、人の事を言えた義理かよ。
大体、こんなバカ女の後付け回して何が楽しいんだか。お前の性癖を疑うね！」
「バカ？バカとは何！？ちょっとディオ、今の言葉訂正しなよ！」
今度は氷海も交えて三つ巴になった言い争いを、エドルは生気のない目で傍観していた。

何しろ、これからこの状況が日常茶飯事になってしまうというのだから、現実逃避したくなるのも当然というものだ。
「お前と二人っきりでトレジャーハントしてた頃が、まるで遠い昔のようだぜ…リシェルア…」
「いいじゃない、人数が多い方が、賑やかで楽しいわよー」
「これを、賑やかとは言わねーんだよ。やかましいって言うんだよ…」

3

「まったく、我々の計画の第一歩となるはずが、このザマとはな」
「何が言いてえんだよ」
とうに陽も落ち薄暗くなった部屋の中で、エドルたちの手を逃れてきたローブの男と黒髪の男が対面していた。
フードをおもむろに取りながら、ローブの男が軽蔑の視線を送ると、黒髪はそれをはね返すように睨む。
燭台の灯火がおぼろげに浮かび上がらせる二つの顔は、とてもよく似ていた。二人の間に流れる血と言う名の絆が色濃く表れている。
「だからやめておけと言ったのだ。最初から目立つことをすると、失敗した時に大事になる。
天空王どころか、余計な連中にまで目をつけられたぞ。よりによって、有名な奴らにな」
「うるせー。説教しに部屋まで押しかけてくんじゃねーっつーの。失敗したけど痛手になんなかったのは事実だろ。それに、こそこそするより、こうやって大々的に名前を出しちまえば、逆に堂々と行動できるじゃねーか。
その方が俺は気楽だね」
「…だからお前は、いつも短絡すぎると何度言えば…」
途中で諦めたように言葉を打ち切るローブの男。
「まあいい、説教はここまでだ。お前の立てた策など、最初から期待していなかったからな」
そうぼやいて、彼は黒髪が自分用に注いでいたワインを勝手に飲み干した。その動作をうざったそうに、黒髪は眺めている。
「さんざん煽った城の連中は、結局どうなった?」

「ほぼ全員、王に検挙されたよ。どうせ捨て駒だったし、もうどうでもいいじゃねーか」
「ほぼ全員…」
ローブの男は顔をしかめた。
「奴らが、余計なことを吐かなければいいが」
「安心しろって。あんな使い捨て共に、誰が機密事項なんか教えるかよ」
ボトルから注ぎ直したワインを一気にあおった黒髪は、相手の杞憂を鼻で笑い飛ばした。
「それでも心配か？」
「検挙されてしまっていては、今更な話の気もするが…な」
「…く、くくく」
グラスに口をつけながら、ローブの男の顔を見上げ、破顔する黒髪。
「実は一人、既に潜り込ませてあるんだよな」
燭台の周りを飛び交っていた羽虫が一匹、翅を焦がして床に転がった。
「今頃は、一仕事終えて酒でも飲んでたりして、なあ？」
一瞥もくれずにそれを靴ですり潰し、喉から笑い声を立てる。
「……こういう話でのお前の働きぶりには、心底呆れるぞ、ルエイド」
「心底尊敬する、の間違いだろ、クォード？」
兄の言葉に揶揄するように応えたその表情は、爽やかさや明るさなどとは程遠い笑みだった。

4

孤島にそびえる霧隠れの塔。
頂点は、霧よりも深い雲海に呑まれていつまでたっても見えなかった。
それが、なんとも言えずもどかしい。

「また予知夢？」
朝、エドルが不機嫌な顔で宿の食堂に降りてくるのを見るや否や、リシェルアが心配そうに声をかけてきた。
「ああ…」
「あの、高い塔が出てくる夢なの？」
言葉少なに彼女の言う事を肯定しつつ、用意された朝食の席につく。
「今日で四回目だぜ。しかも、見るたびに現実味が増してきて、寝た気がしねーよ…」
食器をいじりながら、エドルは大あくびをした。
「今回の事件に関係してるのかしらねー？」
リシェルアは、食後の紅茶を冷ましながら首を傾げる。
「どうだろうな。前に予知夢を見た時も、実際に起こったのは一年後だったし…見てすぐに起こるとは、限んねーんだよ」
予知夢に頼って行動するというのは、エドルは好かなかった。何せ根拠のない曖昧なものだから、外れることだってあるかもしれない。
確かに予知夢に助けられたこともないことはないが、それでも信じ切ってしまうことはせずに、参考程度にしておくに留めている。

「だから、期待はしない方がいいぜ。
ところで、氷海はどうした？」
いつもより食堂にいる人数が少ないことに気付き、ちょうど食事を済ませたディオに、尋ねてみた。
食堂内をくまなく見回しても、あの流れる水のような美しいプロポーションは見当たらない。いつもは誰よりも早く起きていて、悠々と紅茶をすすっているはずの時間だ。
「お前、マジで呑気だな…」
呆れ声が返ってきた。
「あの女は、昨晩起きた事件の聞き込み調査に出たよ」
「昨晩？事件？」
寝耳に水の話だ。リシェルアの方を向くと、彼女は小さく頷いた。
「王子誘拐に加担していたお城の人たちが、ほぼ全員殺されたそうよ。
一晩で」
「は？一晩で？」
天空城で政務を執っている人間が何人いるかなどは、調べる気も起きないが、王子の即位に反対していた人間だけでもその数は、間違いなく十本の指では数えきれるものではないはずだ。それを、一晩で始末したというのは、
「相当の大人数で殺ったか、相当腕のある奴を雇ったか。
拘置所を見張っていた腕利きも、残らず殺されていたみてえだから、両方かもな」
大して事件そのものに興味もないのか、伸びをしながら適当な見解を呟くディオ。
「ごちゃごちゃ考えなくても、あの腹黒エルフが全部調べ上げて帰ってくるだろ。
あの女、情報収集に関しては抜け目もスキもねえからな…。どこから仕入れてくるんだか。忌々しい」
「貴様に腹黒呼ばわりされるとは、心外だな」

凛とした声音に顔を上げると、食堂の入口で、話題の人物が腕組みをして立っていた。片手に手帳とペンを携え、右眼には片眼鏡（モノクル）が掛かっている。

知的で凛々しいその出で立ちは、賞金稼ぎなどではなく、記者と言った方がふさわしい。

「何を考えているのかわからないのは、むしろ貴様の方だろう。貴様の所業は、何度調べても調べきれるものではない。わからないというよりも、底がない」

「こそこそ人の事詮索してんじゃねえよ、下衆が」

「下衆？それは私にではなく、鏡に向かって言う言葉ではないのか」

澄んだ朝の空気が、二人の会話によって見る間に温度を下げていく。最近まともな朝を迎えてないなあ、と、エドルは大きくため息をついた。

放っておこうかと思っていたが、温和さと勇気とを兼ね備えたリシェルアが止めに入り、なんとか今回は事なきを得る。

「で、氷海。事件について何かわかったのか？」

「大体は。

しかし、この事件の裏で、手ぐすねを引いているのがどこかなどというのは、考えるまでもないだろう？」

「…やっぱり、希望の箱しか考えられないわよねー…」

頷き合う氷海とリシェルア。

「希望の箱が、誘拐事件の口封じのために協力者を殺害したというのは間違いない。

問題は、前の事件の解決――いや、奴らの側からすれば失敗か――から、今回の事件までの時間だ」

「…間隔が短すぎるな。動きが早すぎる」

天空王子を連れ戻してから、たった一日しか経っていない。そのたった一日で、大量殺人の計画を練り、実行するというのは限りなく不可能だ。

「ならば、元々天空王子誘拐というのは失敗することを前提に計画

されていて、その為の処置、つまり今回の口封じの準備も既に済んでいたということだ。
――ただの負け惜しみかと思っていたが、「失敗しても痛手ではない」というあのセリフ、あながち嘘ではなかったということだろう」
手帳を開き、一息つく氷海。
「今のところ、警察による調査では、犯人の数も行方も不明という話だが…贔屓の情報屋によれば、犯人はたった一人しかいなかったとも聞いている。一体、何が正しいのやら」
「一人?!ありえねーよそんなん!」
思わず、エドルは鼻で笑い飛ばしていた。一晩という時間と、殺された連中および見張りの数を考慮しても、一人の犯行とは到底考えられない。
氷海は手帳を閉じると、少し声のトーンを落とした。
「それから、もう一つ問題がある。
関係者の口封じの次は、邪魔者の始末が定石だということだ」
「邪魔者?」
「私達以外の何者でもない」
一同の他に人のいない寂れた食堂の中に、一瞬、沈黙が訪れた。

5

リシェルアが、ポットから紅茶を継ぎ足しながら、今告げられた事実にそぐわない、穏やかな声で呟いた。
「あらまあ、困るわねぇ。いつ刺されてもおかしくないなんて、ゆっくりお茶もできなくなっちゃうわー」
「行動と言動を統一しろ、リシェルア。どっちが本音か全然わかんねえよ」
呆れた顔のディオを、「こいつはこういう奴だから」とあっさりあしらうエドル。そんな二人のやり取りにも、緊張感は欠片も見留められない。
エドルは、パンをちぎっては口に放り込むのを繰り返しながら、氷海に尋ねた。
「そもそも。犯人は一人、なんつー情報はどこからやって来たんだよ」
「匿名だが、目撃者がいたらしい。匿名だと言っても、警察ではなく情報屋に情報を流すところからして、どういう類の人間かは明白だが」
彼女は、モノクルを外して丁寧に拭きながら答える。
「拘置所から、何者かが飛び出してきたのを見ていたそうだ。背の高い男だったらしい」
「そりゃまた、良く出来た偶然だな。真夜中に、拘置所付近を散歩するのが趣味なのか、その匿名は」
皮肉をたっぷり含ませ、言い捨てるのはディオ。情報を流した匿名の人間への皮肉というよりは、情報を得てきた氷海への皮肉のように取れた。
「…私の情報が信じられないというのなら、別に信じなくとも良いのだが。

子供じみた皮肉を言っている暇があったら、外に出て自分で情報収集をすれば良いものを」

「その「匿名の人間」が、事件の関係者だということもあり得そうねー」

再び険悪になった場を、間髪入れずにリシェルアが戻した。どうやらリシェルアは、たった数日間で、この凶悪な関係の二人を制御する術を身につけたようだ。

彼女の驚異の適応力に感心しながら、エドルも彼女に便乗してやり過ごす。

「どういう意味だよ？」

「もしもの話だけどね。

事件の関係者、つまり希望の箱の人たちが、わざと情報屋に情報を流して、それを聞くあたしたちへ警告してるのかもしれないわー。これ以上邪魔すると、こういう目に遭うぞーって」

拘置所にいた多数の人間を始末した、たった一人の殺人犯。そんな人物に命を狙われていると知って、震え上がらない者はほとんどいないだろう。

「例えそうだとしても、そんな警告は、こっちにしてみりゃむしろ挑発だけどな」

余裕の笑みを浮かべて、エドルは相棒の紅茶を許可も取らずに飲み干す。

「警告にしろ挑発にしろ、乗ってやる義理はこっちにはねえよ。喧嘩売ってきたら、買うだけだ。気が向いたらな」

ディオは、最初のやる気のない表情に戻ると、席を立って食堂を去って行った。氷海も、もう一度情報収集に出ると言って慌ただしく外出した。

残る二人は軽く談笑した後、ふと、メンバーの一人が未だ姿も見せていないことに気づいた。

「…ところで、あのバカ女はどうした？」

リシェルアが、エドルの手からさりげなくカップを奪い返して答えた。
「あたしが起きた時にはまだ寝ていたみたいだから、きっとまだ起きてきてないわねー」
「本っ当に呑気な奴だな…」
先ほど、同じことをディオに言われたことなどすっかり忘れて、エドルは嘲笑う。
「大量殺人犯に狙われてるって知っても、あんなに呑気なんだろうかね？」
「何の話ー？」
予想外に早く後ろから声が掛かって、エドルは驚きざまにティースプーンを落としてしまった。
振りかえると、赤茶色の髪をところどころ跳ねさせ、間延びした声でリシェルアと朝の挨拶を交わすエリスが立っている。
まだ驚きから立ち直れていないエドルを尻目に、彼女はのそのそと卓に着いて、パンを齧り始めた。寝癖を手で直してやりながら、リシェルアが最初の質問に律儀に答える。
「昨晩、天空城の人たちが、一気に殺害されたっていう事件があったのよー。
怖いわよねー」
ふと、エリスの手が止まった。
「…誰に？」
「犯人は不明。でも、どこの人間の仕業かは大体見当がついてる」
「どこの人間なの？」
「聞きたいか？」
何度言ったか知れない事を、エドルは念を押すように言う。
「これを知ったら、お前は間違いなく元の生活には戻れなくなるぜ。連中にとって、余計な情報を持ってる邪魔者になるってわけだ。天空王子を誘拐して、大量殺人をやってのけた連中に、命を狙われることになる」

「幸い、あの人たちは、エヴァスタであなたの姿を見ていないわ。今手を引けば、あなたの身の安全は保障されるの。これからも観光旅行を続ける気なら、悪いことは言わないわ。あたしたちより、他の用心棒を探した方がいいと思う」

珍しくリシェルアも、真摯な表情でエリスを諭した。今回ばかりは、黙って彼女が巻き込まれるのを、見逃すわけにはいかなかったのだろう。

だが。

「あのエヴァスタ教会跡で、あんたたちは何を見てたの？」

大きくため息をつくなり、彼女は忠告に対して答えを出さず、質問を返してきた。

何を意図したものなのか理解できず、目を瞬かせるエドルとリシェルア。そんな二人を、エリスは呆れ顔で眺めまわす。

「わざわざ。あたしが。目の前でドラゴンを倒して力を見せてあげたっていうのに。

特にエドル。あたしの魔力に当たって倒れてる癖に、まだそういう事言うわけ？」

人差し指をこちらに突き付けてくるエリスに、エドルはたじろぎ後ろに身を引く。

「…い、いや、お前が相当強いってのは、よーくわかったって。でもな、ほら、お前自身の覚悟とか、心の準備だとか、そういう部分を心配してるのであって」

「今さら何を言ってるのやら」

容赦のない一蹴だった。

「いいから、くっだらないこと言ってないで教えてよ。もったいぶらないでさ」

返す言葉もなく、肩を落とすエドル。リシェルアがいつもの笑顔で、そっと寄り添ってきて耳元で囁いた。

「もう、観念しましょうよ。ああまで言ってるんだし、少なくとも足手まといにはならないわよー」

「あああわかった。わかったよ。
ただし、今後ディオが何か文句言ってきても、おれは一切かばわねーからなっ！」
負け惜しみとばかりにそう怒鳴り、顔を逸らすエドル。
彼に代わり、リシェルアが事の説明を続けることになった。

6

「天空王子を攫ったのは、宗教団体「希望の箱」」

朝食を再開していたエリスの動きが、止まる。

「エヴァスタであなたと別れた後、希望の箱を名乗る人たちと出くわしてね。追い詰めたんだけど、逃げられちゃったのよー。希望の箱については、あたしたちも良く知らないの。天空王から、神そのものを否定する、人間第一主義の思想を持った人たちだって聞いたわ。ディオが何か、思い当たることがあるようだったけど、話してくれないし…」

エリスは、じっと大人しく話を聞いているだけだった。殺人事件の概要や見解をリシェルアが語っている間も、茶々や疑問すら口に出さない。

「――あたしたちが知っているのは、ここまで。今、クリティスがもう一度情報収集に行っているから、また新しい情報が入るかもしれないわー」

そう、リシェルアは締めくくった。

手持ち無沙汰で黙って食器を弄んでいたエドルも、エリスの無表情を見やって声を掛ける。

「で、何か言うことは？」

しかしエリスは、まるでエドルの声など聞こえていないかのような目をして、遠くを見ていた。ほとんど口も動かさずに、か細い声で単語を発する。

「…エヴァスタ…天空王…希望の箱…」

それから、彼女は何か考え込むように俯いた後、

「「希望の箱」っていうのはね。昔、天空教と対立していた、小規模な人間第一主義思想の団体なの」

突然エドルたちの方へと振り返り、語りだした。
「一時期は盛んだったけど、その後はどんどん衰退していく一方。廃れたかと思われてたんだけど、どうやら地下で活動を続けてたみたいだね」
「…って、お前、希望の箱のこと知ってんのか?!」
「あたしも、これ以上のことは知らないよ。今、彼らがどの程度の勢力を持っていてどんな活動をしてるか、なんていうのは、全然分かんない」
「なあんだ…」
残念だと、視線を落とすエドル。
未だ有力な情報もないこの段階では、今回の事件について論じ続けることはできなかった。
この話題はここであっさりと終わってしまい、三人はしばらくの沈黙の後、他愛のない世間話へと移行する。
「お前ら、何のんびりおしゃべりしてるんだよ」
すると今度は、部屋に戻っていたはずの不機嫌な声が聞こえてきた。腰に銃を携え、身支度のなっていない三人の状況を見下した目で眺めてくる。
「んな暇あったら、さっさと情報収集してこい。それともなんだ。こんなところで丸腰でだべって、希望の箱の刺客に殺されんのを待ってんのか?」
「カンジ悪いねー。朝ごはんぐらいゆっくり取らせてよ。…ってゆーか」
ディオのいちゃもんに眉をひそめたエリス。しかし、すぐさまはっと顔をあげると、窺うような目つきでエドルの方を向いた。
「…もしかして、あたしも、情報収集とかしなきゃなんないわけ…?」
「…当然だろーが。ついさっき正式に仲間になったんだから、それなりに貢献してもらわないとな?」
横の相棒に視線を送れば、彼女は変わらない笑顔で頷く。

「やっぱりついてくの、やめればよかったかも」
心底面倒臭そうに頭を抱えるエリスを見て、エドルは心中でほくそ笑むのだった。
ざまあみろ、と。

7

「ああ、旦那」

酒気と煙草の煙でよどんだ空気の中、待ち合わせていた人物が、こちらに向かって軽く手を振った。

千鳥足の他客を押しのけて、ルエイドは彼のいる、店の隅の席へと移動する。

「よお、クロウ。

もうこんなに飲んでんのか」

テーブルの上に並んだボトルやジョッキの数を数えて、ルエイドは肩を竦めた。彼、クロウとは昔からの付き合いだが、いつも彼の飲みっぷりには感心させられてばかりだ。

クロウは、少し照れたように頭を掻き、「おかげさまで」と受け流した。

「あんたがおごってくれるって言うからさ。金っつー制限がないと、ついつい」

「おいコラ、制限がないなんて言ってねえぞ。目に余るほど飲みまくるようだったら、お前の報酬から引くからな」

「まあ、それでもいいんだけどね。報酬もどうせ、酒代に消えるさ」

「本当に、お前ってやつは…」

ここまでの会話であれば、ただの呑み仲間の与太話であっただろう。だが次の瞬間、ルエイドは顔からすべての表情を消していた。上着のポケットから小さな紙片を取り出し、テーブルの下で受け渡しを

行いながら声のトーンを落とす。
「こいつらを、始末してくれ」
クロウは彼の豹変にも動じることなく、悠々と酒瓶の陰で紙片を開いた。中には、数名の名前が書いてある。
良いでとろけていた眼が、見開いた。
「この間の計画が失敗したとき、王子を連れ戻しにきた連中だ。できるか？」
「こりゃあ、旦那――」
言いかけて、途中でジョッキをあおるクロウ。飲み干し、力任せにジョッキを置くと、
「とんでもねえ奴らを敵に回したなあ」
「兄貴にも散々文句を言われたよ。俺は良く知らねえんだが、そんなにヤバイ奴らか？」
「ああ、ヤバイな」
口だけで笑うと、クロウは独り言のように言った。
「同業の間の話でも、トップを行くヤバイ奴らだ。特に、上の二人。何でこいつらが、仲良く天空王の犬をやってんだか。世も末だねえ」
「憂いてる場合かよ。できるのかできないのか、どっちだ」
切羽詰まったルエイドの声。クロウは「まあまあ」と彼をなだめ、もう一度酒を注ぎ飲み干すと、
「ヤバイっつってもな」
先ほどのものとは別次元の、歪んだ笑みを浮かべた。
「奴らは、それほど殺しに特化した仕事をしてる人間じゃない。一人は、そういうことをしていたようだが、それも大した数をこなしてるわけじゃあねえみたいだしな。
おまけに、こいつらを殺ればオレの名だってハネ上がる。ガキ共に、「熟練者」の力ってのを思い知らせてやろうじゃねーか」
「今回はダメかと思ってたが、良く言ってくれた」
ルエイドは頬を緩めると、空のジョッキ二つにウイスキーを注いだ。
「頼んだぜ。こんなところで足止めされるわけにはいかねーからな」

「ま、顔ぶれが顔ぶれなだけに一筋縄じゃいかないだろうが、気長に待っててくれや」

二つのジョッキが、重い音を響かせぶつかる。

下町の酒場の夜は、まだ始まったばかりだった。

8

殺人事件が起こってから、数日後。
連日、城下町での情報収集や、旅費稼ぎのために付近の魔獣退治などを引き受けていたエドルたちだったが、思うように情報が手に入らず、鬱々としていた。
というのも、希望の箱に関する情報はいくつか氷海が調べて持って来たのだが、肝心な情報が見つからないのである。
「マジうぜえ。本拠地さえわかれば、とっとと乗り込んでさっさとぶっ潰して、あっという間に解決するってのに」
大して目新しい事も載っていない資料を放り、ディオは眉間の皺をますます増やした。湯気の立つマグカップを両手で抱え、リシェルアもため息をつく。
「かと言って、地区支部みたいな建物も、この町にはないみたいねー。
一体、どこで活動してる団体なのかしら…」
「ここが魔界だったら、本部の場所は十中八九、アトリクスなんだけどな」
アトリクスとは、魔界にある都市である。「神聖都市」とも呼ばれ、魔界で興った宗教の本部がほとんどここに建てられているのだ。地方の信教者にしてみれば聖地のひとつと言っても良く、神官や僧侶を志す者の憧れの地となっていた。
「とりあえず、昔から排他的な団体で、特に天空教とは、悪い意味で因縁のあるところだったていうのはよくわかったよ。
それにしても、当時の天空界で最大の宗教勢力だったはずの天空教と張り合うとは、とんでもない度胸だよな」
「張り合うと言っても罵り合う程度で、さすがに物理的な行動に出るほどの力はなかったようだがな。

しかし現在は、これだけの事件を起こせるほどの勢力を密かに抱えていたということか」

「でも」

リシェルアが、可憐な仕草で首を傾げた。

「現代にはもう、天空教は存在してないわー。派生の創造主教も、今となってはそれほど大きな宗教とは言えないし…。今の彼らは、何が目的なのかしらー？」

「天空王子をあっさり手放したところからも、王家転覆ってセンは薄くなったしな」

そう言って顎に手を当てるディオを流し目で見る。

その時、エドルは不意に、天空城で王に報告をした時のことを思い出した。

現れた疑問を思ったまま、何気なく口にする。

「そういや、ディオ。お前、この間天空王に希望の箱の事訊かれて、何か知ってるような素振りしてなかったっけ？」

後悔したのは、相手の反応を見る直前だった。

案の定、見合った黒い目が、本当に刺さるのではないかと思うほどこちらを射抜いてくる。

「…してねえし」

視線はそのまま、宿の窓の外へと向けられた。帰って来たのは予想通りの反応。

不機嫌の絶頂に達した横顔を眺め、エドルは、氷海が彼のこの反応に食いつくのではと内心冷や冷やしていた。だが、今の月傷に安易に触れるとどうなるかというのは、氷海も心得ているようだ。何も言わず、手帳を読み返している。

凍りつく空気。煮詰まる話し合い。

わざわざ場の雰囲気を崩した自分の無遠慮な言動を反省していると、急に相棒が、三度目の疑問を投げかけてきた。

「…エリス、また来てないのねー」

またか、と、一同は同時にため息をつく。

夕食後に、今後の行動を決めるから集合するようにと、彼女には言っておいたはずなのだが。
「奴の行動は、良く分からない」
独り言のように応える氷海。
「宿でごろごろしていたかと思えば、知らぬ間に出かけていなくなる。一緒に歩いていたかと思えば、いつの間にか姿を消す。自由奔放というか、気まぐれというか、落ち着きがないというか」
「まともに付き合ってると、振り回されてばっかりだよ。ぶっちゃけ、居てもあんまり役に立たねーし、放っとこうぜ」
これ以上あのわがまま少女に振り回されるのは、エドル自身、あまり面白いことではなかった。彼女の旅行（あそび）に付き合っている場合ではないのだ。こちらは、二百万コイルという大金のかかった大仕事をしているのだから。
「この王都で情報収集を続けてても、もう何も出てこないぜ？別の町を当たった方がいいんじゃねーの？」
「…それもそうだな。王都内に本部があるとも限らねえし」
ディオが頷く。
「考えてみれば、天空王子を誘拐するという事件を起こした後に、その膝元である王都で活動をしていては、すぐに目をつけられる。奴らがのうのうとそんなことをしているはずがない。やはり、ここに本部や関連のある場所はないとみていいだろうな。それに、」
氷海の瞳が、細まった。
「私たちも、そろそろここを離れた方が身のためだな」
「ここ数日は何もなかったけど、向こうが何をしてきてもおかしくないわよねー」
これだけ傍若無人に嘆ぎ回っているのだから、希望の箱も、エドルたちのことを煩わしく思っていることだろう。
「明日、隣りのアスレイナの町に向かって、そこからまた調査をする事にしよう。しらみつぶしになってしまうが、地道に聞き込みを

するしかない」
「急ぎの仕事でもないし、ゆっくりでも大丈夫よー。
…でも、問題は…」
開く気配のない部屋の扉を、見つめるリシェルア。
言わんとしていることを悟ったエドルは、同じように扉を眺めて代わりに呟いた。
「エリスがごねたらどうするか、だな…」
今回も、彼女のいないところで今後の行動を決定してしまったのだ。
後になってエリスから、「まだ王都にいたい」「勝手に話を進めるな」などと文句を言われる可能性は十分にある。
「奴を説得するのは、仕事の範囲外なのでな。
ここは、二人に何とかしてもらわないと」
氷海は無情に言い放ち、エドルの不満顔から、関係ないと言わんばかりに顔を逸らした。
「えーっ…」
「あの女がごねようと、計画の変更はなしだからな。
ちゃんとねじ伏せとけよ」
ディオも、手助けすらする気がないようだ。
エドルとリシェルアは顔を見合わせ、途方に暮れるしかなかった。
「大丈夫かしら…」
「あいつ、文句言い始めたら手に負えないからなあ…。
ほんとに、とことん迷惑な女だよ…」

つかの間の静寂の中にいる四人を抱えて、夜は更けていく。
その夜の裏で、今、何が起こっているのかも知らずに。
彼らの立てた計画は、既に手遅れだったということも知らずに。

9

「こんばんは、お嬢さん」

闇夜に溶けた街を、少女が一人、歩いていた。
名前も素性もわからないが、調べていく上で知ったことが一つ。この華奢な娘は、依頼の対象と共に行動しているという事。
「こんばんは」
娘は振り返ると、何の屈託も見せずに挨拶を返してきた。目を瞬かせ、こちらの次の言葉を待ちわび首を傾げる様は、あまりにも純粋だ。
「こんな夜中に、あんたみたいな可愛い娘が出歩いてちゃダメだよ。家族とか友達とか、連れの人はいないのかい？」
「知り合いが四人、宿にいるんだけどー。あいつら、いっつもあたしを仲間外れにするもんだから、今日は自分から外れてきちゃった」
いかにもつまらなそうに、ため息をつく少女。俯きがちの目が寂しげだ。
「そうかい」
一言だけ残して、前触れなく少女との距離を詰めた。不審感を抱かせる間もなく、素早く、足音を立てずに。
「じゃあ、おじさんが楽しいところに連れてってあげよう」
はっとして顔を上げた少女の目が、自分の顔を捉える寸前。彼女は、全身にはしった電流に身体を震わせたかと思うと、声も上げずに倒れこんだ。
腕の中で身じろぎ一つしない少女を眺め、手に残った魔力の電気を打ち消す。

「さあて――」

口元を歪めたまま、顔を上げる。道なりにぽつぽつと灯っている明かりの一つを見つめて、せせら笑った。

「こんな可愛い娘を仲間外れにするような連中は、皆殺しにしないとなあ」

少女を抱いた男は、まるで元の姿に還るかのように、ゆったりとした足取りで闇へと同化していった。

月も星もないこの夜は、家々の灯火も、今起こった出来事をも飲み込んで、ただ、静かに深まっていくばかり。

見るたびに鮮明になる、その光景。
青々とした海、緑の島。
あの塔は、相変わらず天を突き刺さんばかりに、果てもなく立っていた。

エリスは、とうとう帰ってこなかった。

「マジかよ…」
眉根を寄せ、エドルは茫然と呟いた。
エリスが借りたはずの宿の部屋は、ベッドメイクもそのままで使われた気配すらない。
土産品や服、旅行用具の詰まった鞄も、どれもほとんど触られた形跡がなく、部屋の隅に置いてある。
「昨日の夜、宿を出たきり、宿泊客も女将さんもエリスを見ていないそうよ」
部屋を見回し、リシェルアは言う。
「…荷物がそのままになってるということは、あたしたちに愛想を尽かして出て行った可能性は低いでしょうね…」
「そっちの方が、はるかに良かったんだけどな」
言いながら振り返ると、入口でモノクルを押し上げる氷海の姿。彼女は、ここにいる誰もが考えついた予想を、ごく淡々と告げた。

「どうやら、奴らに先手を打たれたようだな。人を攫うという手段が、ことのほかお気に入りらしい」
「どこまでも、足手まといにしかならねえ女だな」
つっけんどんに吐き捨てるディオを、今回ばかりはエドルもリシェルアも咎めることができなかった。
「ここで、我々の今後についてだが」
氷海はというと、相も変わらず波一つない海原のような冷静沈着さだ。何事もなかったかのように話題を変える。
「本部に連れて行かれたという考え方もあるが、ああまで本部の情報を秘匿している輩が、そう簡単に私たちを招くような事はしないだろう」
「エリスは、本部とは別の場所にいるってことか…」
「その通り。
つまり、今後の行動についての選択肢は二つある」
およそ、剣を手にして賞金首相手に戦っているとは思えないほど、白くて細いしなやかな人差し指が立てられる。
「一。先にエリスの居場所を突き止める。
二。先に本部の場所を突き止める」
「二で。」
清々しいまでの即答だった。
先ほどの失言を聞かなかったことにしたリシェルアも、これにはさすがに気が咎めたようだ。
「ディオったら」
「ほっとけ、あんな頭の弱そうな奴。
大体、殺人鬼に命狙われてるかもしんねえってのに、夜中に女の身一つで出歩くのがおかしいんだよ。いくら顔を見られてないからって、俺らみたいな顔の立つ人間と歩いてんだから、嫌でも注目されるのは明らかだろうが」
おまけに、五人の中で一番襲い易い身なりをしていると、ディオは付け足した。

エドルは、腕を組み唸り声を上げる。
「…だからと言って、見捨てるわけには…」
「あーあーわかった！」
その言葉を打ち切るように、面倒極まりないと言った声色で叫ぶディオ。彼の暗い色の瞳に、侮蔑の色が混ざっていた。
「正義ごっこだか善人ごっこだか知らねえけど、好きにやってろっての。ムリヤリついてきた邪魔者を、助ける暇も余裕も俺にはねえんだよ。
俺は本部を見つけて潰すから、お前らは勝手にしろ」
そうまくしたてたかと思うと、身を翻し、彼はあっという間に部屋を出て行ってしまった。後から、氷海の深刻なため息が続く。
「さすが非人道、と言いたいところだが。
本音を言うと、私も本部を見つけて叩くのが一番早いのではないかと思う。わたしにとってもエリスは、義理や情けを掛けてやるほどの人間では無いからな」
「お前、散々ストーキングしておいて言う事か？」
「しかし」
エドルのツッコミを無表情で流した氷海は、モノクルを外して続けた。
「我々四人が、一斉にまとまって動く必要もないというわけだ。
エリス自身も、あれだけ強大な力を持っている。一人で逃げて来られるかと言えば無理だろうが、自分の命が惜しければ何らかの抵抗はするだろう。
二人行けば、エリスも加算して三人になる。四人一緒に行くまでもない」
エドルは、彼女の意見を聞きながら、窓の外を見やった。朝日が昇りきり、明るい日差しを振りまいている。
「まあ、そう言われればそうだけど…
ホント、まとまらねえなあ…おれたちって…」
そんなのどかな光景を眺め、エドルは大きく肩を落とした。

「じゃあ、おれとリシェルアでエリスを助けに行くから、お前らは…」
「いや、」
「へ？」
おそらく妥当だと思われる組み合わせを述べていただけだというのに、氷海がいきなり遮ってきた。まさかこんなところで否定されるとは思わず、一瞬、開けていた口を閉じることすら忘れる。
「エリスの救出には、私が行く。私とエドルだ。
調査を続けるのは、ディオとリシェルア」
「えええええええっ」
「何か不満か？」
冷たい目で睨まれ、エドルは身体を竦ませた。
「さ、さっきお前、エリスは助ける義理もないって言ってたじゃねーか！」
「それとこれとは、話が別だ。助ける義理はないが、助けに行くしかないのであれば、最善の方法を取るに限るだろう？私もエドルも、隠密行動には慣れているからな」
「ううーっ…正論だけど…」
「…まあ…」
氷海はさっと顔を逸らすと、ため息混じりの小さな声で呟く。
「あの冷酷無慈悲な男と一緒に行動したくないという考えも、無きにしもあらずだな」
「無きにしもあらずどころか、それが一番の理由じゃねーのかっ？！おーまーえーなー！」
「さっきから何だ。そんなにリシェルアと離れるのが嫌か？」
「エドル」
氷海に蔑まれリシェルアに諭すような声音で呼ばれ、エドルはむくれたまま黙るしかなかった。
「なら、これで決定だ。
リシェルアも、異存はないか？」

「あたしは大丈夫よー」
「本当に大丈夫かよ」
低い声で、エドルは疑問の声を上げる。
リシェルアが、はっとした顔で、振り返った。
「……心配しないで。本当に大丈夫だから…」
「……」
俯いたまま、エドルはそれきり何も言わなかった。
「…？
とにかく、ディオに報告してすぐに出発する。同行者がリシェルアであれば、奴からも文句は出ないだろう」
不思議そうにしながら、出て行く氷海。それを目で追うと、リシェルアは口をつぐんでいるエドルにもう一度、「大丈夫よ」と囁いた。
「街で、聞き込みをするだけだもの。エドルが帰ってくる頃にも、きっとまだ続けてると思うわ」
「…すぐ戻るからな」
「うん。待ってる」
柔らかく微笑んだリシェルアを見て、ようやっとエドルは顔を上げた。
直前までの態度がまるで嘘のように、両腕を伸ばして肩を鳴らし、笑顔を見せる。
「あの女、大人しくしててくれればいいけどなあ」
「たぶん、無理じゃないかしらー」
「だよなあ…」
部屋を去る二人の背に、高々と上がった太陽が、光を注いでいた。

2

エドルと氷海は王都に残り、ディオとリシェルアが隣町へと先行することになった。

エドルと氷海は二人を見送ると、昼の間は外でエリスの行方について調査をしていた。だが、真夜中に起こった事件のためか、付近に目撃者や手掛かりを持っている人間は見つからない。空き家や廃墟など、誘拐の拠点になりそうな場所にも足を運んだが、無駄骨だった。

夕方になって、仕方なくエリスの部屋に戻り、何か痕跡はないかと当てもなく捜索していた時。

「…あれ？」

窓のあたりを漁っていたエドルは、声を上げた。

窓と枠との隙間に、封筒が挟まっている。

「…おいおい…」

「どうした？」

エリスの鞄を調べていた氷海も、手を止め寄って来た。指で封筒を指し示すと、彼女はそれをさっと取り上げ、首を傾げる。

「さっき来たときは、なかったよなあ…」

「おそらく、日中聞き込みをしている間に仕込まれたのだろうな。まったく、攫った直後に置いていかないというところが忌々しい」

無駄な手間を取らせる、と愚痴を言いながら、まっさらな封筒を手で破り開く氷海。

何の飾り気もない便せんには、「ローグに来い」とだけ書いてあった。

「ローグって、どこだっけ？」
魔界や亜魔界を中心にトレジャーハントを行っていたエドルは、天空界の地理には疎い。
氷海は便せんをたたみ直して答えた。
「…王都の東にある、森の名前だ。そんなところまで…」
「王都の東…ちょうど、アスレイナの反対側だな」
「……」
氷海の目が、訝しむように伏せられた。どうしたのかと声を掛けると、「いや…」と、曖昧な返事が返ってくる。
「何か引っかかる気がしないでもないが…いや、例えそうだとしても、…しかし」
しばらく逡巡していたが、彼女は「まあいい」と一人納得してしまうと、
「夜になる前に出発する。準備はいいか？」
まるで何事もなかったように、普段通りの無表情を向けてきた。その急な変化に戸惑いながらも頷くと、彼女は封筒を懐にしまいこむ。
「向こうもこっちも、いるのは手練ばかりだからな。少なくとも、やられはしないだろう」
歩き始めに残したその意味深な言葉に、エドルは一抹の不安を覚えずにはいられなかった。

一方、昼に王都を出発したリシェルアとディオは、特に何事もなく、夕方にはアスレイナへと到着した。一休みした後に町中へと繰り出し、希望の箱についての情報収集を続ける。
だが。
「おい」

予想よりも意外と早く、状況が展開した。
夕陽も沈んでしばらくし、本格的な調査は明日にして休もうかと思い始めた頃に、いきなり複数の人間に取り囲まれたのである。
「何やら、町中で嗅ぎまわっている不審者がいるという通報があったが…お前たちか？」
「どっちが不審者だよ。そんないかにもなローブを着てからに」
全員一様に黒いローブを身に纏い、どこから見ても怪しげな組織集団だ。よくもまあ、こんな連中が街を闊歩しているのを住人が見過ごしているものだと、ディオは眉をひそめた。
「聞くまでもないけど、どちら様かしらー？素敵なエンブレムをつけていらっしゃるのねー」
「貴様らに名乗る義理などない」
リシェルアの皮肉など意にも介さず、彼らはきっぱりと言い放った。ローブの左胸に飾られた凝った趣向の金のエンブレムが、街灯の明かりに栄えている。
模しているのは、開かれた箱。
「貴様らの無粋な詮索が、住民の安寧を害しているようだ。事情聴取を受けてもらう」
「警察以外の人間に、事情聴取されるいわれはねえなあ」
「抵抗するというのなら、実力行使を行う」
脅しのつもりであろう希望の箱の男の一言に、ディオは隠すことなく笑みを浮かべた。
「その方が、面倒臭くなくて助かるぜ。罵り合いは望むところだが、殺し合いもオツなもんだしな」
隣りのリシェルアが非難の視線を向けてくる。
「…町中で戦うのは、迷惑になるわー」
「とっくに通行人はいなくなってるし、俺も銃を使うのは極力避けるつもりだ」
「本当かしら…」
もちろん口から出まかせだが、向こうから手を出してくると言う以

上、衝突は避けられない運命だ。相手方は、場所を変えるという配慮を備えているわけでもないらしい。
もともと人通りの少ない道だしいいか、と、ディオは考えるのを放棄した。
「俺を相手にしているっつー事実を、そろそろあんたらに、身をもって知ってもらおうか」
「かかれ！」
ディオが銃を抜くのと、彼らに号令がかかるのは同時だった。
黒く輝く異質な銃を手にする感触に、これから戦が始まるのだという興奮を覚える。まずは誰から狙おうかと、品定めを始めた。
が、相手は誰も動かない。
「…何…？」
杖を構えたリシェルアが、疑問を口にした瞬間だった。
二人の足元の地面が、一斉に輝き始めたのだ。
「嘘でしょう、まさか」
輝いていたのは、地面に描かれた魔法陣。エンブレムと同じ、箱の模様。
そこから、刺客たちとディオたちを隔てるようにして、幾匹もの魔獣が現れた。
「魔獣を、こんな町中で召喚するなんて！」
「住民の安寧を害してるのはどっちだよ」
「文句は、事情聴取の最中にいくらでも聞いてやろう」
刺客の一人が、嘲るように言った。
「事情聴取の相手が死体であろうと、我々はまったく問題ない。ここで殺されるか、大人しくついてくるかの二択だ」
死体相手に事情聴取とは暇なものだと、ディオは胸中で毒づいた。
が、口にしている余裕はなかった。
敵の用意した選択肢を選んでやるつもりなど、ディオにもリシェルアにもない。
「さあ…行け」

刺客の二度目の号令が、圧倒的不利な戦いの幕開けとなった。

3

希望の箱から手配された従者が、殺害対象の新たな情報を手にして帰ってきた。その内容を聞いて、クロウは口元を吊り上げる。

「分裂したか…」

想定通りの動きと言ってよいだろう。

「やっぱ、仲良しこよしで一緒に行動してたわけじゃあねえみてーだな？天空王あたりから、希望の箱の討伐依頼を受けて、利害一致で協力してたってなトコだろ。

第一、あれだけ毛色も価値観も違う奴らが、たった数日で仲間意識なんぞ持つわけがねえ。特に、ディオは依頼外の人助けなんて見向きもしないし、氷海も現実的かつ効率的な手段が最優先の人間だ。

本当、冷たい連中だよなあ、お嬢さん」

部屋の隅で、手足と胴を縛られてうずくまっている少女を見やって、クロウは喉奥で笑い声を立てた。

それから、黒いローブに身を包んだ従者に向かって、まるで世間話でも始めるかのようなノリで尋ねる。

「ところで、あんたらの方はどうなんだ？順調か？」

「…あなたは、奴らを殺すことだけに専念してくれればよろしい」

「つれねえなあ…

ああ、それから、アレは一応預かってあるからな。保険も含めて」

そう告げると、クロウは従者を下がらせ、酒の瓶ばかり載っているテーブルの上からグラスを探し始めた。

「…グラスなら、テーブルの端。あたしのいる方から見えるよ」

「おお、どうも…

って、お嬢さん、起きてたのかい」

「あんたって、ずっとお酒ばっかり呑んでるよね…あたしの家族に

もいるよ、そういうの」
呆れ顔の少女を眺め、クロウは愉しげに目を細めた。
「その家族とやらと、一緒に呑んでみたいもんだ」
「無理に決まってるでしょ」
「ははっ、だろうな。
…さて、と」
グラスの中身を呑み干すと、クロウはおもむろに立ちあがった。
少女の目が、じっとこちらの動きを見つめている。
「そろそろ、仕事に取り掛からねえと。
そういえば、お嬢さん、名前は？」
「…エリス」
「そうか。
じゃあな、エリス」
口元だけで笑うと、扉を開けた。
「次に会うときは、あんたの仲間の死体と一緒かな」

ぱたんと、背後で扉の閉まる音がした。
部屋の入口には、先ほどの従者が立っている。
「ここの警備、強化しとけよ。
二人とは言え、手ごわい奴らだからな」
「了解」
「オレは、もう二人の方を始末する」
自分で言った言葉に、胸が高揚していた。
烈火に例えられる魔法力の持ち主に、戦場の死神とも謳われた銃士。
やりがいのある仕事になりそうだ。
「この間始末した奴らは、ほんとつまんなかったからなあ…愉しみだ」
そう言って、彼は通路の奥の暗闇へと消えて行った。

4

ヴィシェナ王都の東、ローグの森。いつもは木々も動物も寝静まる夜だが、今晩は違っていたようだ。
森の中に建てられた古ぼけた屋敷は、今、混乱の真っただ中にあった。
別に、エドルと氷海がエリス救出のために引っ掻き回したなどというわけではない。
二人がここにたどり着いた時には、もうてんやわんやという状況だったのである。
「…氷海さんの見解から言うと、これはどういうことなんだ？」
混乱に乗じて、あっさり屋敷内に潜入した二人。エドルは、抜き身の剣を携えた氷海に、一応問うてみる。
彼女は、ため息混じりの小声で尋ね返してきた。
「答える必要はあるのか、その質問に」
「…あのバカ女…」
屋敷内は警備も何もあったものではなく、血相を変えた希望の箱の信徒たち、あるいは用心棒代わりの魔獣たちがひっきりなしに走り回っていた。警備体制の崩れによって潜入するのは簡単であったものの、これだけ大騒ぎになっていては、どこにエリスがいるのか見当もつかない。
おまけに、信徒たちの会話を盗み聞きしたところ、この騒ぎはエリスの逃走によるものだと判明した。外に脱出していてくれればまだ良かったが、屋敷内に隠れている可能性が高いという。
これでは、こちらがエリスを捜し出すのにも一苦労だ。
廊下に放置されていた壊れた家具の陰で、エドルは頭を抱えた。
「それにしても、どうやって逃げたんだ、あいつ」
「…奴の魔力は、どうやら道具などで強化しているわけではないよ

うだ」
突然、まったく関係のない話題を振ってくる氷海。
「い、いきなり何の話だよ」
戸惑うエドルに見向きもせず、彼女は続ける。
「リシェルアは、杖で魔力増強をしているだろう？エリスもそういう類のもので魔力を強化しているのではと思ったのだが…荷物の中に、それらしきものは見当たらなかった」
「…いつそんなこと調べてたんだお前…」
「さっき、部屋を漁っていたときにな」
「……」
ツッコミなど、する気も起きなかった。
「服に呪文（ルーン）が縫いこまれているわけでもない。アクセサリーの装飾石もすべてただのガラス玉で、魔力がこめられている気配はなかった。あとは、奴が現在身につけているものを調べるだけなのだが、それも同じ結果だと思う。
つまり、エリスの魔力は先天的なものか、あるいは相当訓練して身に付けたものだということになる」
「それはわかった。わかったが、だから何なんだって話になるわけだけど」
「お前にはまったく関係のない話だが、私にとっては、希望の箱云々よりよほど重大な話になる」
そう言い切った彼女の紫の瞳は、点々と灯った蝋燭の明かりしかない廊下の暗闇の中、爛々と輝いているようにさえ見えた。
「…なんだか知らんけど、訴えられない程度にしとけよ…」
その表情に慄きながら、エドルは軽口で受け流す。
「おそらく、あの女は魔法を駆使して脱出を試みたのだろう。口で呪文さえ唱えられれば、
縄で拘束されていても焼き切ることができる」
「そんなことはともかく、連中より先にあいつを見つけねーと」
「…どうやってあの女は逃げたのか、と言っていたから答えてやっ

たというのに「そんなことはともかく」とは…まあいい。
とりあえず――」
氷海は、家具の陰から少し顔を出す。その時、ちょうどすぐそばを、慌てた様子の信者が通りかかった。
すると、氷海は無言でその腹に、剣の柄と拳とを同時に叩きこんだのだ。
「げほっ！…なっ…？！」
その口から上がったのは、高めの女の声だった。彼女が前のめりに倒れかかったところを胸倉から引き上げ、氷海は、どこから出ているのかと疑うほどドスの利いた声で尋ねる。
「大声を上げるな。
お前たちが拘束していた女はどこだ？」
「そ、その女が逃げ出したから、今探しているところなのだっ！私の方が知りたい！」
「つまり、お前はエリスの姿を見ていないという事だな」
そう確認を取ると、氷海は今度は彼女の首筋に手刀を当て、あっという間に昏倒させた。鮮やかな一連の作業にエドルがあっけにとられている間に、手際良く信者の身体を物陰に隠す。
「えっと、どうするんだ、これから」
「お前は、目的地までの道がわからないときにどうやって対処する？」
「は」
先ほどから、全然氷海との対話が成立している気がしない。
困惑する頭を押さえて、仕方なく氷海に合わせることにした。
「あー…地図を買うか、人に聞く」
「そう、つまり、人に聞けばいい」
氷海が、こちらを向いた。何の感情もない無表情だった。
「ここを通る輩を片っ端から捕まえて聞き出して、エリスの居る場所を割り出す」
こいつ、すごい怖い。

氷海のすわりきった目を見ながら、これから山のように積み上がっていくであろう信者たちを想像して、エドルは改めて「氷海」という二つ名の意味を理解した。

5

血だまりの中にまた一匹、魔獣の身体が崩れ落ちた。
流れた血の川に踏み入ると、飛沫がスラックスの裾を赤く染める。
「はい、魔獣退治完了ー」
乾いた音を立て、漆黒の銃身から使い捨ての小粒の魔法石が転げ落ちる。無色透明だったその石も、地面に落ちた途端、沈んだワインレッドに変わった。同じような魔法石が、道端の小石と血に混じっていくつも転がっている。
「あ・と・は」
骨張った手が、新しい石を銃に組み込んだ。
一歩前に進むごとに足元から、土砂降りの道を踏みしめたような、濡れた音がする。
前にいる希望の箱の刺客たちが、揃って竦み上がり、息を呑んだ。
「「人間」だけだな…」
ここにいるのは、獣だった。銀色の毛に黒い目を持ち、返り血にまみれた獣だった。
刺客の一人が、苦し紛れに叫ぶ。
「こ、この、人喰い狼…！」
「誰が人肉なんてまずいもん喰うか！」
惜しくもこの場に、彼の発言についてツッコミを入れる余裕のある人間は、存在しなかったようだ。
いつも笑顔の絶えないリシェルアさえもが、後ろで息を詰めている。無理もない。彼女が呪文を唱える間に、ディオが片を付けてしまったのだから。
「くそっ…こんな奴が来るなんて聞いてないぞ！
クォード様に早く応援を」
「誰が逃がすって言ったかなー」

リシェルアの代わりに微笑んでやると、彼らは頬を緩めることすらせずに固まってしまった。絶世の美青年が笑顔を投げかけているというのに失礼な、と呟き、ディオは今度は不機嫌をあらわにする。
「ああ、でも、逃がしてやらないこともないな。お前らが、素直に本部の場所を吐いてくれれば」
「…はっ。冗談を」
強がる刺客の声は、震えを隠せていない。
「素直に吐いた方がいいと思うわー」
ディオと打って変わり、慈愛に満ちた声色で語りかけるリシェルア。
「あたし、今の戦いで疲れちゃったー。ディオが暴れ出しても、止められる気力がないのよー」
「戦ってねえくせに何言ってんだか」
「うふふ。でも、どっちにしろ、あたしがディオを止めるのは無理だわー」
リシェルアの困った笑いが、さらに絶望感を加速させる。だが、ここで諦めてしまうほど、希望の箱の信念も弱くはなかったようだ。先頭にいた刺客が、舌打ちをして低く呟いた。
「仕方ない…よもや、ただで逃げることすらできないとは…」
「？」
何のことだかわからず、銃口を相手に向けたままディオは首を傾げた。
その隙を見て、刺客は素早く胸のエンブレムをローブから引きちぎった。片手でエンブレムの裏の蓋を外すと、目にもとまらぬ速さで紙片を取り出す。
「無駄な抵抗は――」
「抵抗したいのは山々だが、こちらとて自分の命は惜しいのでね！」
たたまれていた紙片が広がる最中に、後ろの刺客たちが何やら呪文の詠唱を始めた。
引き金を引くか引かないかの瀬戸際、広がりきった紙片がまばゆい光を放つ。

咄嗟に目を押さえた時、まさかここで聞くとは想像もしていなかった、轟音のような咆哮が大地を揺るがした。

「ドラゴン…！！」

リシェルアが、驚愕の声を上げた。

エヴァスタ天空教会跡でも見覚えのあったあのドラゴンが、希望の箱の刺客たちを全員背に乗せて、眼前に立ち塞がっていたのだ。

ここは街の中。地上最強の生物が暴れまわったとなれば、とんでもない被害が出る。襲ってくるかと、二人は戸惑いの中、身構えた。

だが、意外にも、ドラゴンは背中の翼を大きく羽ばたかせたかと思うと、貫禄のあるゆっくりとした動きで宙に浮いた。

そして、ディオたちが呆気にとられているうちに、何をすることもなく、夜の空へと飛び去って行ったのである。

6

「ここが、エリスが捕まっていた場所か…
どうやら、重役の部屋だったようだな」
信者たちからエリスの目撃情報を聞き出し、屋敷一階まで降りて来たエドルと氷海は、エリスが拘束されていたという部屋までたどり着いた。
物陰に隠れて片端から敵を襲っていくという手段を繰り返した結果、いつの間にか、この屋敷にいた信者の大半を倒していたらしい。二人が移動しているときには信者は見当たらず、徘徊していた魔獣も、捜索がてらに始末してしまった。
おそらくこの屋敷内の信者たちを取り仕切っていたと思われる重役の部屋には、もちろんエリスの姿はない。テーブルとその周りの床に、書類と酒瓶がないまぜになって散乱している。
部屋に残った酒の匂いに顔をしかめながら、氷海はテーブルに近づいた。
「天空城の見取り図に、これは神学関係の資料だが…あまり、目新しい話はないな。こっちは、魔術書の写しか？
…どうした、エドル。顔色が青いが」
「別に…」
先ほどまで目の前で起こっていた出来事のショックから未だに立ち直れず、エドルは扉の前で憔悴していた。
次々と物陰に積み上がっていく、気絶した信者たちの身体。死んでいるわけではないとはいえ、この世のものならぬ光景を見せられて、青くならない方がおかしい。
「おかしいなー…エルフ族は、身体的にも精神的にも他の種族と比べて繊細だって聞いてたんだけどな…奴がおかしいのか？おれの方が繊細すぎたのか？」

「何をぶつぶつ言っているんだ。大丈夫なら、そんなところでつっ立ってないで、役に立ちそうな資料を探せ」
けろりとした顔で、部屋の隅にあった紙の山を指差す氷海。
エリスの捜索はどうした、と言ってやりたいところだったが、再び自分の世界に入り込んでしまった彼女に、声を掛けるのも憚られる。
しぶしぶ言われたとおりに、紙束に手を突っ込んだ。
「こういうのは、おれじゃなくていっつもリシェルアが担当してるんだよ…ああめんどくさいめんどくさい」
「たまには頭を使わないと、その内腐り落ちるぞ」
「やめろよそういう表現使うの…」
「…これ、は…？」
氷海が、手を止めて紙の一束を拾い上げた。気になる資料が見つかったようだが、どうせ説明されてもわからないし、とエドルはあえて構わず、無視を決め込む。
文字の羅列しかない紙を、適当に混ぜた時だった。
「おい、」
「この日付は、この日は確か…」
「おい！」
二回呼びかけて、やっと氷海は顔を上げた。始め迷惑そうな表情を見せた彼女は、しかしすぐさま異常に気付く。
酒の匂いにまみれていた部屋の空気が、いつの間にか異臭に満ちていたのだ。
「やっべ！」
エドルはすかさず扉を蹴り飛ばした。
すると廊下から、白く濁った煙と熱が、溢れんばかりに流れ込んできたではないか。
「屋敷に火をつける余裕のある人間が、まだいたということか。それか、先ほどの連中が目を覚ましたか」
「エリス！」
そうだ、エリスがまだ、この屋敷内に隠れているはずなのだ。

エドルは口元を手で覆いながら、一寸先も見えない廊下へと飛び込んだ。左奥、エドルたちがやってきた方の視界が、ぼんやりと赤く色づいている。

あちらは既に、捜索し終えた方だ。まだ捜す猶予があることに、胸を撫で下ろす。

しかし、猶予はあっても余裕はない。

「エリス！どこだ！」

大声で呼んでも、返事はなかった。

「まさか、もう煙にやられてるなんてことは…」

「…わからん」

氷海も、深刻な表情で首を振った。

廊下の両脇にあるあらゆる部屋を、手分けして蹴破り呼び掛けた。

しかし、廊下の端の最後の部屋まで行っても、エリスは見つからない。

火は、すぐ後ろまで迫ってきていた。

「くそっ、いねーじゃねーか！まさか、騙されたんじゃねーだろーな？！」

「…エドル、一旦外に出るぞ」

氷海が、落ち着いた声で言う。

「待てよ、エリスはどうするんだよ！」

「もしかしたら、外に出たのかもしれん」

氷海は、廊下の突き当たりの、小さな窓を見つめていた。

それに倣って目をやると、窓の鍵は壊れて掛かっておらず、覗いた隙間から外の風が入り込んでいる。ここは一階。いくら運動神経が悪くても、打ちどころさえ間違えなければ、怪我一つなく降りられる高さだ。

納得したエドルは呆れる間もなく、氷海に続いて窓から外へと脱出した。

背後では、火の回り切った屋敷が轟音を立てて燃えている。炎の勢いは強まり、空を焦がすかと思うほどだ。

崩壊に巻き込まれないよう素早く屋敷から離れ、希望の箱の信者の目を逃れて傍の茂みに潜り込んだ。

7

唐突に現れた魔獣やドラゴンによって、町は大騒ぎになってしまった。
町人に捕まって面倒に巻き込まれないうちに、ディオとリシェルアは逃げるようにして町のはずれの草原までやってきた。街灯のないこの場所では、お互いの顔も見えないほどだ。
二人が取った宿は町の中。これでは、しばらく戻れそうもない。
「地上最強生物を、あんなに簡単に手懐けられるもんなのか？」
呼吸を整えて、ディオはリシェルアに尋ねかける。
暗闇の中で、リシェルアが首を振ったのがうっすら見えた。
「少なくとも、あんな紙に描いた魔法陣で呼び出せるほど、人間に友好的な生き物じゃないはずよー。相応の応用知識が必要だし、エヴァスタで見たような、きちんとした床や地面に描いた魔法陣で呼び出さないと…。
それでも、呼び出すのがやっとっていうところよ。背中に乗せてもらうなんて、もってのほかだわー」
それから少し間をおいて、彼女は説明を続けた。
「ただ、先にドラゴンを手懐けておいて、それを呼び出すっていうのなら、話は別だと思うけど…。
それでも、ドラゴンを手懐けるっていうのは簡単にできることじゃないわー」
「エヴァスタといい今回といい、連中はドラゴンを操れるっていうのが強みなのか？
衝突するたびにあんなの呼び出されてたら、確かにたまったもんじゃねえな」
草むらに胡坐をかき、銃の手入れを行いながら、ディオは舌打ちした。
そっと近づいてきたリシェルアが、呪文を唱えて杖の先に明かりを

生み出した。銃を持つ自分の手元にそれを近付け、不思議そうに眺めてくる。

「それにしても、ほんとに真っ黒な銃ねー。普通は銀色なのに…」

「これは黒曜石（コクヨウ）を組み込みまくってるから真っ黒に見えるだけで、銃身自体は銀色だぜ。それに、魔界や天空界ではほとんど銃が実用されてないから知らないだけで、黒い銃身のも結構ある。魔界じゃ、銃なんてのは、金持ちのコレクションか置物扱いだろ」

銃身に数多の種類の石を埋め込み、その石によって使用者の魔力を増幅・凝縮し、撃ち出す銃。他の種族に比べて圧倒的に魔力の低い亜魔界人にとっては、魔法に代わる不可欠な武器だ。

しかし、魔法を存分に使うことのできる他の種族にとって、銃は、天然石のちりばめられた美しい観賞品という扱いがもっぱらである。実際に、実用できない観賞用の銃が出回っているほどである。

「まあ、確かにこれは特注品だから、見覚えがなくたって当たり前だけどな」

「特注品なの？

こんなにコクヨウを組みこんで、よくあんなに軽々と扱えるのねえ…」

石の中でも、コクヨウは魔力を溜めて増幅する力が強いため重宝される。だが、その分扱いが難しい。銃に組み込む時のみならず、魔法の力を注いで魔法石として使う時でも、暴発の恐れのある、癖のある石なのだ。

「それだけ、俺の腕が良いってことだよ」

「ふふっ、そういうことなのかしらねー。

現にさっきも、呪文を唱える時間がなかったもの」

ふと、ディオは銃をいじる手を止めた。

「…リシェルア」

「なあに？」

きょとんとした目で、呼びかけられたリシェルアは首を傾げている。

その真紅の目を見つめ返して、ディオは問う。

「俺は魔術の話に詳しくねえからよくわからんが…
呪文って、唱えなきゃ魔法は使えねえよな？」
「ええ、そうよー。魔法石を使ってても、それは一緒ねー」
「この間、エヴァスタでドラゴンと戦ってた時のことなんだが」
話の中で、不意に思い出したことだった。
「エドルが倒れただろ？
お前、確かちょうどその時、ドラゴンにやられそうになったじゃねえか」
「そうだったかしらー？」
何気なく、リシェルアはディオから顔を背けた。
「…。
で、間一髪のところで、お前が火の魔法使って助かったわけだけど」
彼女は、草むらに腰を下ろして空を見上げていた。こちらの話を聞いているのか、いないのか。口元には、いつものように笑みが浮かんでいる。
「あの時、お前、呪文唱えてたか？」
「……」
いくら待っても、リシェルアは答えない。
夜風が吹き始め、彼女の黒髪を揺らしている。
「――呪文を唱えないと、魔法は使えない」
こちらが諦めかけた時、彼女はようやっと声を出した。独り言を言っているような、小さな声だった。
「これは、魔法を使う時の大原則よー。きっと、エリスや氷海に聞いても、同じ答えが返ってくるでしょうね」
「…そう、か」
求めていた答えではなかったが、きっと、これ以上聞いてもはぐらかされるのがオチだろう。こちらとしても、氷海のように他人の秘め事を詮索するような真似は、したくもないし、する気もない。
大人しくディオは、止まっていた手を動かし、銃の手入れを続けることにした。

「…エドルたち、どうしてるかしら…」
しばらく後、リシェルアがぽつりと呟いた。
「心配か？
ちょっとやそっと囲まれるぐらいじゃ、やられるような腕じゃねえだろ」
「それはそうだけど、私たちより危険な目に遭ってるのは確実だわ。
大丈夫かしら…」
頬に手を当て、ため息をつくリシェルア。対して、向こうのグループがどうなろうと知ったことではないディオは、肩を竦めるだけだった。

「なんなら、会ってくればいいじゃないか」

8

思わぬところに先客がいた。
「ぷぎゅ」
茂みに足を踏み入れた途端、柔らかいものを思いきり踏みつけてしまう。
「う、わあああ?!」
驚いて、後ろにいた氷海にぶつかるのも構わず、たたらを踏むエドル。
「ひっ、人の背中、いきなり踏むなーっ！」
「エリス?!」
涙目で怒鳴りかかって来たのは、散々探し回った目的の少女だった。
「やはり、外に出ていたのか」
ぶつかったエドルの身体を汚れ物のように押しのけ、氷海が息をつく。
「でも、中の奴らはみんな、お前が屋敷に隠れてるって言ってたぞ？」
「ふふふん。魔法を見当違いのところにぶっ放して、撹乱させて出てきたの。
あたしってマジ天才だよねー！」
「おまっ…おかげでこっちまで大迷惑だよ！」
安堵と怒りとで、エドルも氷海と同様、大きくため息をついた。
「…で、あたしの荷物は？」
「は？そんなもの、宿にほったらかしてきたけど」
「ほったらかしてきたぁ?!ホントに気が利かないんだからっ」
こんな状況でも自分の荷物が最優先か、と、エドルは呆れるしかなかった。
「今持ってるその鞄だけで充分だろ…言っとくけど、今後一切、私物増やすの禁止な」

「いやあああそれはダメっ！買い物しなきゃあたし死んじゃう！」
「あーもーうるさいうるさい」
耳を塞いで、金切り声をシャットアウト。屋敷を走り回って疲れているというのに、彼女の雑談に付き合える気力はなかった。
「ほら、帰るぞ。さっさと立て」
とにかく、ここを離れたい。信者たちがいつ自分たちを見つけるか知れないし、エドル自身も早く休みたかった。
茂みにしゃがんだままのエリスを立たせようと、手を差し伸べようとする。が、それより早く、氷海が動いた。

「…え」

エリスに向かって氷海が差し出したものを見て、声を失うエドル。
それは、手ではなかった。
背中の向こうで唸りを上げ続けている炎を映し、赤くきらめくレイピアの切っ先。
「…普通、剣を人に手渡す時は、柄の方を向けるもんじゃない？」
「これが、渡そうとしているように見えるのか」
どう捉えても物騒な発想にしかならない氷海の返答に、しかしエリスはにっこりと笑顔を浮かべる。
「ああ良かったぁ。剣術の覚えもないのに、これ使って戦えって言われたらどうしようかと思っちゃったじゃん。
…で」
エリスは、紫色に燃える氷海の目をまっすぐに見つめた。
「何の真似？」
火炎によって熱を帯びているはずの空気が、さっと冷え込んだように思えた。
これは、まずい。
「…にやってんだよ、お前ら！」
咄嗟に、エドルは怒鳴っていた。

「そんなことしてる場合か！ここ、まだ敵地なんだぞ！」
「…っ」
一瞬、氷海の瞳が戸惑うように揺らいだ。下唇を噛み、しばらくレイピアの柄を握り締めていたが、やがて、諦めたのかゆっくりと剣先を下ろす。
「…リシェルアとディオは？」
よいしょっ、と掛け声をかけて立ち上がったエリスは、まるで何事もなかったかのような表情で辺りを見回した。
「あいつらとは、一旦王都で別れた。今頃、アスレイナで情報収集を続けてるはずだ」
「そう…」
エリスの眉が、くっと眉間に寄った。
「急いで合流した方がいいよ。
あたしを攫った奴が、二人の方に向かってるはず」
「え？！」
「名前は聞けなかったけど、大量殺人の犯人はそいつだよ。
あんたたちが分かれて行動してたことも、筒抜けになってたみたい」
全身の血の気が引いた。まさか、こちらの行動が、すべて向こうに知られていたとは。
「――筒抜けというより、そいつには、私たちが分かれるという事がわかっていたのかも知れない。
エリスの隔離場所に、アスレイナの反対に位置するここを選んだのも、わざと私たちを引き離すためではないかと思う」
「確かに、今から行っても、アスレイナに着くのは陽が昇るか昇らないかってとこだな…。
エリス、そいつが出てったのはいつだ？」
「夕日が沈んですぐ…ってとこかな…」
「くそ、それじゃ走って行っても間に合わねー！」
歯噛みして、エドルはすぐさま、王都の方へと駆けだした。
後ろから、氷海とエリスも遅れてついてくる。

「ちょ、ま、待ってよ！
あんた無駄に足速いんだから、もー少し気を使って走って！」
「馬鹿なこと言ってんじゃねーよ！
ついてこれなくなったら問答無用で置いてくからな！」
「鬼ーっ！」

9

リシェルアの不安に応えたのは、知らない声。
ほとんど反射的に、二人は身構えた。

「今から目をつぶって、大人しくしてるだけですぐに会えるぜ。なんてったって、オレは仕事の早さにだけは自信があるんでね」

声は、真後ろから聞こえてくる。

「お代はいらないさ。オレは、人に親切にするのがことのほか好きでな」

「太陽のごとく、夜を照らせ！」

素早くリシェルアが呪文を唱え、高々と杖を突き上げた。
先ほどまでのほのかな明かりが、呪文の通り太陽のような輝きになり、夜の草原を照らし出す。

「はじめまして」

一人の男が、草の中に立っていた。
身なりや風貌はいまいちだが、醸し出すその殺伐とした雰囲気は、明らかに並みの人間ではない。

「烈火のリシェルア、月傷のディオ。高名なあんたがたと手合わせできて、光栄だ。
ホントは酒でも酌み交わしたいところだが、そんなことしたら上の人間に怒られちまう」

「ああ、酒呑みてえなあ」と、ため息交じりに彼は呟く。
銃を構えたまま、ディオは嗤った。

「なんかいろいろ勝手なこと言ってやがるけど、別に俺らは向こうの連中に会う気もねえし、あんたと手合わせする気もねえよ？」

「まったく、どいつもこいつもつれねえったら。寂しくて嫌になるぜ」

相手は、こちらの話など聞く素振りもない。警戒するこちらに構いもせず、歩みを進めてくる。

どこまで近づけばこちらが攻撃するのか、見切られているようで気分が悪い。ディオは威嚇するように、目を細めた。

「しかし、あれだ。ドラゴンってのはあんまり乗り心地のいいもんじゃねえなあ。速いのは助かるが、身体のあちこちが軋んで困る。痛みもわからないぐらい確実にってのがオレの信条だが、そんなわけで調子がいまいちなんだ。ちょっとばかり狙いが外れて、痛い思いするかもしれんが勘弁してくれよ」

男が、動いた。

目には、消えたようにしか映らない。それほど素早い動きだった。

「…リシェルア！」

「火よ！」

ディオが注意を促すと同時に、リシェルアが、ごく短い呪文を叫ぶように唱える。

背中合わせに立った二人の周囲に、いくつもの火の玉が生まれた。

これで、相手も迂闊には近付けない。

そう思っていたのだが。

「甘いぜ、お子様たち」

盾にしたはずの火の玉が、見る間に次々と弾けて消える。それに気を取られ、男が接近するのを許してしまった。

金属同士のぶつかる音が、背中から響く。

「くっ！」

リシェルアの杖と男の得物がぶつかった音のようだ。それを目視する前に、ディオは背後に銃を構えて、標的も見ずに発射した。

「おっと?!」

それに驚き、一瞬身を引いた男を確認し、もう一発。しかしそれも避けられて、魔力の弾は闇へと消える。

「標準も合わせずに発砲とは…さすが！」
二人が再び間合いを取ると、男は心底楽しそうに笑って、手を打ち鳴らした。
「あの人、魔法を使えるのね…」
リシェルアが、いつもより早口で言う。
「さっきの火の玉、水の魔法を当てられて消えたみたいだわ」
「おお、正解正解。良くわかったじゃないか」
ディオが何か言う前に、男が応える。
「少しなら、オレも魔法が使えるんでね。
さっきのは、水の粒を適当に当てて消させてもらった」
また、男が姿を消した。
「ちっ、またか！」
再び銃を構え、神経を研ぎ澄ませる。同時に、上着の内側に手を入れた。
ひゅっ、と、耳元で風を切る音がした。
「ディオ！」
大きく体を反らして相手の攻撃を避ける。しかし避けきれなかったらしく、服の右肩が切れて、皮膚に血がにじんでいた。
しかし、ひるんでいる余裕はない。相手の斬撃が、休む間もなく立て続けに襲ってくる。
ディオは上着の内側に入れていた手を抜き、攻撃に合わせてその手を振りかざした。
甲高い金属音。
手の中にあるのは、ダガー。
「銃だけかと思ったら、そんなことはなかったか」
殺気の迸る沈んだ青い目が、目の前で愉しげに歪んだ。
ダガーと交わった、数本の鋭く短い刃が、一瞬引かれてまた現れる。
それは剣やダガーではなく、刃の鉤爪だった。
数回攻撃を受け流し、ディオはもう片手の銃を構えて威嚇射撃を行った。

「逆巻け、火炎よ！」
相手がたたらを踏んだその瞬間、今まで隙をうかがっていたリシェルアが魔法を放った。
「うおっ？！」
炎の火柱が数本、男の周囲を塞ぐようにして立ち上る。一瞬行動を封じられた男は、続くディオの射撃を避けきることができなかった。一発が、左腕に直撃した。しかし…
「撃ち砕け…！」
彼がディオを睨みつけた時、彼の魔法の雷撃が二人を襲う。何とかそれからは逃れたが、気づくと男の姿がない。
慌てて周囲を見回そうとしたその視界の端に、鈍い光が飛び込んだ。
「っぐ…！」
身を捩るも間に合わず、鉤爪のうち二本の切っ先がディオの脇腹を抉っていく。
膝を折る直前、見えた男の姿に向かって発砲した。しかし、それは惜しくも男の顔の横をかすっただけに留まった。
「やっぱ、二対一じゃあ不公平だったな…」
草の中に膝をつき、相手を見上げる。男は、弾の当たった腕を押さえてにやりと微笑んだ。
脇腹から、手を伝って生温かい血が流れ出ている。五分か、とディオは内心で舌打ちした。
「仕方ねえ。まあ、一発で終われる仕事だとは思っちゃいなかったしな。
また遊んでやるよ、ガキども」
捨て台詞の最後に、男は刺し貫くような殺気立った目を二人に向けた。しかしそれも束の間、すぐに踵を返して闇の中に溶けていく。
「ディオ、大丈夫？」
寄りそってきたリシェルアが、ディオの手をどかせて傷の状態を調べ始めた。
だが、ディオは自分の傷のことなど頭になく、別の事に思いを巡ら

せる。
二人だから追い返せたものの、一人だったらディオであろうとリシェルアであろうと、やられていたかもしれない。あの男は、これまでの仕事屋稼業で出会った中でも、かなりの強敵に入る。
「ったく、次から次へと面倒事が増えてくな…」
まずは奴の素性を暴かねえと、と、ディオは男の消えて行った暗闇の先を睨んで、息を吐いた。

10

燃える屋敷を後にし、暗い森を一目散に駆け抜けた後。木々の間から見える王都を前に、エドルは一旦立ち止まった。
息の上がる胸元を押さえて、後ろの二人が追い付いてくるのを待つ。
「やっと王都か。アスレイナに着くのはやはり、深夜か明け方になりそうだな…」
「は、速すぎなんだけどっ…」
こちらの姿を見つけたエリスは、開口一番にそう文句を垂れた。
「もっとゆっくり走ってってば！これじゃ、あたし倒れちゃう！」
「さっきからうるさい。しゃべりながら走れば、無駄に体力を消耗するのは当然だろう」
「そっちが気を使ってくれれば、こんなに怒鳴らなくて済むのっ！」
「貴様が安易な行動をとって誘拐されたから、こうやって走らなければならなくなったというのに…少しは遠慮というものを覚えられないのか？」
どうやら、さすがの氷海もここにきて、エリスの傲岸不遜さにいら立ってきたようだ。ここぞとばかりに口撃を始めた。
「なにそれ。大体、あんたたちが今まで散々あたしを足蹴にしてきたのが悪いんでしょー？」
「足蹴にしているのはどっちだ。これ以上チームワークを乱すような真似は…」
「チームワークなんて、元々あってないようなものだったと思うけど。だから今、こうやって別々に行動してるわけで…」
「お前らなー…」
こうも騒がれては、一体何のために休憩を取っているのかわからない。

エドルは、呆れかえって二人の間を割った。
「とりあえず、アスレイナに着くまで大人しくしろって。リシェルアたちと合流してから、好きなだけ喧嘩してくれ」
「「……」」
険悪な雰囲気のまま、そっぽを向く女二人。
こめかみに片手を当てて目を瞑った氷海を横目で見ながら、エドルは思い直していた。
いら立っている、というのは間違いかもしれない。先ほどエリスに剣を向けたこととといい、彼女のエリスに対する対応が、今までとは明らかに違う。
エリスの短所は山のように思い当たりがあるので、彼女にとって何が決定打になったのだろうと悩み始めた時だった。
「仲直り、しよ」
氷海と正反対の方角を向いていたエリスが、おもむろに振り返り、そう言いだした。
「……は？」
氷海の口から出てくるとは想像もしなかった間抜けた声が、森の中に響く。
「うーん…この際、ごめんなさいは省くことにしよう。とりあえず、仲良くなれればいいんだし」
「何を勝手なことを」
「チームワークが必要なら、まずは仲良くしなきゃダメでしょ？」
言葉に詰まって、口を噤み眉間に皺を寄せる氷海。
急な展開についていけず、エドルがおろおろしている間に、話は進んでいく。
「そうだねー…まず、あんたの本名、教えてよ」
「本名？」
「そう。いつまで経っても二つ名で呼んでちゃ、仲良しとは言わないでしょ」
そういえばエドルたちの中で、氷海だけは、二つ名で通っているた

め本名を知らない。
特に氷海は、賞金稼ぎだ。本名から素性を賞金首などに知られてしまうと、家族を盾に取られかねない。それを防ぐために、本名を伏せて活動する賞金稼ぎや仕事屋というのは少なくない。
おそらく、氷海もその類だろうとエドルは思っていたのだが、
「クリティス・シェリィ」
意外にあっさりと、氷海――クリティスは、自分の名前を口にした。
「ええっ?!いいのか、そんな何のためらいもなく!」
「別に私自身、隠しているつもりはなかったのだが…なぜか、二つ名の方が有名になってしまってな。
それに、ここまで有名になってしまっては、隠していてもおのずと素性は知れ渡ってしまうし、そもそも、」
クリティスは、一瞬言葉を途切れさせた。だがすぐに、いつもの変わらぬ抑揚の薄い声音で続ける。
「家族は、皆とっくにいなくなっている。以来、ずっと独り身だから、知られて危険なことなど一つもない」
「なんだ、そうだったのか…」
心配して損した、と、エドルは安堵のため息をついた。
黙って彼女の話を聞いていたエリスが、にっと笑みを浮かべる。
「それじゃあ、クリティス。これからよろしく」
「…今更だが」
クリティスの冷静なツッコミに頬を膨らませたエリスは、それでもすぐに表情を戻して、「また走るのやだなー」と伸びをした。
どうやら、いくらか場の空気はなごんだようだ。安心して、再びクリティスを見上げると、彼女はじっとエリスの背中を見つめていた。
「本名…」
「どうした?」
「…いや」
再び王都に紫の瞳を向けて、クリティスは少し驚いたような声で、ぼんやりと呟いた。

「クリティス、の名で呼ばれる事など、五十年来のことだったと思っていただけだ」

11

「お前が、弟が雇っているという殺し屋か」
アスレイナから少し離れた村の地下に、クロウは足を踏み入れた。
希望の箱幹部の弟、ルエイドとは知った間柄だが、兄クォードとは初対面だ。
ルエイドと打って変わって生真面目な性格の彼は、神学や魔術の本で溢れんばかりの書庫で、鋭い視線を向けてくる。
「その血なまぐささは、何とかできないのか？本や資料に血を落とすなよ」
腕の傷もそのままに、ドラゴンでここまで直行してきたクロウは、ぎこちない笑みで軽口を返した。
「怪我人に、そんな冷たいこと言わねえでくれよ。
ほれ」
懐から、赤茶けた紙束を取り出し、向こうに投げて渡す。受け取ったクォードは、息をするのも忘れてその紙束に書かれたものを読み始めた。
「「保険」は一応、ローグの方にも置いてある。
…が、もし向こうに行った邪魔者を仕留めきれなかったら、屋敷そのものに火を掛けるよう、旦那の方から指図があった。最悪の場合だけどな…」
「ルエイドから、連絡が来た」
紙から目を離すことなく、クォードは言う。
「屋敷に残っていた信者は、皆気絶させられていたそうだ。そこで、ルエイド自身が屋敷に火を放ったらしい」
「…奴らは？」
「始末に失敗した。人質の女ともども、まんまと逃げられた」
「最悪の中でも最悪のケースになったか…」

「…まあ、いい」
さして憤慨することもなく、クォードはすました顔を上げた。
「これが無事手に入っただけでも良しとしよう。
あとは、邪魔者を消し、手勢を増やすだけだ」
それから、彼は懐中時計を取り出し時間を確認すると、
「これから客人が来るのでな…下がってくれ。
ちなみに、医者は右の角を曲がればすぐだ」
「はいはい、血なまぐさい奴は退散しますよっと」
首を振り振り、クォードに背を向けクロウは書庫を後にした。言われた通りの道筋を辿り、角を曲がる。
「?!」
その時、突如、得も言われぬ威圧感がクロウの身体を圧迫した。あまりにも急な事に、クロウは何の覚悟も構えもできぬまま、立ち尽くす。
廊下の向こうから、何かが来る。
鉄の床を、靴の底が叩く音。それは、どんどん近づいてきて、
「こんばんわー」
え。と、クロウは思わず、間の抜けた声を上げていた。
何とも場違いな愛らしい声が、自分に向かって挨拶したのだ。
威圧感を出していたその者の姿を見て、愕然とする。
「あら、血が出てる。早く診てもらうといいよ」
女の子だった。それも、年齢は十歳かそこらというところだ。
観劇やパーティーにでも行くのかと言うような、レースをふんだんにあしらった華やかなドレスを身に纏い、巻いた金色の髪はふわふわと揺れている。
「あ、ああ、どうも」
「それから――」
彼女は、小首を傾げてこちらの顔を見上げて来た。

「あんまり、好きじゃないニオイもするなー」

鼻歌を歌いながら彼女が通り過ぎるまで、威圧感に気押されて、クロウはまともに彼女の瞳を見ることもできなかった。鼻歌が聞こえなくなった頃に、やっと我に返る。

「なんだ、今の」

彼女が横を通る時、その背中に纏わりついていた黒い影。いや、霧か煙にも見えた気がする。

良く分からない。良く分からないが、自分が触れてはいけないものだという確信はあった。

「…早いとこ、退散するか」

顔を歪めて舌打ちを一つすると、クロウは足早に医務室へと駆け込んだ。

盗まれた封印

五人がようやっと再会したのは、次の日の朝のことだった。

「はあ？」

「王都に帰るっ？」

負傷してベッドで安静を保っているディオを囲んで、話し合いをしていた時だった。

クリティスの口から出た突拍子もない提案に、エリスを除いた三人が目を丸くする。

ちなみにエリスは、床に寝転びスナック菓子をほおばりながら、だらだらと本を読んでいる。一度怖い目に遭っているというのに、反省の色もなく相変わらずマイペースだ。

「ここまで来て何でまた…」

「天空王に、聞きたい事がある。おかしな資料を見つけたものでな」

「おかしな資料？」

エドルがおうむ返しに尋ねても、「まだ何の証拠もないから」とクリティスは教えてくれない。

まず不満の声をぶつけたのは、ディオだった。

「ここでの調査はどうするんだよ。結構いい線来てるのに」

「負傷している貴様が言う事ではない。怪我が治らないうちにまた襲われたら、対処できるのか？」

「単独行動中に奴が来たらやばいが、他の雑魚には…」

「その雑魚にしても、簡単にドラゴンを呼び出すというのだろう？」

「……」

返す言葉もなく、ディオは黙り込んだ。

「なるほど…ディオの療養も兼ねてってわけか？」
「そうだ。怪我人がいる時に下手に動いても、かえって危険を招くに決まっている。
さっさと安全圏に戻って、そこでできることをしようということだ。
ディオの怪我が良くなってからアスレイナに戻ってくればいい」
今度はクリティスも、分かれて行動しようとは言い出さなかった。
分かれて行動したが最後、別個に叩かれてしまうというのは、すでに学習済みだ。
希望の箱とこちらとでは、戦力の差は歴然。少ない人数をなるべく削らないよう、慎重に行動する必要がある。
「わかったよ。一旦、王都に戻って天空王に会おう。向こうも、もしかしたら新しい情報を提供してくれるかもだし」
「というわけだが、聞いてんのかエリス？」
ディオが、スナックの袋に手を突っ込み引っ掻きまわしているエリスを睨み下ろす。
返って来たのは、「聞いてる聞いてるー」という、なんとも適当な返答だった。
「こいつ…いっそ、何かやらかすまえに俺の手で始末した方が」
「と、と、とにかくっ、明日王都に戻るからな！準備しとけよ、エリス！」
物騒な事を言い始めたディオにも、エリスは全く無反応。
いつもと変わらぬこの調子で大丈夫なのかと、エドルは胃が痛む思いだった。

「それにしても」
宿の廊下を、自室に向かって歩いていると、突然クリティスが話しかけて来た。
「あら、クリティス。なあに？」

振りかえると、手帳とペンを持った紫の瞳と目が合った。何か、考え事をしているようだ。
「希望の箱の連中が、ドラゴンを呼び出すという話があっただろう。呼び出す前にドラゴンを手懐けておいて、それを呼び出しているというのがお前の論だったが…」
「ええ、そうねー」
「そもそもドラゴンは、生息地も生息数も限られているはず。それを、どこで手に入れているのかと疑問に思ってな。
私も召喚術をたしなんでいるが、どうも納得いかない。手懐けたところで、紙に書いた魔法陣ごときで呼び出せるはずが…」
「うーん…あたしはそれほど召喚術に詳しくないから、どうとも言えないわねー…」
顎に手をやり眉根を寄せるクリティスを見て、リシェルアも首を傾げる。しかしこればかりは、魔術に精通するリシェルアにもわからなかった。
「どうも希望の箱には、相当魔術の知識のある人間がついているようだな。おまけに、腕の立つ殺し屋もいる。思った以上に危険な団体だ。
ディオの傷が浅かったというのが、唯一の救いか」
クリティスはそう言い残して、そのまま自室へと入って行った。
「おやすみー」
思考にふけっているクリティスに、リシェルアの声は耳に入らない。しかし、別段気にする事でもないので、リシェルアはその後ろ姿を見送ってすぐに、部屋に向かった。
クリティスの頭の良さ、洞察力の高さには、いつも驚かされる。なんて知的で凛々しいのだろうと、何度羨んだことか。
「エドルも、あれくらい頭が良ければかっこいいのに」
頬に手を当て、リシェルアは一人、含み笑いを零すのだった。

2

昨夜から、ずっと書庫にこもりきりだという兄を、弟ながらに心配して、ルエイドは地下支部に戻ってくると、さっそく書庫の扉を叩いた。

「…何だ？しばらく書庫には誰も近づくなと、言っておいたはずだが」

「弟にも言うか？それ」

「…ルエイドか…」

扉越しに短い会話を交わすと、向こうから扉が開いた。古い本のすえた臭いと、こもった空気とが一気に押し寄せてきて、げんなりする。

「換気ぐらいしろよ…不衛生な…」

「ああ、まあ、そんなことはどうでもいい。それより、入ってくれ」

兄の口調は、高揚した心持ちを表していた。面白い話か実になる情報でも手に入れたのだろう。

入ると、几帳面な兄にしては散らかり放題の室内が、最初に目に飛び込んでくる。熱中するとずぼらになる彼の性質は、昔から変わっていないらしい。

「我々の行こうとしている地は、とんでもない場所だった」

そんな室内の状況に見向きもせず、クォードは目を輝かせながら語り始める。

「とんでもない場所？

確かに、場所的にいえばとんでもないけどな」

「そうではない。

歴史、目的、そして太古の叡智…あらゆる意味で、我々の想像をはるかに超えた場所だという意味だ」

扉を少しの間開放して、微弱な風の魔法で室内の空気と熱気を逃がす。しかし、兄の興奮はまったく冷める様子がない。
対してテンションの下がっているルエイドは、「…はあ」と適当な相槌を投げ返した。
「で？想像をはるかに超えたとんでもない場所なのはいいけど、ちゃんと俺らの目指す目標に沿ったところなんだろうな？」
雑多な机の上に載っていた、飲みかけの紅茶の入ったティーカップを片づけながら訊くと、
「無論だ」
クォードは、端正な顔に輝かしい笑顔を浮かべた。
「我々が行くべき場所はそこしかない。いや、そこでなければ成し遂げられん！
いいかルエイド、決して邪魔者共に計画を悟られるなよ。ようやっと素晴らしい情報も手立てもものにしたというのに、邪魔が入ったとなれば興ざめも良いところだ」
「はいはい、頑張りまーす」
結局、弟にその素晴らしい情報とやらを教える気はないらしい。面倒くさいだけなのかもしれない。
これ以上留まっていると、つまらない話を延々と聞かされそうな気がして、ルエイドは部屋を去ることにした。
扉を開けると、通路に集まっていた信者たちが散り散りになって離れて行った。どうやら、クォードの事を心配して様子をうかがっていたようだ。
「あいつならぴんぴんしてるぜ。ほっといても大丈夫そうだから、心配しなくてもいい」
兄に代わって声を掛け、信者たちの不安を取り除く。こんなことが原因で組織内に乱れが起こっては、困るのだ。
「兄のところに、昨日誰か来てたか？」
「え、ええ」
口々に安堵のため息をついて定位置につく信者たちから、一人を捕

まえて小声で問う。新米らしき彼は、戸惑いながら頷いた。
「ルエイド様が雇われていた方が…」
「クロウか…他には？」
「他に…？」
彼はしばらく記憶を手繰るように首を傾げていたが、後に首を左右に振った。
「いえ、そんな報告は聞いていませんが…」
「……」
ルエイドは、無言のまま顎の動きだけで指示して、彼を去らせた。

信者の向かった方と反対側に歩き出しながら、思考を巡らせる。
書庫の机に載っていた、飲みかけの紅茶。
クォードが飲んでいたとは思えない。彼は本や資料を読むとき、零すと嫌だからと言って物を飲み食いすることはないというのは、弟である自分が良く知っていた。
ならばクロウに出したものかと考えると、やはりありえない。クロウが飲むといえば酒、よくてコーヒーだ。紅茶のような上品なものは口に合わないと言っていたのを、思い出す。クロウの事を良く知らないクォードも、出すとすれば、ワインかコーヒーを選択しただろう。
他に、違う客がいたとしか考えられなかった。もしかすると、「素晴らしい情報」とやらも、その客から聞き出したのだろうか。

思えば、天空王子を攫い、エヴァスタ旧天空教会に連れてくるという計画。あれは、確かに自分が計画を練って指揮したものだったが、エヴァスタ旧天空教会や天空王子の事、それらの情報を持って来た

のは兄に他ならない。
ドラゴンの召喚術、あれも彼が見つけてきたものだ。魔術の話には疎い自分には理解しかねるが、聞けば、普通ではありえない術式だという。便利なのは認めるが、考えれば考えるほど、不気味だった。
「…あいつ…毎度毎度、どこから情報を持ってきてるんだ…」
情報収集はクォード、実行役はルエイド。いつもそう役割分担をしていたが、お互いその分担は性に合っていると思っているし、ルエイドも兄の持ってくる情報に、特に何の疑問も抱いた事がない。というのも、彼の持ってくる情報は、外れた事が一度たりともなかったからだ。
だが。
「何かあいつ、いろいろと俺に隠してるのか？
…警戒しとくに、越したことはねえな」
胸くそ悪い。
そう吐き捨てて、ルエイドは自分の仕事場へと戻って行った。

3

王都に帰ると、一行はすぐさま城を訪問し、天空王との謁見に臨んだ。
「聞きたい事があるのだが」
王と対面し軽く挨拶を交わした後、クリティスが単刀直入に話を切り出す。
「何かな？」
「最近、この城に盗人が入った事は？」
その場にいる皆が、クリティスに注目する。
天空城に泥棒が入ったという話は、エドルにとっては初耳だった。
しかし、隣りのリシェルアは少し考え込む素振りを見せてから、
「そういえば、殺人事件があった後に王都で聞き込みをしてたら、町の人がそんな噂をしてたような…」
「マジか」
「でも、本当なんですかー？」
王は、きょとんとした表情で頷いた。
「その通りだ。
数日前…あー…確かー―」
「私たちが依頼を受けて、エヴァスタに向かった日では」
「そう。その日だ」
もう一度頷き、それから天空王は少し困った表情を見せる。
「しかしその日は、息子の誘拐を手引きした者たちを検挙するのに大忙しでな。城中が大騒ぎになっていたために、誰もその犯行に気付けなかったのだよ。
しかも、盗みに入られた場所は書庫。あの騒ぎの最中、書庫で読書をする呑気な者はさすがにいなかったようだ」
「そうか。その様子では、盗まれた物の行方はおろか、犯人も未だ

不明だろう」
「まったくその通りだ。ここしばらく、息子の誘拐や大量殺人と大きな事件が相次いでいたものだから、その件の捜索は後回しになるばかりで…ああ、頭が痛い」
口ではそういうものの、王の顔はそれほど深刻そうにはまったく見えない。これも、彼の神経のたくましさの賜物なのだろうか。
クリティスが、手に持っていた資料を王に差し出した。
「…これは？」
「先日、連れの一人が希望の箱に攫われた。それを助けるためにローグの屋敷に行ったところ、見つけた資料だ」
訝しげに紙の束を受け取り、そのまま読み始める天空王。読み進めるに従って、彼の眉間に次第に皺が寄っていく。
「…間違いない」
すべて読み終えた後、王は大きくため息をついてそう呟いた。
「ここに書いてある計画の概要、盗まれた物。すべて今回の盗難事件に当てはまる」
どうやら資料の中には、今回起こった盗難事件の内容が書かれていたらしい。
つまり。
「その事件も、希望の箱の仕業ってわけか。で、結局盗まれたものってのは何なんですか？」
ディオが尋ねると、王は難しい顔をして黙り込んでしまった。
わからない、というわけではなさそうだ。むしろ、知っているからこそ言いにくい、という苦渋の表情だった。
「「天空王族秘伝の封印の書」と、資料には書いてあるのだが…表現があいまいだからか、いまいち私にもわからない」
クリティスも、好奇心に満ちた瞳を王に向けた。
「秘伝ということは、とどのつまりは門外不出、一般世間に教えられない本だということか？」
「…ああ」

いつも飄々としている王が、珍しく頭を抱え込む。
エドルはそれを見て、納得いかないという顔で尋ねた。
「そんな大事なもん盗まれてるのに、なんで後回しにしてるんですか」
「第一に、盗んだところで、利用するには解読が難しく手間のかかる本だということがある。何せ、古代文字で書かれているからな。第二に、本ごときで人の命には代えられん。市民にしてみれば、門外不出の本などよりも、誘拐事件や殺人事件の方を、先に解決してほしいに決まっている」
「…なるほど」
考えてみれば、確かに妥当な優先順位だといえるだろう。
「まあ、背に腹は代えられん…。ただでさえ人手不足の今、頼れるのはお前たちしかいないからな。
おまけに、この三つの事件すべてが希望の箱に関係するとなれば、こちらも最大限の情報を提供せねば」
しぶしぶ顔を上げ、一度大きく深呼吸をする天空王。
それから、まるで裁判で宣告を下すかのような厳かな声色で答えた。
「その本の正式な題名は、「後世の天空王家後継者たちへの高等魔法の伝授の書～主に封印関連を中心に、ポロリもあるよ～」だ」
「秘伝の書にポロリはいらねえだろ」
「ポロリだと？」
「お前ら…」
ボケにボケで返すディオとクリティス。エドルは呆れ顔で彼らを睨む。
「つーか、王もこんな状況で冗談言うのやめてくださいよ」
「…もう一度言う。
その本の、「正式な題名」だ」
「――天空王ってのは、昔から変人ばっかなのかよ…」
あんまりな題名だが、しかし、これで盗まれた本の内容についてもおおよそ見当がついた。

「王家が直々に施す、封印や結界に関する魔術書か。
しかし、ポロリなどと言うから、高等な禁呪などが密かに載っているのかと思ったが」
クリティスが少し残念そうに言うと、王は苦笑した。
「悪いが、中身は普通の魔術書だ。神から禁じられている魔法を、神に仕える天空王家が持っているわけにはいかないだろう。
私も、この本の題を読んだときには、思わずやましい気持ちになって幼心ながらにわくわくしたものだったが…」
そう言って、思い出に浸り遠くを見やる天空王。一同の白い視線に気づくと、彼は前にもしたように一つ咳払いをして、
「天空王家の秘伝にまで首を突っ込んでしまったのだから、こちらの方も、是非取り返してきてくれ。
もし中身を見てしまっても、悪用は禁止だ」
「中身を見たところで、古代文字で書かれてるんじゃそもそも読めませんよ」
古代文字とは、その名の通り、遥か太古の時代に使われていた文字の事だ。現代では解読できる人間もほとんどおらず、いずれ誰も読めなくなってしまうのではないかと、危惧されつつある。もちろんエドルも読めないし、彼にとっては読めなくとも、生きていくにはまったく弊害のないものでもある。
「まあ、希望の箱を潰すついでに取り返してくるってカンジで」
「それでいい。奴らに、あの本を利用できるとは到底思えないからな」
天空王は、ほっとしたような笑顔を浮かべた。
が、その時だった。
なにやら、謁見の間の奥、王族の部屋のある方から、けたたましい騒音や爆音が聞こえてきたのだ。
目を丸くして、エドルたちは顔を見合わせる。
「――ああ、心配しなくていい。別に賊などではない」
しかし、かなりの音だったにも関わらず、王は動じることなく玉座

に腰を落ち着かせている。その笑顔は、さわやか過ぎるほどにさわやかだ。

「いつもの事だ。じきに悲鳴が上がって兵や召使いが駆けつけてくるが、温かく見守ってやってくれ」

「は」

王が何を言っているのか理解しかねて、ぽかんと口を開けたままでいると。

「きゃあああああああっ！」

まさに言った通り、女性の悲鳴が謁見の間にこだました。

「ど、どうしよ、部屋のドア開かなくなっちゃったあああ！誰か助けてえええええ！」

「ひ、姫様ー！ご無事ですかーっ！」

間もなくして、これまた王の予言通り、忙しなく兵士や召使いが駆けこんできた。彼らはエドルたちのことなど構いもせず、謁見の間を素通りして奥へと入っていく。

王は、笑顔のまま説明を始めた。

「先の悲鳴を上げていたのが、我が娘であり、アスロイの姉に当たるエイナだ。

小さい頃からからくりものをいじるのが好きでなあ…触っては壊し組み立てては爆破させ、結果的にあのような…どうしてあんな娘に…。

いや、思えば、他界した妻もあんな感じだったような…」

王の笑顔は、さわやかなどではなかった。むしろ、精も根も尽き果て笑うしかないという、諦観の表情だった。

「本来ならば、直接顔を出させて紹介したいところなのだが、見た通りの状況なので、このような簡単な紹介で勘弁してくれ」

「いえ、お、お構いなく。

…人騒がせな女には、もう慣れてるんで…」

エドルが、この場にいないわがまま少女を思い浮かべていると、天空王は「ほう？」と首を傾げた。

「君も意外と、女性に悩まされるタイプか」
「いえ、あのじゃじゃ馬が特殊なだけです」
そう、エドルだって、エリスに出会う前までは、さすがにああまで自己中心的な女とは、知り合った事はなかったのだ。リシェルアだって、たまに食えないことを除けば、大人しくて付き合いやすい少女だ。
「今日だって、眠いから行きたくないって言って布団からでてこねーしな…」
「絶対今頃、買い物してるに決まってる」
ディオも、同調して頷いた。
王は背もたれに寄りかかると、ふっと顔を緩めて微笑んだ。
「じゃじゃ馬、か…それはそれは。
是非とも、会ってみたいものだな」
「やめておいたほうが…あいつ、失礼な態度取りまくると思うし」
「失礼と言えば、お前たちも十分失礼だとは思うんだがなあ…」
王のぼやきは見事にエドルたちにスルーされ、姉王女とともに大騒ぎしている兵士や召使いたちの声にかき消されていった。

4

「クロウ、ここにいたのか」
町の寂れた酒場で、一人酒盛りをしていると、ルエイドが周囲の様子を警戒しながら入ってきた。
「おお、旦那。
この間の件は悪かったな。うまくいけばいっぺんに奴らを始末できると思ってたんだが、やっぱかなり手ごわい連中だった」
自分を捜しに彼が来る理由となれば、ローグでの失敗のことだろう。そう踏んだクロウは、先手必勝とばかりにすかさず謝罪した。
こうしておけば、向こうがうるさく追及してくることはないと考えたのだが。
「いや、そんなことはどうでもいい」
あっさりとそれを切り捨てられ、思わず拍子抜けしてしまう。どうやら、まったく別の件でやってきたようだ。
「お前、例の本の中身は、もうあいつに渡したのか？」
「もちろん。ここにきて、すぐに渡したはずだが」
「…そうか」
ルエイドは、難しい顔をして顎に手をやり、俯いた。
そもそも、兄に渡せと言ってきたのは、他ならぬルエイドだ。それを、今更尋ねてくるとはどういう事なのか。
「…その本の中身、読んだか？」
「いや、読めなかった。全部古代文字で書いてあったしなあ。
…どうした？まさか、紛失したなんて間抜けた話じゃ」
「い、いや、そういうわけじゃねえ」
どもりながらこちらの杞憂を否定するルエイド。しかし、その表情は未だすぐれない。
しばらくして、彼は俯いたまま呟いた。
「実はな。あの本の中身、俺も知らねえんだ」

「…は？！」
一瞬、クロウは自分の耳を疑った。
信者たちに、天空城の書庫から盗んでくる事を指示したはずのその当人が、盗んできたものの中身を知らないとは。
「あれを盗んで来いって言ってきたのは、あいつ…クォードなんだ。俺は、それを遂行しただけでな…」
「ははあ、なるほどそういうことか」
「…そういえば、お前」
はっと、思い出したように顔を上げるルエイド。
「その本の中身を渡しに行った時、クォードに、なんかおかしなところはなかったか？」
そんなことを言われても、と、クロウは首を傾げた。何しろあれが、自分とクォードとの初対面だ。相手の事をよく知っていなければ、おかしな点になど気付けるわけがない。
「わかるかい、そんなもん。
渡したら、客が来るからってすぐに厄介払いされたしな」
「客？！」
突然のルエイドの大声に驚いて、口に含みかけていた酒を噴出するところだった。
懐から雑にたたまれたハンカチを取り出し、口元を拭いつつ相手を睨む。
「急に叫ばないでくれよ…危うく、もったいないことしちまうところだった」
「わ、悪い。
でも、あいつ、客が来るって言ってたのか？その客、お前は見たのか？」
「だーもう、ちょっと待ってくれって！」
彼の意図も趣旨もわからない質問に、こちらの思考がまったくついていけない。なぜか興奮するルエイドを、クロウは両手を前に押し出すジェスチャーで留まらせた。

「確かに、客が来るとは言ってたよ。けど、オレはその客とやらが来る前に追い出されて医務室に行っちまったんで、後の事はわからん」
「そうか…しかし、本当に客が来てたのか」
今度は、ルエイドは、クロウをそっちのけで独り言を言い始める。
「つーことは、あいつが俺の知らないところで、知らない輩と内通してるっていうのははっきりしたわけだ…」
「あのー、旦那？」
こちらが声を掛けても、彼は返事すら返さない。それどころか、ぶつぶつ呟きながらこちらに背を向けて、酒場を出て行ってしまった。
クロウのことなど、眼中にないといった様子だ。
「…最近、どこからもはぶられてる気がするのは気のせいか？」
マスターがカウンターでグラスを拭く音を聞きながら、殺し屋クロウは薄暗い酒場の隅でうなだれ、独り酒に浸るのだった。

5

海の上の空は澄み渡っているようだが、塔の上を覆うように渦巻いた雲は、どこか禍々しい雰囲気でもあった。
やりきれない憎しみに満ちた心が、そう感じさせるのだろうか。空の青も、海の青も、悲しい色にしか見えないのである。

数日もすればディオの傷もそこそこ癒えたため、予定通りアスレイナに戻ってきた一行。
そのまま市街に入ろうと話しながら、はずれを歩いていた時だった。
「…早っ」
エドルが、自分たちの周りを見回し呟く。それもそのはず、まだ町に入ったばかりだというのに、黒いローブの不穏な集団が、こちらを取り囲んでいたからである。
「えーっと…お出迎えごくろうさまですー？
なんだか、この間とおんなじパターンねー」
さっそくリシェルアの毒舌が飛ぶ。
「学習能力のねえ奴らだな…。俺に散々痛めつけられたのを、もう覚えてないとでも？」
「覚えているから、こうやって復讐に来てやったんだよ」
集団の中から、エドルにとっては聞き覚えのない男の声が、ディオの悪態に応えた。
前までエドルたちと別行動をしていた二人は、あからさまに顔の色を変える。

人の輪を掻きわけて進み出てきたのは、風貌のいまいちな中年の男。
飄々とした顔つきだが、視線にはそれなりの殺意が見えている。
「…ほーう」
彼は五人を舐めまわすように観察した後、レイピアの柄に手を掛けているエルフの賞金稼ぎと視線を合わせた。
「名前だけは知ってたが、お目にかかるのは初めてだな。噂通りの美人だ」
「何かと思えば、殺し屋クロウだったのか」
「クリティス、知ってるのか」
エドルがすっとんきょうな声をあげると、彼女はさも当然という顔で頷いて、
「そこそこ有名な賞金首だ。
まさかこんなところで出くわすとは、運がいい。捕まえれば多額の賞金が手に入って、しばらくは魔獣退治に明けくれなくて済む」
「それはいいわねー」
「金蔵扱いかよ、オレ」
クロウがしょげて肩を落としているが、こちらには気を遣ってやる義理はない。素知らぬ顔をしていると、ディオの陰に隠れていたエリスが小声で言った。
「こいつだよ、あたしを攫った奴。超呑んだくれなの」
「おや、お嬢さん。こんな形で再会するなんて夢にも思わなかったぜ。
…屋敷から脱走するほどのじゃじゃ馬だとは、気付かなかった」
うすら笑いを浮かべていたクロウが、一瞬眼光を鋭くした。
しかしじゃじゃ馬娘は、その視線に恐怖など感じてもいないようだ。
得意げに「ふふん」と鼻を鳴らして、そっぽを向いている。
エドルは、一連の会話を総合して大きくうなずく。
「なるほど…王都で大量殺人をして、エリスを攫って、ディオに怪我を負わせた張本人か、あんた」
「その通りだよ、疾風」

再び、うすら笑いを顔に張り付けるクロウ。
「希望の箱に雇われていてね。あんたらをまとめて始末しろって、頼まれてるんだよ。
もちろん手段なんか問われていない。つまり、」
ここで彼は、大きく両腕を広げた。
「こんなふうに、たまには数に頼ってもいいってことだ」
「一人であれだけの数の城の人間を殺せる腕を持つ奴が、たった五人相手に、数に頼った戦法とはなー。
殺し屋の名前が泣いてるぜ」
「手厳しいなあ」
まいったね、と頭を掻き、一度俯いたクロウだったが、
「まあ、しかし」
ゆっくりと、顔が上がる。そこには、先ほどまでの笑顔はない。
人を殺すことに、微塵のためらいも持たない無情な殺し屋の、本当の顔がそこにあった。
「死んでいく人間の言う事だから、気にする事もねえだろう」
その言葉が合図になったのか。希望の箱の信者たちは、一斉に各々の武器を取りだした。
「あら、今回は召喚術はなしなのー？」
「ありゃあ、いろいろと後始末がめんどいらしくてな。
あんま使うなと怒られちまった」
袖から覗くクロウの両手にも、鋭い刃の爪がついている。
彼は舌なめずりをすると、口元を大きく歪ませた。

「召喚術なんてつまんねえものより、オレは直接、血みどろの戦を体験したいタチだしなあ」

6

できれば殺し屋クロウの相手はしたくないな、と願っていると、彼は真っ先にディオの元へと向かっていった。
そういえば、リシェルアから聞いた話では、ディオも傷ついたが、クロウの方にもディオが一太刀浴びせたとのこと。互いの因縁に決着がつくまでは、エドルが相手をせずとも済むだろう。
「さて、こっちは…と」
様々な武器を手にして、真正面からかかってくるローブたちを見据えて、エドルははあ、とため息をついた。
魔法戦であればともかく、接近戦では動きづらいであろう、裾の長いローブ。そんなものを着て真っ向から臨んでくるなど、正気の沙汰ではない。動きやすい服装で、というのは、戦の基本どころかスポーツの基本である。普通に考えてもわかりそうなものだ。
つまり彼らは、武器による戦いにおいてはまったくの素人であると思われる。
「こんな素人を戦に連れ出すとは、よほど人手不足なのか？」
信者の一人が繰り出してきた、見え見えの太刀筋を受け流し、クリティスが首を捻った。
エドルは、気の抜けるような速度で飛んできた矢をダガーでたたき落とし、それに答える。
「まあ、こんなことしてるとはいえ、希望の箱ってのは一介の宗教団体にすぎないわけだろ？」
「確かに、門をたたく人間が、皆戦に長けているとは言えない。むしろ戦の経験などない一般人が多いのだろうが…それにしても、傭兵を雇うぐらいの財はなかったのか…」
しばらく信者たちの相手をした後、クリティスは、ふと、急に思い立ったという表情で、ディオと激戦を繰り広げているクロウを見や

った。
「…クリティス？」
「…そろそろ、私も本業を再開しなくては」
そう独り言を漏らすなり、「ここはまかせた」と、彼女は視線の先へと駆けて行ってしまった。
「は？！え？！いきなりなんだよ！」
突っかかってくる敵を手当たり次第に蹴散らしながら、クリティスはどんどん二人の元へと近づいていく。
クリティスの本業…
「あいつ、賞金稼ぎだったよな…」
波乱の予感が、胸中に渦巻く。
まとめて襲いかかってきた信者を殴り飛ばし蹴り倒し、エドルは本気で頭を抱えたくなった。
「頼むから、わざわざややこしい事にしないでくれよー…」
間一髪で爪を避け、銃を放つ。しかし銃弾の軌道を読まれて避けられ、隙をついてきた爪をまたかわす。
一向に進展しない戦況に、ディオはいら立ってきていた。
「とっとと死んじまった方が、余計な事考えずに済むのになあ」
首元を狙って薙いできた爪をダガーで弾くと、にやけ顔が一瞬目の前に現れて、また消えた。
こちらの心境を、見透かされている。
舌打ちをして、後ろに現れた気配に向かって魔力の弾を撃ち出す。
しかしそれは当たることはなく、今度は背中に振り下ろされた爪を、胴を反らしてかわした。
「動きが適当になってるぜ。そろそろ、集中力が切れてきたか」
再び、間近に迫るクロウの顔。
「昼間っから酒くせえんだよ、この酔いどれ！」

その顔面に銃口を突き付けたつもりだったが、構えた時には既に姿がない。
慌ててその場から離れようとしたが、
「うわっ?!」
思わぬ方向から飛んできた、他の信者の放った矢に気を取られてしまう。幸い矢には当たらなかったが、完全にクロウの居場所を把握し損ねた。
焦って気を散らした瞬間に、気配は背後から襲いかかってきた。
「じゃあな」
完全に不意を突かれてしまった。今から動いたのでは、遅すぎる。
反射的に、腕で攻撃を防ごうとしたときだった。
「?!」
いつまで経っても、相手の攻撃が始まらない。
「まったく…戦場の死神の異名を持つ男が、見ていて呆れる」
代わりに聞こえて来たのは、いつ聞いても、はらわたの煮えくり返る涼しい声音。
顔を上げると、自分とクロウとの間に、凍てついた海の名前を持つエルフが立ち塞がっていた。
「それにしても動きが鈍いが、貴様まさか、傷が開いているわけではないだろうな?」
「…うるせえ」
口先で一蹴してはみたが、図星である事には違いなかった。
開いているかどうかはわからないが、先ほどから脇腹の傷がいやに痛む。自分の身体と相手の攻撃と、常に両方に気を回していなければならないのだから、集中力がいつもより早く切れるのも当然のことだった。激しい動きは傷に触るため、おのずと動ける範囲も制限される。
それを察していたクリティスは、こちらに背を向けたまま呆れて首を振り、
「貴様が勝手に死ぬのはこちらとしても喜ばしいが、時と場所を考

えてほしいところだ。
今死なれては、人手に困る」
「俺は死んでやるつもりなんかねえよ」
「…二人がかりは、卑怯じゃないか？」
クリティスの向こう側から顔を覗かせているクロウが、困った顔で肩を竦めた。クリティスは、無表情を微塵も崩さず鼻を鳴らす。
「そちらが数に頼ると言うのなら、こちらも数に頼るまで。
…というのは、冗談だが」
「何？」
「私には、この男と共闘する気などさらさらない。
私がディオに代わって、お前の相手をする、というだけだ」
「は？！」
人の意思を無視した勝手な決定に、ディオは不満の声を上げた。
「ふざけんな！あの酔いどれは俺が倒す！」
「負傷している貴様が奴に勝てる可能性は低い。それに私には、貴様の安っぽいこだわりに付き合ってやる義理もない」
「呼んでもいないのにしゃしゃり出てきて、人の獲物横取りしようとしてんじゃねえよ！
いいからどけ！」
「誰の獲物だの横取りだのという問題ではない。
今貴様に死なれると、人手に困ると言っただろう。聞いていなかったのか？」
「おーい…」
ほったらかしになっていたクロウの控えめな呼び声に、我に返る二人。
彼は、寂しげな目でこちらの様子をうかがっていた。
「もうそろそろ、始めてもいいか？」
「…始めていいかも何も、今のうちに襲ってくるとか、そういう考えはなかったのか」
「いや、あまりにも仲が良さそうなんで、横槍入れるのが憚られる

なーと…」
「「仲が良さそうだと？」」
今の一言で、抑え込んでいた怒りが沸点に達した二人。それはもう、刺し殺さんばかりの鋭い視線をクロウにやって、正面に向き直った。
「訂正を要求する」
「今言った事、死んで後悔しろ」
エドルが案じたその通りに、今まさに、この場に波乱が巻き起ころうとしていた。

7

「あの二人、一緒に戦ってるわー」
にこにこと愛らしい笑みを浮かべ、炎の魔法で周囲を一掃しているリシェルア。エドルのそばまで近づいてくると、楽しそうに耳打ちしてきた。
「仲良しねー」
「なんだかなあ…」
実は彼らの一連の会話を耳にしていたエドルは、複雑な気持ちで返事を返した。
「クリティスは、ディオの助太刀と本業と、どっちが本音なのかわかんねーしな…」
ディオには上手い事言っていたようだが、先ほどのエドルの傍での呟きから察するに、本業の賞金首狩りをしたいというのが本音ではないだろうか。すべて、エドルの推測でしかないのだが…
「敢えて戦の合間に喧嘩をするあたり、実は仲良しっていうセンも無きにしもあらずか…」
働いてさえくれれば、もうどーでもいいんだけどな。
諦観しきった眼のまま、エドルは素人信者たちを適当にさばき続けるのだった。

「どけよホント！いい加減にしねえと、あいつごと殺る！」
「賞金首狩りは、私の専門だ。貴様こそ、他を相手にしていればいい」
先ほどから、ずっと口論を続けながら二人は戦っていた。
クロウがひっきりなしに繰り出す爪を交互に避けてはいるが、どう

やら彼らはクロウよりもお互いの方が気になるようで、攻撃らしい攻撃を返してこない。
威嚇射撃のつもりか、はたまたいら立ちゆえの八つ当たりか、まったく見当違いの上空に銃を放ち、ディオは怒鳴り散らす。
「うぜえんだよ！助太刀だろうが賞金首狩りだろうが、んなこたどうでもいい！
こっちは間に合ってるから、ほっとけって言ってんだろうが！」
クリティスも、爪の攻撃をはね返すと、一度宙を一閃してディオを睨んだ。
「はっきり言わなくてはわからないのか？
怪我人に戦場をうろつかれると、足手まといだということだ。さっさと退場願いたい」
「あのー…」
既に呆れを通り越して、涙目になっているクロウは、小さな声で呼びかけた。
「避けるのはまあいいとして、せめて攻撃をしてきてくれねーかな？こっち、すごいむなしいんだけど…」
「退場すんのはてめえの方だ…それともなんだ、人生から退場させてほしいのか」
「どうやら、人手不足になるのを心配している場合ではなさそうだな…今のうちに、ここで後顧の憂いを絶っておくべきか」
「お前らと戦ってるのはまごうことなくオレのはずなのに、何なんだろうな、この疎外感」
嗚咽を堪え、震える声で呟き苦笑いを浮かべるクロウ。もちろん、それを慰めてくれる者などどこにもいない。
お互いに神経を向けているため、一見簡単に始末できそうに見えるのだが、案外隙がなく攻め入る事の出来ないところが、またやりきれなかった。
「いつ殺してやろうかずっと悩んでたが、なんだかふっきれた気分だ。

今しかねえな、うん。今決めた。今殺す」
「人手など、あとで適当な仕事屋を見繕って雇えばいいだけのこと。それよりも、この人害を早めに潰しておかなくては、世の中に害はあっても利はない。
――決まりだな」
元々の敵の事などとうに忘れ去った二人は、同時に決意を固めて対峙して…
「あのガキ共の頭を冷やせ、水よ！」
クロウの、怒りに満ちた呪文が響き渡ったかと思うと、二人の頭上から、まるで滝のように多量の水が降り注いだ。しばらくすると水は止み、頭から靴まで濡れそぼった、文字通りの水も滴る美男美女が現れる。
「散々無視しやがって…少しは冷めたか？」
「「……」」
改めて声を掛けるクロウ。しかし、二人からの返答はない。
「聞いてんのか、てめえら」
すっかり問題児を諭す父親の気分で、彼は再び声を掛ける。
そこで、ようやっと二人は顔を上げ、クロウを見た。
鬼のような瞳だった。
「「黙れ」」

「いぎゃあああああああああっ！」

突如、断末魔が蒼天高く轟いた。
「うわ、何だ?!」
数少なくなった信者を、面倒くさがりながら気絶させていたエドル

は、それに驚き身を竦ませる。
おそらく、ディオかクリティスが何かやらかしたのだろう。
「それにしても、すげえ声だな…」
「大丈夫かしら…」
「あの二人なら大丈夫だろ」
「ううん、今の声の人ー」
「……さあ」
なにしろ相手は、悪名高いあの二人だ。
「ただでは済まないだろうなー」
「そうねー」
断末魔に慄き、逃げて行く信者たちの背中を眺めながら、エドルとリシェルアは、他人事のように語り合った。

血の海の中で、息も絶え絶えに倒れ伏したクロウ。
周囲の信者たちも、きっちり片付いている事を確認したクリティスとディオは、クロウの身体を挟んで対立した。
「貴様には、言っておきたい事がある」
「俺も、前から言いたかった事があるんだが」
二人は、互いに得物を突きつけ合う。レイピアの刃の銀、コクヨウの銃の黒が、陽光を反射し鋭く光る。
血の、錆びたにおいが立ち込める中で、睨みあった二人は同時に言葉を吐き捨てた。高音と低音の、見事なハーモニーだった。

「「目障りだ」」

二人の因縁も、まだまだ先が長そうである。

「さて、何度か遠回りしたが、やっとこれで必要な情報が手に入りそうだな」

エリスを攫い、監禁した張本人が、まさか同じ羽目に遭うとは思いもよらなかっただろう。

日差しも和らぎ涼しくなってきた頃、ディオとクリティスによって昏倒させられ縄で括られたクロウが、やっと目を覚ました。

一応こちらで手当てはしておいたが、二人がよってたかって痛めつけたため、傷は深い。しばらくは満足に動けないはずである。

「…この俺が、簡単に口を割ると思ってるのか？」

クロウは、小馬鹿にした笑みを一同に投げかけてくる。だがしかし、

「そりゃ、簡単にはいかない事は承知してるさ。

だからこっちも、いろいろと口を割らせるための方法を試してみるつもりだ」

ディオはそう言って、この上なく嬉しそうに微笑んだ。殺し屋が一瞬身震いをしたのは、見間違いではないだろう。

「まずは何から始めよっかなー」

「ま、待て、ちょっと待て！俺は別に、口を割らないとは言ってないぞ！」

ディオの目が、拷問の道具を求めて辺りを探り出すのを見ると、先ほどの威勢はどこへやら、クロウはあっさりと観念してしまった。

「口を割らせるための作業はディオに一任する」というクリティスの提案は、見事に功を奏したようである。

「えっ…そうか…、まあ、その方が、お互い嫌な思いをしなくて済むしな…」

そう応えたディオの声が、若干つまらなそうだったのは、気のせいだという事にしておきたい。対するクロウは、ほっと胸を撫で下ろ

していた。
「同意も得られたことだし、単刀直入に聞くぜ。お前ら希望の箱の、本部はどこだ？」
「本部だと？」
再び、嘲るような笑い声を立てるクロウ。
彼が口にした答えは、信じがたいものだった。
「希望の箱に、本部なんてねえよ」
「…なんだと？」
身を乗り出して、尋ね返すのはクリティス。
「栄えていた昔には、どっかに本部があったらしいがね。今はもうないらしい。
支部って名義で実質の本部を作ってるんだが、それも、たまに気まぐれに移設しちまう」
「紛らわしいことを…
で、その支部は今どこに？王都にはなかったようだが…」
「このアスレイナの隣町、エベリスだ。地下に今のところの支部があって、幹部が住んでる」
これまた、やけにあっさりと情報を漏洩するクロウ。
「…いやに素直だが、嘘じゃねえだろうな？」
「希望の箱に、俺の常連がいる。今回の仕事もそいつから引き受けたもんだが、別にそこまで肩入れしてやるほどの関係でもないんでね。
俺は、金さえもらえりゃそれでいい。希望の箱そのものがどうなろうと、知ったこっちゃない。
あんただって、同じような考えで仕事屋やってんだろ、月傷」
「……」
肯定も否定もせず、ただ不機嫌な表情で、ディオは彼から目を反らした。
黙ってしまった彼に代わり、クリティスが尋問を続ける。
「ちなみに、その常連とやらは？」

「希望の箱の幹部…いや、リーダーの一人だ。名前はルエイド。そいつにはクォードって兄がいて、兄弟二人で希望の箱をまとめてる」

「クォードとルエイドか…」

得た情報を、片端から手帳に書き留めていくクリティス。

その横から、今まで沈黙を保っていたエリスが唐突に口を開いた。

「…希望の箱の目的は何？」

天空王子を攫い、口封じのために朝廷の人間を多数殺害し、城の書庫から秘伝の封印の本を盗み出した希望の箱。

彼らの狙いはなんなのか、未だにエドルたちにはわからない。

しかしそれは、目の前の雇われ殺し屋にとっても同じことだったようだ。

「さあね。一体あいつらが何を求めてるかなんて、オレには知らされてもいないし興味もなかったが…」

彼は、少しばかり考え込む素振りを見せて、

「ただ、希望の箱は、神を嫌う連中が集まった団体だってのは、お前らだってとっくに知ってんだろ？

連中の思想から考えれば、神とか、神に準じる存在とやらをぶっ倒して神の支配から逃れて、人間の尊厳を取り戻すってのが目的…だとも言えなくはない」

「神を倒す？」

エドルは、その答えを鼻で笑い飛ばすと、

「そもそも、ホントにいるのかいないのかすら、はっきりしないものなのに？

天空王は、神の名の元に天空界を統治してるって言ってるけど、それだって、ホントかどうだかわかりゃしねーだろ。自分の権威を主張するために神の名前を持ち出すのは、魔界や亜魔界の国の王だってしてることだし」

腕を組み、彼はうんざりした表情をあらわにする。

「矛盾してるんだよ。神がそんなに嫌いなら、倒す倒さないじゃな

くて、もともといないものとして考えればいいだけの話じゃねーか」
「…神が本当にいるのかいないのかという話はさておき」
こめかみを人差し指で押さえて、クリティスがエドルの話を遮った。
「確かに、神を倒すということが目的であるというのは、一理ある。だが、ここまで奴らが具体的な動きを見せているという事は、そんな曖昧な目的ではなく、もっと具体的な目的を持っているということだ。
もしかすると、その具体的な目的が、「神を倒す」という最大の目的につながっている可能性もある」
「目的なんて、どうでもいいだろ」
面倒くさそうにため息をついたディオは、伸びをしながら言い捨てた。
「支部に行って、リーダーとやらを捕まえて天空王に突き出せば、仕事完了だ。
別に、他のごちゃごちゃしたことに首を突っ込むつもりはねえよ」
「言われてみれば、そうねー」
リシェルアがそれに応じて、クロウに目を向ける。
「でも、まずはこの人を警察に連れて行かないといけないわねー」
「こんなにも身になる為になる話をしてやったっていうのに、対する報いはそれなのか?!
知ってはいたが、とんでもない鬼畜だな、お前ら!」
「先にも言った気がするが、もう一度言う」
手帳とモノクルを懐にしまいこみ、クリティスは深刻な目で言った。
「お前の賞金は、貴重な資金源なのだ。
なにせ私たちには、今、金がない」
「アスレイナと王都を行き来した交通費が、一番痛かったのよねー」
天空王からは、前金など貰っていない。また、ディオの負傷による治療代という、思わぬ出費もあった。
事が解決すれば大金が手に入るのだが、さしあたっての資金は乏しかった。

「こういう仕事をしている先輩として、お前らガキ共に忠告しておくが…」

憐れみに満ちた表情で、クロウは言う。

「節約は、どんな状況でも必須だぞ」

「…良く覚えとく」

普段であれば、一蹴するか皮肉で返す敵の言葉を、今回ばかりは、黙って受け止めるしかなかったのだった。

2

「殺し屋が捕まったという報告があったが」
「……」
責めるような視線を向けてくる兄を睨み返し、ルエイドは黙って、書庫の入口に立っていた。
以前とは違い、書庫内はきれいに整頓されている。それどころか、山のようにあった本が、ほとんど棚から消えていた。
「俺のせいだと言いたそうな顔だな…」
「当然だ。一番悪いのは、勝手に信者たちを連れだして復讐を目論んだ殺し屋だが、雇ったお前にも責任はある」
クォードは、書庫に残った数少ない資料を、仕分けでもするように手にとって眺め、
「…が、捕まったからと言って、お前も奴には大した情報は与えていないのだろう？」
「そりゃそうだ。顔なじみだからと言っても、部外者には変わりないしな。
俺らが何を目指しているかなんてのは、一切知らない」
「せいぜい奴が知っていて、仕事屋たちの役に立ちそうな情報といえば、ここの場所ぐらいか…」
それからクォードは、無表情のまま、わざとらしく首を捻り、
「ちょうど、そろそろ支部を解体しようかと思っていたところだ。奇遇とはこのことだな」
「こんなにきれいに片づけを済ませておいて、今更「奇遇」も何もねえだろ」
支部にいた信者たちは、すでに荷物と共に移動を始めている。今、ここにいるのはルエイドとクォードと、数人の護衛のみだ。
もう、この場所でなすべきこともないだろう。

「例え、邪魔者がここを嗅ぎつけてやってきたとしても、既にもぬけの殻ってわけだ。
さすがクォード、仕事が早いな」
「ただのもぬけの殻ではない。墓穴の役目まで果たすおまけ機能付きだ」
「ほんと、手際のいい…。
あんたを敵に回すと、ろくなことはなさそうだな…」
何のことはない、ただの独り言のつもりだった。
「……」
まるで、こちらの心を見透かしたような目。
自分でも意識せずに呟いた台詞だというのに、なぜ彼は気づいたのだろうか。
「ここには、お前と私以外は誰もいない。護衛も部屋から遠ざけてある。
言いたい事があるなら、聞くが？」
「…クォード、お前こそ、俺に何か隠し事してねえか？」
ごまかしたところで、兄が信じるわけはない。ルエイドは開き直り、逆に質問をし返した。
クォードの眉が、不愉快そうに歪む。
「…何？」
「客と称して、得体の知れない人間をここに招いてたみたいじゃねえか」
挑みかかるような口調で詰め寄ると、相手は予想外の反応を示した。
「ああ、なんだそんなことか」
「そんなことだと？！」
まさか一蹴されるとは思わず、勢い任せに身を乗り出すルエイド。
しかし兄は、弟の様子に少しも動じることはなく、
「お前は何か勘違いしているようだが、私は別に、部外の客がいることをわざわざ隠していたわけではない。
ただ、あのお客人が、騒がしいのは苦手だと言うので、人払いを綿

密に行っていただけだ」
彼の表情は涼やかで、嘘をついているようには見えなかった。
が、冗談を真顔で言うような兄の事だ。表面だけ見て安心して、まんまとはぐらかされるわけにはいかない。
「…信じられないという顔だな」
クォードは、さも面倒くさそうに額に手をやった。
「わかった。
明後日、『本部』にその客人が来る事になっている。その時に、お前も招待しよう」
「！」
「ただ一つ、兄として忠告しておこうか」
伏せられていた眼が、薄く開く。
そこにあったのは、氷のように冷たい青い瞳。
「客人の前で、無礼を働かないように」

死んでも、知らないぞ。

3

美しい海も、緑の島も、この悲しみと憎しみとが混ざり合った目には何の感動も映らない。
なぜ、こんなに悲しいのか、憎々しいのか。
エドルには、いつまで経ってもわからなかった。

殺し屋を見事捕らえ、希望の箱の拠点を聞き出した一行。
だが、それから数日経過した今、彼らはまだアスレイナに留まっていた。
もちろん、皆、居たくて滞在しているわけではない。観光目的でエドルたちと同行しているエリスでさえも、さほど見所のない平凡な街並みに飽きており、ここのところは昼寝をするか菓子を食べるかぐらいしかしていなかった。
「…どーやら、こうして粘ってても埒が明かなそうだな…」
諦めの表情で、自分の財布を覗くエドル。そこには、スズメの涙ほどの金しか残っていない。
この事態は、全くの予想外だった。
捕らえて、警察に突き出したはずのクロウが、二日もたたないうちに脱獄してしまったのである。
賞金の支払いには三日ほどかかるからと警察から言われ、仕方なく待ちぼうけを食らわされていた矢先に、この始末だ。当の本人が逃げ出してしまっては金を支払う事はできないと宣言され、頭にきたエドルたちが抗議しに行っても、頑なに拒否されてしまう。

「これ以上足止めされて、天空王の報酬もパーになったら意味ねーしな…」
「そうだな…資金は心もとないが、エベリスの支部を叩いて、リーダーたちを天空王に突き出せば金がもらえるのだから、それまで節約するしかない」
クリティスも、ため息交じりに賛同した。リシェルアとディオも、しぶしぶといった様子で頷く。
「あまり時間はかけられないわねー…長期戦になればなるほど、交通費も滞在費用もかかっちゃうし…」
「今更後悔しても遅いが、必要経費は城の方から出してもらうように聞いてみるべきだったかもな」
「ほんとだよ。おかげで、あたしまで無駄な時間を過ごしちゃった」
エリスが、町の菓子屋で買ってきたらしいチョコレートの欠片を口に放り込みながら、文句を垂れた。メンバーの中で一番何もしていない者が、一番不満顔をするのはいかがなものかと、エドルは心の中で毒づく。
「お前はいいじゃねえか。今も金には困ってないみてえだしな」
「貸してほしいなら貸してあげるよ。もちろん、利子つきでね」
「お前から借りるのだけは、死んでも嫌だね」
いらだちの募っているディオが、エリスに絡み始めた。この憂鬱な状態でじっとしていては、彼が何をしだすかわかったものではない。
「行き先は決まってんだし、今すぐにでも出発しようぜ。日が沈む前に、エベリスに着きたいしさ」
「そうねー。徒歩で行くしかないけれど…」
「うえー…馬車がいいようー」
再び文句を言いだすエリスには、無視を決め込む。
五人は、重い腰を上げると、軽い財布を抱えたままアスレイナを後にした。

アスレイナの隣町エベリスへ行くには、丘を一つ越えなければならない。
丘と言っても、その高さはやや低めの山といったところだ。中腹まで登ると、早くもエリスがへこたれ始めた。
「やーだーもおおおー！疲れたー！」
「うるせー！黙んねーと、森の中に放り込んで置いてくからな！」
「これだったら、あんたたちと一緒に行かないで、あたしだけ馬車使えばよかった！
ああん、少し考えれば思いついたものをっ」
黙れと言うのに、全く黙る気のないエリス。このところの不運続きで、顔には出さなかったもののさすがに荒れていたエドルは、本気で置いていこうかと考え始めていた。
「…ディオ？」
ふと、リシェルアが、じっと丘の向こう側の空を睨んでいるディオに気付いた。呼ばれた当人は、空から視線をそらすことなく、返事だけを彼女に返す。
「…鳥の群れが…」
「鳥？」
「ほれ、あそこ、見えるだろ？」
ディオが指で差した曇り気味の空には、確かに、不自然な黒い影が点々と見えた。
しかし、それを見たリシェルアは、不審そうに首を捻る。
「鳥にしては、ちょっと大きすぎないかしら…」
「そう、俺もそう思ってたとこなんだが…違うとしたら、何だ？」
「――ドラゴン…」
いつの間にか、モノクルを装着していたクリティスが、半ば唖然と呟いた。
「…に、見えるのだが…」
皆、そろって顔を見合わせた。

ドラゴンというのは、個の縄張り意識が強い生き物で、群れを成す事はめったにない。幼体でさえも、親と共にいる目撃例が極めて少ない。そんなドラゴンが、群れて空を飛んでいるというのは、明らかにおかしいのである。

「希望の箱の奴らか？」

「だろうな。でも、あんな大人数でどこに行くつもりだ？」

ドラゴンたちが向かったのは、北西の方角。ちょうど、エドルたちが目指しているエベリスから、離れるようにして飛んでいく。

「どうしましょう？追うのー？」

「いや、やめておいたほうがいい」

リシェルアの提案に、クリティスが即座に首を振った。

「あれだけの数の信者がいなくなったということは、支部とやらは今、手薄だという事になる。この機会を逃すわけにはいかない」

「なるほど。奴らが戻ってくる前に着けば、待ち伏せできるってことじゃねーか」

今まで後手に回っていたこちらが、今度は相手の裏をかけるということだ。

「え。ってことは、エベリスに着いてから休む時間は…」

あからさまに顔をしかめたエリスを、エドルは興奮気味に、しかし冷淡に突っぱねた。

「もちろん、無しってことだよ！」

4

「やーだー！疲れたー！もう休むー！」
道中も散々騒ぎ立てていたエリスだったが、エベリスに着くと、その駄々はさらにヒートアップした。
「こんなへとへとの状態で敵の陣地に直行とか、マジありえない！あんたたち化け物なの？」
「化け…」
「宿屋行こーよー！おやつの時間だしー！」
彼女の横暴は、留まるところを知らないらしい。エドルのパーカーの袖を、ちぎり取りかねない勢いで引っ張ってくる。
「…どうする、これ」
完全にお手上げ状態のエドルは、思わずクリティスに助けを求めた。
彼女は、片手で額を押さえて答える。
「攫われた前例があるから、なるべく一人にはさせたくないのだが…こうも強情では、いたしかたない」
「これなら、本当に森の中に捨ててくれれば良かったぜ」
「ひどっ！この人でなし！」
余計な一言を添えるディオ。エリスと彼の睨み合いがすぐさま始まった。
が、リシェルアに止められると、エリスはふてくされた顔で、
「じゃあ、あたしは宿屋で部屋取ってるからね。攫われてほしくなかったら、さっさと戻ってきてね」
何やら、脅しとも寂しがっているともつかない台詞を捨てて、通りの向こうに消えていく。
残された四人は、呆れと安堵のため息を同時についた。
「後は、支部の入口を探すだけねー」
「町でちょっと聞き込めば、そんな如何にも怪しげな場所なんてす

ぐ割り出せるだろ」
互いに目配せをすると、エドルたちも、人であふれる町の中へと飛び込んだ。

予想した通り、希望の箱の支部の場所はすぐに割り出す事ができた。
町人は、初めはやや渋っていたものの、いざ語り出すと場所のみならず、希望の箱に対する愚痴や悪口まで吐く始末。どうやら市民の間でも、希望の箱は評判が悪いらしい。
「そりゃ、廃街とはいえ、ドラゴンで頻繁に町に出入りされちゃ、迷惑どころの話じゃねーよな」
地下支部の入口は、とうの昔に人気の途絶えた、エベリスはずれの廃街の中だった。黒いローブを纏った怪しい連中が、よくここを出入りしているという話だ。
「…これか」
ディオが、窓も扉も外れて蔦が絡み放題になっている廃屋のひとつに入り、床に目を落とす。
天井もなく直射日光にさらされた土の床に、明らかに周囲から浮いている、新しい鉄の蓋がついていた。
「見張りの姿もなし、か…」
廃屋の周りを一周してきたクリティスが、怪訝な表情を浮かべる。
「…罠という可能性もあるな…」
敵の喉元まで来ているというのに、こうまで順調だと、確かに疑わざるを得ない。
「でも、さっき、希望の箱の人たちが大勢ドラゴンに乗って、どこかに行っちゃったっていうのは、確かなのよね？」
「ああ。町の奴らも言ってたしな」
「やはり、一旦様子を見るべきか…しかし、もしこれがチャンスだとすれば、みすみすそれを逃してしまうことにもなる…」

鉄の蓋を見つめ、黙り込んでしまう四人。時間は、刻一刻と過ぎて行く。

「このまま戻ったら、エリスには大笑いされるだろうな」

エドルが、小さな声で呟いた。

「「「……」」」

途端に張り詰める、場の空気。見合わせた顔は、皆、一様に同じ表情だった。

「まあ、例え罠だとしても、奴らに関する手掛かりぐらいはあるかもしれない」

クリティスのその言葉は、答えを選択したのと同じことだった。

思い思いに頷く四人。

「開けるぞ」

皆の意思を視認すると、エドルは、床の鉄の蓋に手を掛け、一気に引き上げた。

5

一つしかない地下支部への入口に、見張りはどこにも見当たらない。地下へと下る階段を降りても、それは同様だった。

「これは…まさか」

人が暮らすにしては、あまりにも少なすぎる家具。見放されたかのようにまばらに落ちている、生活用品。一人として残っていない住人たち。

「今回も、奴らが一枚上手だったという事か」

クリティスの見解を聞きながら、エドルは人の生活していた面影だけが残った部屋を見回し、がっくりと肩を落とした。

「くっそー…もう少し早く来てれば間に合ってたかもしれないってことかよ…」

こちらの動きを読まれていたのか、それとも、クロウの情報提供そのものが、初めから罠だったのか。どちらにしろ、今となってはどうしようもなかった。

「でも、何か手掛かりが残ってるかもしれないわー。手分けして探してみましょうよ」

リシェルアの一声で、エドルたちは、数少ない家具や生活用品を一つ一つ、確認し始めた。

会議か集会に使っていたのか、壊れかけの長椅子だけが隅にまとめて置いてある広い部屋。薬品のにおいが残る、医務室と思われる白い床と壁の部屋。信者たちが寝泊りしていたのであろう、いくつもの小部屋。

それから…

「ここは…書庫か？」

ほぼ空の棚が林立した、埃っぽい部屋を入口から見渡す。それらの棚にわずかに残っていたものは、すべて、ローグの屋敷にあったよ

うな神学関係の本や、既に解決済みの事件に関しての紙の束だった。
「まさかこんなところに、大事な書類とか忘れてくわけねーよな…」
そう言って、エドルが苦笑いを浮かべた、その矢先に。
「……当たりかもしれない」
部屋のちょうど、真ん中あたりの床に落ちていた紙きれを拾い上げ、クリティスが、唖然と呟いた。
思わず、自分の耳を疑うエドル。
「はい？」
「これを見てみろ」
半信半疑で、差し出された紙を受け取り眺めてみる。
それは、天空界の地図だった。ところどころに、赤いインクで印が付いている。
天空城に一ヵ所。城から少し離れたローグの森の中に一ヵ所。城を挟んだ森の反対側、アスレイナの町に一ヵ所。それから、今いるエベリスに一ヵ所。そして、隣りの大陸の、海沿いの山の中に一ヵ所。すべて、希望の箱に関わる一連の事件で訪れた場所だった。
「でも、これといって目新しい事は何も…」
「ここにもう一つ、印があるだろう」
「へ？」
横から指で指し示され、エドルはもう一度地図に目を落とした。
クリティスの指がなぞった場所は、エヴァスタ旧天空教会跡の印からすぐ西にある、海の中だった。エベリスから見ると北西の方角――つまり、希望の箱の者たちが先ほど向かっていた方角にあたる。
「…罠じゃねーの？この地図」
みすみす足取りを知られてしまうようなものを、置き去りにしておくとは、ご都合主義も大概と言ったところだ。
「大体、こんな海のど真ん中に何があるんだよ。見たところ、地図上には何もないぜ」
クリティスに突き返すと、彼女は懐からいつもの手帳を取り出し、ページの間に挟んでいた自分の地図を取りだした。

それと、落ちていた怪しげな地図とを見比べ、しばらく後に首を傾げる。
「…確かに、ここには何も書いていないな…」
「お宝積んだ沈没船でも見つけたのかね。
…あとは、これから何かする予定だとか、な」
いずれにしろ、他に何の手がかりもないこの場所であれこれと悩んでいても、不毛というものだ。
まだ何か考えているクリティスをその場に残し、部屋から出ようとノブに手をかけた時だった。
突然その扉が、向こう側に勝手に開いたのだ。
「うお?!」
たたらを踏んで前のめりになると、そこにいたリシェルアと衝突した。「きゃあ」と、驚いた様子のない棒読みの悲鳴と共に彼女が後ろに倒れたので、慌ててその腕を掴んで引き上げてやる。
「あーびびった。
何だよ、せめてノックぐらい…」
「ごめんなさいー。でも、そんなこと言っている場合じゃないのよー」
相変わらず危機感皆無な口調だが、何やら焦っているようだった。
一体何がだよ、と尋ねようとする前に、エドル自身も異変に気づく。
「…希望の箱は、人攫いのほかに、放火の趣味まで持ち合わせてやがるのか?」
「他人の趣味にとやかく言う気はないのだが、相当悪趣味だな」
クリティスも、支部に入って来た時と比べて幾分高くなっている気温に、顔をしかめた。
「ディオはどうした?」
「火の出所を確認してるわー。でも、それが、よくわからないのー」
そう言って、リシェルアは手招きをすると廊下の先へと駆けだした。

6

リシェルアに先導されて支部の奥へと進んでいくにつれ、熱気と煙が濃くなっていく。
「ディオ！」
辿りついた大部屋の中は、すでに火の手が回っていた。部屋の入口でディオと合流すると、彼は口早にこう尋ねてきた。
「爆音も震動も起こさずに、人の手を使わないで火を起こす方法って、あるか？」
「ある」
即答するクリティス。
「魔法石に、火の魔法を込めておく。それに軽く衝撃を与えると、爆発することなしに、炎が魔法石から飛び出す」
「ははーん、なるほど。よっくわかった」
ディオは、おもむろに部屋の扉の内側に目を向けた。
扉の上部に、小さな滑車が不自然についている。扉を動かすと、滑車に巻きつけられたロープが回るようになっている。ロープは壁を伝って、今は炎に包まれている部屋の奥へと繋がっていた。
「どこにその魔法石が設置されてたのかは知らんが、ここに入った時によく調べとくんだったぜ」
「込められた魔力が尽きない限り、魔法石は炎を撒き散らし続ける。消すよりも、逃げた方が賢明だな」
言われるまでもなく、真っ先にエドルは駆け出していた。
嫌な予感がする。
支部のこんなに奥で放火をしたところで、出口から逃げられるのがオチのはず。ここで自分たちを始末しようというのなら、もっと出口に近いところで火を掛け、逃げ道を塞いでしまった方が良いに決まっているのだ。

そうしないということは。
「――――！！」
地上へ続く階段の終わり、鉄の蓋の前で、エドルは絶句した。
「どうした？」
予想は、的中した。
鉄の蓋が、開かない。いや、開けられないのである。
鉄の蓋の前面に、透明な壁のようなものがある。壁の中央に、どこかで見た事のある紋章が浮かび上がって光っていた。
銀色の六紡星。神に仕える天空王家の証。
「…結界…」
リシェルアが、どこか諦めの混じった声色で呟いた。
「まさか、ここであの「封印の本」を活用とは…予想だにしなかった」
クリティスも、静かな声で言う。
「もし、これが通常の結界であれば壊す事も出来たが、紋章付き結界では話にならない。
これを解けるのは、解法を知っている術者本人か、天空王家の者だけだろう」
一般的に魔法使いの間で使われている通常の結界に、このように紋章が描かれていることはなく、解除方法も実に単純なものである。
結界に込められた以上の魔力をぶつけてやれば、相殺して消すことができるのだ。
しかし、紋章付きの結界は特別で、そんな力任せの解法は通用しない。その結界独自の複雑な術式と、解法が存在する。
この結界に付いた天空王家の紋章は、天空王族の間でしか伝えられていない秘伝の術という証であり、解除方法を知っているのも、天空王族と本を盗んだ希望の箱だけ、ということだ。
「あの滑車の仕掛けと同じように、時間差で発動するようになっていたのだろうな」
敵を追い詰めたという油断や、休む間もなくここに直行した疲れが、

四人にはあったのかもしれない。今回は、あまりにも見落としが多すぎた。
火の粉のはぜる音が、背後から着々と近づいてくる。煙も、徐々に階段下から上ってきていた。
「くそっ、二回も同じ手に引っ掛かってやられるなんて、冗談じゃねーぞ！」
エドルは、鉄の蓋と自分とを隔てる光の壁を、両拳で力いっぱい叩いた。
「誰かいねーのか？！」
ここは、町人ですら避けて通る廃街。エドル自身、誰かが応えてくれるとは思ってもいない。ただ、心の底から湧いてきた絶望感を、叫ぶことで払拭しようとしていただけだった。
しかし。

「…エドル？」

普段、文句しか言わないあの甲高い声が、これほど有難く聞こえる時があっただろうか。
「エリス？！」
鉄の蓋と結界越しに、エドルの叫びに応えたのは、先ほど自分たちと別れて宿へ行ったはずの、エリス。
思わぬ事に驚いて、四人は顔を見合わせた。
「仕事終わった？っていうか、なんで出て来ないの？」
「出れねーんだよ！」
なぜ彼女がここにいるのかとか、彼女にこの結界を破る方法を見つけられるのかとか、そういう疑問はすべて吹き飛んでいた。
「この蓋に、結界がかけられてるんだ！しかも、火が――」
「結界？」
「そう、天空王家の紋章が入ってて、力任せじゃ解けねーんだよ！」
現状を報告すればするほど、絶望感が増す。天空王家の者でもない

エリスに、この結界を解けるわけがない。天空城に向かわせて救援を頼もうにも、その間に炎にやられてしまう。

言うだけ言ってエドルが黙った後、彼女は、尋ね返してきた。

「…天空王家の紋章で、間違いないんだよね？」

「…？あ、ああ、銀の六紡星だけど…」

「あっそう」

その声色は冷静そのもので、さして慌てている様子もない。

エドルがそれを不審に思っていると、エリスは「少し下がってて」とだけこちらに命じてきた。

一体、何が何やらわからない。

命じられた通りにエドルが一歩下がった途端、なんと、天空王家の銀の六紡星を宿したその結界は、まるで脆いガラスのように、音もなく砕け散ったのである。

「え……」

「ほら、これで出て来れるでしょ」

さっきまで、この場に満ちていた絶望感が、まるっきり嘘のようだった。四人はしばらく、露わになった鉄の蓋を眺めたまま、立ち尽くしてしまう。

「お、おい」

「あ…うん」

しばらく後、ディオに呼びかけられ、エドルはやっと我に返った。

蓋に手を掛けてみても、先ほどまでの温かい結界の感触はもちろんない。ただ、鉄の冷たさが、熱気でほてった手の平から心地よく伝わってきた。

蓋をあけると、刺し貫くような日の光が、真っ先に目に飛び込んできた。

「お仕事ごくろうさま」

言葉ではねぎらっているようだが、その声は、どこか揶揄を帯びている。

支部の中から顔を出したエドルたちを見下ろし、太陽を背負った少女は、満面の笑みで出迎えた。

「全員、アップルパイ一切れずつ、あたしに奢ってね？」

7

なんだ、あれ。

兄に招かれ、「客」との会合を終えた後。
『本部』に設えられた自室に戻ると、今更ながらに身体が震えだした。

あれは、間違いなく人間ではない。魔獣でもない。
この世の存在かどうかすらも不明だ。

「あんな…あんなとんでもないのと手を組んでたのか」
あの、膨大な知恵と知識を備えた正体不明の存在は、これから起きる出来事、自分たちがなすべき事を、まるで何もかも知っているかのように語っていった。
ルエイドが、恐怖とも畏怖ともつかない感情に縛られて口を動かすことさえできないその横で、クォードは平然と、客との対話を楽しんでいた。恍惚とした表情さえ浮かべながら。
その様相は、既に会合とは呼べなかった。その優雅さはティーパーティーのようでもあり、得体の知れない存在の予言に耳を傾ける形式は、教会や寺院におけるミサや講話のようでもあった。
あの客は…そう、まるで、神そのもののようだった。
「クォード、あいつ、どうしちまったんだ」
敬虔な創造主教の信者だった兄弟二人は、不慮の事故で親を失い、

それからは神を呪って生きて来た。希望の箱に入り、どうにかして、神と名のつくものに一矢報いてやろうと誓っていた。
しかし、あの兄の様子は…まるっきり本末転倒ではないか。
「神を倒すために、神の力を借りる？
んな馬鹿げた話があるか！」
崇拝される存在は、すべて敵だと言っていたのは、どこの誰だ。
「絶対、俺は認めねえ…」
そう言って、拳を握りしめた時だった。

「…独り言は、もうちょっと静かにやってくれねえかなー…」

聞き覚えのあるけだるい声が、背を向けていた扉の方からかかる。
驚いて振り返ると、なんと、警察に捕まっているはずの殺し屋クロウが、呑気に佇んでいるではないか。
「…？！な…なんでお前、ここにいるんだ？」
「あんたが知らないってことは、やっぱ兄貴の方の差し金か…」
意味のわからない事を呟き、クロウは説明を始める。
ようは、天空王の手先に捕まったが、ルエイドの知らぬ間にクォードが手を回していたようで、送り出された信者たちに助けられて、二日で脱獄できたということだった。
「あ、ただ、見ての通り怪我が治りきってないんで、重労働はよしてくれよ」
クロウは、身体のあちこちに巻かれた包帯を指差し、苦笑いを浮かべる。
対してルエイドは、そんな彼を茫然と見つめながら、ある考えを巡らせていた。
「クロウ」
「あ？」
これは、もしかするとチャンスなのかもしれない。
「邪魔者共の始末は、一旦中止だ。

その代わり、頼まれてほしい事が出来た」
「…重労働は無理だって言ったばっかなんだけど」
「重労働と決まったわけじゃない。
少なくとも、連中の始末よりははるかに楽だ」

そう言って、殺し屋の耳に打ち明けた策は、我ながらとんでもないものだった。

8

あの、「客」との会合以来、しきりに弟が抗議をしてくるようになった。

「まったく、我々の悲願の達成も、目前だというのに…」

一日の間に何度となく彼の話に時間を取られ、思うように研究がはかどらない。ただでさえ、現代の知恵を超越した代物を対象にしているというのに。

弟の言い分は、決まって同じことだった。

あの得体の知れない客と、すぐに縁を切れ、という。

「戯言を…。

「あれ」の提供する情報なしには、曖昧な神という存在に対抗する現実的な方法を見つけ出すことさえ、不可能だった。そして、これからも不可欠だ」

神を、亡きものにするために。人類が、神の支配なしに生きていくために。

しばらくして、部屋にノックの音が響き渡った。

「…誰だ?」

またルエイドが邪魔をしに来たのかと思ったが、杞憂であったらしい。

「オレだ」

「…何だ殺し屋か」

いつもは袖の下に隠しているらしい爪が、今日はよく見える。彼の瞳も妙にぎらついているが、はてさて、どこからの仕事帰りだろうかと思いかけ…

……いや。

「…どうやら、ただ与太話をしに来た、というわけではないようだな」

「お兄様は、本当に勘の鋭いことで」
クロウは、にまりと微笑んだ。
「本来は、オレをムショから助けてくれた礼をするべきなんだろうが…悪く思わねえでくれよ。これも仕事なんだ」
こちらの話を聞く耳は、最初からないようである。いまや、完全に仕事の顔になった殺し屋を、クォードは呆れ顔で見た。
「ただし、あんたが助かる方法が一つある。
あんたが囲ってる、「客」とやらがいるそうじゃないか。そいつの命を引き換えにするなら、あんたの命は取らなくてもいいっていう条件を、依頼人が出していた」
やはり、弟からの刺客だったようだ。
しかしクォードは、驚く事もおびえる事もしなかった。ただ、殺し屋の向こうの、扉の方へ注意を向けただけ。
「…私も命が惜しい。それに、お前に抵抗できるほどの力もない」
「そうこなくちゃな。オレも、恩ある人間に仇で返したくはない」
交渉は、無事に成立したようだ。
ただし、あくまでも、殺し屋とクォードとの間での話だが。
「ということになった。
――ぜひ、彼の遊び相手になってやってくれないか？ルヴォラ」
ここで、初めて殺し屋は、困惑の表情を浮かべた。ゆっくりと身体ごと後ろを向くと、そのまま、息を詰まらせる。

「あら、わたし、全然お話を聞いてなかったの。
もう一度、聞かせていただける？」

あまりにも場違いな、ドレス姿の少女が、いつの間にか扉を背にして立っていた。
彼女は、まるで可動式の人形のように、機械的な動きで首を傾げた。
「こいつ、は…」
「こんにちは。はじめまして、ではなかったはずね」

「おや、もう知り合いだったのか」
少女は、金色の髪をふわふわ揺らして頷いた。
「地下のお家で、ごあいさつしたの。ところで、今日のお茶会にゲストはいないと聞いていたのだけれど…」
「彼は、招かれざる客という奴だ。君と戯れたいと言って、きかなくてね」
形ばかりのため息をつくクォード。
殺し屋が、唾を飲み込んだ。
「わたしのために、舞踏会のご用意をしてくれたの？素敵」
可愛らしく微笑む、ルヴォラという名の少女。小さなあかい唇が、嬉しそうに言葉を紡ぐ。
「それじゃあ、さっそく、踊りましょう？」
背中に負われた黒い霞が、威圧感と共に膨らんだ。

「ま…待ってくれ」
喉の奥からやっとのことで捻り出した声は、自分でも無様に思えるほど掠れていた。
「邪魔者たちの始末よりはるかに楽だ」とは、見当違いにもほどがある。
「無茶振りはやめてくれよ…お嬢さんのお相手が、俺に務まるわけがない。
何せ、ダンスなんてのは観覧専門で、酒ばっか呑んでるもんでね」
しかし、一度声を出してしまえば、後は立て板に水を流すがごとく。
なんとかこの場を凌ごうと、できるだけ口を早く回す。
「俺は、確かに弟さんからこの仕事を引き受けたが、前金を貰って

るわけじゃない。
つまりこのまま帰って、「できませんでした」っつって断る事もできる」
「最初から、そうしていれば良いものを」
後ろから、クォードが呟いた。冷淡な、軽蔑を含んだ声音だった。
「戻ったら、ルエイドに伝えておけ。
お前の話など、今後一切聞く耳持たないとな」
意地でも顔には出さないが、内心ほっとため息をついた。こちらを返り討ちにする気はないらしい。
しかし、黙ってその場を後にしようとすると、
「…待て」
いきなり低い声で呼び止められ、心臓が跳ね上がった。
「な、なんだよ」
「…そうだな、気が変わった」
座りきった眼で、クォードはこちらを見つめている。その視線と言葉とに、思わず逃げ腰になってしまう。
「交渉だ」
「交渉？」
「そうだ。
お前はルエイドに、いくら払うと言われた？」
ここで察しがつかないほど、クロウは馬鹿な人間ではない。
実際、今まで仕事をしてきた中で、殺害対象に同じ話を持ちかけられたことが何度もある。その交渉は、すべて拒否してきたが。
「…七十万」
「そうか。ならば、八十万出そう」
しかし、今は、まるっきり逆の立場だ。おまけに、相手から持ちかけられた相談とくれば、引き受けない手はない。

「ここまで邪魔立てするのであれば、もう用はない。
弟を、始末しろ」

迷うことなく、クロウは大きく頷いた。

9

自分のために、兄を殺したかったのか。兄のために、兄を助けたかったのか。
果たして、自分の本音はどちらだったのだろう。朦朧とする意識の中では、それすらもわからなかった。

（こんな時まで、思いつくのはあいつの事か）

今の兄は、目的の為と言いながら目的を蔑ろにしてしまっている。
そのことを気づかせるつもりだった。
それが、このような形で返ってくるとは。

（あんなに頭の良い奴だと思ってたのに、意外と馬鹿だったのな）
（いや、馬鹿なのは俺もか）
（結局、実の兄一人すら、どうすることもできないなんてな）

（俺は、どうすればよかったんだ）
（あいつと同じように、あの存在を信じればよかったのか。あいつを信じればよかったのか）
（俺は、今まであいつのことを信じていたのか？）
（信じるって、なんだ）
（信じるってどうやればよかったんだっけか）
（思い出せない）
（あいつは？）
（あいつは知ってるんだろうか）

（なあクォード、知ってるか――）

10

「お仕事完了…っと」

血まみれの爪を布で拭いながら、クロウは鼻歌交じりにクォードの元へと戻っていた。

手に入れた金でどこの酒を呑みに行こうかと、先ほどからそればかり考えている。留置所を出てからは、しばらくまともに呑めていなかったのだ。

「天空界の町はあらかた回ったしな…そろそろ、亜魔界の方にでも足をのばすか…噂のフォーラスの酒も、一口ぐらい…」

「なんだとっ…！」

いきなり、困惑に満ちた怒鳴り声が廊下に響いた。

楽しい想像を邪魔されていささかむっとしながら、声の聞こえた目的の部屋の扉に耳を立てる。

「もう一度言わなければいけないのかな？」

次に聞こえたのは、あの奇妙な少女の声。

「こんな一大事を前にして、兄弟喧嘩なんてツマラナイことしているニンゲンに、もう用はないの」

兄弟間の殺し合いの次は、客との仲違いのようである。

つくづくクォードの旦那も大変だと、クロウは他人事のように嘲笑った。

「なぜっ、これからだというときに…！

まだ「これ」についても、ほとんどわかっていない！あんたの智慧と知識が必要なのだ！」

「少なくとも、これまでで、あなたの手には十分余るほどの智慧を

与えたはず。これ以上教える事は、あなたにとってもわたしにとっても不必要よ」

少女は、軽く笑い声を立てると、

「それに、所詮今のあなたは、片翼のハト。片方しかない翼で、ちゃあんと飛ぶ事ができて？」

「ここまで来れば、弟の力などいらん！

「これ」さえあればっ…そう、「これ」さえあれば、どうとでもなるのだ！そのためにも知識を、力を！」

さすがのクロウも、クォードのその語気に思わず身を引いてしまった。

片腕でもあった弟を自ら討ち、頼みにしていた「客」にまで見放された彼は、これからどうなるのだろう。

自分は、金さえもらえれば、どんな仕事でも引き受けるつもりだが。

「つまり、あのあんちゃんにとって俺は、ある意味唯一の、力ある協力者ってことになるわけだ。いや、ちょっと照れるなあ」

「そこの扉の後ろで、殺し屋さんがお待ちのようよ。結果をお聞きになったらどう？」

まずい、と思う間もなく、勢いよく扉が開けられた。

クォードが、戸惑いと怒りとがないまぜになったような、鋭い目つきで立っている。

「…聞いていたのか」

「い…いや、たったちょうど今、来たところでーす…」

両手を顔の前でぱたぱたと振ると、爪から、拭いきれていなかった血がさっと飛び散った。

それを見たクォードが、硬直する。

一瞬疑問に思ったが、クロウは予定通り、早口に報告を行った。

「言われたとおり、弟さん…ルエイドは、この爪で始末しといたぜ。死体は、外に埋めておいた。

約束の八十万、忘れないでくれよ」

「……」

返事は、返ってこない。
「おーい」
「……！
あ、ああ、…わかっている」
彼の顔を窺うようにして眺めていたが、こうしていても埒が明かない。こんな気まずい空気の中にいつまでもいたくはないので、とっとと退散させてもらうことにした。
「クロウ、」
「へあ？」
立ち去ろうとしたところで、クォードが呼びかけてきた。
無視したりいきなり話しかけてきたり、面倒くさい奴だなと心内で愚痴りながら振り返る。クォードはじっと、真正面の何もない空間を見つめながら尋ねた。
「死体は、外に埋めたと言ったか」
「ああ、そうだけど」
「…そうか」
再び背を向けて歩き出すと、後ろで、あの少女の声が囁いた。先ほど聞いた言葉を、同じように繰り返していた。

「片方しかない翼で、ちゃあんと飛ぶ事が、できて？」

目指す場所

エリスが、宿を取らずに地下支部までやってきた理由。それは、いたって情けない話だった。
取るつもりだった宿屋が、満室で取れなかったのだという。他の宿を取るにしても、待ち合わせの都合もあるため、エドルたちと一度合流して、指示を仰ごうと考えたようだ。いつも勝手な行動を取るエリスにしては、珍しく謙虚な判断である。
エドルたちがしたように、町の人から支部の場所を聞き出すと、彼女は廃街を訪れた。入り口を見つけて、入ろうかどうか渋っていたところ、エドルの叫び声が聞こえたのだという。
あの、天空王家の紋章が付いた結界を、彼女がどうやって破ったのか。
皆疑問に思えど、誰もそれを聞こうとは、しなかった。

「で、このしるしは結局何なんだ」
エベリスの町を歩きながら、ディオは、クリティスが地下支部で拾ってきた地図を指差して疑問を投げかけた。
五人の中に、答えられる者はいない。
「そもそも、あたしたちも、それほど天空界の地理に詳しくないものねー」
「そこらへんの町人にでも聞いてみるか？」
エドルの提案で、五人は、通りを歩いている町人を何人かつかまえ、聞いてみることにした。
だが、地図のしるしを見せても、人々はきょとんとした顔で首を振るばかり。聞けば、この町の住人の大半は、この大陸から離れた事すらほとんどないと言う。

「なんだそりゃ」
「まあ、当たり前と言えば当たり前だよね」
四人が奢ってやったアップルパイを、手掴みで歩き食べしながら、エリスが言う。
「あたしたちみたいに、ひっきりなしに旅に出てる人間の方が、町の人にとっては珍しいんだよ。みんな毎日、町で暮らす事に大忙しなの」
「ってことは、ここやアスレイナで聞きこんでも、あんまり意味ないってわけか…」
聞き込んで効果のある場所と言えば、観光客や仕事屋たちの集まる、王都ヴィシェナ。
「交通費は痛いが、また王都に戻るしかなさそうだな」
「何回目だよ…」
エベリスから徒歩で王都へ向かうと、一日以上かかってしまう。しぶしぶ皆は、少ない金を集めて馬車を使う事に決めた。
「救いと言えば、ここで宿を取る必要がなくなったことだな。運が良かったとしか言いようがない」
「それも、交通費で消えるけど…」
肩を落とし、同時にため息をつくエドルたち。「やった！今度は馬車だ！」という、エリスの能天気な声だけが、暮れかけた空に響き渡った。

「くそ、くそ、くそ、くそっ…！！」
机の上にばらまかれた大量の紙、本。その、あまりにも膨大な情報を、先ほどからクォードは、まるで自棄になったように片端から読み返している。

あの後、結局「客」とは縁を切られたようである。何もかもに見放された彼には、もはや、今まで手に入れた情報しか、頼れるものがないのだろう。

「諦めてたまるか…私は、もっと高みに、天に手を伸ばさなければならないのだ！

この計画すら消えてしまっては、私が今までしてきたことはっ…」

時に呟くように、時に怒鳴るように、彼は独り言を口にしながら、資料をあさり続けている。その様は、信者たちでも近づくのを憚るほど不気味だった。

（オレが来てる事すら気付かないとはねえ）

いつもなら、ここで「誰にも相手にされない」と悲しむところだが、今回ばかりはそんな冗談も言っていられないようだ。

そろそろ、潮時なのかもしれない。

リーダーの一人は消え、情報源も去り、そして、例の邪魔者たちは未だ健在だ。

（まあ、いきなり頼みの人間に縁を切られたその矢先に、ガキ共の始末失敗の報だもんなあ。錯乱してても仕方ねえか。

…それにしてもほんと、奴らのしぶとさにはびっくりだぜ）

「クロウ」

あれこれと考えを巡らせていると、突然、視界の先にいた希望の箱のリーダーが自分を呼んだ。気付かれていないものだと思い込んでいたクロウは、思わずびくりと身体を震わせる。

「なんだい」

「そろそろ、手を引こうなどと考えていないだろうな」

「……」

おまけに、こちらの思考を読まれている。心底不愉快になって、クロウは返事をせずにいた。

「ふん…そう思うのも無理はないか。今の希望の箱は、勢力はあれど、このように不安定な状態だ。

だがな」

自嘲とも嘲笑とも取れない、不可思議な笑みをクォードは零した。
「お前がこの島から出る事は、我々が目的を果たすか、天空王の手勢にやられるかするまでは、不可能だ」
「…なんだと？」
怒りのこもったクロウの声を聞いて、なおも彼は笑い続ける。
「奴らは、まもなくこの場所を嗅ぎつけてくる。確実にな。それに対抗する準備を、私もしているのだ。今、この島から、誰一人として脱走者を出すわけにはいかないだろう？」
脱走者を出さない方法とやらの具体的な話を、クォードがすることはなかった。が、頭の切れる彼の事だ。そのような方法など、いくらでも思いつくに決まっている。
現に、ここにやってきた時点で、ドラゴンを召喚する魔法陣を描いた用紙は、すべて彼に没収されてしまった。こんな状況では、素直に「くれ」と頼んだところで、もらえるはずもない。
「お前には引き続き、天空王の犬どもの相手をしてもらう。大人しく、修行にでも励んでいるんだな」
とんでもないことに、自分は巻き込まれていたのかもしれない。
クロウは今更ながら、取り返しのつかない事になってしまったことを悔やむしかなかった。

2

王都ヴィシェナに着いた時、エドルたちが真っ先に行った事は、聞き込みではなかった。
このまま文無しで行動し続けていては、いずれ首が回らなくなるという危機の元、クリティスから一つの提案が出されたのである。
それは、思い切って、天空王から報酬金を前払いしてもらうということだった。
これに異議を唱える者は、もちろん一人としていなかった。エリスを除いて、皆いっぱいいっぱいの状態だったからである。
人間、金がすべてではないにしろ、金があれば心もそれなりに安定するのは確かだ。
「な…なるほど。それは大変だったな…」
さしもの天空王も、こんな理由で帰ってこられては、反応に困ってしまったのだろう。あらかたの事情を四人から聞くと、おざなりな返事を返してきた。
もともと金に余裕のあるエリスは、どうせつまらないからと言って、飽きもせずに買い物に出てしまった。今頃は、喫茶店でケーキと紅茶でも嗜んでいることだろう。
「わかった。先に、一人三十万ずつ支払おう。今後の足しにしてくれ」
「ありがとうございます…」
情けなさを押し殺し、召使いが携えて来た現金を、一人ずつ受け取っていく。
その間に、王は違う話題を振ってきた。
「ところで、これから王都内へ聞き込みを始めるとのことだが…一体何を知りたいのだ？
わかる範囲であれば、教えてやれるが」

これを聞いて、エドルたちははっと顔を上げた。
どうやら四人は、よほど心にゆとりがなかったらしい。天空界の地理を、それを治める天空王が知らないわけはないのだ。最初から、彼に聞けば良かったのである。
「王、これを」
クリティスが、例の地図を天空王に差し出した。
「これは？」
「希望の箱の支部で、拾った地図です。今まで奴らが事件を起こしてきた場所に、しるしが打ってあるのですが」
エドルが、説明を始める。
「エヴァスタ教会跡の西の海にも、しるしがあるんです。おそらく、希望の箱はそこにいると思うんですが、一体そこに何があるのか、よくわからなくて」
その時だった。
「――！！」
エドルの言った地図上のしるしに目を留めた天空王が、あからさまに顔色を変えたのだ。
「…王？」
「なぜ、この場所が？！」
彼は、いつもの飄々とした態度を忘れて、勢いのままに立ちあがった。それから地図を握りつぶすと、頭を抱え込む。
「どうして聖域の場所を、一宗教団体ごときが知っているのだ！」
エドルたちは、思い思いに顔を見合わせ首を傾げた。
「聖域…？」
「神の管理する、神聖な地の事だ。正しく言えば、神の名の下に、天空王家が代理で管理している場所だがな」
「聖地みたいなもんか。エヴァスタみたいな…」
「馬鹿を言うな！」
納得した素振りで頷くディオに対し、天空王は声を荒げて否定した。
「聖地など、我々人間が好き勝手に定めた地にすぎん。そこに本当

に神の力が宿っているかどうかなど、問題ではないのだ。ようは、人間にとっての癒しの場となれば良いだけのことなのだからな。

しかし、聖域は違う。神の一族、いやその頂点に立つ創造神が、直接天空王家に対して、封じるようにと命を下された、由緒正しい地なのだ！重要度は、聖地などとは比較にもならん！」

王は、激昂のあまり歯ぎしりまで鳴らし始め、

「それだけではない！

あそこには、おびただしい数の古代兵器が眠っている。そんなものを武器に取られては、我々はひとたまりもないぞ！」

「古代兵器？！」

太古の超越した技術力をもって作られた、様々な兵器。技術の失われた今となっては、もう同じものを作り出す事さえできないが、頻繁に大戦が勃発していた古代では、大いにその力を発揮していた――子供の頃には必ず聞く、お伽噺の一つだ。夢物語だと言われていても、その存在への憧れを忘れられず、考古学者として発掘にいそしむ者も少なからずいる。

しかし、そんな兵器が、実際に今に存在していたとは。

「本当かどうかはともかく、そこまで重要な場所が、地図にも載っていないのはなんでだ？」

エドルが純粋に疑問を口にすると、天空王は、これまた激しい口調で「当然だ！」と叫んだ。

「そんな場所を公に知られては、今回のように、不埒な輩がひっきりなしに乗り込むに決まっているからだ！我々天空王族ですら、そう簡単に足を踏み入れられる場所ではない。

公表はおろか、天空王家秘伝の封印術を施して人の眼に見えないようにしてあるし、近海にも、近づけないよう結界を張ってある」

秘伝の封印術。

エドルたちは、再び顔を見合わせた。先ほどとは違った、確信の表情だった。

「天空王、つかぬ事を伺うが」

クリティスが、散々怒鳴り散らしてすっきりした顔つきの天空王に、尋ねる。

「天空王子…アスロイ王子は、その秘伝の封印術とやらを知っておられるのか？」

「一応、秘伝の術があるということは教えてある。…が、あの通り、まだ幼いからな。封印術の使用法そのものは、教えていない」

そう、つまり。

「なにもかも、その「聖域」に侵入するためだったっていうことか」

天空王子を攫い、聖域にほど近いエヴァスタ旧天空教会跡に監禁したのも、天空王子に聖域の封印を解かせるためだったのだろう。だが、天空王子はその解法を知らなかった。

「おそらくその方法が、奴らにとっては、一番手っ取り早い方法だったのだろうな。しかし、天空王家の跡継ぎを攫うとなれば、それなりに危険が伴うため、失敗も念頭に置かなければならない」

「だから、それを見越して、秘伝の封印の本を盗んだのねー」

「そういうことだったか」

天空王は、玉座にもたれかかると、大きく息をついた。

「フレーデへの視察の最中、大勢の護衛をかいくぐってどのように息子が攫われたのかということは、未だに謎のままだ。息子も、一切記憶がないと言っている。

それに加えて、秘伝のはずの封印術の存在や、聖域を知っている…どこでそのような情報を得たのかはわからんが、ここまでそら恐ろしい団体だったとは」

「確かに、連中がどこからそんな情報を手に入れているかは気になるが…」

ディオが、腕組みをして、にやりと笑みを浮かべた。

「希望の箱の目的ははっきりしたわけだ。

その聖域にある、古代兵器を乗っ取りたかったってわけだろ。乗っ取ってどうするかはともかくとして」

「でも、聖域ってのが、いまいちよくわかんねーんだよな」
エドルは、納得いかない表情で眉を寄せた。
「海の中なんだろ、聖域って。そこに古代兵器があるってことは、まさか、海の上に古代兵器が浮かんでるとか？」
「ああ、いや、そういうわけではない」
苦笑して、天空王が首を振る。
「地図には、先ほど言ったような理由があって載せていない。だが、実際はそこに、「ルシア島」という名の島があるのだ」
「ルシア島…」
「そう。そして、」

「そこに、「ルシアニアの塔」という、それはそれは高い塔が建っているのだ」

3

ルシアニアの塔。

その名前を聞いたとき、エドルは、それが今までに何度も見ていた、夢の中の塔の名前だという事を、ごく自然に理解していた。どこかで聞いたわけでもないのに、どこかでそれを聞いていたような、不思議な感覚だった。

そうでなくても、海の真ん中にある島にそびえ立つ高い塔など、そうそうある光景ではない。天空王の話と一致していることからも、間違いないだろう。

「これが、不思議な塔でな」

天空王は、まるで、おもちゃを見ている子供のような、楽しそうな表情を浮かべた。

「その塔が、一体何のために作られて、そこで何が起こり、そしてどうしてあのように壊れてしまっているのか、すべてにおいてまったくわかっていないのだ」

「壊れている？」

エドルがいぶかしむと、天空王は頷く。

「そう。下部は残ってしっかりと立っているのだが、上部が、そう、ちょうど雲に隠れるか隠れないか…といったあたりから、なくなってしまっているのだ」

なるほど、とエドルも頷き返す。

夢の中では、上部が雲に隠れて見えなかったが、そのあたりが壊れていたのだろう。

「先祖の代から、あの塔に関する文献や資料を集めようとしていたみたいだが、なんとこれが、まったくといっていいほど無い。魔界や亜魔界にもだ。

緑の時代に神から管理を任されたという記録が、かろうじて残って

いたので、その頃にはすでに存在していたようだが…。なにせ、聖域には我々でさえめったに入る事ができないのだから、調査隊を組む事も不可能でな。我々も、あの塔…いや、ルシア島自体に関して知っている事と言えば、古代兵器が存在するという事だけだ。それも先祖が、神から教えていただいた話で、実際に入って確認したわけではないそうだ」

「じゃあ、本当に古代兵器があるかどうかは、わからないということですか？」

「そういうことだ」

謎が多すぎてロマンがあるだろう？と、おどけて笑う天空王。すっかり、いつもの彼に戻ってしまったようだ。

すべてが謎に包まれた、古代の塔。つまり…

「まさかエドルったら、宝物があるかも…とか考えてるの？」

リシェルアから、諌めるように放たれた言葉に、思わずぎくりと肩が竦んだ。

「そ、んなこと考えてねーしっ！せ、聖域からお宝くすねるとか、できるわけねーじゃん！」

「ああ、そういや忘れてたけど、お前の本業盗人だったな」

「ちげーよっ！」

しかし、今回の事件に巻き込まれすぎて、本職がおろそかになっているのは否めない。そろそろ事件を解決して、トレジャーハンターに戻りたいところだ。

「聖域に人を送り込むことは、したくなかったのだが…そうも言っていられない。

神も、理解してくださることだろう」

天空王は、厳かな表情を見せると、四人に言った。

「お前たちに、聖域に入る許可をやろう。あの海域を通る船はどこにもないから、私の権限で、特別に船を出す。

聖域を無断で踏み荒らす無礼者共を、ここに連行してきてくれ」

四人は、揃って頷いた。

今日の夢は、いつもと少し違っていた。
青い海、緑の島、そびえる塔。それらは何一つ変わらない。
しかし、空だけが違っていた。
いつもは青く澄み渡っていた空が、灰色の雲に覆われている。今にも降り出しそうだったが、時間が進むにつれて、本当に雨粒が海に注ぎ始めた。
雨は次第に、風と共に波を立てる。遠雷もどこかから響いてくる。
それは獣の唸り声にも、何かの怒りの声にも聞こえた。
やがて、激しい雨によって視界が霞を帯び、いつしか何も見えなくなり…

「エドル！」

怒声で、目が覚めた。
「こんな日に寝坊するとか、どんだけなの?！
人には散々寝坊するなって言っておいて、本人がしてちゃ意味ないじゃん！」
瞼を開いて最初に見えたのは、鬼のような、という表現がぴったり当てはまる形相をした、エリスだった。
二、三度瞬きをして目を擦り、もう一度彼女の顔を見る。そこでやっと、自分が寝坊をしたのだという現実に気がついた。
「早く起きて！みんな、準備できてるんだから！」
「うお、おう…」

甲高い声に捲し立てられたかと思うと、こちらに言い訳もする間も与えず、彼女は部屋を出て行ってしまった。
静かになると同時に、寝ぼけたままの耳に、夢の中でも聞いた覚えのある音が聞こえてくる。まだ夢を見ているのかと疑ったが、そうでもないらしい。

そう。
今日の天気は、雨だった。

2

「荒れるかな…」

天空王の用意してくれた船に乗り、一行は海原へと旅立った。

雨は止む気配がない。波も、風に煽られてやや高い。

「いやあ、このぐらいなら大丈夫でしょう。

心配なのは、天気よりも、敵の出方でしょうな」

こちらの呟きに応えたのは、朝廷お抱えの船長だった。舵を取る船員の傍で、彼は苦笑する。

「一応、大砲やらなんやら、基本的な装備はこの船にもついてますがね。こちらはこの通り、たった一隻しかない。

向こうが大船団を組んできたとなると、若干分が悪いですねえ。ははは」

「若干どころじゃないですよ船長！最高にまずいじゃないですかそれ！」

お気楽そうに笑う船長に、隣りの船員が突っ込んだ。

「まあ、やばくなったら引き返しましょう。それから城に応援を頼む方法も、アリです」

「こちらは、戦争をしたいわけではないからな…私たちが島に上陸できればそれでいいのだが…」

向こうが、こちらの行動に気づいていなければ良いのだが、そうもいかないだろう。おそらく、こちらの動きをある程度予測しているはずである。

それにこちらは、敵の勢力をまったく把握できていない。一体どう出てくるのか、見当もつかないというのは苦しかった。

「さて、そろそろ見えてくるかな…」

雨雲と海だけの景色に飽きて来た頃、船員に代わり舵を取っていた

船長が呟いた。
「島の近海には、結界を施してあるって言ってなかったか？」
ディオが、不思議そうに眉をひそめる。確かに、今までにそんなものは見えなかった。
「結界を解いたあと、そのまま放置しているのだろう。島や近海を覆うほどの大型結界を、おいそれとかけ直す事はできないだろうからな」
「じゃあ、入るぶんには問題ないってわけか。
…あの大船団を、どうにかできれば」
彼のその呟きに、船の中の空気が張り詰めた。
雨で霞がかった水平線に、黒い点がいくつも見える。最悪の予想が、当たってしまったようだ。
「おー、壮観壮観。
どこか、違う町の船団だったりしないかなー…」
「たぶん、それはないわねー。
結界の内部だった場所だもの。天空王の許可なしに無断でこの海域に入るような船は、希望の箱と海賊船だわー」
海賊船だったとしても、それはそれで面倒だ。いずれにしろ、あの船団との衝突は免れない。
近づけば近づくほど、点の数は増えていった。アスレイナでクロウと戦ったときは、素人の信者を動員していたほどだったというのに、あれだけの勢力をどこから得てきたというのだろう。
あまりの多さに、やはり一度引き返すべきではと、相談を始めた時だった。
「助けてあげてもいいよ」
ぽつりと、エリスの声が上がった。
振り返ると、船室にいたはずの彼女がいつの間にか、腕組みをして仁王立ちになっている。
「お前、何を…」
「王都に、ちょっと値段のするチョコレート屋があるの。そこのチ

ョコ、二十粒ずつで手を打ってあげる」
「チョコレート屋さん…もしかして、あのお店のことかしら」
リシェルアの笑みが、心なしかぎこちない。
「そんなに高いのか、その店」
「一粒千コイル」
「はあ？」
すっとんきょうな声を上げ、エリスを見るディオ。
「お前馬鹿か！二十粒で二万だと？！」
「この事件解決したら、天空王から大金もらえるんでしょ？その後でいいよ」
大金と言っても、収入が不安定なエドルたちにとっては、今後の有事のために出来る限り取っておきたいものなのだ。
だが、ここで解決しなければ、報酬そのものがもらえない。しかし、いったん引き返すという手がある以上、無駄な金は…
「わかった。頼む」
エドルが悩んでいる間に、あっさりと返答した者がいた。クリティスである。
現実主義の彼女にしては、珍しい選択だった。見ると、彼女は、挑むような目をエリスに向けている。
「今から戻っても、連中に追い打ちをかけられないとも限らない。あの大船団を、どう対処するのか見せてもらおうか。
何なら、他の三人の分を、私が肩代わりしてやってもいい」
「そこまで？！」
「別にいいよ。
そんなに期待されると、緊張して力入っちゃうなー」
エドルが唖然としている間に、交渉は成立してしまった。
エリスは、エドルの横を素通りしていくと、船長に言う。
「あたしがいいって言うまで、このまま進んで」
「わ、わかりました」
一層激しくなってきた雨が、甲板を打ち付ける。エリスは、じっと

前を見据えたまま動かない。
黒い点の集合体だった船団が、みるみるその全容をあらわにし始めた。マストの先で、開いた箱を模した旗が揺れている。どの船も、こちらを待ち構えているかのように、微動だにしていない。
船団の背にうっすらと、島と、そこに突き立つ塔が見えた。
誰かが、唾を飲み込んだ。
「もうすぐ、敵の砲撃の射程圏内に入りますが…」
「そう。もう少し、右の方に船を移動させながら進んでくれる？」
これ以上、進むと言うのか。
思わず、身体が強張った。
船長は、黙ったまま指示通りに動いた。前方に障害のないところ、つまり、直進しても敵の船とぶつかることなく島までたどり着けそうな位置で、
「止めて」
エリスは、声高らかに言った。
「…まさか、このまま突っ切るなんて言わねえよな？」
「それも面白そうだけどねえ」
冗談めかして言うディオに、エリスは笑って首を振る。
それから、低く、はっきりとした声で続けた。
「そろそろあたしたちも、反撃を始めないと、ね」
まるで、天を掴もうとでもいうかのように、エリスの腕が高く上がった。

3

海が、二つに分かれた。
いや、実際に分かれたわけではない。しかしエドルの目には、分かれているようにしか見えなかった。そして、おそらくこの船に乗っている皆の目にも、そう見えているに違いない。
「なんだ、これ」
放心したように呟く。目の前で、ありえるはずのないことが起こっているのだから、仕方がない。
エリスが手を掲げたその瞬間、冷たい風が横殴りに吹いたかと思うと、海が、止まってしまったかのように凍りついたのだ。氷が敵の船の下部を丸ごと飲み込んでいるため、船団はまったく身動きが取れない。甲板の信者たちは皆、呆然と立ち竦んでいる。
自分たちの乗っている船の前方の海だけが、液体のまま、たゆたっていた。左右に氷の壁を設えた、青く冷たい海の道が、真っ直ぐに、ルシア島まで続いている。
「ほら。あとは、この道を進めばいいだけだよ。
大砲も矢も、氷の壁のおかげでこっちには通らないから、何も心配はないでしょ」
とんでもない奇跡を起こした少女は、満面に笑顔を浮かべて振りかえった。「チョコレート八十粒、よろしく」などと付け足しながら。

「なんだ…あれは」
それ以外に、言葉が出て来なかった。望遠鏡の先で起こった出来事に、ただ、驚くことしかできないのだ。

突然、時を止めたように動かなくなった海。二つに割れた海の間を、悠々と渡る一隻の船。
人間の所業とは思えなかった。島の近海を、一瞬にして氷の大地に変えてしまうなど。
「一体、何がどうなっているんだ。奴らには、神か何かがついているのか」
自分で、自分の言った事が信じられなかった。あれほど神の存在を否定してきたというのに、なぜこうも自然に、神という名が、口から出てしまったのだろう。
「っ…クロウ！」
「あー？何だい」
部屋の隅で、不機嫌そうにソファに横たわっていたクロウは、首だけをクォードの方へ向ける。
「仕事屋たちが海を突破した。お前も、奴らを出迎える準備をしておけ」
「…あの船団を突破されたのか」
見る間にその表情が険しくなった。彼も、ただ事ではないと悟ったらしい。
クロウはそのまま立ち上がると、黙って部屋を出て行った。その袖から、得物の爪が鋭く光っている。
一晩で王宮の人間を片づけた手練だ。本気を出しさえすれば、たった五人を始末する事などたやすいだろう。
「…あとは…」
クォードは、部屋の奥をじっと睨んだ。
「あれを、動かせさえすればいい」

4

海の道を真っ直ぐに抜けると、島は目前だった。目の覚めるような緑に覆われたルシア島から天に向かってのびる塔が、威圧感を放っている。

雨はいつの間にか小降りになり、雲間からところどころ、青空が覗いていた。

「何だ。ちゃんと道はあるんだな」

船から降りると、エドルは、森の中に続いている道路を眺めた。

人の侵入が禁じられているところだというので、人外魔境のような荒れ果てた光景を想像していたのだが、そういうわけではないようだ。

先に立って進みながら、ディオが応えた。

「そりゃ、希望の箱の連中もここを本拠地にしようってんだから、整備ぐらいするだろ。

それより心配なのは、伏兵だな…」

「魔獣の存在も気になる。この閉鎖された土地に、どんな種類のものがいるのか見当もつかない」

「あらまあ、それじゃ、新種の魔獣に会えるかもしれないわー」

楽しみねえ、と、リシェルアは呑気に微笑んだ。

この小さなルシア島では、魔獣の食糧（いわゆる人間の肉や、他の動物の肉）が慢性的に不足しているということは、想像に難くない。つまり、そんな激しい生存競争の中で、魔獣たちは、外の土地などよりもはるかに強く、凶暴に進化しているかもしれないという事だ。

急に、ディオが歩みを止めた。クリティスも続いて止まり、エドルとリシェルアも頷き合う。

周囲に立ち込める、獣の匂い。

「これはちょっと、やっかいかもな…」

木々をぬって現れたのは、想像した通り、見た事もない魔獣ばかり。
ダガーを抜き、エドルは舌打ちをした。
塔に入ってからが問題だというのに、思わぬところで手こずりそうだ。
「おい、エリス」
ディオがくるりと振り返って、一番後ろで隠れる準備にいそしんでいたエリスに問う。
「お前、さっき海を凍らせたみたいに、こいつらのこと凍らせられねえの？」
その意見は、もっともだった。エドルも期待を込めた目で、彼女を見る。
すると、
「それじゃあ、その代わりにあんたたちは何をしてくれるの？」
まるで、さも当然という表情で、そう尋ね返してきたのだ。
「…お前、いちいち対価をもらわないと、魔法を使わない気なのか」
エドルがむっとして呟くと、
「だって、あたしは天空王の依頼を引き受けたわけじゃないから、あんたたちの手伝いをしてるってことになるでしょ？だから、あんたたちからはそれなりのものはもらわないと。
ちなみに、エヴァスタでドラゴンを倒すために使った魔法は、エドルを気絶させちゃったのも考慮して、おまけしてあげる」
あまり大したことはしてないような…と言いかけて、やめておいた。
ドラゴンを一撃で倒す、天空王家の紋章の入った結界を破る、海を凍らせる…よくよく考えてみれば、どれも、大したことではないとは決していえない所業だ。ただ強引についてきて、文句を言っているだけかと思っていたが。
「ほらほら、塔まではまだまだかかるよ。みんな頑張ってー」
…が、やはりうざったいことには変わりない。
「この野郎…」
エリスのやる気のない声援を受けながら、四人は、襲いかかってき

た見知らぬ魔獣と、悪戦苦闘するのだった。

やっとのことでルシアニアの塔に辿り着いたときには、皆ぐったり疲れ切っていた。これからが本番だというのに、先が思いやられてしまう。

「こんな場所を拠点にしようって考えが、ありえねー」

身体中についた埃や草、あるいは魔獣の血を払ったり拭ったりしながら、エドルは愚痴を漏らした。

手の平に付着した真っ赤な返り血を、舌で舐め取りディオが言う。

「あとは、この塔にいる連中を捻れば、全部終わりだな。古代兵器ってのも気になるっちゃ気になるが」

先ほどまで、魔獣相手に繰り広げていた戦いの余韻が冷めやらないのか、彼の眼は座っている。その様子は、飢えに飢えた獣そのもので、エドルは身震いし、顔を逸らした。

「古代兵器か…」

五人は、一斉に塔を見上げる。

「…白銀の時代」

クリティスが、何とはなしに語り始めた。

「頻繁に大戦があって、「史上最悪の時代」とも呼ばれた時代だが…その頃に作られた兵器の中には、魔界の大陸を真っ二つにしたものも存在したそうだ」

何で、今になってそんなことを言い出すのかと、クリティスを問い詰めてやりたい気分になった。

「それが、この塔に設置されているとは限らないがな」

「可能性はあるってことか」

「そーゆーこと言うなってディオ…」

彼らの空気の読めなさは、半端ではない。

すっかりテンションの下がり切ったエドルを、リシェルアが慰めに

来た。
「そんな大変な兵器を彼らがものにしているとしたら、希望の箱は、それを盾にしてあたしたちを脅すことだってできたわよー？しないっていうことは、大丈夫ってことよー。たぶん」
「だといいけどな…」
エドルは、もう一度目の前のルシアニアの塔を見上げた。暮れかけの強い陽光に照らし出された塔の雰囲気は、荘厳でもあり、不気味でもある。
今は希望の箱の動向よりも、この塔そのものが、得体の知れない、恐怖の対象だった。

5

ルシアニアの塔の中で最初にエドルたちを待ち構えていたものは、古代兵器でも刺客でもなかった。

塔を内部から支える巨大な一本の柱。それを取り巻く螺旋階段。そして、壁一面に彫りこまれた古代文字。天井にまでびっしりと敷き詰められた、謎めいたその文字列に、圧倒される。

リシェルアが、ため息を漏らした。

「なんて書いてあるのかしら…」

「いや、これは…全部、人の名前だな。

しかし、なぜこれほどたくさんの人の名前が…」

彼女の問いに答えたのは、クリティス。

エドル、いや、そこにいた皆が驚愕の声を上げた。

「お前、古代文字読めるのか?!」

「エルフ族は、古代文字の廃れが他と比べて若干遅い。だが、現代語の普及も遅いから、他種族との交流には不自由なところもあって、賞金稼ぎを始めたばかりの頃は苦労した覚えがある」

魔界のエフィット大陸に住む長寿の種族、エルフ族。彼らは自然との共生を昔から続けている反面、他の種族との共生を拒む傾向がある。現代でも、エフィット大陸に出入りする他種族の者はわずかだ。その為、外界文化とは切り離された、独自の文化を持っている。古代文字の存続も、その一つなのだろう。

「だが、エルフ族の中でも古代文字はほとんど読まれなくなっているし、私も趣味の域で勉強していただけだ。ほんの少ししか読めないが…」

「おい、ここにもなんか書いてある」

ディオが、中央の柱の下の方を指差した。

見ると、階段の陰に隠れるように、古代文字が刻まれている。壁に

書ききれなかった人の名前ではないかとのエドルの推測に、クリティスは首を振った。
「こっちは、文章だ。こんなところに書くことと言えば、着工の年月日だとか定礎の…」
だが、彼女は言葉を途中で打ち切ると、もう一度じっくりとその文字列を眺めた。そして、眉をひそめて言い直す。
「…違う。これは、…よくわからない」
「わ、わからないって」
予想外の回答に拍子抜けしていると、クリティスは食い入るように文字を見つめ、そしてそれを訳し始めた。
「…天空王…二世…は、愚かな……だった…？
駄目だ。私の解読力では…」
諦めてうなだれてしまったクリティス。エドルたちも、落胆して肩を落としたその時。
「『天空王イリアム二世は、愚かな王であった。賢王イリアム一世の実子でありながら、彼はいつも政務を大臣たちに投げだして、城下で遊び呆けていた。しかしながら、それでも彼は情に篤く、人望があったため、人と神とのどちらからも好かれていた。』…」
エリスが、クリティスの後を継いで訳し始めたのである。
「…エリス、お前もこれ、読めるのか」
尋ねると、彼女は小さく頷いた。その表情は真剣そのもので、とても、適当に嘘をついているとは思えない。
「あっ」
突然、リシェルアがぱっと明るい声を出した。
「そのお話、知ってるわー」
「マジで？」
「ええ。「イリアム二世の物語」っていう、お伽噺よー」
微笑みを浮かべた彼女は、子供たちに読み聞かせでもするかのような、柔らかな透き通る声で語り始めた。

イリアム二世は、自分の仕事を放り出していつも城下で遊んでいる、愚王であった。しかし、とても優しく、誰とでもわけ隔てなく接するので、市民の人気は非常に高かった。

ある時、天空界で戦争が起こった。それはとても大きな戦争で、たくさんの人を巻き込んだ。神はこの悲惨な戦争に怒り悲しみ、愚かな人間を罰しようと考えた。

しかしイリアム二世は、人を愛し神を愛する王だったので、それをさせまいと、必死になって神を説得した。戦争を続ける人間たちにも、何度も何度も呼びかけた。

「…それで？」

「あら、これで終わりよー？」

「えええええええっ？！」

オチがあるだろうと踏んでいたエドルは、まさかの打ち切りに不満の声を上げた。

「えらく中途半端すぎねーか？」

「でも、本当にこれで終わりなのよー。少なくとも、あたしが昔、絵本で読んだ限りでは…」

「ページ抜けてたんじゃねーの、その本」

「しかし」

噺を聞いている間、じっと柱の古代文字列を読んでいたクリティスとエリスも、リシェルアの擁護に入る。

「こちらの古代文字の文章の長さからしても、それほど長い物語には思えないのだが」

「っていうか、リシェルアの話してた部分までしか書いてないよ、ほんとに」

「うわっ、すげー続き気になる！

結局、史実ではどうなってんの？その、イリアム二世って」

天空王族の歴史など、エドルにとっては知った事ではない。が、話を中途半端な状態で投げ出されるというのも切ない。
一番その手の話に詳しそうなクリティスに尋ねると、しかし、意外な答えが返ってきた。
「知らない」
「えーっ」
「というか、」
リシェルアが彼女の言葉を継ぎ足した。
「実はこのお話、天空王族の歴史と矛盾してるのよー。
言ったでしょう？「お伽噺」だって」
お伽噺。子供たちに話し聞かせるために作られた、架空の物語。
「イリアム二世などという天空王は、歴史上のどこにも存在しない。イリアム王という王は確かにいたが、彼には、子供がいなかったそうだ。
彼の後を継いだのが、今の天空王、ゼルヴァス・ルア・ヴィシェナ王の先祖だ」
そうだったのか…と、エドルは残念がって項垂れた。
しかし、ないものはないというのだから仕方がない。これ以上詮索しても今は無意味だと判断した五人は、しばらく部屋を調べ回った後、上へと進むことにした。

6

次の階からは、また違った光景がエドルたちの目を引いた。
鉄や銅などの金属と魔法石の塊でできた、得体の知れない巨大な置物が、各階に一つ、あるいは二つ三つずつ、設置されているのだ。
これらは、何かを模した像なのだろうか。十階まで登って来た時、エドルが疑問を口にすると、
「…これが、古代兵器なのかもしれねえな」
像に触れながら、ディオが感心のため息を漏らした。
「銃の作りと似てる。たぶん、このでかい魔法石に魔力を溜めこんで、それをどっかから放つんだろう。
もっとも、内部はもっと複雑な構造をしてると思う。扱いも、銃なんかよりはるかに難しいだろうな」
「お、おい、そんな軽々しく触って大丈夫なのか？」
説明などよりも、いつ、まかり間違って起動させてしまうかが心配だった。
だがディオは、馬鹿にしたような目でこちらを見ると、
「これに装着してある魔法石は、古すぎて、もう魔力を溜めこむ力はねえよ。
なんだお前、怖いのか」
「怖いに決まってんじゃねーか！下手すりゃ大陸が吹き飛びかねないようなモンが、あちこちに置いてあるんだぞ！」
自分もトレジャーハンターの端くれなので、古代兵器の多くの謎に、確かに魅力は感じる。だが、身の程はきっちりわきまえる主義なのだ。下手に好奇心を出して危険を冒しては、いくら命があっても足りない事は、長年の経験で知っている。
「ちょっと触ったぐらいじゃ、うんともすんとも言わねえって」
こちらが怖がっていると見るや、サディスティックな笑顔で腕を引

っ張って、兵器に触らせようとしてくるディオ。
「やーめーろっ！」
「うふふ、微笑ましいわー」
「遊んでる場合ではないだろう。貴様らには、ここが敵地だという自覚が…」
クリティスの咎める声が、終わるか終らないかという時だった。
視界の右端、古代兵器の陰で、何かが鋭く煌めく。と同時に、リシェルアがほとんど悲鳴に近い声で叫んだ。
「危ないっ！」
ぞっと背筋が冷たくなった。考える間もなく、エドルは本能に任せて、身体を後ろへと引いた。
鼻先を、一筋の光がかすめていく。右手から左手へと飛んでいったそれを、クリティスがレイピアで叩き落とした。
ナイフだった。カランと軽い音を立てて落ちるそれを見つめ、エドルは、身体から血の気が引いていくのを感じていた。
「不意討ちかよ…珍しく、殺し屋らしい手段じゃねえか」
前方のディオが、嫌そうに顔をしかめる。
エドルも素早く体勢を整えると、皆が向いている方向、ナイフが飛んできた場所に目を向けた。
「そろそろ――
戯れんのは止めにしようや、お子様共」
「クロウ…」
今回の彼に、前のようなおどけた雰囲気はなかった。得物の爪も殺気立った表情も、何もかもが本性むき出しだ。
「いい加減、とっととくたばってくれ。安心して酒が呑めねえんだよ」
「いい機会だから、今後の健康も考えて、禁酒してみたらどうだ？長生きしてえだろ、おっさん」
ディオがホルダーから、銃を抜いた。銃口の先で、クロウは笑う。
「老後のためでもあるんだ。じいさんになってからも、この稼業を

続けるつもりはないんでね。
道中資金不足になってるような、勢いだけのガキには、まだわかんねえか」
「お前、おれらのことガキガキって言うけどさー」
張り詰めた空気を解きほぐすような明るい声色で、エドルは不平を言った。
「それ、クリティスに失礼だぜ？あいつ、あれでも軽く五十は越えて――」
ひゅっ、と。後ろから飛んできた何かが、頬をかすめて地面に突き立った。
頬に残った、小さな痛み。血が出ているようだ。それを確認してから、おそるおそる地面に目を向けると、今度は見た事のあるレイピアだった。
「悪かった、エドル。うっかりすっぽ抜けてしまってな」
続いて、先ほど通ってきた氷の道などとは比較にならないほど、冷え切った声が飛んでくる。
まだ戦い始めてもいないのに、剣が手からすっぽ抜ける事などありえるのだろうか。そんな疑問を投げかける暇もなく、おもむろに剣を拾って立ち去るクリティスの背中を、視線で追うしかなかった。
「ほんと、お気楽な連中だなあ」
くくっと、クロウが喉で笑い声を立てる。
「オレを前にして、そんな茶番できるのなんか、お前らぐらいだったよ」
地面を蹴る、軽い音がした。はっとして彼を振り返るが、そこには、古代兵器の影が落ちているだけ。
傍にいたディオも、切羽詰まった表情で辺りを見回している。どうやら、うかうかしている間に見失ってしまったようだ。
途端に、悪寒が、背筋を駆けあがった。さっきよりも、それははるかに強かった。
「それじゃあそろそろ、「熟練者」の本気ってのを見せてやろうじ

ゃねえか」
背後から声がした。気配を察知すると同時に、身を引きながら振り返る。
だが、遅かった。
「死にな」
血が、目の前で鮮やかに飛び散った。
「エドル！」
リシェルアに呼ばれて初めて、その血は自分のものだと気がつく。
同時に激痛が襲ってきて、エドルはそのまま後ろに倒れた。
地面にぶつかる直前に、リシェルアに抱き止められる。意識はかろうじて繋ぎとめたが、傷口が焼けるように痛んで、うまく呼吸ができない。
「さすが、疾風の名は伊達じゃねえな。
首を狙ったつもりだったんだが、避けられちまった」
血に濡れた爪を舐めながら、クロウがこちらを見下ろす。
強がって精一杯睨みつけてやるが、吐き気が込み上げて、慌てて口元を抑えた。自分を見つめるリシェルアの青い瞳が、不安そうに揺らめく。
「正直、今まではオレも、お前らの事を馬鹿にしてたよ。だから今回は、容赦なしだ」
「人の事をお子様だの、自分の事を熟練者だのと言ってる奴が反省してるふりしたって、説得力ねえんだよ」
ディオが、クロウの前に立ち塞がった。
「私たちの実力を認めてるのであれば、一人で相手をするなどという無謀な事もしない。
お前は、自分の力に自惚れているだけだ」
クリティスも、彼の隣に並んで吐き捨てた。
対してクロウは、二人を見下した目つきで眺め回し、言葉を返す。
まるで、地の底から響いてくるような、低くドスの利いた声だった。
「『殺し屋』をなめんなよ…仕事屋風情が」

7

切りつけられたエドルは、なんとか意識を保っていた。滅らず口をたたく気力はないようだが、命に別状はなさそうだ。
ひとまず胸を撫で下ろしたクリティスは、爪をゆらゆらと遊ばせているクロウへ目を向ける。
数の上では、圧倒的にこちらが有利だ。エドルが戦線離脱、エリスは参戦不明だが、それでも三対一になる。
「リシェルア、動けるか？」
「…ええ」
声を掛けると、リシェルアは抱いていたエドルを古代兵器の陰に座らせて、立ちあがった。…が、相棒が傷を負わされた事に動揺しているのか、彼女の表情は暗く沈んでいる。その不安が、果たしてどれほど戦いに影響を与えるか。
考えてみれば、エドルもリシェルアも、ただのトレジャーハンターであり、このような、人間相手の殺し合いの場に立った事はほとんどないはずである。以前アスレイナで希望の箱と対峙した時は、相手側の大半が素人だったからか、それほど気負いしてはいなかったようだが、仲間が二度も、同じ人物に傷つけられるのを目にしていては、動揺するのも無理はない。
澄んだ金属音が、塔の内部に響き渡った。
見れば、ディオとクロウが長い膠着状態から抜け、本格的に戦いを始めている。エリスは、思った通り観戦を決め込んだようで、中央の柱に隠れてその様子を見守っていた。
助太刀に入ろうと、抜き身のレイピアを下げて駆けだそうとした時。
「人を殺すのって、悪い事よね…？」
消え入りそうな声が、傍で聞こえた。はた、と立ち止まり、なんのことやらわからず眉を顰める。

「…「人を殺すのが、悪い事か」？」
おうむ返しすると、尋ねてきたリシェルアは、俯きがちに頷く。抱え込むようにして杖を握っている様は、どこか不安定で、儚げだ。
「悪い事だろう」
クリティスは、きっぱりと答えた。
「無闇に人の命を取る事は、被害者当人だけではなく、その周りの大勢の人間の人生まで台無しにする。少なくとも良い事など、何一つないな」
なんてくだらない質問なんだと、クリティスは一瞬、リシェルアを嫌悪した。殺し屋との戦いを前にして、しかも自分の連れを傷つけられているというのに。こんな状況で聞くようなことではないはずだ。
「そう…そうよね」
そう答えたきり、彼女は何も言わなかったので、結局その質問の意図はわからなかった。だが、リシェルアが、何かを思いつめているというのは、表情や声色からはっきりと伝わってくる。
「…戦えるか？」
問うと、彼女は小さく頷いた。どうやら、その点は大丈夫なようだ。
「っく！」
ディオの苦悶の呻きが聞こえる。続いて、何かが弾かれる鋭い音。咄嗟に足をそちらへ踏み出すと、「待って」と、リシェルアが服の裾を引いてきた。
「炎のつぶてよ！」
さっと前に振られた銀の杖の先端から、真っ赤な炎の球が飛びだした。それは、得物を弾かれ距離を置いていたディオの横を抜け、クロウめがけて突っ込んでいく。
「うお？！」
不意を突かれたクロウは、なんとか火球を避けるも、そのままバランスを崩してたたらを踏む。その隙に、クリティスは間合いを詰めて斬りかかった。

まずは彼の厄介な速さを封じてしまおうと、レイピアを腿に突き立てようとする。
しかし、
「はしれ、雷よ！」
「くぅっ！」
間一髪で放ったクロウの電撃が、構えたレイピアを伝わってクリティスに襲いかかる。全身が弾けるような感覚をおぼえた直後、目の前が真っ白になり、気がついた時には床に膝をついてしまっていた。
「伏せろクリティス！」
背後から飛んだディオの命令と共に、わざと腕の力を抜いて地面に伏せる。発砲音がすぐさま聞こえて、魔力の弾が頭上を飛び交った。
クロウの唸り声が、聞こえた。
その後まもなく、リシェルアの呪文が響く。
「炎の庭は、汝の足下に！」
熱風が前方から吹き付けてきた。思わず身体を起こして飛びすさると、クロウが、撃たれたのであろう腹を押さえながら足元に広がった炎の絨毯から逃れようとしてる姿が目に入った。
今だとばかりに、そばでディオが再び銃を構える。だが、それに気付いたクロウは、燃える床を転がるようにして銃撃を避け――しまった。と、思った時にはもう遅い。

「全員、動くなよ」

殺し屋は、据わった眼でこちらを睨んだ。
「これにて、お前らとの遊びも終了だ。
自分の仲間には、きちんと注意を払っておかないとな？」
彼の右手には、鋭い凶器。左手には……柱の陰で戦いを見守っていた、エリス。
クロウ一人に気を向けすぎていたあまりに、彼がエリスに接近しすぎていたことに気がつかなかったのだ。

床を覆っていた、魔力の炎が消える。つい先ほどまでの激戦がまるで嘘のように、静寂が訪れた。

8

「はっ。人質作戦なんて、自分が小物だって言ってるようなもんじゃねえか」
銃口を向けたまま、ディオがクロウを嘲った。
「『熟練者』のプライドはどうした？堕ちたな、殺し屋」
「立場の割に、口は達者だな。この状況をちゃんと理解してるのか？」
左手でエリスの顎を持ち上げ、爪を突きつけるクロウ。
「プライドなんて、殺し屋始めた時点で捨ててるんだよ。相手より優位に立つか、勝てりゃそれで十分さ」
「なるほど」
クリティスは、至極冷静に頷いた。
「それには同感する。下手なプライドなど持っていたところで、この業界では荷物になるばかりだ。そんなものを優先していては、命がいくつあっても足りない」
「おや、まさかあんたに共感されるとは思ってもみなかった。敵同士じゃなけりゃ、呑み交わして語り合いたいところだったな」
苦笑した殺し屋だったが、しかしその眼に油断はない。この程度の雑談で、気を緩める相手ではないという事はわかっていたが…
再び訪れる、沈黙。時間は、刻一刻と過ぎて行く。
しばらく後、ふと、後方で何かが蠢く気配を感じた。
振り返って確認する事は不可能だが、察するに、古代兵器の陰にもたれていたエドルが何かしているのだろう。幸い、クロウはクリティスたちに気を向けているせいで、そちらの方への注意がおろそかになっている。
彼に、賭けるしかない。しかしそのためには、極力彼の動きに気付かせないようにしなくてはならない。

とにかく何か会話をしようと、クリティスは口を開きかけた。
だが、彼女よりも先に声を上げた者がいた。
「あんた、今まで自分が何人殺したか覚えてる？」
囚われの身のはずの、エリスだ。さすがというべきか、自分の命を今にも狩ろうとしている人間に対して、恐れるそぶりなど微塵も見せない。
問われた殺し屋は、その堂々とした声音に一瞬絶句したが、すぐさま平静を取り戻して、馬鹿にしたような答えを返した。
「知らないね。オレは黄泉の国の番人でもないから、死人の数なんざ、いちいち覚える必要はない」
エリスは、憐れむような笑みを浮かべた。
「百人だよ」
その表情は、相手には当然見えていない。
「あんたに会うたびに、地面の底から声が聞こえる。殺された人間たちの怨念が、叫んでる。
あんたを罰しろってね」
「…はっ。可愛い顔して、オカルト趣味か？」
クロウの表情が若干、ひきつっている。
だが、こちらも同じような心地だった。いきなり脈絡もなく、死人の声が聞こえるなどと言われても、聞いている人間は言葉を失うか、冗談でごまかすしかできないだろう。
エリスは続ける。
「難しい事じゃないよ。そろそろ自分の所業を反省して、罪を償ったらどうなのかって言ってるだけ」
「…命乞いするどころか、敵に人道を説くとは…ほんと、お嬢さんの度胸には参るね」
殺し屋の表情が、あからさまな嫌悪を映し始めた。
「だから嫌いなんだよ、偽善者ってのは。
力の差を見せつけてやっても、理屈ばっか捏ねて自分の正義を主張しやがるから、屈服させるのに手間がかかる」

荒んだ瞳が、殺意を孕んでぎらついた。
「たまに、殺すまで言い続けてる奴もいるが、お前もそのクチか？」
途端に、エリスの顔から、笑顔が消えた。
「イーセ！」
彼女の口から、鋭い叫びが飛び出す。
それは、聞き覚えのある言葉だった。はるか昔、古代文字を独学で覚えた時に。
「イーセ」は、「氷」の意。
「ぐあっ！」
言葉の意味通りのものが、殺し屋の右腕を包みこんだ。
痛みに気を取られた彼の腕をすり抜け、エリスがこちらへと駆けこんでくる。
彼女とすれ違うような形で、今度は後方から、銀色の輝きが一直線に飛んで行った。エドルが放ったのであろうそのダガーは、空中に光の残像を残して、クロウの胸に突き刺さった。
「！！っがはっ…！」
床に膝から崩れ落ちるクロウ。腕を凍らせていた魔力の氷塊は消え去ったが、立つことはできないらしく、激しく咳き込んでいた。
口を押さえた指の間から、血が滴り落ちている。
「たぶん、心臓は外してるはずだ」
真っ先に駆け寄ったリシェルアに支えられながら、エドルが掠れ声で告げる。
振り返って二人の様子を見届けると、レイピアを収めながら殺し屋へと近づくクリティス。しかし、
「…そこまで言うなら、てめえの言い分に従ってやろうじゃねえか」
ディオが彼女を追い越し、クロウを見下ろして低い声で言った。
「力の差、いわゆる弱肉強食がすべてだってことは、俺らに負けたてめえは、当然俺たちの言う事を聞かなきゃいけない事になる。じゃあ、死ねと言えば、死ぬんだろ？」
「……殺したきゃ、殺せばいいさ」

荒い息の間から、投げやりな言葉を返してくるクロウ。
しかし、ディオは鼻先でそれを笑い飛ばした。
「殺さねえよ。殺したら、てめえの言い分に従ったことになる。せいぜい刑務所で、今まで死んだ人間の分まで生きながらえて償い続けるんだな」
「…今はあえてその言葉、受け取っておいてやるが…」
殺し屋は、床に膝と手をついたまま、ディオを睨み上げた。
「殺しに少しでも手を染めてたっていうあんたが、人にんなこと言えるのか？」
「――――……」
ディオは、答えなかった。後ろからでは表情が窺えず、かといって、わざわざ覗きに行くのも躊躇われる。
その後、黙ったままこちらを向いたディオは、何を考えているのかよくわからない、少し青ざめた無表情だった。顎だけ動かして「逮捕しろ」とこちらに指図すると、そのまま横を素通りしていく。
クリティスは一人肩を竦めると、ポケットに収めていた手錠を殺し屋の手首に掛けた。
すると、幾分落ち着きを取り戻したらしい彼は、相変わらずのこちらを見下したような態度を取り始めた。
「そんなショボい手錠だけで平気かい？手は使えないが足は使えるってことは、逃げ出せるってことだぜ？幸い傷もそれほど…」
「ああ、それに関しては問題ない」
殺し屋の御託を遮って、クリティスはおもむろに頭を振った。
「貴様には、眠っておいてもらうつもりだ」
「眠って…？睡眠薬でも使う気か？」
「睡眠薬？」
眉をひそめるクロウ。首を捻るクリティス。
「そんな高くつく物は持ち歩いていない。物理的な方法で十分だろう？」
「ぶ…？！」

さあっと音がしそうなほど、殺し屋の顔から一気に血の気が引いた。
クリティスの右拳が左手で押し固められて、音を立てている。
「待てっ、待…！オレ怪我人！怪我人だから！」
「幸い、傷はそれほどでもないのだろう？」
問答無用。クリティスは大きく右腕を後ろへ引くと、容赦なくそれを、殺し屋の腹へと叩きこんだ。
声にならない悲鳴を上げて、ぐったりと床に倒れるクロウ。完全に白目を剥いていることを確認して、クリティスは手の平を打ち払いながら振り返った。
「終わった」
「いや、終わったってお前」
唖然としてこちらを見つめる面々。
あまりにもじっと眺められているので、少々居心地の悪さを覚えていると、エドルが、小さな声で呟くのが、微かに聞こえた。
「…また夢に出たらどうしよう」

9

殺し屋クロウとの因縁にも決着がつき、一応一段落したかと思いきや。
ここで、新たな問題が出てきてしまった。
「…エドル…」
「平気だって」
昏倒したクロウの傍からダガーを取り、持ち主の元へと返す。手渡した際に見えた胸の四本の傷からは、まだ痛々しく血が溢れていた。
強がるエドルの顔色は青白く、額にも汗の粒が浮いている。
「戻るか？」
今ここには、十分な手当てを出来るほどの道具はない。ディオのその判断は、妥当だった。
だが…
「この出血では、果たして戻るまでに体力が持つかどうか…」
ただ戻るにしても、島を出る間に魔獣たちに出くわす恐れがあるのだ。全員好調の状態でも手こずったというのに、怪我人をかばって戦うとなれば、一体どれほど時間がかかるのか。
「…このまま進むしかないな…。
ここにだって、連中が使ってる医療施設ぐらいあるだろ」
エドルが、傷を押さえながら立ち上がろうとする。しかしそれを、リシェルアが制して言った。
「無理に動いちゃ駄目よ。まだ、血が止まってないのに」
「治るまでここにいるわけにもいかねーだろ。敵が来ないとも限らない」
「進んでも、希望の箱の人たちと衝突するのは確実よ」
「じゃあどうするんだよ！どうせどこに行っても敵だらけだろ！」
エドルが、声を荒げた。リシェルアは、びくりと身体を震わせる。

「だから、進むしかないんだよ」
「…治すわ」
唐突に、リシェルアがそう呟いた。
治すとは、一体どういう事なのか。意味がよくわからずいぶかしんでいると、今度はエドルが血相を変え、
「だめだ！！」
塔中に響き渡ったのではないかと思うほど、声を張り上げて怒鳴った。
驚いていると今度はリシェルアが、負けじと悲痛な金切り声を上げる。
「お願い！！あたし、もしエドルが死んだらって思ったら、あたし、」
死ぬなんて、そんな大げさな…とも思ったが、ふと頭に思い浮かんだのは、先ほどリシェルアが呟いた質問だった。
「絶対だめだ、それだけは――」
「いや！
助けられる人を見殺しにするなんて、もうできないのよっ！」
「人を殺す事は悪い事か」と彼女は聞いた。
「リシェルア？」
クリティスが呼びかけても、まるで聞こえていないかのように、エドルに寄り添うリシェルア。エドルが睨んでも、彼女は唇を噛みしめて無視をし続けている。
「治すわ」
いつになくはっきりとした声で、再び彼女は告げた。
「……っ」
舌打ちしながらも、とうとう相方は何も言わなくなった。
リシェルアは、そっと両手をエドルの胸に当てる。
一瞬、エドルがこちらを鋭く睨んだ…気がした。
奇跡が起こった。

なんと、リシェルアがかざした手から淡い魔力の光が零れたかと思うと、みるみるうちに血の流れが止まったのだ。
「あれっ」
エリスが、素っ頓狂な声を出す。
「治癒魔法じゃん。とっくの昔に消えたと思ってたんだけど」
「治癒魔法…」
古代には、この塔に存在する兵器のような技術ばかりではなく、魔術に関しても、現代より優れたものがあったという。時を経るうちに、危険視されて封印されてしまったり、使える者がいなくなり消滅してしまった魔法の中に、生き物の傷を癒す魔法というものも存在した。
伝承でしかなかったものを、まさかこの目で見る事ができるとは。
「…古代の人は、完全に傷口を塞ぐ事が出来ていたそうだけれど…あたしは、少し傷の治りを早める程度で精いっぱいなの」
血が止まったのを視認すると、リシェルアは手を下ろす。
「もしかして」
クリティスは、思わず声を上げていた。
「この間の、ディオの傷の治りが早かったのも、その力か？」
「何？」
目を丸くするディオ。リシェルアは、こちらも見ずにわずかに首を縦に動かす。
不思議には思っていたのだ。アスレイナで再会した時のディオの傷は、思った以上に早く治っていった。クロウとの戦いの最中に開きはしたが、それもあっという間に塞がった。
「アスレイナでディオが怪我した夜…寝ている間に、黙ってこっそり魔法をかけておいたの。
…ごめんなさい」
「え、いや、謝るようなことか？それ。
むしろ、こっちが礼を言うところだろ」
思いもよらない事に戸惑っているディオ。リシェルアはただ、憂い

を帯びた目を下に向けている。
傷の痛みも薄れたのか、エドルの表情も少しばかり和らいでいた。
しかし相変わらず、何が不満なのか眉根は寄っているが。
「……」
黙ったまま、壁に手をつき、腰を上げるエドル。しかし、貧血のせいか立ちくらみを起こし、相棒に慌てて支えられる。
戦わせるのは控えた方が良さそうだが、立ち上がる気力があるならば、当分は大丈夫だろう。
「エドル、怒ってる？」
口を結んだままのエドルに、リシェルアが恐る恐る尋ねた。
しばらく、エドルは俯いたまま返事をしなかった。が、吹っ切れたのか、大きく天井を仰ぐと深く息をつき、
「あーもう、別にいいよ。
ほら、行くぞ」
苦笑しながら、彼女の方へと振り返り、手を差し伸べる。リシェルアも、いつものように柔らかな微笑みを浮かべて、彼の傍についた。
「…古代魔法…ねえ」
呆れと安堵とを覚えながら、二人が階段を上って行くのを見つめていると、後ろでエリスが意味ありげに呟く。
「どうした？」
気になったのか、ディオが彼女の顔を覗き込んだ。伏し目がちにしながら腕を組んでいるエリスは、ゆっくりと首を振る。
「……ううん。
何でもないよ。別に…ね」
そして、彼女はそのまま、二人の後ろから上へと上って行ってしまった。
残された二人は、顔を見合わせる。
「…何だか知らんが、あいつらもいろいろとあるんだな」
「貴様も、何やら隠し事をしているようだがな…興味はないが」
「てめえも十分胡散臭いんだよ…興味はねえけどな」

エドルたちに急かされて、クリティスたちも階段を足早に駆け上がった。

もちろん、お互いの顔を、殺気のこもった視線で睨む事を忘れずに。

10

澄みきった外界の空気が、闇と共に満ちていた。上を見上げると、天井の代わりに、果てのない夜空が浮かんでいる。
そこは、高いルシアニアの塔の一番天辺の部屋だった。屋内にいながら空を臨むことのできる、崩れた塔の最上階。

「とうとう、来たか」

聞き覚えのある声だった。
「へえ、お前だったのか。希望の箱のリーダーは」
部屋の奥から姿を現したのは、信者たちと同じく黒いローブを身に纏い、胸にエンブレムをつけた男。
彼は、エヴァスタ旧天空教会で一度まみえ、捕らえ損ねた二人組のうちの一人だったのだ。
「クロウはやられたのか…」
「十階で白目ひん剥いてるよ。
塔にいた信者共も、残らず片づけた。あとは、お前をお縄につかせれば終わりだ」
風が、部屋の真ん中にある机の上から、資料と思われる紙の束を吹き散らす。
男はどこか覚束ない足取りで、その机に近づき、もたれかかった。
そして、静かに含み笑いを零す。
「お前たちは、神を信じた事があるか」
「は？」
この期に及んで、与太話でも始める気なのだろうか。思わずエドルが間の抜けた声を上げると、男はなおも笑いながら続けた。
「神だよ。

例えば――世界のすべてを形作ったとされる、創造主」
黄金色の瞳を持ち、時に太陽と同一視される、その姿すら定かでない未知の存在。
「かつて私は、創造主教の信者の一人だった。創造主は常に我々を見守っており、辛い時に手を差し伸べ、助けてくれる存在だと信じて疑わなかった。
しかし、十年前…両親が魔獣に襲われ殺された時…私は、自分の信じていたものに裏切られたのだと気付いたのだ。
神は、我々を助けてなどくれない。それを思い知らされた時、私は神に対して復讐する事を決意した」
「…そのお話は長くなりそうだな？」
嫌そうに顔を歪め、ディオが銃を構えた。
「続きは、警官か裁判官にでも話せよ。俺にとってはてめえの事情なんざ、どうでもいいんでね」
「動くな」
男の声が、夜の空気の中に鋭く響いた。
彼は俯いたまま、おもむろに部屋の奥の暗闇を指差す。
「あれが何か、わかるか」
暗闇の中を、エドルはじっと目を凝らして見つめた。
何か、ある。
いや、部屋の奥に広がる大きな暗闇そのものが、一つの物体にも見える。
「あれも、古代兵器なのか…？」
「そうだ。ただし、下階にあったものとは比べ物にならない大きさと威力だ。
古い魔法石をすべて取り外し、新しくつけ替えてある。そこに魔力を注ぎ込めば、すぐにでも兵器は起動する」
それは、とんでもなく巨大だった。他の階にあったものが、部屋の一角を陣取る程度の大きさだったのに対し、ここの兵器は、最上階の部屋の半分を占拠して佇んでいるのだ。

「そう、私は、あれを動かすためにこれまで活動を続けて来たのだ」
男は、両腕を広げて胸をそらす。その姿は、今から大空へ飛び立とうとする大きな鳥を思わせた。
「あの古代兵器で、神界に攻撃を行うためにな！！」

11

「馬鹿馬鹿しい」
そう、身も蓋もなく吐き捨てたのは、クリティスだった。
「黙って聞いていれば、何もかも相変わらずお粗末すぎる。第一、神界が存在すると言われているのは、遥か天空界の上空だ。攻撃が届くと本当に思っているのか」
現実主義者らしい、冷静な突っ込みだった。だが、一体何が彼を自信づけているのか、男は不敵に笑ったまま。
「裏切られただの何だのと言う割に、古代兵器に関する根も葉もない噂をよくそこまで盲信できるな。天空王は、この塔に関する記録は全くって言っていいほど残ってないって言ってたぞ」
「ふん、あんな狡猾な変人の言う事を信じる方が、よほど難しいと思うがな」
男は、見下すような目でこちらを見た。
「だが、これでわかったはずだ。私は、別に貴様らにとって不利な事を行おうと言うのではない。むしろ、神という、見知らぬところで人類を支配し続けている存在から、解放してやろうとしているのだ」
「勘違いはなはだしいとしか、言いようがねえな…」
「まあ、神をはなから信じぬ仕事屋風情には、何の意味もないだろうがな」
「…なら、聞くわ」
既に呆れ顔のリシェルアが、男を睨んで問う。
「神に裏切られて神に復讐する事を決意したと言うけれど、あなた自身は、これまでに人を裏切った事などないと言えるの？少なくとも、あなたたちに「口封じ」された天空城の人たちは、あ

なたたちに裏切られたと思っていたそうだけど」
「裏切った相手を一方的に責めるのは、お門違いってことだな」
エドルも、彼女に続いた。
「何かを信じた以上、あんたもそれに対して責任を負わなきゃいけない。信頼ってのは、お互いがお互いに対して、責任を負うことで成り立つものなんだし」
「…うるさい」
男が、動いた。
こちらをねめつけてゆっくりと後退し、今度は、巨大な古代兵器にもたれかかる。
「もう、何を言われようと、私は引き下がる事などできないのだ」
「おかしな真似は…」
「私にはもう、何を信じればいいのかわからない。信じるという事も、信じられるという事も、わからない。頼れるものはもう、この物言わぬ古代兵器しかないのだ！」
瞬間、暗闇が吹き飛んだ。
古代兵器に装着された無数の魔法石たちが、一斉に光り輝き始めたのだ。
「動いた…」
エドルは唖然と、様々な色の神秘的な光を浴びて呟いた。
夢物語と思われていた、古代の未知の兵器が、今、目の前で起動している。
「…まさか、そんな」
驚いていたのは、エドルたちだけではなかった。兵器を起動させたと思われたローブの男自身も、呆けた顔でそれを眺めていたのだ。
「結局、動かし方がわからなかったというのに」
散々盾に取っていたのに動かし方がわからなかったというあたりは、呆れどころだったが、今はそんなことを突っ込んでいる場合ではない。
もし、この古代兵器が力を発揮した時、何が起こるのか。エドルた

ちには、想像がつかないのだ。
本当に、神界を攻撃することになるのか。もし失敗したとしたら、その影響は…？
どうなるにせよ、止めた方が賢明だろう。振り返ると、同じ答えにたどり着いたらしいクリティスとディオと目が合った。隣りのリシェルアも、頷いている。
古代兵器に近づこうと、足を踏み出した時。
「そこまで言うなら、動かしてみなよ」
挑発的に男に呼びかける、エリス。
慌てて振り向くと、彼女は真っ直ぐに古代兵器を見据えていた。
「魔力の充填方法がわからなかったんでしょ？だから、あたしが充填してあげたよ」
「なっ…！」
そんなことをして、一体何のつもりなのか。
「馬鹿かお前！」
「あんたが信じたそれが、どういうものなのか、教えてあげる」
「エリスっ！！」
彼女の目的が分からない。怒鳴っても、彼女はこちらを見向きもしない。
それどころか、ゆっくりと古代兵器に近づいていく。それに気付いた男は、警戒心をあらわにして叫んだ。
「動くなと言っただろう、女」
「あたしは動かないよ。動くのは、あんた」
そう言いながら、エリスは男の傍までやってくると、古代兵器の一部に人差し指の先を向けた。
その先には、魔法石でできた四角い箱に似た小さな物体が取り付けてある。他の魔法石と違って、淡く明滅するそれは、次に引き起こされる事態を待ち構えて誘っているようにも感じた。
「ほら、そこの箱に手を置くだけだよ」
抑揚のない声で、エリスが言った。

「そうすれば、この古代兵器が発動する。どうなるかは、あんたがその眼で確かめてみればいい」
「……っ！」
「何をためらう必要があるの」
ここにきて渋り出した男を相手に、なおも挑発を続けるエリス。
今までずっとわからなかった、彼女がエドルたちについてきた理由。
まさかそれは、この古代兵器を動かすためだったのだろうか。
「神に復讐したいんでしょ？神を倒して、人類をその支配から解放するんでしょ」
「くっそ！やめろ、二人とも！」
エリスが、男の方へと歩みを進めた。合わせて、男も後ろへと下がる。
男が、恐る恐る振り返った。すぐ後ろに、箱が迫っている。彼が手を伸ばせば、簡単に触れられる距離だ。
「さあ、早く」

「さあ」
「さあ」
「さあ」

男は、箱に、手を触れた。

古代兵器が、発動する。
ヒトからの最終命令を受け付けたそれは、一層魔法石をまばゆく輝かせた。そしてその巨体を、長い眠りから覚めて伸びでもしているかのように、轟音と共に大きく身震いさせ――

12

「あはははははははは」

静かになった部屋の中で、エリスの笑い声だけが響いていた。
彼女の前では、巨体を一度震わせたきり沈黙してしまった古代兵器が、夜明けの風にさらされている。
古代兵器は発動したかに思われたのだが、何を引き起こすわけでもなく、そのまま沈静化してしまったのだ。あれほど光を放っていた魔法石も、今ではすっかり闇の色に溶けてしまっている。
「きっと、もう動かないね」
永遠の眠りについた兵器を、慈悲を帯びた瞳で眺めながら、エリスは言う。
「この古代兵器はもう、全部、内部の機関がボロボロになってるんだよ。魔法石をどんなに新しくて良いものに変えたって無駄。いくら古代の超技術だって、気の遠くなるほどの長い年月には勝てなかったわけ」
少女の手が、発動装置だった小さな箱を撫でる。兵器が動き出す事は、もう、ない。
「キレイでしょ？時の止まった博覧場。この塔にあるものは、全部そう。大昔から、時間が止まったまま」
「そんな…」
床に崩れ落ちた希望の箱のリーダーは、失意のこもった声をかすかに上げた。
「一体私は、何を信じて来たんだ…何を信じればいいんだ…」
「自分を信じてくれた人間を、ことごとく裏切っておきながらその発言とは、救いようがないね」
エリスは、腕組みをするとため息をひとつついた。

「それにまだ、あんたを裏切っても、あんたに裏切られてもいない人間がたくさんいるよ。あんたには、ただの手駒にしか見えていないようだけどね」

海でエドルたちを襲撃し、塔でも行く手を阻んできた、希望の箱の信者たち。彼らももしかすると、彼と同じような境遇で神を憎むようになった人たちなのかもしれない。

「彼らはまだ、あんたを信じてる。今度はあんたが信じてあげればいい。

まあそれも、王都で裁判を受けてからの話だけどね」

エリスはそう言って、彼に背を向けてこちらへと戻ってきた。

それから、してやったりとでも言いたげに胸を反らして…

「アホかお前はっ！！」

次の瞬間、思いきりディオに後頭部を殴られていた。

「何考えてんだてめえ！あれでもし動いてたらどうなったと…！」

「殴った?!あんた今、あたしのこと殴った?!」

「そりゃ殴りたくもなるわボケ！」

彼は大声で怒鳴り散らしながら、エリスに詰め寄った。

「なんでお前は毎回毎回余計なことしかしねえんだよ！動かないなら、動かないままにしときゃいいものを！」

「何も殴る事ないでしょっ！結局動かなかったんだしいいじゃん！」

「だから、それならわざわざ起動させるなっつってんだよ！」

「痛っ、また殴ったー！

泣いてもいい?泣くよ?あたし、泣くと手がつけらんないんだからね！」

この喧嘩は、どうやらしばらくは収まらなさそうだ。

仕方ないので、仲裁をリシェルアに任せて、エドルはクリティスと一緒にリーダーの男を捕らえることにした。

男には、抵抗する気力などないようだ。大人しく手錠を受け、立ち

上がる。
そういえば、と、クリティスが呟いた。
「お前の名前をまだ聞いていなかったな」
「…クォードだ」
「クォード…。
…クロウから聞いた話だと、もう一人リーダーがいるという話だったが」
「…あいつから聞いていなかったのか」
クォードは、ここでようやく顔を上げた。憔悴しきった、虚ろな目。
「弟は…もういない。
…私が殺した」
クリティスの手が、一瞬止まった。
「……そうか」
しかし、何事もなかったかのように短い言葉を返し、手錠の鍵をとめる。
騒いでいた二人は、リシェルアの仲裁のおかげかようやく我に返ったらしい。こちらに向かって手招いている。
見上げると、朝日がほのかに空の色を変え始めていた。暗かった最上階もだんだんと明るくなり、暗闇そのもののようだった古代兵器も、銅と魔法石でできたその美しい全容を現す。
塔は遥か昔から、こうしていくつもの夜を越えてきたのだろう。そして、これからもおそらく、永遠に目覚める事のない朝を迎え続けていくのだ。
入口に向かって歩を進めた時、クォードが、何か呟くのが聞こえた。
あまりにも小さな声だったので、すべて聞き取ることはできなかったが、不思議と、一つだけはっきりと聞こえた言葉があった。
「ルエイド」、と。

衝撃とはじまり

島から戻り、無事希望の箱を警察の手へと引き渡したエドルたちは、ようやく賞金を手に入れる事ができた。と言っても、手にしたのはクロウの首に懸かっていた賞金だけで、仕事自体の報酬は天空王に報告を終えてからになるのだが。

後始末は、すべて警察や王宮に任せておけば大丈夫だろう。

「あー、終わった終わった」

次の日、久々に昼近くまでゆっくり休んだエドルは、あくびをしながら宿の下階まで下りて来た。珍しく自分が最後だったようで、寝坊常習犯のエリスも、既に朝食を終えて紅茶のカップを片手に、クリティスと談笑している。

「おはよー」

バルコニーで小鳥に残り物のパンをやっていたリシェルアが、こちらに気づいて駆け寄ってきた。

「お城に行くのは、お昼をすぎてからだそうよー」

適当に相槌を返して、エドルはすっかり冷めきってしまった朝食兼昼食をのんびりと口にし始める。

すると、すぐそばのテーブルにいるエリスとクリティスの会話が聞こえて来た。

「あ、言っとくけど、今回はあたしも一緒に天空城に行くからね」

「…へっ?!」

トーストを齧ろうとしていたことも忘れて、会話に割り込むエドル。

「…何?」

「いや、どういう風の吹き回しかと…」

「うーん…」
エリスは、何か考え込むように首を少し傾けると、
「もうそろそろ、大丈夫じゃないかと思って」
「え？」
意味がわからない。
こちらが眉をひそめていても、彼女は平然として紅茶をすすっている。リシェルアかクリティスの解説を期待したが、二人もいぶかしげに顔を見合わせていた。
「と…とにかく、城にはついてくるってことでいいんだな？
ただ、事件解決の報告と報酬の受け取りだけで、退屈なだけだと思うけど…。お前、報酬がもらえるわけでもないし…」
「心配無用。あたしはあたしで、用があるの」
相変わらず謎な返事を返して、エリスはそのまま黙ってしまった。
エドルは一人、肩を竦めて朝食を再開する。
何はともあれ、彼女ともこれで別れることになるのだ。多少のわがままは多めに見てやってもいいか…と、彼は考えていたのであった。

その日の昼下がり。眩しい太陽に照らされた白亜の王宮の前で、五人は立ち止まった。
「入城許可を証明するものは？」
幾度となく耳にした、門番兵の問い。入城許可状を管理しているクリティスが、手荷物の中を漁り始めた。
その時だった。
「これを」
突然、一番前にいたエドルを押しのけ、門番に手を差し出すエリス。
「え、お前」
「なんだ？」
エドルの戸惑いの声と、門番の高圧的な尋問が重なる。それらをす

べてスルーすると、彼女は差し出した手をおもむろに開いた。
陽光の反射で良く見えなかったが、銀色の金属製の物体が、手の平の上に載っている。
エリスは、門番兵の顔を見上げて、微笑んだ。
「天空王に渡して？」
つられてエドルが門番を見ると、何故かその表情は強張っている。
すぐさま彼は、門の反対側を見張っていたもう一人の門番を呼ぶと、何事かぼそぼそと話しこみ…
「しょ、少々お待ちくださいませ…！」
あからさまに口調を変えて、いやに低姿勢で金属の物体を受け取るなり、彼は城の中へと飛び込んで行ってしまった。
後に残されたもう一人の門兵は、手持無沙汰でおろおろするばかり。
それを、エリスは面白そうに眺めている。
「な、何したんだ？」
彼女の傍まで近寄ると、エドルは小声で尋ねた。
「入城許可証を渡しただけー」
ただの許可証を渡しただけで、あんなに門兵がうろたえるはずがない。おそらく、何か特別なものだったのだろう。
「ずっと聞こうと思ってたんだが」
ディオが、いつの間にかすぐ後ろに立っていて、エリスをじっと見下ろしている。
「お前、一体何者なんだ？」
「……ふふ」
含みのある笑い声を立てて、エリスは目を細めた。それから、まばゆい太陽の光を手で遮りながら、城を見上げる。
「意識しなきゃ、わからないもんなんだよね。
いろんな意味でさ」
彼女のこの言葉の意味を、この後、エドルたちは思い知らされることになる。

「…とうとう、来たか」
伝令から渡された、六紡星を模した銀製の金属板を弄び、天空王は呟いた。
それを、寝室の窓から差し込む日の光にかざす。太陽光と魔力によって六紡星の中心に浮かび上がったのは、金色の小さな印。
それを視認して、王は満足気に頷いた。
「どうやら、彼らは思い通りに、「じゃじゃ馬娘」を連れてきてくれたようだな…」
思わず、笑いが込み上げてくる。まさか、これほど思い通りにいくとは。
「よし。丁重にお通ししろ。
もちろん、四人の仕事屋たちも一緒にな」
「ど、どこにお通しするのがよろしいでしょうか?」
王の不気味な表情を見て若干顔を引きつらせている伝令の問いを聞き、王は少し首を捻った。
「最上等の客室に」
「は、はっ!かしこまりました!」
「それから…」
王は、伝令に手招きをして、傍まで引き寄せた。不思議そうにしている彼の耳元に、考え付いた事をあらかた告げてから、そのまま寝室を去らせる。
「…く…くくくくく」
一人になった途端、天空王は、笑いを堪え切れずに声を上げた。
ようやっとこれで、長年の念願が果たせるのだ。ここまでくるのに、どれほどの時間と労力を使ったか。
「今度こそ、逃がさない」
固い決意と共に手の中の印章を握り締めると、王は礼服を羽織り、寝室を後にしたのだった。

2

「天空王がいないっ？」
ほどなくして、城の中に通されたエドルたちは、案内の召使いから不測の知らせを受けた。
なんと天空王が、急な公務で出かけてしまっているというのだ。
「じゃあ、報酬は誰から貰えばいいんだ？代理で、大臣か誰かが渡してくれんのか？」
「いいえ、御心配には及びません」
前を歩いていた召使いは、にこりと営業スマイルを浮かべて振り返った。
「もうすぐお帰りになるというお話でしたので、今しばらくこちらでお待ちください。
王が帰還され次第、ご報告すると共に、謁見の間にご案内いたします」
立ち止まった召使いが、そっと廊下の右の部屋を示す。開け放たれた扉から中を覗くと、おそらく賓客を招く部屋の内でも、格が上なのではないかと思われた。
何の事はないただの一市民に対して、これほどの扱いをするとは考えられない。やはり、エリスの持っていたあの入城許可証の効果だろう。
五人が入ると、召使いはそそくさと出て行ってしまった。一体ここでどれほど待たされるかわからないが、しばらくは、この豪華なもてなしを堪能するのもいいかもしれない。
「それにしても、急にいなくなるってのは――」
凝りに凝った装飾の椅子に腰かけ、文句を並べ立てようとした、その時。

かちゃん。

扉の方で、小さな物音がした。

「……え？」

五人は、一斉にそちらを向いた。美しい細工の鉄製の扉は、何事もなかったかのようにずっしりと重厚に居座っている。

クリティスが真っ先に動いた。近づいていって扉を丹念に調べ、そして、ノブに手を掛けて。

だがしかし。ガキンと、つっかえたような音を立てて、ノブは途中から動かなくなっていた。

「うっそ」

顔を青ざめさせたエリスが、クリティスを退かせてノブを回す。馬鹿の一つ覚えのように何度も何度も、ノブを回し押し引きを繰り返すが、扉が動く事はない。

「やっ…」

エリスが、悲鳴に近い声で叫んだ。

「やられたあああっ！！」

「え、え、えええっ？」

何が起こっているのかわからない。

ドアに腕と額をつけて、項垂れてしまったエリスの肩を叩く。

「やられたって、なんだよ？」

「全部天空王の罠だったのっ！」

「ふふふふふ…罠とは、人聞きの悪い事をおっしゃる」

突如、公務で出かけているはずの、噂の人物の声が聞こえてきた。

「天空王？」

声は、扉の向こう側から伝わってくる。

エリスがはっと身を引き、怒鳴り立てた。

「どういう事？！」

城下をうろついてても兵士たちが追いかけて来なかったから、てっきり諦めたのかと思ってたのに！」

「くくく…まさに、そうあなたに思い込ませるために、今回はあえて何もしなかったのです。
あなたがそこのトレジャーハンターたちを引き連れ、この度の事件解決のために動くであろうという事は、私の予想の範疇だったという事ですよ…！」
何の話だろう。
後ろを振り返っても、自分と同じようなぽかんとした表情でつっ立っているリシェルアたち三人がいるだけだ。
「天空王ゼルヴァス、我が主の御前に謹んで申し奉ります！」
天空王が、一際声を高くした。

「後生ですから、早く神界にお帰りください、創造主エリスティア様！！」

え？

・

3

（創造主？）

開いた口が塞がらない。いきなりの展開に、頭がまったくついていかない。

（創造主？だれが？）

創造主。

神の一族の長であり、日輪の王とも神聖なる太陽とも称され崇められる。想像も及ばないほどの大昔、天地のすべてを創ったもの。

その姿形は様々に言い伝えられ、存在すらあやふやであった。

「だから、やだって言ってるじゃん！つい二百年前に帰ったばっかりなのに！」

真っ白なままの頭の中に、エリスの声が響く。

（二百年前に帰った？どこに？神界に？

なんでこいつが神界に帰るんだ？そもそも、二百年前ってどういうことだ？）

もう一度、エドルは後ろを振り返った。

もともと頭を使う事が苦手だというのは、自分でもよくわかっているのだ。鈍い頭で考え込むよりも、この状況をきちんと理解していそうなリシェルアたちに聞くのが、一番早い。

…が、どうやらそれも無理なようだ。後ろの三人も、目と口を丸く開け放したまま、銅像のように固まってしまっている。

「私に当たられても困ります！文句なら、私に創造主様お呼び戻しの命を下された、魔界神アルト様にどうぞ！」

「あんたねえ！あの子の命令とあたしの命令、どっちが大事だと思

ってんの?!」
「一番大事なのは自分の命です！」
「このっ…」

仕方ないので、自分の頭で考える事を再開した。
そう、確か創造主は、唯一無二の、太陽のような黄金色の瞳を持つと聞いた。
ならば、瞳の色さえ確認すれば、良いのである。我ながらこれは名案だと思い、少しだけ心が落ち着いた。
まず、自分の瞳の色。これは鏡で確かめるまでもなく、深緑色であるとわかっている。人からはよく森の色だと言われて、その例えの微妙さに、反応に困ったものだ。
リシェルアは、真紅。彼女の二つ名である「烈火」につながるような外見イメージはこれしかない。だから出会った人は、激しい炎とは裏腹な彼女の正反対な性格を知って、大いに驚く。
クリティスは紫色。彼女ほど、紫という落ち着いた色の似合う人間はいなさそうだ。
ディオは、漆黒。得物の銃と同じ色。これもまた、彼の噂や性格のためにあるような色だ。本人に言うと、とんでもない目に遭わされるかもしれないが。
そして。

「おい、エリス」
「とにかく、あたしは帰らないよ！アルトにも、そうはっきり言っといて」
「無茶言わないでください。創造主様一筋のあの方が、そう簡単に諦めるとお思いですか？」
「エリスってば」
「そこを、あんたが何とかするんでしょ！」
「もうこれ以上、何とかできないところまで来てるんです！いい加

滅、中間管理職を務める私の身も案じていただきたい！」
「むきぃぃぃぃ！天空王のバーカっ！」
「エリス！」

「うるっさいね、何なのさっきから?！
ぼーっと立ってる暇があったら、あんたたちもあのわからず屋になんとか言ってよ！あのバカ、あたしが神界に帰るって言うまで、ここから出さないつもりなんだよ?！」

そう言って、勢いよく振り返り、こちらを睨んだ瞳の色は、
今までに見た事もなかったはずなのに良く見慣れた、太陽のような黄金色だった。

4

呆れるだとか驚くだとか感激するだとか、そんなものを通り越して、エドルはすべての思考と感情を放棄した。

見ると他の三人も、同じような境地に至っているらしい。悟りを開いたような清々しい無表情で、ドアの前の「創造主」を眺めている。

ただ、クリティスはすぐに口元に手をやって俯くと、小さな声で独り言を言いだした。「まさか、そこまでの存在だったとは…」という、意味不明な言葉がぽつりと聞こえてきたが、どうやら彼女の驚きどころは、自分たちと違っていたようだ。

「……あれが？」

ディオが、今一番言ってはならないことを呟いた。

「あれが「創造主」？ふざけてんのか」

ディオが信じられないのも無理はない。むしろ現段階では、クリティスはさておき、エドルも、おそらくリシェルアも信じていない。

何せ、神の一族そのものの存在だって曖昧なのだ。その長が、地上を観光しながらうろついているなどといきなり言われて、そうですかとあっさり信じる人間がいたら見てみたいものだ。

だが思い起こしてみれば、彼女が今まで、人間には到底できない事をしでかしてきているというのも確かなのである。

「ふざっ…？！」

見る間に全身の毛を逆立てて、怒りをあらわにする創造主エリスティア。

「何？あたしが創造主で、なんか文句あんの？！

大体、神様は超慈悲深くて超偉くて超カリスマ溢れてるってイメージは、あんたら人間が勝手に作ったんでしょ？！

そりゃ、確かに神の一族の中にだって、そういう神様っぽい神はいるけどね！」

「自分に、威厳がないという自覚があったのか」
「悪かったね威厳がなくてっ！」
言っている事自体は確かにもっともなのだが、顔を真っ赤にしながら涙目で主張されても、ますます威厳が薄まるばかりである。
別にこちらが何を言うわけでもないのに、彼女はさらにむきになって捲し立てた。
「あたしだってねー、最初の頃は、ちょっとそういうふうに偉そうにしてみよっかなーって思って、神界にこもってた時もあったんだからね！
でも、下界の方が面白い事いっぱいあるし、おいしいものもいっぱいあるんだもん。別にいーじゃん、創造主が観光したり、ちょっと危険な事件に巻き込まれたりしても」
今回の場合は巻き込まれて、というよりも、自分から強引に首を突っ込んだと言った方が正しい。
「おおっぴらに動いて、人間たちにあからさまに手を貸すってのはあんまり良くないんだけど、ちょっとぐらいならいーでしょ？だって、あたしの創った世界だもん。誰も文句言わないもん」
だんだんと話の焦点がずれてきてしまっているが、ようは、世界の頂点に立つものであっても、商店街で山ほど買い物をしたりお菓子を食べ歩きしたいのだと言いたいらしい。
天空王が、少し疲れの感じられる静かな口調で言った。
「もちろん、あなたのお創りになった世界で、あなたの行動を制限しようとするものはいないでしょう。仮に誰かがそうしたところで、あなたがそれをお許しになるはずがありませんし」
「でしょ？！じゃあ、今回だって見逃して…」
「それとこれとは別です」
それはもうばっさりと、容赦なく一蹴する天空王。
「なんでーっ？！」
「ですからっ、あなたを神界に一度お帰ししないと、私の立場と命が危ういのです！

アルト神も、神界に永住するようにとは言われておりません。一度顔をお出しするだけでよろしいのだと思われます」

魔界神アルトは、その称号の通り魔界を守護する神であるとともに、知恵と知識の神として知られている。学校や図書館など、知識を身につける場所では、アルト神が奉られていることが多い。

一体どんな性格の神なのかは知らないが、何やら相当エリスティアのことを慕っている様子だ。彼女に、いわゆる里帰りをしてほしいのだろう。

「ああまで言ってるんだからさあ、帰ってみれば？」

とにもかくにも、この場をなんとか収めなければ、いつまで経っても出られない。エドルは、しぶしぶエリスティアの方を諭す事に決めた。

「またすぐ下界に来れるんだろ？」

「神界から戻るのは簡単だけどね。問題は行く方なの」

膨れっ面で、ドアの先の天空王を睨むエリスティア。

「ここから神界に帰るには、まず一度亜魔界に降りて、それから魔界を経由しなきゃなんないわけ。

天空界が神界の上空にあるからって、そのまま直通で行けるわけじゃないんだよ」

「…それは面倒だな」

以前通った「道」から直接魔界に降りればいいのでは、と提案したが、彼女曰く、それでは逆に遠回りになってしまうのだという。

「とにかくっ、絶対っ、嫌だからねっ！」

「ぐうっ…相変わらず強情なお人で…」

天空王は扉越しに、悔しそうに歯噛みをした。しかししばらくして、また怪しげな笑い声を洩らし始める。

「ふふ、ふふふふふ」

「…今度は何企んでるわけ？」

エリスティアが不審そうに問うても、彼は答えない。その代わり、エドルたちに向かって語りかけて来た。

「エリスティア様の後ろにいる、四人の英雄たちよ…」
冒頭からして、胡散臭さが濃厚だ。
「…なんですか」
「お前たちに、頼みがある」
はっきり言って、嫌な予感がするので聞きたくはない。が、そうもいかない。
天空王は、扉越しからでもその必死な表情が見えてきそうな、切実な声で言った。
「エリスティア様を、神界に送り届けてほしいのだが」

なんで、こんな予感ばかり的中してしまうのだろう。
薄々、そうなるのではないかという予想はあった。もちろん、是非お断りしたいのだが…
「どうせ、引き受けなきゃここから出してくれないんですよねー」
「ははは、無論だ」
むしろ、はじめからそのつもりでいたのだろう。エドルたちと共に、エリスティアがやってきた時から…いや。先に、「創造主が事件解決に動く事など予想の範疇」と言っていたところから察するに、おそらく…自分たちを城に誘い出し雇った時点で、既にこの計画が彼の内にあったに違いない。
だとすれば、なんと狡猾な男なのだろうか。
エドルは思わず、姿の見えない天空王に対して思いきり暴言を吐き散らしたい気分に駆られた。リシェルアたちも、顔を引きつらせている。ディオに至っては、王宮内だというのに銃に手をかけてすらいた。
「このっ、卑怯者っ！」
「お褒めにあずかり光栄です」
今回ばかりは、エリスティアの言葉に全面的に共感した。天空王は、しれっと受け流してしまったが。
「当然だが、ただでとは言わん。今回の事件の報酬が二百万だった

から、この仕事はその二倍、四百万ということにしよう。
さあ、どうする？」
「本当に天空王は、人を半強制的に動かすのが上手くていらっしゃる」
クリティスが、皮肉を吐いた。やはり今回もこちらには、拒否権はないのである。
「せっかく、いつもの生活に戻れると思ってたんだけどなあ…」
エドルは、腰まで折り曲げてうなだれた。
「仕方ないわー。でも、また皆でお仕事できるのねー」
「それが一番気に食わないんだがな」
妙に嬉しそうなリシェルア、そして、今にも不満が爆発して、暴れ出しそうなディオ。
「だが、あの女のお守りで四百万払ってくれるなら、引き受けるさ。大金くれるってんなら、俺はなんでもするね」
「私も引き受ける。それに、あの女には、個人的に興味がある」
しぶしぶといった感じだが、二人の意見はまとまっているようだ。
「またしばらく、賑やかなのねー」
「はいはい、もうどうにでもなれって…」
仕方がない。不満は山ほどあるが…
「…わかりました。引き受けます」
「よしっ、良く言った！良く言ってくれたお前たち！」
引き受けざるを得ない状況を作り出したのは、紛れもなく天空王本人なのだが、彼は心底嬉しそうに礼を重ねて述べてきた。ガッツポーズを決めている姿が、目に浮かぶようである。
客間の鍵が、軽い音を立てた。ようやく開かれた扉の先には、礼服に身を包んだ天空王。
「許さない…絶対許さないからね…」
まるで、地の底から響いて伝わってくるような低い声音で、創造主は彼に怨みの言葉を吐く。
対する王は、実に丁寧に会釈をすると、満面の笑顔を浮かべて言っ

た。

「怨まれ役は、この地位に就いた時から慣れておりますので」

5

なんとか話が片付いたので、ようやくエドルたちは謁見の間に通された。

「さて…いろいろとあったが、首尾よく希望の箱の企みを阻止してくれたようだな」

王はエリスティアに玉座を譲り、エドルたちの前に立つ。

玉座の傍らには、以前助け出したアスロイ王子と、その姉であるエイナ王女が佇んでいた。エドルたちの周りにも大臣たちや兵士が立ち並び、じっと一同の様子を見守っている。

「島に入るまでの経緯は、あらかた船の者に聞いた。

創造主様がその尊いお力を発揮され、見事敵の大船団を退けたそうだな」

「そーやっておだてて、あたしの機嫌を取ろうとしたって無駄なんだからね」

玉座で足を組み、頬を膨らませて呟くエリスティア。

天空王は、指を鳴らして近くにいた召使いを呼び寄せ、小声で何かを囁いた。彼女は微笑んで「かしこまりました」と答えると、謁見の間をしずしずと去っていく。

ほどなくして、数人の召使いがやってきて、エリスティアの前に小さなテーブルを設置した。最後に、盆を携えた召使いが、テーブルの上に紅茶と、色とりどりのプチケーキが載った皿を置き、一礼してから退室する。

その途端、

「わーいっ！」

あれほどのしかめっ面をあっという間にほどいて、創造主はケーキに心奪われてしまったではないか。

こほんと咳払いをして、王は得意げな笑みを浮かべる。創造主とも

あろうものが、菓子一つですぐに機嫌を直してしまったのを目撃して、複雑な気分を抱かずにはいられないエドルであった。
「さて、話を続けよう。
この度の栄誉は、天空王族の末に及ぶまで語り継がれるだろう。よくやった英雄たち！」
「栄誉とかはどうでもいいんで、早く報酬ください」
「…むう…せっかく盛り上げてやっているというのに、冷めた連中だな…
まあいい」
不満そうに眉間にしわを寄せる天空王。だが、すぐに気を取り直して、
「わかった。まずは、約束通り報酬を渡そう。
受け取るがよい」
もう一度、王は指を打ち鳴らした。
今度は、盆に金の袋を乗せた兵士が四人現れ、エドルたちの前に並ぶ。それを有り難く受け取っていると、王が、ふと思い出したように尋ねてきた。
「そういえば、後から頼んでいた例の本は見つかったか？」
「ああ、すっかり忘れていた」
クリティスが、懐を探って、赤茶けた古い紙束を取り出す。
「結局、これだけしか見つけることはできなかった」
それは、盗まれた秘伝の封印の書の数ページだった。
クォードから聞き出して、塔に隠されていたのを見つけたはいいのだが、なんと、そこにあったのはこの数ページだけだったのだ。
彼らに必要だったのは、特定の封印の使い方と解除方法を記した一部分だけだったらしく、本そのものはローグの森の屋敷に、保険のための写しと共に保管してあったそうだ。
だが、そのローグの屋敷は、エリスティアを救出しに行ったその夜に…
「ううむ…」

事情を聞いた天空王は、難しそうに顔をしかめる。ついでにいいから、と言ったものの、完全に取り返しのつかない事になってしまっていたことに、少なからずショックを受けているようだ。
しかし、これぱかりは――
「あ、そういえばあたしも」
不意に、幸せそうにケーキをぱくついていたエリスティアが、声を上げた。
皆の注目を浴びながら、彼女は玉座の後ろから、自分の荷物を取り上げる。
「例の本って、あのおバカな題名の封印書でしょ？。これを渡すために来たのに、さっきのゴタゴタのせいで忘れてたよ」
雑品の詰まった鞄から取り出されたのは、
「あ…ああっ！それです！」
青い表紙の、大きな本。金色の古代文字で、何やら長ったらしい題名がつづられている。
王は今にも駆けだしそうな足取りで彼女に近づくと、本を受け取り、開いた。そして、目を丸くして何度も独りで頷く。
「間違いありません、この本です」
「な、何でお前が持ってるんだよ！」
ディオが素っ頓狂な声で問う。創造主は、再びケーキを口に運びながら答えた。
「攫われて脱走してる途中に見つけたの」
「なんでおれらに渡さなかったんだ！」
「決まってんでしょ」
彼女は、静かにこちらにフォークを突き付ける。
「あんたたちに渡したら、悪用するかもしれないじゃん」
「どうせ古代文字で書いてあるんだろ？読めねーよ」
「クリティスは古代文字、読めるじゃない」
「ぐ…」
ふう、と一つ、彼女はため息をついて、

「あれは、天空王家の秘伝の書。本来は、王家の者以外の人間が見る事は禁じられているの。その規律を守るために、敢えてあんたたちに隠してたんだよ」
正論だった。彼女は「エドルたちの仕事の補助役」としてではなく、「創造主」の立場として、秘伝を守ることを選んだのだろう。
「とにかく、これで万事解決ということだ。本当に、お前たちはよくやってくれた」
天空王は、深々とこちらに会釈をした。城の重役が集まっている中で最高権力者にそんなことをされると、こちらも委縮してしまう。
「いや、そんな」
「…それから」
照れたエドルが、謙遜しようとした時。顔を上げた天空王が、この上なく素敵な笑顔を浮かべている事に気がついた。
「今後とも、創造主様をよろしく頼んだぞ？」
「……」
せっかく感激していたというのに、なんだか台無しになってしまった感は否めない。
「わかりました…」
天空王の笑顔の後ろで、ケーキを食べ終えて満足げに紅茶を飲んでいる創造主エリスティアをぼんやりと眺めながら、エドルは大きく、深く、ため息をついたのだった。

第一章　エピローグ

城を出ると、天空王が直々に見送りに出てきてくれた。
変人と広く謳われているが、彼を慕う者は多い。やはり、どこか憎めない人格とその度量は、天空界という大きな一つの世界を治めるにふさわしいものなのかもしれない。

なにはともあれ、再び五人は旅の空に出る事になってしまったのだった。
護衛対象の創造主は、王都銘菓を山ほど土産にもらって、大満足で鼻歌を歌っている。
彼女はまだまだ謎の多い存在だが、これまで創造主だとは考えもしなかったほどに、そこらの村娘となんら変わりはないようなので、普通に接している分には問題ないだろう。
「…天空王も食えないけど、お前も相当だな」
「そう？」
さっそく土産の箱を開いて、中の菓子を食べ始めている彼女を見やって、ディオが言う。
「俺たちを利用して、今回の事件を解決させようって腹だったんだろ？
あの封印の本のことだって、殺し屋に攫われたところから既に、お前の策の内じゃねえかって疑うね」
「ふふふん」
彼女は、意味深な笑顔を浮かべたまま、曖昧な相槌を返すだけ。
「実際のところ」
クリティスが、いつもの無表情で尋ねた。

「どこからがお前の策略の内だった？
私たちを、天空城に誘導したあたりからか？」
「策略だなんて。あたしはただ、誘拐事件を解決するにはどうしたらいいか悩んでるときに…」
創造主エリスティアは、それは愉快に笑い声を立てた。
天高く昇った真昼の太陽も、かくやといわんばかりの笑顔が眩しい。

「腕のいいトレジャーハンターたちが樹海に入ったまま出て来ないっていう噂を、魔界の村で偶然聞いただけだもーん」

第一章　エピローグ（後書き）

あー、終わったー。
これにて第一章は完結です。終わるか不安でしたけど…まだ第一章ですけど…一応一区切り。
次の章からは心機一転、神界のお家に帰る（送る）旅が始まります。
と言っても、今までとたいして変わんないと思います。みんなマイペース。

二章の登場人物

二章に出てくる登場人物を紹介します。

※ご注意！※
前章のネタバレ有ります
二章以降は前章を踏まえて続いているので、ネタバレが嫌な人は一章の一話から順に読み進める事をお勧めします。

・クリティス・シェリィ
才色兼備な、エルフ族の女賞金稼ぎ。五十歳を越えていることが発覚した。
物事を客観的に判断するが、達観しているわけではないようだ。
また、エリスに対して個人的に何か特別な感情を抱いているらしい。
暇なときはもっぱら本を読んでいる。

・エドル
基本的に常識人な、翼人族のトレジャーハンター。十八歳。
武器は二本のダガー。魔法も一応使えるが、よく失敗する。
相棒のリシェルアと行動することが多い。

・リシェルア
温厚で優しい、魔法使いの少女。十五歳。
遥か古代に失われた治癒魔法を使える。また、彼女の操る炎の魔法にも何らかの秘密がひそんでいるようである。
もっぱらエドルの傍らに佇んでいる。

・ディオ・ライアネイズ
額の傷跡と銀色の髪が特長的な美男子。二十歳。
口も性格もまるっきり極悪だが、時を止める事は残念ながらできない。
「神を否定する人間至上主義の組織」に何やら思うところがあるらしい。

・エリスティア
ただの旅行者かと思いきや創造主だったらしい。自称十七歳だが実年齢は不明。
神聖なる太陽、神の一族の長…等々異称が多く、エリスティアという名前も本名かどうかは定かではない。むしろ本名があるかどうかも不明。
正体が連れに知られても、彼女は相変わらずふてぶてしく存在している。

・エフィル・トレーク
強気で強引な、大剣使いの少女。十九歳。
神からのお告げを受け、世界を破滅に陥れんとする魔王を打ち倒すために旅をしている。
正義感が強いため、よくやっかい事に首を突っ込んでは仲間を振り回す。が、本人に悪気は全くなく、根が真っ直ぐで不器用なだけなので、なんだかんだ言って信頼されているようである。

・ラズマ
創造主教の下っ端僧侶。二十二歳。
エフィルに神のお告げを宣し、彼女と共に魔王を倒す旅をしている。
常にどこかやる気がなく、暇さえあれば黙々と絵を描いている。
あまり物事に動じる事がないため、暴走しがちなエフィルの良いストッパー役でもある。

・イルファ・アリゼル
そこそこ有名なトレジャーハンター。二十四歳。
父の形見でもある剣「鳴神の剣」を主な武器としており、赤髪赤目の容姿から「赤い雷」の異名を持つ。
美しい女性・可愛い娘の前ではだらしがなかったり、恐ろしいものを前にすると腰が引けたりとへたれな感じは否めないが、仲間を想い、ムードメーカーとして振る舞う彼の姿は、さながら皆の兄のようである。

・ウィミーネ・アリキネル
内気な翼人族の娘。十三歳。
得物は小さなナイフだが、魔法も得意。また左腕には、魔力を溜めこむ不思議な表印文字が彫りこまれており、いざという時にはその魔力を一気に解放して絶大な威力の魔法を放つ。
とても純粋で、エフィルの力や意志の強さに憧れている。

第二章　プロローグ

「どういう事なのよ、これ」
手にしたペンダントを見つめ、エフィルは絶句するしかなかった。
王家の家紋があしらわれたそのペンダントトップには、くっきりと名前が刻みこまれている。
『アクス・ヴォールナ・フォーラス』…一年前に死んだはずの王子の名前。
「兄貴は、戴冠式の日までに俺を殺すつもりなんだ」
ペンダントをエフィルに手渡した、その持ち主たる「死んだはずの王子」は、俯いたまま呟いた。
エフィルには、わからなかった。どうして、国を追われて存在を殺され、一年の間命を狙われ続けながらも、逃げて続けているのか。
「信じられない…なんでここまでされて、逃げてるだけなのよ、あなた」
「おい、エフィル」
「堂々と、みんなの前に出てやればいいじゃない。自分は生きてるんだっていうことを、証明するのよ」
「できるわけがない」
彼女の必死の説得を、きっぱり否定するイルファ。
「のこのこ出て行ったが最後、向こうに偽物だの何だのと難癖つけられて、殺されるに決まっている」
「なら、私たちが証明すればいいのよ」
エフィルはきつく拳を握りしめた。「どうやって？」と不安げに尋ねてくるウィミーネの顔を一度見て、大胆に宣言する。
「戴冠式の時に、国民の前で、カイ王子の行いを暴くのよ」
黙っていたラズマが、おもむろに口を開いた。
「そんなことして、一国を敵に回す事になったら、テロリストの肩

書がつくかもしれないぞ」
「テロリストだろうが英雄だろうが、そんな肩書どうでもいいのよ」
腰に手を当てて、エフィルは胸を張る。
「魔王さえ倒しちゃえば、どうとでもなるわ」
「すごい自信だな…」
ため息交じりに呟いたラズマを無視し、彼女はフォーラス王家の証のペンダントを持ち主に返した。
そして、どこか申し訳なさそうにしながら受け取るアクス王子に、力強く笑って見せた。

「この、勇者エフィル様が、何もかも正義の星の下に裁いてみせるわ」

「やだ」
「断る」
「ごめんなさいねー」
口々に拒否…いや、拒絶の言葉を放って、三人の娘たちは誘いを突っぱねた。
前方でへらへらした笑顔を浮かべていた赤髪の男が、一瞬呆然とした後、肩を落としてうなだれる。おもむろに連れの黒ずくめを見やると、「お前もなんか言ってくれよ…」とすがり始めた。
しかし彼はどうでもよさそうにエリスティアたちを見ただけで、あさっての方角を向いてしまう。この青年は、無理やり赤髪のナンパに付き合わされているだけのようだった。
「なっさけなーい。一人でナンパもできないわけ？」
「あ、エドルたち来ちゃったわー。それじゃあ、またねー」
「ふん」
エリスティアはまるでおもちゃに興味をなくした子供のように、リシェルアとクリティスはまるで何事もなかったかのように、その場を離れた。黒髪に無念そうに引きずられていくナンパ男になど目もくれず、三人は後ろから歩いてきた男性組二人を迎える。
「おーい。
…何やってたんだ？」
すでに遠く離れて見えなくなってしまった見知らぬ二人組を、目を凝らして捜しながら、開口一番にエドルが尋ねた。
「ただのナンパ。やっぱ、あたしって魅力的なんだねー」
「当人はリシェルアを狙っていたようだな。真っ先に声を掛けられていた」
「うふふ…すぐに断っちゃったけれどー」
「…こっちは炎天下の中、パシリを引き受けてやったっていうのに

呑気なもんだな…」
先ほどからむっつりと黙りこんだままだったディオが、腕を組みこちらを睨む。
「創造主様のお使いができて光栄…の間違いでしょ？」
不機嫌なディオの顔を覗き込み、不敵に笑う「創造主様」。ディオはその肩を、うんざりだと腕で押し返すと、ポケットから五枚の紙切れを取り出した。
「おら、取ってきてやったぞ。
しかも、聞いて驚け。特等席だ」
「特等席？」
クリティスは、不審をあらわにした表情でディオの顔を覗いた。
「当日の、こんなギリギリの時間に、それほど良い場所が取れるとは思えないが」
「当たり前じゃねえか。なんと、最後列」
「えええええーっ？！」
当然と言えば当然だが、真っ先にエリスティアから不満が噴出した。
「そんなとこじゃ、見えないし！」
「今更文句言ったって、しょーがねーじゃん。
それに、どうせお前、式場内に出てくる屋台が本命なんだろうしな」
「う」
図星を突かれて、言葉に詰まるエリスティア。ディオは、諦観しきった顔で鼻を鳴らした。
「どうせ、そんなこったろうと思ったぜ。まあ、せいぜい背伸びでもして頑張れば？
お前の身長じゃ、それでも見えるかどうかだけど」
「ムカツクっ！馬鹿にすんなっ！」
毒づきながら、紙束に飛びつこうと手を伸ばしたエリスティアを、ディオは身長差を利用して素早く避ける。
「ちょっと！なんで渡してくんないの！」
「はん。これが欲しかったら土下座して、「今日から私はディオ様

の召使いです」って三回繰り返せ」
「バカじゃないの、この変態ドS！」
エリスティアと睨み合うディオの背後から、クリティスが紙切れを五枚とも、無駄のない動きで取り上げた。ディオの鋭い視線が、エリスティアからこちらに向けられるが、もちろんそれは無視した。
「本当に神界に戻る気はあるのか？」
さりげなくチケットを一枚抜き取ってくる創造主にそう尋ねると、
「あるってば！
いいじゃん、ちょっとぐらい寄り道しても」
あると言ってはいるが、ふてぶてしく胸を張るその態度に反省の色は皆無だ。なんやかやと理由をつけて、帰省するのを遅らせる魂胆なのだろうか。皆に察知されている時点で、無駄な行為なのだが。
「一応今回は付き合ってやるけど…明日には、絶対この国を発つからな？」
「わかってるってばー」
チケットを眺めて鼻歌交じりに返事を返すエリスティアを、エドルも呆れ顔で見つめている。
しかし、こうしてチケットを手渡してしまった今、愚痴や文句を言っていても仕方がない。息抜きという名目で、こちらもそれなりに楽しむしかないなと割り切り、クリティスは連れと視線を合わせた。
「さて、そろそろ行くぞ。もうすぐ式が始まるだろう」

2

「…見えないんだけどっ！」
人ごみの中に埋もれて、エリスティアがこの上なく不機嫌に怒鳴った。
チケットに示されていた最後列の立見席は案じた通りの場所で、メンバー内で一番背の高いディオでも、前の人の頭の間から、フォーラス城のバルコニーがかろうじて見えるという状態のようだ。一番背の低いエリスティアから見えるものは、せいぜい人の背中ぐらいだろう。
おまけに城の前の特設舞台から遠すぎる上、同じ立見席で暇を持て余した他の見物客の話し声がやかましい。エルフ族である自分の長い耳を持ってしても、大臣、貴族たちの賛辞や宮廷楽団の演奏もほとんど聞こえないのだ。
一体、自分たちは何のためにこんな苦しい思いをして炎天下の中立ち続けているのかと、自問せずにはいられなかった。
「なあ…おれもう帰りたいんだけど…」
隣りから、憔悴した表情のエドルが力なく訴えた。
「同感だな」
「そうねえ」
頷くと、この息苦しさの中にいてまったく動じていないリシェルアも、やんわりと同意してくる。
先ほどから前の客の背中を一心に睨んだままのエリスティアを一斉に見やると、彼女は振り返ってさらに眉を寄せた。
「…何」
「これでは何の意味もないから、帰らないかという話になっているのだが」
「あたしは帰んないよっ」
何をムキになっているのか、ぷいっとそっぽを向いてしまったエリ

スティア。
「さっき、散々屋台回ったじゃねーか。もう満足だろ？」
「やーだーっ！まだ、戴冠の儀始まってないじゃん！」
「戴冠の儀が始まったって、お前の背じゃ見えねーだろ。
ったく、神界に帰るのを遅らせたいからって、こんな強引な…」
エリスティアは、驚いた顔でエドルを見た。
「ば…バレてたの…？！」
「バレてたの、じゃねえんだよバカ。バレたくなかったら、もっと頭使って俺らを足止めしろ」
ディオも、汗ばんだ額を前髪ごと拭いながら顔をしかめた。
舞台では、一通りの挨拶と賛辞が終わり、宮廷演奏家たちの見せ場が始まっていた。この後二、三の曲が披露されてから、メインイベントである次期フォーラス王の戴冠がある。
「神の一族の長に向かってバカとは何！？」
「うわっ、耳元ででかい声出すな！ちょっとは周りに配慮しろよ！」
「思うんだけど、あんたたちって、あたしのこと創造主だって意識してないよね？ってゆーか絶対信じてないでしょ！だからそーやって、あたしに対してガサツな扱いをするんでしょ！
マジあり得ないんだけど。あんたたちこそ、もっとあたしに配慮してよ！」
「「いやだ」」
「リシェルアー！男どもが寄ってたかってあたしのこといじめるー！」
「はいはい、静かにしてねー」
今度は、連れがやかましくなってきた。演奏中のためいくらか周囲が静かになり、彼女たちの声が余計に際立っている。見物客のうっとうしそうな視線も、あちらこちらから刺さり始めていた。
いっそのこと、他人のふりを決め込んでやろうかと真剣に考え始めた頃、
「おい、あそこ」

ディオが、こちらの袖を引いて特設舞台の少し左横を指差した。
だが、そこを見ても、待機している大臣たちや他国からの賓客、それから警備兵が立ち並んでいるだけだが…
「奥だよ、奥。あそこからなら、式がよく見えそうじゃね？」
要人たちの後ろには、城を囲む分厚い塀がそびえている。しかし、一角が崩れていて修復中らしく、木製の足場が組んであった。足場は、大きな壺と豪華な生け花が立ち並ぶ、舞台の裏側まで続いている。そこにうまく潜り込めば、壺や花が死角になって、舞台の上からも観客席からも自分たちの姿は見えないだろう。
ディオは、そこを陣取ろうと言いたいらしい。
「…できなくはなさそうだが、万一見つかったらどうするつもりだ」
「見つかったら見つかったで、蹴散らす」
「相変わらずの非道だな」
最初からクリティスの同意など必要ではなかったのか、彼はそのままエリスティアたち三人を呼んで、その思いつきを話してしまった。エリスティアはまず迷くことなく賛成し、渋っていたエドルとリシェルアも、この人ごみと炎天下に気力が尽きて来たのか、結局頷き合っている。
したり顔で振り返ったディオに、クリティスは大きくため息をつくしかなかった。

城の敷地内に侵入するのは、こいつらと出会ってから二度目になるか。そんなことを考えながら、クリティスは周囲を警戒しつつ、木の板の足場によじ登った。
どうせすぐに気付かれると思っていたが、壺と花が案外上手くこちらを隠してくれている。その合間から覗くと、舞台上の王族たちと、その下の見物人たちが一望できた。
「どう？見える？」

エリスティアが、足場に腰かけて目を細めた。じっと舞台の上を窺っていたが、急にぷうっと頬を膨らませるなり、
「…後ろ姿しか見えないじゃん」
「文句言うな。近くで見れるだけマシだと思え」
当の提案者は、彼女の不満を無責任に突っぱねた。
当然と言えば当然だが、舞台上の主役たちはこちらに背を向けている。戴冠の儀の際には横を向くだろうから良いとして、正面の見物人たちに挨拶を述べている今は、特に見ていても楽しい事はなさそうである。
ようやくフォーラス王の有難いお話が終わった頃には、クリティスもエリスティアもエドルもディオも、暇疲れしてぐったりと項垂れていた。リシェルアだけが絶えずにこにこと皆の様子を眺めていたが、内心は同じように疲れ切っているに違いない。
「あんな上っ面と定型文だけのセリフを、よくもまあ太陽の位置が変わるまで延々としゃべれるもんだ」
ディオが小さな声で、渾身の皮肉を吐き出した。こんなに傍にいるというのに聞かれてはまずいと思ったのか、エドルが慌ててその口を塞いでいる。
舞台上がせわしく動き始めた。戴冠の儀が始まるようだ。
舞台に並んでいるのは、二人の男性と一人の女性。厳つい顔つきの年配の男は、ここフォーラス王国の現国王。その隣に礼装で立っているのは、彼の嫡子であるカイ王子。
修道服姿の女性は、国教である亜魔界神信仰教会の大司祭だ。フォーラス王から王冠を受け取り、カイ王子に戴冠を行う役目なのだろう。
ディオが、「ん?」と不思議そうに声を上げた。
「どうした?」
「いや、俺の覚え違いなら別にいいんだが…
現フォーラス王の息子って、確か双子じゃなかったか?」
「そうなのー?」

解説を求めて、リシェルアが振り返ってきた。しかしクリティスといえど、あらゆる世界のあらゆる王族を片端から覚えているわけではない。誰もが知る大国や、近年大きな動きのある国などについてはそれなりに情報を集めているが、ここフォーラスはそれほど大きくもなく、比較的平和を謳歌している国である。クリティスにとってはあまり興味をそそる対象ではなかったし、今回も素通りするつもりだった国なので、ほとんど内情がわからない。

素直にそう告げると、ディオが難しい顔で口元に手を当てた。

「…そうか…嫌な予感がしないでもないな…」

「嫌な予感？」

クリティスが聞き返した時。

突如、舞台の向こう側にいる観客たちがざわめき始めた。

戴冠の儀はまだ始まっていない。しかしながら、気付かれたわけでもないらしい。人々は、舞台よりも上の方を見上げて、あるいは指を差して何か言い合っている。

（なんだ？）

クリティスも、つられて上空を見上げる。が、あるのは雲と太陽だけだ。ならば、もっと後ろの方かと、上半身を反転させた。

3

「待ちなさいっ、カイ・ヴォールナ・フォーラス王子！」

高らかな女声が、上方から聞こえた。

見ると、クリティスたちのいる足場よりやや離れた塀の上で、誰かが仁王立ちになっている。

まばゆい日差しを片手で遮りながら良く観察してみると、長い茶髪を風に流した二十歳前後の女だった。背が高めでプロポーションも良く、それなりに美人なのだが、背中に負った体格に不釣り合いな無骨な大剣が、それをいろいろと台無しにしている。

「誰？」

ぽかんとそれを眺めていると、後ろからエドルが身を乗り出してきた。彼の位置からは塀の上が見えないのか、ぐっと首を伸ばしてこちらに体重をかけてくる。脆い木の足場が、ギッ…と音を立てた。

「おい、見えねえんだよ馬鹿エドル。どけろ」

「押さないでよっ、狭いんだから…」

ディオがエドルの身体を横に押しのけ、その傍にいるエリスティアは迷惑そうに身体を揺する。彼らの動きで、さらに足場が悲鳴を上げている。

一人用に作られた足場に、五人も座っているのだ。薄い踏み板もそれを支える細い角材も、とっくに限界を超えているはずである。

「子供みたいな喧嘩をするんじゃない。それに、騒ぐと気付かれ…」

「あなたの悪行は全部バレてるのよ！大人しくしなさい！」

クリティスの忠告は、塀の上の女性の声にかき消されてしまった。

舞台の上の王族たちと言い争いをしているようだが、今は連れの対応に精一杯で、聞いている余裕などない。

「危ねーなっ！二人して押すなよ！」

「あらあら、落ちついてー」

「あたしの方が危ないんだってば！押さないでって何回言えばわかんの？！」
「…いい加減に…」
再びクリティスが仲裁に入ろうとした、その途端。
「う、ひゃあっ？！」
「きゃあっ！」
とうとうエドルの下の板が、みしっ、と二つに裂けた。足場はそれを期に、けたたましい音と共に一気に崩れ落ちた。
彼はそのまま、後ろでその背中を押していたディオもろとも前のめりに倒れてくる。当然、その正面に座っていたクリティスも巻き込まれ、倒れて…
陶磁の壺が割れる甲高い音が、会場に響き渡った。生花と、壺の中に満たされていた水とが舞台の上に無残に飛散する。
ざわついていた会場は、一瞬にして沈黙した。
「わ、悪いクリティス…大丈夫か…？」
額をぶつけて痛いわ服は濡れるわ壺の破片で腕を軽く切るわ、はっきり言ってまったく無事ではないのだが、説教をするのは後だ。
「な……何なのよあんたたちっ？」
一番最初に一行に向かって声をかけたのは、あの茶髪の女だった。
「いきなり舞台裏から乱入してくるとか、何考えてるのよ」
彼女が人の事を言えた義理ではない。エドルが突っ込みを入れたそうに口を開きかけるのが見えたが、ディオの「逃げるぞ」の一言で、黙って踵を返した。
「くっ、貴様らもあの女の仲間か？！捕えろ！」
まだ戴冠の済んでいないフォーラス王子が、こちらを指差し号令をかけた。舞台を取り巻いていた警備兵たちが、一行の両脇からなだ

れ込んでくる。追われるようにして、五人は塀の崩れている部分から、忍びこんで来た時に通ってきた城の敷地内へと引き返した。
上手くどこかに隠れてやり過ごすか、撒いて兵士たちが散ったところを個々に撃破すれば何とかなるだろう、と思っていたのだが。
「ウィミーネ！」
塀の上から、またもや茶髪の女性の声が鋭く響く。その声が消えるか否かの内に、上空をさっと黒い影が横切った。途端、大風が進行方向から吹きこんできて、身構える間もなかった五人はたたらを踏んでしまう。
その間に、空を飛んでいた影が前方に着地し、立ちふさがる。それは、金色の髪の少女だった。エドルと同じ翼人族の真っ白な翼が、大きく宙を煽ぐ。
「あんなところに居たっていうことは、今回の事件と何か関係があるんでしょ？
逃がさないわ。重要参考人として、大人しくしててもらうわよ！」
「舞台の裏に潜むとは…貴様らも、亡き王子の名を辱める、あの女の仲間だな？！」
茶髪の少女の怒鳴り声と、後ろから駆けてきた警備団長らしき男の声が重なった。どちらもややこしく勘違いをしているようだが、あんな場所に居た自分たちの方に非があるという事は、クリティスも重々承知している。
何とか誤解を解いて、穏便に切り抜けたいのだが…
「あたしら無関係の第三者だしっ！あんたたちの事情に巻き込まないでくれるっ？」
「ふざけるな！ますます信用できん！」
…穏便に…
「面倒くせえな…もういっそ、全員ぶちのめして…」
「本性を現したわね…！どうせ、ここに潜んであたしたちを殺そうと待ち構えていた、カイ王子の手先か何かでしょう？
ぶちのめせるもんならぶちのめしてみなさいよ！」

…穏便には、無理かもしれない。
クリティスは、平和的問題解決の可能性をあっという間に潰した二人の背中を睨みながら、頭を押さえた。
ディオが上着の裾の下に隠し持っていた銃を抜くと、塀の上の娘も警備兵たちも、それぞれの武器を取りだした。なぜ彼が、戴冠式の見物に愛銃を携えているのかなど、問いただす気も起こらなかった。
「あらまあ、どうしましょう？とてもお話を聞いてくれそうにないわねー」
「奴らが余計な事を言ったり、あまつさえ得物を抜いたりしなければ、誤解を助長せずに済んだものを…」
恨み事を吐いても、既に後の祭りである。
さて、ここからどう撤退するか。クリティスは俯き少し考えると、周りの様子をのんびり眺めている烈火に小声をかけた。
「お前の炎で、兵士たちをどれくらい足止めできる？」
「ありったけの魔力を使えば、燃料なしでも一時間ぐらい燃やし続けられるわよー」
「いや、さすがにそこまではしなくていい。
三十秒。その間に、後ろの翼人を突き飛ばして強行突破する」
「その後は？」
傍で聞き耳を立てていたエドルが、期待の視線を向けて促してきた。
その深緑の瞳を真っ向から見据えると、クリティスはきっぱり言い捨ててやる。
「自由行動だ。それぞれ好きなように逃げ回って、せいぜい敵を撒いてくれ」
「はあ？！クリティス、まさかあたしたちのこと見捨てる気？！」
エリスティアが、あからさまに焦って怒鳴り散らした。エドルも、
「お前、ホントはすげー怒ってるだろ…」と小さな声で言っている。
が、クリティスはすがるような皆の視線を、冷たく振り払うようにして顔を反らした。
「それでは、解散という事で。逃げのびる事が出来たら、宿に集合

すること」
リシェルアが炎の魔法を放ったのを見届け、クリティスはすぐさま前方へと走りだした。不意を突かれて唖然としている翼人の少女を軽く突き飛ばして尻もちをつかせる。
「ちょ、ちょっとおお！」
遅れて動きだした四人の足音と、兵士たちの怒号を遠くに聞きながら、クリティスは後ろも省みずに敷地内を全速力で駆け抜けるのだった。

4

遅い、と独りごちて、ラズマは詰めていた呼気を吐きだした。
戴冠の最中に飛び込みカイ王子の所業を暴露したあと、アクス王子本人を登場させてその言葉の正しさを証明する。カイ王子が大人しくその事実を認めてお縄につくのであれば合図をこちらに送り、彼が逆上して何か仕掛けてくるのであれば、即座にこちらへと逃げてくるというのがエフィルの算段なのだが、いまだ遠くの会場の喧騒が聞こえてくるだけで、一向に進展がない。
やはり、彼女に任せてしまったのは間違いだったのか。
暇つぶしに開いていたスケッチブックと鉛筆に目を落とし、ラズマはもう一度ため息をつく。デッサンの終わってしまった城の画が、暇なのだということを一層感じさせてうんざりした。
裏門で待機しているイルファの様子を見に行くか、それとも会場の様子をうかがってみるか。これからの行動に思案を巡らせた時だった。
「奴ら、分かれて逃げたぞ！」
「こっちも散開して追え！」
遠くから無数の足音と共に、兵士たちの威勢のいい声が飛び交った。
（…やっと動いたか）
どうやらカイ王子は、素直に罪に服する気がなかったようである。
今いる場所は、フォーラス城と見張り塔とを結ぶ渡り廊下の下。アクス王子を連れたエフィルが逃げてくるはずの場所。ラズマの仕事は、二人が安全に脱出できるよう、ここで兵士たちを迎撃し、撹乱することだ。
ローブの裾を払うと、ラズマはスケッチブックを閉じておもむろに立ちあがった。無造作に積まれている木製の空き箱だの使い物にならない家具や武器だのといった粗大ゴミをそっと押しのけ、外へと這い出てみる。

まだ誰の姿も見えていないが、足音と喧騒は相変わらず聞こえ続けていた。仲間たちがやってくるのも時間の問題だろう。
まずは、威嚇のために派手な魔法でもぶっ放してやろうと、頭の中で呪文を練る。間もなくぱたぱたと足音が近づいて、視界に一人の少女の姿が現れた。
「エフィ……ん？！」
だが。それは、想定していた人物とはまったく違っていた。

あ…れは……

「うそ、待ち伏せっ？！」
赤銅のようなつややかな色をした髪を持つ小柄な少女は、ラズマに気付くと大きく後ずさった。こちらが一瞬呆けている合間に、身を翻して元来た道へと踏み出す。
「まっ…待て！」
「待つわけないでしょバーカ！」
背中を見せたままそう叫ぶと、彼女は走り去ろうとする。が、曲がり角の向こう側から近づいてくるまばらな足音に、再び足を止めて舌打ちをした。
「こっちか？！」
「追いこめ、逃がすな！」
同時に、数人の男たちの声も聞こえてくる。事情はわからないが、この少女も兵士たちに追われている最中らしい。
ラズマは、躊躇している彼女に素早く近づくと、後ろから胴に片腕を回し、抱え込んだ。驚いて大声を上げかけた少女の口をもう片手で塞ぎ、先ほど待機していたがらくたの山に飛び込む。
間一髪。
自分たちの姿は兵士たちの目に映らなかったらしく、彼らは騒がしく怒鳴り散らしながら粗大ゴミ置き場の前を通り過ぎて行った。
安堵のため息をついたのもつかの間、今度は至近距離から、予想外

の抵抗が始まる。
「いてっ！うわ、やめろって！」
抱え込んでいた少女が、いきなり拳を振り上げ暴れ始めたのである。
咄嗟に口を塞いでいた手を離すと、彼女は大きく肩で息をしながらこちらと距離を取った。
「っはー、はー、はー……」
どうやら、息ができなくて苦しかったようだ。涙を浮かべて睨んでくる金色の瞳から軽く目を反らすと、ラズマは「ごめん」と素直に謝った。
「助けてくれたのは良かったんだけどね？」
「…鼻ごと押さえてた事に、気がつかなかったんだ。本当に悪かったよ」
ひとしきり喘いで呼吸を落ち着かせると、少女は乱れた髪や服を整えはじめた。それから、ラズマの全身を隅々まで眺めて、
「…聖職者？」
ラズマが首から下げているペンダントに目を留め、尋ねる。
ペンダントトップの、太陽を象った紋章を指先で弄りながら、ラズマは答えた。
「ああ」
金色に輝くこのペンダントトップは、太陽に例えられる神の中の神、創造主に身を捧げた証である。身に纏った黒いローブも、戦闘服であると同時に、創造主教の僧侶の制服だ。
「創造主教の僧侶、ラズマ・ガーダー。神聖都市アトリクス出身だ」
「アトリクス出身？なんで魔界のアトリクスから、亜魔界のこんな辺鄙な国に来てるわけ？」
「それは、いろいろと込み入った事情があってね…
あんたこそ、なんで兵士に追われてるんだ？」
外の様子を確かめながら、ラズマは問い返した。エフィルの姿はまだ見えない。
「あ、う…その…

た、戴冠式の見物に来てたら、なんか変なゴタゴタに巻き込まれちゃって…成り行きで」

ラズマは、肩を落として後ろ頭を掻いた。

「変なゴタゴタ」とは、おそらくエフィルたちの乱入の事だろう。

そして、何故か無関係のこの少女が巻き込まれ、兵士に追われる羽目になっている。

つまり、自分たちの立てた「カイ王子の所業を暴く計画」は、既に失敗している可能性が高いということだ。

「…大きな剣を背負った、茶髪の娘に会わなかったか？」

念のために問うてみると、少女は目を丸くして頷いた。

「ああ、塀の上から大声出してた人のこと？

彼女にカイ王子の手先だとか言いがかりつけられた揚句、逃げるのを邪魔されて、こんな状況になってるわけだけど…」

何やら、自分がここでのんびりデッサンをしている間に、ややこしい事態が発生していたらしい。それも、仲間の勘違いを発端にして。

「そりゃ、あんなとこにいたあたしたちも悪かったんだけどー。だからって、いきなり決めつけるのはどうかと思うんだよね。

もしかして、君の知り合い？」

「…実はそれ、僕の仲間なんだ」

あまりの申し訳なさに少女の顔を見れないまま、ラズマは小さな声で言った。

「まじで？」

「詳しい説明は省くよ。

とにかく、ごめん。うちの連れが迷惑かけたみたいで」

「まあ、どんな事情があったのか知らないけど…君自身が悪いことしたわけじゃないし、気を落とさないで、ね？」

あっけらかんとした声でなだめられるも、罪悪感は増すばかりである。

しかし、このままじっとしているわけにもいかない。現状が把握できた以上、こちらも臨機応変に動かなくては。

気を取り直して、ラズマは深呼吸をし顔を上げた。
まず、この少女を無事に外へと脱出させるのが先だ。その後、裏門で待機しているはずのイルファの様子をうかがい、今後の対策を練らなくてはならない。空を飛ぶ事のできるウィミーネも、城の上空を経由して直接そこへと向かっているはずだ。…会場で兵士たちに捕まっていなければ、だが。
「あんた、名前は？」
「あたし？……エリスだよ」
少女エリスは、その黄金色の目を瞬かせて答える。
「エリス。僕は、今から裏門にいる他の仲間と落ち合うつもりなんだ。おそらくそこに辿りつけさえすれば、あんたも安全に脱出できるだろうから、一緒に行かないか？」
エリスは、ためらうことなく頷いた。
兵士たちの近づいてくる気配がないことを確かめて、木箱の隙間から静かに抜け出る。それから、先ほどエリスがやってきた方向と真逆の、裏門のある方へと二人は走り出した。
エリスのペースに歩調を合わせながら、ラズマは尋ねる。
「エリス、あのさ」
「何？」
「僕、あんたのこと知ってるんだけど」
「……へっ？」
隣りに並んだエリスは、呆けた顔でこちらを見上げた。
おかしいとは思っていたが、やはり気付いていなかったようである。というより、覚えていなかったという方が正しいだろうか。
「知ってるって…なんで？
あたし、いつ君と会ったっけ？五百年前？千年前？」
「いや、そんなに前じゃなくて。…例えば、今日の朝、とか」
「うーん、突っ込みがいまいちあっさりしすぎててつまんないなあ……
って、今日の朝っ？」

エリスは思いがけず足を止め、こちらをじっと観察し始めた。
そして。
「あ……あああああああああっ！！」
逃亡中だということなどすっかり忘れて、彼女は大声を上げたのだった。

5

散々城の敷地を駆けずり回り、ようやっと裏門が見えてほっとしたとき、

「…ちょっと待て」

共に走っていたディオが、こちらのローブのフードを引っ張った。

「どうしたのー？」

「しっ」

その端正な横顔を見上げて問うと、彼は口元に人差し指を当てる。

「誰かいる」

見張りの兵士だろうか。良く見ると、確かに門の陰に、誰かが立っている。

他の連れの安否も気になるところだが、休む間もなく追いまわされて疲れ切っており、早く安全な場所に避難したいというのが今一番の気持ちだ。兵士一人程度ならば、強引に突破しても問題なさそうだが…

リシェルアがそう告げると、ディオは首を横に振った。

「いや、警備兵じゃねえな…」

門扉の鉄格子の隙間から、真っ赤な後ろ髪が見えていた。警備兵は皆頭に兜をつけているはずだ。腰に下げた鞘も、城の兵士に支給されているような量産品などではなく、古めかしくも威厳のある作りをしている。

ディオが、いつでも撃てるように銃を下手で構えて、そろそろと近づく。だが、不意に足元の砂利が思いがけず大きな音を立て、彼はびくりと身体を震わせた。

その音は赤髪の男にも聞こえてしまったらしい。彼は呑気な声色で何か言いながら、ゆっくりと振り返った。

「ウィミーネか？首尾は…」

「ちっ！」
舌打ちをすると、目にもとまらぬ速さで銃を持ち上げるディオ。男の顔が完全にこちらを向くのと、彼がトリガーに指を掛けるのは同時だった。
「待ってディオ！」
発砲寸前、リシェルアはディオの腕を抱えるようにして押さえこむ。
「な…」
「っ誰だあんたら?!」
今度は、こちらの存在に気付いた赤髪が剣の柄に手をかける。が、扉越しにリシェルアの姿を見るなり、驚いた顔で動きを止めた。
「あ、あれっ?君は確か…」
「…何だ?リシェルアの知り合いか?」
男の豹変にいぶかしんだディオが、銃をしまいながら尋ねてくる。
リシェルアは小さく頷いた。
「知り合いっていうほどでもないんだけどー。
今日の朝、あたしたちナンパされてたでしょう?」
「ナンパって…俺らがチケット取りに行ってた時のか?」
「そうよー。
それで、彼がその、あたしたちをナンパしてた人ー」
「ま、まさかこんなところでまた会えるとは…」
背の高い赤髪の男は難なく門を開け放つと、さっとリシェルアの華奢な手を取り唇をつけた。それから、手慣れた仕草でリシェルアの背中に腕を回し、外へと促す。
「なぜここにいるのかはわからないが、君のような可憐な少女が、此度の事件に巻き込まれるのを見るのは忍びない。
さ、今の内に早くここから離れてくれ。そろそろ、兵士たちが押し寄せてくる」
そして今度はディオの方へ向き直ると、社交場の紳士を思わせる動きで丁寧に会釈をした。
「初めまして、レディ。俺は、トレジャーハンターのイルファ。イ

ルファ・アリゼルだ。
今日のこのよき日に、君のような麗しい美女に出会えるなんて、光栄に思いたいイタイ痛い！！」
「初めまして、優男。耳を引きちぎられるのはお好きかしら？」
赤髪の男イルファの片耳をつまんで力の限り引っ張りながら、皮肉のこもった笑みを返すディオ。リシェルアが慌てて止めに入ると、彼はまるで汚物でも見るような目でイルファを睨んだ。
「じょ、冗談だって…。あんたがれっきとした男だってことぐらいわかってるさ、「月傷のディオ」」
「…俺の事を知ってた上で冗談をかますとは、よっぽどのMだな」
旧知の仲、というわけではなさそうだ。おそらくイルファの方が、ディオの姿形とその悪名を知っていただけだろう。
「「烈火のリシェルア」と「月傷のディオ」か。面白い取り合わせだな」
イルファは後ろ手で門を閉めると、そこに寄りかかって言った。
「どうしてこんなところにいるんだ？まさか、カイ王子に雇われて、こっちの始末をしにきたわけじゃないだろうな？」
どこかで聞いたような誤解だった。
「なるほど。お前、あの茶髪の女の仲間か。
そいつにも同じ事言われたけど、こっちは式を見物に来て巻き込まれただの一般人だ。もっと言うと、あの女に誤解されて足止め喰らったがために逃げ遅れて、さらに誤解した兵士共に追いまわされる羽目になったわけだが」
「…エフィルの奴、また事を面倒な方向に…」
イルファは格子に片手を掛けたまま、がっくりとうなだれた。
「で、何か言う事は？」
「ああもう、疑って悪かった！すいませんでした！
それはさておき、城の中を逃げ回ってる間にうちの仲間を見なかったか？」
「お仲間ー？もしかして、今朝も一緒にいた黒い服の人かしら？」

リシェルアが首を傾げて聞き返すと、彼は数回首を横に振り、
「いや、ラズマの奴は他の場所で張ってるから大丈夫だとして、ウィミーネの方だな。翼人の、金髪の女の子だ」
「もしかして、エドルたちと離れる前に、立ち塞がってきたあの子かしらー」
確か、あの茶髪の娘エフィルも、「ウィミーネ」と叫んでいた気がする。
「逃げてくる前には見たが、逃げてる最中には見なかったな。俺らを追いかけて来てたのは、城の兵士だけだったと思うし」
「そうか……
…捕まったのか？いやしかし、あいつは空を飛べるから…」
向こうは向こうで、何やら事情があるようだ。が、わざわざ事件に首を突っ込む気にもならないし、手助けをしてやる義理もない。リシェルアでさえそう思っているのだから、ディオに至っては、手助けをしてやろうなどとは最初から考えていないだろう。
「どんなことに首を突っ込んでんだか知らねえが、まあ、せいぜい上手く立ち回るんだな」
「それじゃあ、あたしたちはこれでー」
「ああっ、ちょっと待ってくれ！」
さりげなく立ち去ろうとすると、イルファは慌ててリシェルアの腕を掴み、引き止めた。こちらが少し困ったように眉尻を下げるも、彼は構わず、最初にしたように柔らかく手を取り、
「今回の非礼のおわびに、ぜひとも君を食事に誘いたい。城下町の郊外に、夜景の美しいレストランがあってね。もちろん、料理の方も一級品なんだ。
良ければ、今日の晩にでもまた二人で会いたいと思うんだが、どうかな」
「せっかくだけれど、お断りするわー」
ためらいもせずにきっぱりと拒否すると、イルファは二の句が継げずに固まってしまった。

そこに、ディオの冷たい言葉が炸裂する。
「おわびとか言ってる割に、同じ目に遭ってる俺を一緒に誘わないあたり、下心が透けて見えるな。
口説くの、下手くそ」
「……」
言い返す言葉もないのか、イルファはリシェルアの手を握ったまま再びうなだれた。
その手をも無情に払いのけ、「さようなら」と笑顔で告げると、先に歩き出していたディオの後ろに小走りでついていく。
「とりあえず城は抜けたし、一応は安全だな」
「そうねえ…。
みんな、無事だといいけれど」
自分を置いて、さっさと先に逃げて行ってしまった相棒に思いを馳せながら、リシェルアは一つ、ため息をつくのだった。

6

しばらく城の適当なところに身をひそめてから、元居た城壁の破れ目まで戻ってきたクリティス。案の定、王族貴族はもとより庶民の見物客も避難してしまった後で、会場内はもぬけの殻だった。兵士たちも、一人残らず敷地内に散って、連れや乱入者たちを追いまわしていることだろう。平和な小国の警備体勢など、所詮この程度と言ったところか。

一応周囲を警戒しながら、舞台の横に回り込んで悠々と城下町に出る。直接宿に帰っても良いが、せっかく時間があるのでどこかで一息入れていこうと思い、クリティスは喫茶店を探し始めた。

（そういえば、町中だけではなく郊外にもあったな）

この国に滞在すると決まった時に買った観光ガイドブックに、郊外の丘に建つ優雅なレストランが載っていた事を思い出す。どうせ集合時間は決めていないし、戻るのが少し遅くなったところで、誰も咎めはしないだろう。そもそも、こちらの忠告も聞かずに騒ぎ立てていた彼らが、自業自得で引き起こした事態なのだから。

「…こっちか」

街中の人ごみを抜けて喧騒から少し遠ざかると、住宅街の合間を縫うように伸びている小道と、その先に、林に覆われた小高い丘が見えた。懐から手帳を取り出し、そこに挟んでいた城下町の地図を取り出して確認しながら上っていく。丘の林の上から、ぽつんとレストランの屋根が突き出ていた。

住宅街を抜けて、林に差し掛かった時。

「……？」

クリティスは、立ち止まって耳をひそめた。

聞こえてくるのは、昼から夕方に移り変わる時間帯の、涼しくなった風が吹き抜ける音。それから、木々の間を飛んでいく小鳥の鳴き声。

辺りに、人の姿はない。
少し首を傾げてから、再びクリティスは歩き始めた。が、すぐさま歩みを止めて周りを見回す。もう少し歩いてみて、また止まる。
足音が、聞こえる気がする。それも、こちらが歩けば向こうも歩き、こちらが止まれば向こうも止まるというように、まるで自分に合わせて動いている。エルフ族のクリティスの耳だからこそ聞こえるが、人間の耳では聞き取る事の出来ないような、ほんの微かな足音だ。
知らぬ間に、警備兵につけられていたのだろうか。それとも、他の誰かか――
普段の癖で腰のあたりをまさぐったが、レイピアを置いてきてしまった事を思い出し、眉を寄せる。まず宿に戻って武器を身につけておくべきだったと後悔しても、遅い。
万が一襲われても、素手の自分が対処できるか程度の相手かどうかは、わからない。そしてすぐそばには、目的地のレストランがある。
（…あそこに駆けこむか）
相手の正体が定かでない以上、こちらから動くのは危険だ。そう判断したクリティスは、とりあえず逃げをうつことに決めた。レストランに駆けこんで、相手が諦めればそれでよし、追いかけてくるようであれば、相手を見て対処法を考えればいい。
もう一度辺りを見回し、相手の姿が視認できないのを確かめてから――クリティスは、軽やかに地面を蹴った。
しかし。
「おい、クリティス！」
「！」
聞き覚えのある声に呼ばれて、クリティスは咄嗟に、踏み出した足を軸にして振り返った。
いつの間にかエドルが、背後の少し離れたところに立っており、こちらに向かって手を振っている。突然のことに目を丸くしていると、クリティスが何のリアクションも取らない事に焦れたのか、むっとした表情で彼は歩み寄ってきた。

「呼んでるんだから、さっさとこっち来いっつーの！
どこ行くんだよ、宿はあっちだろ」
「あ――いや……
一息入れよう思って、レストランに…」
「…お前…おれら見捨てて一人で逃げた挙句、呑気にティータイムかよ…」
ジト目で睨まれたがそれはよそに、クリティスははっと我に返って周囲を見回した。
その挙動を見たエドルが、不思議そうに顔を覗き込んでくる。
「…どうした？」
「いや……
エドル。ここに来るまでに、誰か見なかったか？」
「は？」
質問の意味がわからないというような顔で、深緑の目を瞬かせるエドル。
「誰かって？」
「どうも、何かにつけられていたような気がしていたのだが…」
「警備兵か？おれがここに来る時には、それらしい奴は見なかったけど」
「……そうか」
どちらにしろ、ここでエドルと合流した時点で気配が消えたという事は、おそらく追手ではないのだろう。
ふう、と大きく息をつくと、クリティスはエドルの顔を見据えて尋ねた。
「ところで、お前はどうしてここにいるんだ」
すると、エドルは一変して不機嫌に腕を組み、大げさにため息をつく。
「どうしても何もねーよ。城から抜けて人ごみに紛れてたら、お前がすたすた住宅街を上ってるのが見えたから、慌てて追いかけて来たんだよ。

集合場所間違えてんのかと思ったじゃねーか」
「…自分で決めた集合場所を、自分で間違えるわけはないだろう。お前の軽い脳みそならともかく。
それに、リシェルアはどうした？お前と一緒に逃げたものと思っていたのだが」
「お前、今あっさりと失礼な事を…まあいいや。
リシェルアとは、逃げるときにはぐれたよ。ついてきてるかと思ったら、いつの間にかいねーんだもん」
肩を竦めると、「あいつ、基本マイペースだから」とエドルは付け足した。どうも、それほど心配しているわけでもないようだ。その態度が意外だったので唖然としていると、エドルは横目でこちらを見て、怪訝そうに顔をしかめた。
「まあ、たぶん何とかなってるだろ。エリスかディオと一緒に逃げてる可能性もあるし。
とにかく、さっさと戻ろうぜ。あいつらも戻ってるかもだしさあ」
「あ、ああ」
曖昧な返事を返すと、彼は怪訝な表情を元に戻さず、こちらの考えている事を探るようにじろじろと顔を眺めてきた。が、無表情からは何のヒントも得られなかったか、今度は俯いて唸り始める。しばらくしておもむろに顔を上げると、
「わかった。もしかして、さっきのことまだ怒ってる？」
「怒っていないとは言わないが、今は別に、そのことを考えてたわけではない」
「じゃあ、誰かにつけられてた事がまだ気になってんのか？
そんなに怖いなら、おれが後ろについて護衛してやってもいいけど」
「別に。
それに、お前も丸腰のままなのだろう？護衛になるとは到底思えないが」
「なんだ、どっちもはずれかよ…。お前って、何考えてるかほんっと読めねーなあ…」

なぜか残念そうにうなだれると、エドルはとぼとぼと先に歩きだした。護衛してやってもいいと言ったくせに結局前を歩くのかと、失笑を禁じ得なかったが、先の心遣いに免じて突っ込むのは止めておくことにする。

気付けば太陽は大きく傾き、日差しの色も赤みが増して、下に見える住宅街の家々の壁を染め上げている。背にしたレストランが少し名残惜しかったが、夕食時に連れを誘ってもう一度来るのもいいかと思い直し、そこを後にするのだった。

囚われた星

「…どう？」
スケッチブックを小脇に抱え、ラズマは、外壁に上り小さな窓に張り付いて中を覗いているイルファに声をかけた。
「……暗くて見えない。いるかどうかまではわからないな」
相手は壁を蹴って地面に降りると、左右に首を振った。
「しかし、三人が捕まった可能性は高そうだ。逃げ切れたのなら、間違いなくこっちと連絡を取ろうとするだろう」
「エフィルのノリなら、暴れて脱獄して来そうなもんだけど、さすがに無茶か」
ラズマは苦笑して、すっかり日の暮れてしまった空を見上げた。
「これからどうしよう？」
「どうする何も、助けるしかないな。
今夜中に処罰されることはまずないだろうし、一旦城から離れて作戦を練ろう」
やれやれとため息をつき、イルファは牢屋の窓を背にして戻り始めた。ラズマもそれに続き、二人は裏門の鉄格子を上って外へと脱出する。
城から少し離れると、イルファが尋ねてきた。
「ところで…今回の事件、首謀者はカイ王子じゃないって本当か？」
「ああ。「首謀者はカイ王子じゃない」っていうより、「カイ王子をたぶらかして裏で糸を引いている奴がいる」って感じだけど」
胸元で揺れる太陽の紋章を指で弄びながら、答えるラズマ。
「ウチの教会から流れて来た情報だ」
「教会からってことは、今回の事件は、宗教勢力争いが絡んでるのか？」
「さあ、どうかな…でも、僕もそう思ってる」
ラズマは、瞬き始めた星空を眺めて続けた。

「少なくとも、カイ王子が単独で暴走して、アクス王子を始末しようとしてるわけじゃないのは確かだ。僕たちが、それをひっくるめて解決する羽目になるかどうかはわからないけど、一筋縄じゃいかないだろうね」
「ぜひとも避けたいな、それは。
ただでさえ、今日はとんでもない奴と出くわしたっていうのに…」
「ディオ・ライアネイズのことか？」
イルファは、げんなりした表情で頷いた。
「奴に関わると、ろくなことにならないって話だ。事件の関係者じゃなくて、本当に良かった」
引きつった顔のイルファを見て、思わずラズマは吹き出しそうになってしまった。
「まあ、彼に救援を頼むような事にならないよう、僕たち二人で何とかするしかないな」
「そうだな…」

ラズマとイルファがフォーラス城から抜け出した頃、入れ替わるようにして、二人の少女が真っ暗な牢の中に押し込められた。
「いたっ！突き飛ばさないでよ！」
「はっ、どうせ明日には公開処刑されるんだ。大人しく、遺言でも考えてるんだな」
看守のせせら笑いと牢の扉の閉まる音が、続けざまに闇の中に響いた。
看守が去って辺りが静まると、エフィルは小声で呟く。
「だーれが大人しくしてるもんですか」
そして、突き飛ばされたときに打った翼の付け根を、しきりにさすっているウィミーネを振り返り、
「ウィミーネ！「腕」の調子は？」

「いたたた…うん、大丈夫だよー。いつでもいける」
ウィミーネは、左腕の袖を大きく捲り上げた。
長袖の下から現れたのは、腕の皮膚に直接彫りこまれた、無数の表印呪文（ルーン）。高等魔術師だけが施すことのできる、文字そのものに魔力が封じ込まれているという特殊な呪文である。
ウィミーネが左腕に意識を集中させると、表印呪文は淡く輝きだした。
「魔力も結構溜まってるみたい。しばらく使ってなかったから」
「好都合だわ。さあ、こんな陰気な牢屋、思いっきりぶっとばしちゃいましょ」
「ま、待って待って！せめて、もうちょっと夜が更けてからにしようよ。
まだお城の人たちも働いてるだろうし、すぐに囲まれちゃうよ」
意気込むエフィルに、左腕をいそいそと隠しながらストップをかけるウィミーネ。
一瞬不満そうに彼女を睨んだエフィルだったが、少し考えてから、
「それもそうね」と冷たい牢屋の床に座り込んだ。
「みんなが寝静まった頃に、暴れるとしましょうか」
「あ、あんまり暴れちゃだめだよ…」
「それにしても、ラズマとイルファは何やってんのかしら…。か弱い女の子たちが捕まってるっていうのに、助けにもこないで逃げ出すなんて、見下げ果てた奴らだわ。
アクス王子の行方もわからないし」
小窓から星空を見上げて、エフィルは呆れのため息をついた。

謎の男

「仕事屋の、ディオ・ライアネイズだな」
その男が突如現れたのは、あの騒動の後、宿に全員無事に集合し、クリティスの提案で郊外の例のレストランで夕飯を取っていた時だった。
フードとマフラーで顔をほとんど隠し、夜景きらめく優美なレストランに似つかわしくないものものしい服装をした男は、ふらりと店内に入ってくると、真っ直ぐクリティスたちの元へとやってきて、ディオの肩を掴んだのである。
「……怨恨絡みの決闘はお断りだぜ」
名指しされた本人は、フォークをくわえながら男を見上げて、面倒くさそうに言う。まず仇討ちを疑うという事は、今まで、よほど他人の恨みを買って生きていたということだろう。
しかし、謎の男はゆっくりと首を横に振ると、
「あんたを見込んで、仕事を依頼したい」
「悪いが、実は今他の仕事を請けててね。明日には、そこのわがまま娘を護衛しながらここを発たなきゃいけねえんだ。違うところを当たってくれ」
取り付く島もなくそう言い放つと、ディオは再び食事へと戻った。
「誰がわがまま娘だって？」とエリスが抗議の声を上げる。
諦めるかと思ったが、男はしばしフードとマフラーの中で沈黙すると、少し声を低めてこう言った。
「少なくとも、明日、お前たちがこの国を発つことは難しいだろうな」
「どういうことー？」
意味深な言葉に問い返したのは、リシェルア。
男は話を続ける。

「今夜、城でまた事件が起こるはずだ。それによっておそらく、城下の出入りや国境の警備が強化される。
戴冠式の時に舞台裏に潜り込んで、乱入者の一味だと勘違いされたままのお前たちが、簡単にそれをかいくぐれるとは思えない」
「ほう。何やら私たちの事をいろいろとご存知のようだが…
今夜事件が起こるという証拠は？」
クリティスがティーカップに口をつけながら訊くと、
「ない」
男は、あっさりと言い放った。
「おいおい、話になんねーじゃんか」
「俺の話を信じられないというのであれば、今夜、実際に事件が起こってから引き受けてもらっても構わない。
明日の朝、俺はここで待機している。興味が出たら、話を聞きに来てくれ」
こちらの返事も聞かず、男は店を出て行ってしまった。彼の異様な姿に驚いていた他の客の目線とざわめきが、痛い。
「人の食事を邪魔して、あまつさえ居心地悪くしていくなんて、人間の片隅にもおけない奴だね」
エリスが、身体を縮めて呟いた。
「ディオ、どうするのー？引き受けるのー？」
リシェルアに顔を覗きこまれた仕事屋は、ずずっと一口、食後のコーヒーをすすった。
「明日まで待ってみてから考える。本当に事件が起こって警備が強化されるんだったら、あいつが言った通り、どうせしばらく動けなくなるだろうし、暇つぶしに請けてみるのもいいな」
「依頼主の正体もわからないのに？」
エドルが嫌そうに眉をひそめると、ディオはカップを置いて、ため息をつく。
「依頼主が誰だろうが目的がなんだろうが、金さえもらえりゃいいんだよ」

「貴様が非人道な仕事もぽんぽん引き受けようとするのは、その態度が原因か」
天空界からフォーラスに来る間にいくつか持ちかけられた危うい依頼を、何の躊躇もなく引き受けようとしていたディオを、皆で諫めていたのを思い出すクリティス。
「おれらと一緒にいる間は、あんまりヤバイ仕事引き受けないでくれよ…お前一人の時ならともかく、おれらまでとばっちり受けるような事になったらシャレになんねー」
「んなヘマしねえよ。これでも、自分の力量はわきまえてるっての。とにかく、事件が起こらなければ引き受けない。事件が起こったら、話だけでも聞いてみるさ。その時は、お前らは好きにしろ」
「はいはい、わかったわー」
まだどこか不満げなエドルをなだめるように押さえ、リシェルアはものわかりよく頷いた。面倒事好きなエリスは目を輝かせている。
クリティスも、「まあ、貴様一人で引き受けるというなら」としぶしぶ了承した。

真夜中の脱走劇

満月も傾きかけた深夜に、静寂を破って爆音が響き渡った。

「くそっ、牢の方か！」

「早く瓦礫をどかすんだ！」

一日に二度も事件を起こされ、そのたびにこき使われる警備兵たちはたまったものではないだろう。可哀そうだとは思うが、同情はしようとも思わなかった。

「ウィミーネ、大丈夫？」

瓦礫の陰に隠れながら、エフィルは横目で仲間の様子をうかがった。溜めていた魔力を放出した左腕を押さえながら、呼吸を整えていたウィミーネは、目を合わせて頷く。

「ちょっと疲れたけど、逃げれるよ」

「そう…辛かったら早めに言うのよ」

二人は短く小声でそう交わすと、崩れた牢屋の壁から通路へと出、瓦礫で塞いだ方とは反対側に向かって走り出した。

「当面は、取られた武器を回収する事を目的にしましょう。その後は、脱出できるようだったらすればいいし、時間を稼げば、ラズマたちが応援に来てくれる可能性もあるわ」

「うん！」

嫌な予感というよりは、確信に近かったかもしれない。

仲間を助け出そうと、フォーラス城の前に立った矢先に、この爆音である。何があったかは、見るまでもない。

ラズマは、独り言のようにイルファに言った。

「…帰ろうか」

「気持ちはよくわかるんだが、一応援助に行った方がいいと思う」
「冗談だよ」
八割方本気だったが。
「武器は回収されてるだろうから、今のはたぶん、ウィミーネの「あれ」だな。エフィルの指図だろう」
「ってことは、少なくとも女子二人は無事だな。アクス王子の消息はいまだ不明、と」
ラズマとイルファは顔を見合わせ頷くと、裏門に素早く駆け寄り、先ほどはいなかった門兵たちに飛びかかった。脱走者の襲撃に気を取られ侵入者への警戒が緩んでいたのか、唖然としている彼らを魔法と剣とで打ちのめすと、門扉を開放し再び城の敷地へと踏み入る。見張り塔には非常事態を告げる明かりが煌々と灯され、鐘の音が響いていた。このままのこのこと走り回っていては、すぐに見つかってしまう。せっかく助けに来たというのに、あの二人が先に脱走したせいで逆に身動きが取りにくいとは、やるせない。
「渡り廊下の下に、食堂に続く勝手口があったはずだ。極力見張り塔の下に張り付いて、死角を歩いて行くしかないね」
「「灯台もと暗し」ってやつか」
塀の内壁を伝い、警備の目をかいくぐって見張り塔の足下までくると、二人はそっと渡り廊下に回り込んだ。昼、ラズマが隠れていた粗大ごみの山が、暗がりにうっすらと見える。
勝手口の鍵を壊して城の中に入ると、足音や人の声に混じって、今度は剣を打ち合っているような金属音も聞こえてきた。
「もしかして、エフィルたちが交戦してる音かな?」
「わからんが、そうだとしたらますます俺たちの存在意義がなくなるな…」
「と、とにかく合流しよう。アクス王子の無事も気になるし」
徐々にしぼんでいく意欲を無理やり奮い立たせ、明かり一つ灯されていない食堂を抜けると、二人は金属音の聞こえる方へと向かうのだった。

牢屋からほど近くにある物置から自分たちの武器を取り返したエフィルたちだったが、今度は、次々と襲ってくる兵士たちに苦戦させられる羽目になった。

「きりがないわね…」

ダガーを手に肩で息をしているウィミーネの様子を見ながら、ため息をつく。弱音も吐かずについてきてはいるが、体力が底をついているのは明らかだ。

一方、絶え間なくかかってくる兵士たちに手間取りすぎて、牢屋から思った以上に進めていない。これでは、脱出する前に力尽きてしまう。

「…一旦、どこかに隠れましょう。このまま戦い続けてたんじゃ、倒れてしまうわ」

「そ、そうだね…」

周囲に注意を向けながら、二人は近くの部屋の中に飛び込んだ。部屋の真ん中に粗末なテーブルが一つあり、椅子が散乱している。武器が無造作に立てかけてあったり、つい先ほどまで使われていた形跡があるところを見ると、警備団の詰め所だろう。もちろん、兵士たちは皆出払っていて、ねずみ一匹見当たらない。

エフィルはしゃがみこみ、鍵をかけた扉に耳をつけた。

足音がこちらに向かってきている。人数は五、六人程度だろう。気付かずに通り過ぎてくれればよいのだが、もしかすると、一旦この部屋に戻ってくるつもりなのかもしれない。隠れ場所にこの部屋を選んだのは失敗だったかと、エフィルは今更になって後悔し始めた。

しかし。

「うわ、誰だっ！」

足音が急に止まり、扉の向こうで怒号が飛んだ。それから剣を打ち合う音が聞こえ、すぐに呻き声がいくつか重なる。
部屋の扉がコンコン、と音を立てた。
「エフィル、ウィミーネ。ここにいるのか？」
「ラズマっ！」
ほっと胸を撫で下ろしながら、エフィルは扉を開いた。見知った二人の男が目の前に立っている。
「もう、助けに来るのが遅すぎるのよ！今まで何してたの！」
部屋に二人を招き入れて扉を閉めると、開口一番、エフィルは怒鳴った。
「それはこっちのセリフだ。いつまで経っても来ないからどうしたのかと思えば、いつの間にか捕まってるんだからな。
戴冠式の時に、一体何があったんだ」
イルファに尋ね返され、エフィルとウィミーネは交互に、戴冠式の時にあった出来事を語った。
エフィルが戴冠式に乱入しカイ王子の悪事を暴いている最中に、舞台裏から五人の不審者がなだれ込んできた事。逃げようとした彼らを問い詰めるためにウィミーネが立ち塞がったが、不意を突かれて突き飛ばされ、しりもちをついたところを警備団に拘束されてしまった事。それを助け出そうとしたエフィルも、結局警備兵に囲まれて捕まってしまった事。隠れていたアクス王子は、自分たちにも行方がわからない事。
「…なるほど。その五人の不審者ってのが、エリスやディオ、リシェルアだったわけか。
あと二人は見なかったけど、一緒に捕まってないってことは上手く逃げたみたいだな」
ラズマがそう呟くのを聞いて、エフィルは眉をひそめた。
「何よ、そいつらの事知ってたの？」
「敷地内を通って、俺たちの方に逃げて来たんだ。巻き込まれたんだと思って逃がした」

「はあっ？！なんで逃がしちゃったのよ！
舞台の裏から出てくるなんて、明らかにおかしいじゃない！絶対カイ王子の関係者だわ！」
エフィルはいきり立って、イルファを怒鳴りつけた。
彼は腰を引きながら顔の前で両手を振ると、弁解を始める。
「いや、その、だって、舞台の裏から出てきたとか、そんな事情知らなかったし、それにエリスやリシェルアは朝のナンパで……っ！」
ここで、イルファは大慌てで自分の口を塞いだ。が、耳ざとく聞いていたウィミーネが軽蔑の視線を向ける。
「「朝のナンパ」…？」
「…ちょっと、「ナンパ」ってどういうことよ」
エフィルも、立ち上がったまま赤毛を睨み下ろした。
「今日の朝、二人してどっか行っちゃったから何をしてたのかと思えば…
大事な作戦を前に、呑気にナンパしてたってわけなのかしら？」
ラズマの方にも視線を向けると、彼は気まずげに「僕は無理矢理誘われただけで…」などとごにょごにょ言っている。しかし、そんな言い訳にほだされるエフィルではない。
「……どうやら城を脱出した後に、重要会議を開く必要がありそうね……」
「「……」」
ラズマとイルファは、彼女の放出する威圧感に圧倒され、正座したまま押し黙ってしまった。
明らかに冷たくなったエフィルの声が、二人に命令する。
「ほら、さっさと立って。まずはここを脱出するのが先よ」
合流して早々重苦しい空気に包まれた四人の男女は、部屋を出ると、出口を目指して再び城の中を駆け出した。

その夜、フォーラス城を抜け出した四人がどこに潜んだのかを知る者は、誰一人としていない。

謎の依頼

翌日。荷物をまとめて宿を出たクリティスは、城の方に大勢の町人が向かっているのを目撃し、首を傾げた。

（…何だ？）

他の連れはまだ出立の準備が整っておらず、エリスティアに至ってはクリティスが宿を出る間際に戸を叩いて、やっと起きたというところだ。出発にはまだまだ時間がかかるだろう。

一度宿を振り返り誰も出て来ないのを確認すると、クリティスは道に溢れる人波にまぎれ、フォーラス城へと向かった。

着いた事には着いたのだが、昨日の戴冠式もかくやと言わんばかりの人ごみに揉まれ、城の様子を見るどころか、足を踏まれぬよう足元に注意を払うのがやっとである。ようやく足を止めて顔を上げても、目の前には人の頭、頭、頭…。クリティスは、思わずため息をついた。

やじ馬が減るのを待ってから、もう一度来るべきか。持ってきてしまった荷物も重たいし、と、踵を返しかけた時。

「嫌な世の中じゃのう…」

傍から、不安げに呟く老人の声が聞こえた。

振りかえると、杖をつき腰を大きく曲げた老爺が、人を掻きわけて城とは反対の方へと歩いていく。もしかして、と、クリティスは彼の身体を咄嗟に支えて、声をかけた。

「おお、ありがとうお嬢さん。助かるよ」

「つかぬ事を伺うが、貴方は今、城の様子がどうなっているのか見て来たのか？」

「ああ、見て来たとも。あの美しい白亜の城が脱走した賊に壊されたと聞いて、飛んで見に来たのじゃ」

少し人ごみから離れた広場まで老人を連れてくると、彼は腰をさすりながらベンチに座り込んだ。クリティスも横に座って一息つくと、質問を投げかける。

「賊に壊された、とは？」

「何でも、昨日の戴冠式を台無しにした不届き者を捕らえたは良かったのじゃが、昨晩、捕らえきれなかった仲間の補助を受けて脱走したそうじゃ。その時に、牢と正門が大きく壊されたそうでのう…」

老人は、肩を落とした。

「はあ…一年前にアクス王子様がお亡くなりになった時も、大層心が痛んだというのに…こうしてカイ王子様の戴冠まで台無しにされ、城まで壊され…

ディアン様は、我々フォーラスの民をお見捨てになってしまったのだろうか」

神妙な面持ちで、彼は顔の前で手を組んだ。彼の捧げる祈祷に、クリティスも静かに耳を傾ける。亜魔界を見守る男神、ディアン神への祈りだった。

やがて彼は深呼吸をすると、再び話し始めた。

「こうして独りでお祈りを捧げる事はできるが、教会が閉まったままでは大司祭様のお伝えくださる御言葉も聞く事ができぬしのう」

「教会が閉まっている…？」

クリティスは、思わず聞き返した。

老人は不思議そうに、皺だらけの瞼を上げてこちらを見たが、

「おお、もしかして、旅人の方じゃったか。

そうなのじゃ。ひと月前から突然門が閉じられてしまって、講話もとんと開かれなくなってしまった」

フォーラス城下の住宅街には、大きな教会があったはずである。おそらく彼は、そこの事を言っているのだろう。

亜魔界神信仰は、この国の国教である。多くの人間がその教会を利用しているはずだ。それが突然締め切られてひと月も音沙汰なしとは、さぞかし住民は不安だろう。

「教会を出入りする僧侶や神父様の姿もない。どうしたのかと心配だったのじゃが、昨日の戴冠式で大司祭様のお姿を拝見できた。それが唯一の救いじゃ…」
「……」
クリティスが黙り込むと、老人は申し訳なさそうに言った。
「いや、せっかくこの国を訪れてくれた旅の方に、こんな暗い話をしてすまんのう」
「そんなことはない」
朝風に乱れるゆるいウェーブのかかった茶髪を耳にかけながら、首を振るクリティス。
「見れば、エルフ族の方とお見受けする。年寄りの与太話とも言えぬ陰気な愚痴に、付き合ってもろうて申し訳ない」
「同じくらい年を取っていたとしても、住むところが違えば境遇も違う。考えることが違えば話も違うものだ。ためにならない話など、私にとっては一つもない」
家まで送ろうかと提案すると、すぐ近くだからとそれを断って、老爺は去って行った。
「……ふむ」
クリティスは腕組みをして、聞いた話を整理し、考え込んだ。
（一応、城下の門を確認していくか）
荷物を持ち上げベンチから腰を上げると、クリティスも歩き出す。
朝日が、城を見に来る大勢の住民たちに強い光を投げかけていた。

「んもおおっ！どこ行ってたのクリティス！」
先ほど見た時はパジャマ姿で寝癖を直していた寝坊娘が、今は宿の玄関で仁王立ちになってクリティスを出迎えている。
「何十分待ったと思ってんの？！創造主様を待たせるなんてとんだ無礼者だね！」

「毎朝貴様の準備に待ちぼうけを食らわされている私たちの気持ちが、よくわかっただろう」
「それとこれとは話が別！」
「何が違うと言うんだ」
思わず彼女を横目で睨んだクリティスに、入り口前の階段に腰を下ろしていたリシェルアが笑顔を向けた。
「でも、本当にどこに行ってたのー？
もしかして、この騒ぎと関係あるのかしらー」
途切れることのない、通りの人波を指すリシェルア。
「ああ」
一旦荷物を地面に下ろして、クリティスも階段に座り込んだ。
ディオが、思い当たったらしく応える。
「城で何かあったのか。昨日の奴が言ってた通り」
「その通りだ。聞けば、昨日の戴冠式で騒ぎを起こした不届き者が脱走したとか」
「うっわあ」
事情を察したエドルが、嫌そうに眉を下げる。
「警備はどうだ？」
「念のために城下の入口を見て来たが、数が多くてとても抜けられそうにないな。詰めている兵士の誰かは、私たちの顔を覚えていそうだ。
それに、巡回している警備兵も増えている。フォーラスを出るどころか、町中を歩くのも危険かもしれない」
皆、絶句してしまった。それと同時に、急に人目が気になり出し、五人はそそくさと宿の中に戻る。
「不届き者っていうのは、あのエフィルっていう女の人で間違いないでしょうねー」
リシェルアが、自分の荷物の傍らで呟いた。ディオも、指折りながら人名を挙げる。
「俺らが会ったイルファっていうトレジャーハンターとかウィミー

ネっつー翼人、エリスを助けたラズマって僧侶も奴の仲間だろうな」
「捕まっていない仲間の手引きで脱走した、とも言っていた。彼女たちの内の誰かが逃げ延びたのか、それとも他に仲間がいるのか…そこら辺はよくわからないが、とにもかくにも、あの覆面の男の言った通りになったという事だ」
クリティスは、ディオを見上げた。
「どうする。話を聞きに行くのか」
「仕方ねえから行く。どんな仕事かは想像もつかねえけどな。奴の正体も良く分からねえし…」
彼の面倒そうな表情を見て、クリティスは再び語りだした。
「…その男の正体についてなのだが…」
「あ？」
四人は、一斉に彼女に顔を向ける。
「おそらく、あのエフィル一派と面識がある人間ではないかと思うのだが」
「どういうこと？」
エリスティアが首を傾げると、クリティスは彼女の方を見て、
「奴は、昨晩事件が起こって城下の監視が厳しくなると言っていた。つまり、エフィルたちが脱走するということを、あらかじめ知っていたことになる。
ということは、エフィルたちの脱走計画を聞いていたか、もしくは、彼女たちが大人しく処罰されるのを待つような潔い人間ではないという事を認識していたわけだ。どちらにしろ、彼女たちと面識がなければわかるわけがない」
「っていうことはー」
リシェルアが、頬に手を当ててにこりと笑った。
「その覆面さんが依頼しようとしている仕事は彼女たちに関係することであって、それを解決すれば警備の包囲網が解ける可能性がある…っていうことかしらー？」
「そうだ」

「なるほど。ディオに任せて知らぬ存ぜぬを貫き通すより、協力した方が手っ取り早いって話か」
エドルが頷きながらそう言うと、ディオがうざったそうに顔を歪めた。
「…言っとくが、今更手伝うとか言いだしたところで絶対に礼なんか言わないし、出さねえからな…」
「別にそんなもの、期待していない。効率的な方法を提案したまでだ」
それに個人的にも興味が出て来たし、と呟くと、ディオは天敵でも見るような嫌悪の視線を向けて来た。なんでもかんでも首を突っ込むようなクリティスの態度を、彼はお気に召さないらしい。彼は彼で、人道に反れたとんでもない仕事を受けようとしたりするのだから、お互い様だと思うのだが。
「さて。話がまとまったところで、みんなで話を聞きに行きましょーか。
今日のおすすめデザートは何かなー」
「お前、さっき朝飯食ったばっかなのに、またなんか食う気なのか」
「もちろん。
ちなみに、クリティスの奢りで！あたしのこと待たせた罰ね！」
「ならば私は一体、何度貴様に奢ってもらわなくてはならないのだろうな」
「だからあ、それとは話が別だって言ったでしょー！」

2

「やはり来たか」
昨日の謎の男は、朝日差し込むレストランのテラスで、一杯の水を前に座っていた。あの怪しい装いは相変わらずで、周囲のさわやかな風景から完全に浮いている。一同が、思わず近づくのを尻込みしたほどだった。
同じテーブルについた一行に、店員が水を配って注文を取りに来る。その間は営業スマイルを保っていたが、離れる間際に他の店員とひそひそ何か話しているのが聞こえてしまった。
「…もうちょっと、周りへの気遣いを態度で表わしたらどうなんだよ。
せめて、コーヒーぐらい注文するとかさあ…」
耐えかねたエドルが、男を睨んでいちゃもんをつけた。苦情を受けた本人は身動き一つしないまま、抑揚の薄い声で答える。
「コーヒーは飲まない性質だ」
「馬鹿にしてんのかこいつ」
「まあまあ。
それより、昨日の依頼の事なのだけれど、詳しく聞かせていただけるかしらー？」
いきり立つエドルを遮り、リシェルアはグラスを両手で包みながら、覆面の男に微笑みかける。彼女の方へ少し首を動かして、男は言った。
「俺が依頼を受けてほしいと頼んだのは、ディオ・ライアネイズ一人だ。
別件の保護対象であるというそこの娘を含めて、お前たちが彼にどう連なる人間なのか、教えてもらいたい。
部外者に依頼内容を教える気はない」
「あー…エリスも含めて、全員俺の協力者ってことにしといてくれ。

ちなみに報酬はいらないそうだから、用意するのは俺一人分でいい」
わずらわしそうに片手をぱたぱたと振りながら、運ばれてきたアイスコーヒーをすするディオ。報酬の有無の件についてか、エドルが驚愕の顔つきで立ち上がりかけたが、話がこじれる事を恐れたリシェルアがすかさずそれを抑えて座らせる。
「…ならば、依頼内容を話すとしよう。見たところ有名な顔ぶれが多いようだから、問題はなさそうだ」
ゆっくりと頷くと、覆面は言った。
「住宅街にある亜魔界神教会に立ち入って、そこの状況を調査してもらいたい」
「亜魔界神教会だと？」
クリティスは、持ち上げたティーカップに口をつけるのを止めて聞き返した。
「亜魔界神教会は、ひと月前から閉鎖されていると聞いたが」
「そうだ。そこに立ち入って、教会内が今どうなっているのか、詳細に調べてきてくれ」
「なんだそれ」
拍子抜けした顔をして、ストローでジュースを掻き回すエドル。
「そんなもん、ケーサツ…警備団に頼めば？わざわざ高い金払って仕事屋に頼む事じゃねーよ、ただの潜入調査なんて」
「できないから、頼んでいるんだ」
覆面の中で、少し声のトーンを上げる謎の男。
店員からケーキの載った皿を受け取ったリシェルアが、「うーん…」と唸った。
「もしかすると、この国の政治問題に絡んでくるから、かしら」
「んあ？どーゆーことだ？」
「お前の頭にもわかるように言うとだな」
首を捻ったエドルに、クリティスは目だけを向けて説明した。
「王族と教会が密着しすぎているせいで、警備団が圧力を掛けられていて動けない、と言う事だ」

「そういや、亜魔界神信仰はこの国の国教だったな。王族絡みじゃ警備団は動くに動けねえだろうさ」
「…え…っと……そういうもん、なのか」
結局納得しきれず、しかしこれ以上説明を求めても無駄だと思ったのか、投げやり気味に呟くエドル。
男は続ける。
「お察しの通りだ。この国は今、教会が王族と癒着しているせいで、教会が大きな権力を持つ一方、政治家や警備団は名ばかりの存在になっている。
昨日の戴冠式での騒ぎも、その問題の一端だ。この問題を根本から解決すれば、おのずと警備団の警戒も解かれて…」
「…待て」
クリティスは、眉をひそめて男の話を遮った。そして半ば呆れ気味にため息をつく。
「その言い振りからすると、まるで教会を潜入調査するだけで、この国に根付いた王族と教会との癒着という大問題を、一辺に解決できるとでも考えているように聞こえるわけだが」
「まさか。そこまで簡単に行くとは思っていないさ」
覆面の中で、短く苦笑する男。
「だが、その大問題を公に晒し出す一歩になるとは、信じている」
そう言った彼の声は、覆面の内で発したにも関わらず、いやにはっきりと聞こえた。毅然とした彼の表情が、見てとれるようだった。
まだクリティスが訝しく思っていると、依頼の引き受け手であるディオが、背もたれに体重を掛けて呑気に伸びをしながら言う。
「フォーラスがどうなろうと、関係ないし興味もない。ようは教会に潜入して、教会と王族との癒着の証拠になるもんを見つけてくりゃいいんだろ」
「ああ、それでいい」
「了解。どうせ、昨日の件でほぼお尋ね者みたいなもんだしな。教会への不法侵入ぐらい、どうってことねえだろ」

不法侵入をつまみぐい程度の罪にしか思っていないようなディオの口調に、思わず罵倒の声が出そうになった。が、その直前に、覆面が応えて言う。

「不法侵入については安心してくれ。それなりにバックアップはするつもりだ」

「へ…」

つまらなそうにストローを噛んでいたエドルが、ぽかんと口を開けた。

「あ、安心してくれ…って、どう考えたって不法侵入は犯罪だろ…。どうにかできるのか、あんたが」

「……まあ、な」

覆面の男は、顔を背けるように俯いた。

しいんと、場が静まる。葉ずれの音が、涼しげに聞こえてきた。

「…まあ…どんな奥の手を使うのかは知らねえけど、確かに俺らじゃどうにもなんねえし、そこらへんは任せたぜ。

じゃあ、契約成立ってことで」

「ああ、よろしく頼む」

覆面の男は音もなく立ち上がると、水に一度も口をつけないまま、立ち去ってしまった。

残された五人は、昨日の晩と同じく気まずい雰囲気で、各々頼んだ品をもくもくと減らしていく。

「……あのエフィル一行と知り合いで、しかも、多少の犯罪は揉み消せるような人間ねえ…」

ジュースを飲み干し、エドルがテーブルに片肘をついた。それからクリティスの方を見て、

「誰なんだ、アレ」

「私に聞かれても困る。

ただ、この国を憂いて行動しているのだろうから、この国の出身者である可能性は高いな」

「犯罪を揉み消せるってことは、地位もそこそこ高そうだな。貴族

か政治家か警備団の上層か、そこまでいかなくてもその身内か…
まあ、あいつの正体なんてどうでもいい」
ディオはそう一蹴すると、エドルと同じようにクリティスを見た。
「それよりも、亜魔界神教会が閉鎖されてるとかなんとか言ってただろ。
どこまで知ってるんだ」
口元をナプキンで拭いながら、クリティスは彼を見返した。
「私の持ってくる情報を毛嫌いしている人間が、急に私を頼るとはどういう風の吹きまわしだ?」
途端に、ディオの纏っている空気が張り詰めた。彼の眼光は、今にもクリティスを刺し殺さんとばかりにぎらついている。
エドルが、「なんでそうやって突っかかるんだよ…」と、小さく抗議の声を上げた。
「しかし、今は貴様の協力者という肩書だからな…まあ、仕方ない」
二人の非難の視線に構わず、クリティスは、先ほど老爺から聞いた亜魔界神教会の話を語り始めた。

3

「…ひと月前か…おれらが、ちょうど天空王からエリスの護衛を受けた頃だな」

クリティスが一通り話し終えると、エドルが口元に手をやって、独り頷く。

「戴冠式を前にして、いきなり教会を閉鎖するなんてやっぱり変よねー」

フォーラス王国の民がおのずと、自国の新しい王の誕生を神に感謝しに教会へと来るのは、誰でも想定できるはずだ。しかし、それをあえて閉ざしてしまうというのは、民に不安を与えるのはもちろんのこと、信仰そのものに疑念を投げかけられかねない。教会の死活に関わるのだ。

「王族との癒着問題につながるかどうかはさておき、今現在、教会に何か問題が起こってるみてえだな。もしかすると、昨日のエフィルたちの乱入騒ぎに関係するのかもしれねえし」

「のどかな見かけによらず可哀そうな国だなー。主に庶民が。そのディアン神ってのは、ほんとにフォーラスを見捨てたのかも」

「あっちょっと。聞き捨てならないね」

軽いジョークのつもりであろうエドルの言葉に反応したのは、覆面の男と会って以来、ずっとデザートのフルコースに夢中になっていたエリスティアだった。

「まるで、あの子がサボってるみたいな言い方じゃない。あたしの一族をあたしの目の前でけなすってことは、それなりに反駁されるのを承知してるわけだよね？」

そう言い捨てて、頬を膨らませる金色の目の創造主。

エドルは、少し慌てたように、相方に目を向けた。

「え、えーと、ディアン神って…」

「んーとー、亜魔界神ディアン様は、亜魔界を守る神と同時に、武と勇を司る神でもあるのよー。だから、武器を生産する場所でもよく崇められてたりするのー。例えば、錬金都市トレリアとか」
錬金都市トレリア。世界一の鉱脈を背後に構え、武器や兵器、からくりといったものを製造している亜魔界の巨大な都市である。太古には鉱物を金に変える術が研究されていた場所だったが、それがいつしか廃れ、代わりに「鉱物をお金になるものに変える」術としての武器・からくりの製造や、鍛冶が発達した。
ああ、とエドルが声を上げる。
「そういえば、行ったことあったな…リシェルアと会ったばっかの時だから、確か六年前ぐらい？」
「そうよー。あの時、エドルってば…」
「ああっ！言うなっての！」
話を続けようとしたリシェルアの口を、エドルがさっと塞いだ。気になったクリティスとエリスティアが問いつめてみるも、二人は苦笑して首を横に振るだけだ。おそらく、苦々しい思い出なのだろう。
諦めたエリスティアが、話を戻した。
「でも、ディアンは割と働き者なんだよ。上司の神に付き合わされて、毎晩呑みまくってるけど。毎朝二日酔いだけど」
「武勇の神とか言うからどんだけ怖い神かと思ったら、ただの大酒呑みかよ」
「むむううっ…ディアン馬鹿にすんなーっ！」
幻滅したエドルが肩を落とすと、エリスティアはむっと顔を不機嫌に歪めて、彼の頭に手刀を食らわせた。しかしどう考えても、誤解を招くエリスティアの紹介の仕方が悪い。
「さて、捜査にはいつ取り掛かる？」
と言っても、さして準備も必要ないだろうが…」
クリティスは、皆を見回した。
彼らは少しの間それぞれ思案に暮れていたが、やがて「すぐにでも

行ける」という趣旨の返事を口々に返す。
「今日は武器も持ってきてるし、このまま教会に直行しても大丈夫だぜ。教会の中で戦う事になるかどうかは知らねーけど」
「いや、関係者が抵抗してくる恐れもある。言わずもがなだが、気は抜くな」
とっくに空になっていた食器を後にして会計を済ませると、五人はレストランを出た。
林を抜けると、丘から見下ろせる住宅街のまばゆい白壁の中から、教会の尖塔が突き出ているのが見える。尖塔の小さな赤い屋根の下に、銀色の鐘が吊ってあり、南国の日差しを反射していた。
でっかー、と、エリスティアがぽかんと口を大きく開けて、亜魔界神教会の屋根を見上げている。
国教の教会だけあって、住宅が所狭しと立ち並ぶ街の中にありながら、その横幅も高さも他の建物とは比べ物にならない大きさだ。
「この中を捜索すんのかー…なんか、エヴァスタ教会跡を思い出すな」
確かにエヴァスタ天空教会跡も大きかったが、地上部がほとんど崩壊していたため、あまり広いという印象は受けなかった。あの教会も、使われていた時代には大きく荘厳で、日々多くの信者たちを迎えていたに違いない。
亜魔界神教会の木製の扉には鉄の鎖が幾重にも掛けられ、「立ち入りを禁ず」と記された板きれが斜めに引っかかっていた。信心深い住民たちも、上から圧力をかけられた警備団も手を触れる事のなかったノブには、埃が積もっている。
「さすがに、正面から入るのはまずいだろうな…」
鎖を指先で引っ張りながら、ディオが呟く。
「勝手口か非常口がどこかにあるだろう。誰か裏を見てくれ」

「はーい」
クリティスの頼みにリシェルアが応じ、彼女はエドルを伴って裏手に回った。ほどなくして、リシェルアだけが戻ってきて、今来た方向を指差し報告する。
「勝手口があったわー。
でも…」
「でも？」
訝しげに眉をひそめるリシェルアも、クリティスたちも不思議そうに見つめる。
「何だか、最近使った跡みたいなのが全然ないのよー。
教会の人たちって、どこから出入りしてるのかしらー？」
四人が勝手口に回ると、エドルが粗末な扉を前にしてうんうん唸っていた。クリティスたちが来たのに気付くと、振り向いてノブを指差す。
「ここも、埃が積もってる。念のために他の場所も調べてみたんだけど、この勝手口以外に、他に入口はなさそうなんだよな。
どういう事だと思う？」
「……そういえば」
クリティスは、朝の老人の言葉を思い返して答えた。
「僧侶や神父が出入りしているのを、誰も見ていないとも言っていたな…」
「ってことは、教会内には誰もいないのか？」
好都合じゃねえか、と、ディオは目を輝かせた。
「捜索中に勘づかれて、人が来る可能性はある。気は抜くな」
「てめえに言われるまでもねえよ」
クリティスの忠告を聞き流し、ディオは、埃を払い落してゆっくりとノブを回した。閉まっているかと思われた扉は、かすれた音を立てて外に開く。
ディオは一瞬目を丸くして、こちらを見た。
「……誰もいない…んだよな？

なんで開いてるんだ、鍵」

「……」

答えかねて、クリティスは腕を組んで黙ってしまった。

しかし、おかしなところもあれど、絶好の機会ではある。クリティスは疑念を振り切ると、皆を促して中へと入った。

教会潜入

灯火のない聖堂は薄暗く、光と言えば、壁にはめ込まれたステンドグラスから零れる申し訳程度の日差しだけだ。
目を慣れさせようと瞬きを繰り返していると、後ろでエリスティアが軽く咳き込んだ。
「埃っぽい…掃除もしてないなんて」
確かに、聖堂内の空気は淀んでいた。長椅子に触れると、やはり埃が積もっている。
「やっぱ、人はいないみてえだな…じゃあ、このドアはただの鍵のかけ忘れか？」
「何とも言えんが…とりあえず、捜索を開始するとしよう。まずは聖堂から」
クリティスの声に応じて、一同はそれぞれ聖堂内をくまなく調べ始めた。と言っても、捜索の経験がないエリスティアは、聖堂の中を適当に観察しているだけのようだが。
しばらく探して何も進展がないのを悟ると、クリティスは皆を呼び集めた。
「さすがにこんなところに、証拠になるようなものを隠しておくわけはないようだな」
「それじゃあ、地下と別館の方を探してみましょうかー」
「え…地下に行くのお…？」
エリスティアが、口をひん曲げた。
「これだけ掃除してないってことは、地下なんてもっとひどいんじゃない？
やだなあ…服汚れそう」
「どこも同じようなもんだと思うが…まあ、お前がどこに行こうと、役に立たないのはわかりきってるしな」
ディオがそう鼻で笑い飛ばすと、エリスティアは彼をじろりと睨ん

だ。途端に壮絶な睨み合いが始まったが、他の三人は、それを無視して人員の割り振りを始める。
「別館は外から見た感じだと広そうだったけど、地下はわかんねーなあ。でも、別館より広いってことはないだろ」
「そうだな。地下は二人、別館は三人で分けるか」
「じゃあ、おれとディオで地下に行くよ。エリスもああ言ってるし、別館の方が比較的明るくて安全そうだから、女子でやってくれ」
「あらまあ。ずいぶん紳士なのねー、エドルったら」
からかうようにくすくすと笑うリシェルア、照れてむっと黙り込むエドル。
「その方が助かるぜ。この馬鹿女と一緒に探索なんてお断りだ」
「こっちこそ、あんたみたいな口も性格も悪い男と一緒に地下になんて行かされたら、どうしようかと思ったよ」
「異論はなさそうだな」
お互いを指しながら、声を重ねるディオとエリスティア。クリティスは、ため息交じりに頷いた。
「では、分かれるとしよう。何か見つかったら、聖堂の方に出てきてくれ」
「了解」
五人は分かれて、男子二人は地下へと続く暗い階段へ、女子三人は別館へ続く渡り廊下へと向かい、姿を消した。

「ほんと、アクス王子ってばどこ行っちゃったのかしら」
客などほとんどいない場末の喫茶店で、薄いコーヒーを前にしてエフィルはため息をついた。
ここは、城下から少し離れた田舎の村ハーベル。指名手配の身となったエフィルたち四人はこの村に身を潜め、訪れる警備兵をやりすごしていた。

戴冠式の計画は大失敗に終わった。戴冠の機会は延びたものの、カイ王子自分の罪を認めず、いまだにのうのうと次期フォーラス王候補として城に鎮座しているのである。しかもこちらには、彼の嘘の証拠であり切り札でもあるアクス王子がいない。まったく身動きが取れなくなってしまったのだ。

「彼に兄を裁く意志があるなら、僕たちの居場所を是が非でも突き止めてやって来るはずだよ。何の音沙汰もないということは、諦めたか、それとも単独で動いているかだね」

ラズマが、エフィルの正面で少し遅い朝食を取りながら応えた。

イルファとウィミーネは、城下町の入口の様子を調べに行っている。だが、おそらく警備団によって厳しく検問が行われていることだろう。入れたところで、町中を見回っている兵士に捕まるのがオチだ。アクス王子にこちらから接触するのは、難しいかもしれない。

ここまで悩んで、エフィルは考えるのをやめた。疲れた頭をすっきりさせるためにコーヒーをあおり、それから、ラズマの傍らの椅子に立てかけてあるスケッチブックに目をやる。

「…ところで、戴冠式の時にまでスケッチブック持ってったって、本当なの？」

「ん？あ、うん」

食後のフルーツに手を延ばしながら、彼女と同じようにスケッチブックに目を向けるラズマ。

「呆れた。本っ当に絵が好きなのねえ」

「どうせ、エフィルたちが逃げてくるまでは暇だろうと思ってね。でも、君たちを助けに行ったときはさすがに宿に置いてきちゃったよ」

それどころじゃなかったし、と付け足すラズマの前で、エフィルは顔を少し下げ、視線を反らした。

何につけても淡白でマイペースな彼でも、自分が捕まったと知った時は焦ったのだろうか。いつも大事に持ち歩いているスケッチブックを、忘れるぐらいには。

「…エフィル？」
突然顔を覗き込まれ、エフィルは、自分でも大げさだと思うぐらい身を引いた。
「びっっっくりしたあ…」
「そんなに驚かなくても。何考えてたの？」
「な、何でもないわよっ」
わざと突き放した態度を取ると、エフィルは店員を呼んで、別に欲しくもなかったコーヒーのおかわりを頼んだ。ラズマが、不思議そうにこちらの様子を眺めている。
少し顔が熱い気がする。ばれてはいないだろうかと、妙にそわそわした。

のどかで素朴な喫茶店内。不自然な雰囲気で黙りこくってしまった二人を、椅子の上のスケッチブックが眺めていた。

2

エドルの言った通り、クリティスたちの来た別館は聖堂に比べて窓の数が多く、太陽の光が十分に入ってきていた。ただし、ここも埃っぽいことには変わりなかったが。

「部屋がいっぱいあるなあ…これ、全部探すの？」

「当たり前だ。どこに隠してあるかわからないのだから、手当たり次第に探すしかない」

「うえええっ…」

エリスティアが、早くも面倒くさそうに肩を落とした。むしろ、地下に隠されている可能性もあるので無駄骨になるということも無きにしもあらずだが、それを口にすると、彼女が本気でボイコットしかねないのでやめておく。

「大司祭や神父たちの執務室、それから外来者の宿泊施設などが揃っているようだな。

私は執務室の方を回るから、二人は手分けして宿泊施設の方を当たってくれ」

「はーい」

「ううう…めんどい…」

ワンピースの裾を揺らして行くリシェルア、彼女の後ろを重い足取りで付いていくエリスティアを見送り、クリティスは傍にあった神父の執務室に入った。

不正の資料があるとすれば、一番怪しいのは教会関係者の部屋だ。

部屋の隅に立っている本棚に近づき、慎重に書類を調べていく。

（ここにはなさそうだな…）

本棚にまとめられた書類を一通り調べ終え、部屋を隅々まで捜索してから、次の部屋に向かおうとした時だった。

「クーリーティースー」

エリスティアの間延びした声が、遠くから自分を呼んでいる。思っ

たより早かったなと、クリティスは部屋を出て、廊下の先へと向かった。
外来者の寝泊りする客室のドアの前をいくつか横切ると、廊下の向こうでエリスティアが手を招いているのが見えてくる。彼女の後ろにあるのは、厨房の入口だった。
「どうした」
「面白いものが見つかったの」
「なんだ、隠し部屋でも発見したか？」
「うふふ、クリティスは相変わらず勘が鋭いわねー」
厨房の扉が開いて、リシェルアが顔だけ覗かせた。
石壁石畳の粗末な厨房には、火のない石窯と木の調理台、食器の並んだ棚だけが設置されている。食器棚の横の壁では、たった今二人が見つけたのであろう隠し通路が大きく口を開けていた。
「…中は調べたのか？」
「一応、少し入ってみたわー。通路は食材とか調理器具をしまう場所になってるみたいなんだけど、その奥に地下に続く階段があって、そこを降りたら、いかにもっていう感じの扉があったのよー」
「…地下が二つか。確かに怪しいな」
しかし、まだ執務室の捜索が終わっていない。少し考えて、三人はまず、執務室の調査を終わらせることにした。
しかし、五人の神父の執務室と大司祭の執務室を調べ終えても、なんら重要な手掛かりは発見できなかった。やはり、厨房の隠し扉の先に、王族との癒着に関係する資料が隠されているのだろう。
再び厨房へ入り地下へ降りて来た三人は、期待の面持ちで扉を見た。鉄製の重々しい扉には、扉の素材とは別の銀色の金属で、複雑な装飾が施されている。リシェルアの言った通り、「いかにも」な雰囲気を醸し出していた。
「もしかして、この中に大司祭とか神父がいたりして」
エリスティアが、声をひそめて呟く。
あり得ない事ではない。教会から人の出入りする気配がないという

ことは、「誰も入っていない」という事ではなく、「誰も外に出ていない」という事である可能性もあるからだ。
クリティスは、観音開きの扉を両手で押し開いた。見た目に反して扉はそれほど重くなく、彼女一人の力でも難なく動く。
「……って…なに、ここ」
開いた扉の先を見たエリスティアが、拍子抜けした声を上げた。
扉の先に広がっているのは、ただの闇。光もなければ人もいない。およそ、人が使っているとは思えぬような殺風景な場所だった。
クリティスも一瞬呆けたが、すぐにリシェルアに明かりを頼んだ。
彼女は頷くと、口早に呪文を唱えて杖の先に炎をともす。
彼女の明かりを頼りに、三人はそっと部屋へ入った。足音が、壁や天井に反射して遅れてこだまする。どうやら、かなり広い部屋のようだった。
「…緊急避難用の部屋か何かだったのかしらー…家具とかも見当たらないみたい…」
明かりを強くして部屋内を照らし、首を傾げるリシェルア。
「なあんだ。期待して損しちゃった」
「まだ残念がるのは早い。ここはダミーで、どこかにまだ隠し扉があるのかもしれん」
「えーっ、まだ探すのー？」
不満げに口をとがらせたエリスティアが、部屋の奥に向かって足を進めた、その途端。
彼女の足元が突然まばゆい光を放ち、部屋の中の闇を払い飛ばした。
「え」
驚く間もなく、光は床を縦横無尽に奔って広がり、だんだんとその強さを増していく。光が無作為に広がっているのではなく、何かの模様を描き出しているのだと気付くと、クリティスは入口の方へと後ずさり、叫んだ。
「離れろ！これは召喚術の魔法陣だ！」
エリスティアとリシェルアは、声に従い慌てて飛び退いた。ほどな

くして光の動きが止まり、床にははっきりと魔法陣が浮かび上がる。
「何者かが陣に入り込んだ時に発動するように、仕掛けられていたようだな…」
発動する前に気付ければ、魔法陣を消去するだけでよかったのだが、発動してしまったのではもう遅い。
魔法陣放つ光の中から、何かが姿を現した。身構える三人の前で、それは一度、大きく身体を震わせる。力を失った魔法陣から光が消え、辺りはまた、左右もわからぬ闇の世界に戻った。

暗黒の中で大きな目を見開いたそれは、建物を揺らすほどの大きな雄たけびを上げた。

3

「明かりを灯す程度の火の魔法を失敗するとか、信じられねえな」
地下の湿っぽい空気の中に、ディオの放った毒舌が響いた。
地下に入った直後、真っ暗では捜索などできないからと、エドルが明かり持ちを申し出たのだが、初めに火力の調整を失敗し、火の玉を思いきりディオに向かって放ってきたのである。その後何度か失敗を繰り返してなんとか明かりは灯せたのだが、あやうく大火傷を負うところであったディオは大いに機嫌を損ね、こうしてエドルをいびっているのだ。
「そもそも魔法を使いすらしない奴に言われたくねーしっ」
「俺は自分の身の程をわきまえてるから、魔法の道を潔く捨てたんだよ。
お前の場合は、下手くそなくせに自信満々に「明かりぐらい灯せる」って明言した上でのあの失敗だぜ。恥ずかしい」
「リ、リシェルアにこの間手ほどき受けたばっかだったから、いけると思ったんだって！」
「あれで魔法学校通ってたって言うんだから、笑えるよな」
「だから、魔法学校はつまんなかったから中途で飛び出して来たんだよ！」
むきになって声高になるエドルを横目で眺めながら、ディオは鼻を鳴らした。
闇の中をしばらく歩いていると、エドルが急に足を止めた。そして、明かりの灯ったダガーを前方に掲げる。
分かれ道だ。
「…どうする？」
意見を求めて見上げて来た顔を、ディオは見返して唸った。
「明かりを持ってるのはお前だけだしな…効率は悪いが…
…いや、待て」

ディオは、はっと今まで通ってきた地下道を思い出し、踵を返した。
エドルの慌てた呼び声が聞こえるがそれは無視して、少し戻ったところに積み上げられていた、おそらく薪であろう木材を一本拾う。
それからエドルの元へと戻り、それを彼に差し出した。
「ほら、これに火をつけりゃ、松明代わりになるだろ」
「なるほど」
エドルはダガーの炎を薪に近付け、先端に火を灯した。松明よりも燃焼時間に不安はあるが、薪のストックはあるし、それほど長く捜索をすることもないだろう。
エドルは右に、ディオは左の道にそれぞれ分かれて探索を続けた。
ディオの方の道には、五つほどの扉が道の両脇に並んでいるだけで、すぐに行き止まりに行き当たってしまった。この程度であれば、薪が一本燃え尽きる前に、捜索を終えられるだろう。
だが。
「…何だ、この臭い」
分かれ道の入口に差し掛かったあたりからわずかに臭ってくる異臭に、思わずディオは顔をしかめた。まるで生肉を放置して腐らせたような臭いが、地下の黴の匂いに混じって漂ってくるのだ。
先に進めば進むほど、その臭いは強烈になる。途中で耐えられなくなり、ディオは鼻を押さえた。
（貯蔵してる食料が腐ってんのか？一か月人が入ってないそうだから、確かにあり得るが…）
これでは、探索どころではない。先に臭いの元を突き止めなんとかするべきだと考えたディオは、入念に調べるのは後回しに、とりあえず各部屋を回ってみる事にした。
「ここか？」
雑品の入った木箱しかなかった手前の四つの部屋を調べ終え、最後の扉に手を掛ける。臭いはますますひどく、開けるのをためらったほどだ。
ノブを回してほんの少し扉を動かした時。ゴトン、という重い音と

共に、扉に軽く衝撃があった。
「ん？」
無意識にさらに扉を引き、音と衝撃の正体を確認しようとする。すると、何かが、どさりと床に転がった。おそらくもともと扉に引っかかっていたそれが、開いた拍子にバランスを崩し、扉に当たったのだろう。
床に横たわったそれを見て、一瞬、ディオは呼吸を忘れた。
「――――……」
叫びたいのに声が出ない。
それは、人だった。ディオの方に頭を向け、不自然な姿勢でうつぶせになったまま、動かない。
どう見てもどう考えても、生きているようには見えなかった。なぜなら、髪の毛の隙間から覗く首も服の袖から出ている手も、露出した肌のすべてが、生きている人間の肌にはありえないような色をして、腐り、爛れていたからである。
「あ…」
おもむろに顔を上げたディオは、開け放したままの扉の先にあった光景を目の当たりにして、立ち竦んだ。
他の四部屋と同じく、部屋の奥には、使われなくなった雑品の入った木箱の山。しかし床には、足元の死体のように腐乱した人間の身体が、いくつも倒れ、あるいは木箱にもたれかかるようにして座っていた。部屋の中には腐臭が充満し、死体にたかる羽虫の音も聞こえてくる。
しばらく放心していたディオは、我に返ると、明かりを握り直して寄りかかっていた廊下の壁から背中を離した。
とにかく、状況を調べなくてはならない。相方のエドルを助っ人に呼ぶ事も忘れ、半ば頭の中を真っ白にしたまま、そっと部屋に入り込んだ。
「…っ…」
惨状を改めて目にして、ディオは再び息を呑む。早鐘を打つ心臓を

押さえ、室内の概観を把握しようと、周囲を見回した。
その時だった。今まで気がつかなかった、小さな気配を感じ取ったのは。
「なっ？！」
驚き、部屋の真ん中でディオは身構えた。
もしかすると、この中の誰かがまだ生きているのかもしれないと思い立ち、その場で死体たちを目を凝らして観察したが、どれも原形を留めているのがやっとというほどの腐乱状態だ。
それに…
（これは、殺気だ）
ただの気配ではなく、明らかに自分を殺そうとしている気配だった。
まさか、彼らを殺害した犯人が、まだこの部屋に潜んでいるとでもいうのだろうか。潜んでいるのだとしたら木箱の中が一番有力だが…先ほどのショックからまだ立ち直れていない状態での、この唐突な襲撃。ディオは今、軽いパニック状態だった。まったく思考力が働かない。銃に伸ばした手も構えた腕も、ほとんど無意識の内での行動だった。
だめだ。こんな状態で襲撃に遭ったら、ひとたまりもない。
自分の危険な状態を自覚すると、ディオは大きく深呼吸をした。途端に、えも言われぬ異臭を思いきり吸いこんでしまい、軽くむせてしまう。その動作が逆に心を落ち着かせ、ディオは胸を撫で下ろした…が。
彼を襲った出来事は、これだけではなかった。
一息ついたのもつかの間、今度は、魔獣のものであろう大きな咆哮が轟き、教会を揺るがしたのである。
「うわ…っ？！」
すると次に、誰かが部屋の中に飛び込んできた。
殺気の主かと思い咄嗟に銃を持ち上げる。しかしそれは、さっき別れたばかりの、ディオの良く見知った人物だった。
「ディ…！

って、うげ…こりゃひどいな…」
今の咆哮を聞いて駆けつけたのだろうが、部屋の惨状を見た途端、エドルは眉尻を下げて鼻を押さえた。しかし、すぐに顔を上げてディオを見、目を丸くする。
「お前…顔真っ青だぞ？…大丈夫か？」
「…あ、え、エドル」
安堵して気が抜けると同時に、どっと疲れが押し寄せて来た。
エドルはそんなディオを見て、叱咤の声を上げる。
「おい、ディオ！」
「…ああ」
崩れそうになった体をなんとか気合いで立たせ、ディオは彼に駆け寄った。
この部屋の状況を説明しようとすると、それを手で制止される。
「こっちも気になるけど、さっきの声の方が先だ。距離的に、たぶんリシェルアたちのところだと思う」
「わかっ…」
頷きかけて、ディオは、はっと辺りを見回した。
「どうしたんだよ？」
エドルに訝しげに問われてもしばらく返事を返さず、神経を尖らせる。
先ほどの殺気が、消えている。
「おい、エドル。ここに来る時、何か気配がしなかったか？」
「気配？おれらの他に、ここに誰かいるのか？」
ディオは、先ほど殺気を感じた事を手短に説明した。すると、エドルは口元に手を当てて考えていたが、やがて首を振る。
「少なくとも、おれの方では何にも感じなかったぜ。大体、こっちに来たのだってあの咆哮が聞こえてからだしなー…」
「そうか…」
部屋の中を睨み回すディオ。小さかったが、確かにあれは殺気だったと思うのだが…

エドルが、こちらの袖を引っ張った。
「まあそれも、あとで部屋を調べりゃわかるだろ。
それより、リシェルアたちが」
「ああ、そうだな…」
まだ気になって仕方がなかったが、しぶしぶディオはエドルに言われるままに部屋を出、聖堂に向かって地下道を駆けた。

4

「エリス！」
魔法陣から現れたもの――地上最大の生物ドラゴンを視認するや否や、再びクリティスは叫んでいた。
エドルとディオがいない今、クリティスとリシェルアの二人だけでこれを仕留めるのは難しい。しかしエリスティアには、以前ドラゴンを一撃で倒したという経歴がある。
「街の喫茶店で、五千コイル分のデザート」
「やったーっ！」
創造主は場違いな歓声を上げるなり、ドラゴンの前に飛び出した。巨体を震わせ、口を開いて再び咆哮を上げようとする、地上最大の魔獣。
彼女はそれと真っ向から睨み合うと、古語の呪文を唱えた。
「イーセ」
相も変わらず短い呪文だが、それからは想像もつかないほどの魔力が一気に迸り、すぐさま冷気に変わる。吹きつける風を凌いで目を開くと、ドラゴンの足元が見事に凍りついていた。
真正面から一撃必殺を狙っても効果はない、と、以前彼女が言っていたのを思い出す。以前のようなおとり役を引き受けようかと言いかけると、エリスティアは首を横に振った。
「大丈夫、もう終わるから」
なんと、足元を凍りつかせていただけの氷が、いつの間にか下半身全体を侵食しているではないか。目を見開いてぽかんとしているうちに凍結は進み、いつしかドラゴンは、完全に氷像と化した。
「魔法陣から出てきた直後だったから、油断してたみたい。そうじゃなかったら、途中で凍結を止められただろうね」
この間は火の魔法の一撃で灰に。今度は、氷の魔法で全身凍結状態に。つくづく神の力は恐ろしいと、クリティスは息を呑んで、太陽

神の背を見つめた。
「それにしても悪趣味な罠だね。希望の箱とそっくりな…」
「……シェルア！リシェルア、どこだ?!」
エリスティアの呟きを遮って、遠くからエドルの声が聞こえた。
やがてどたどたと、騒がしい足音が近づいてきて、エドルとディオが室内に駆けこんできた。二人はまず、クリティスたちが無事なのを目だけで確認すると、その後すぐに奥のドラゴンを見つける。
「うおっ！?何コレ！」
「ここに入ったら、いきなりこいつが召喚されちゃったの。エヴァスタで、アスロイ王子を助けた時にもドラゴンがいたでしょ？アレと同じタイプの罠だったみたい」
「ふーん…まあ、大丈夫だったみたいだな」
エドルは息をつくと、クリティスを見た。
「んで、何か見つかったか?」
「いや、まったく。探している最中に、ここに行き当たって罠に引っ掛かったというところだ」
「そう…か」
こちらの返答を聞くと、エドルとディオは難しい顔で俯いた。何かあったのかと問うと、ディオが重たげに口を開く。
「地下倉庫に、九人の腐乱死体があった」
クリティスたちは、言葉を失った。
「腐食が進行してて人相はわからなかったが、服装からしてここの聖職者たちだ」
「聖職者が九人…」
ふと、クリティスはこの別館に入ってから、聖職者たちの執務室で得た情報を思い出した。
「おそらく、神父五人と彼らの弟子の僧侶四人だな。フィスカ・イーリス大司祭を除いて、この教会で勤めをしていた聖職者すべてが死んでいたのか」
「フィスカ・イーリス大司祭?」

エドルが、誰の事かわからないと目をぱちくりさせた。呆れたエリスティアが答える。
「あんた、昨日の事なのにもう忘れてんの？
戴冠式で、カイ王子に戴冠してた女の人、いたでしょ」
「あー！いたいた。
そういや、確かにあの死体の山の中に、女の人はいなかったような」
クリティスは頷いて、淡々と続けた。
「見て確かめてみない事には、遺体の腐食の進行度はわからないが…十中八九、ひと月前に殺されたのだろうな。おそらく、イーリス大司祭も絡んでいるに違いない」
「でも、この事件を解決するのはあたしたちの役目じゃない気がするわー」
リシェルアが、困った顔で言った。
「この国の警備団の役目だな」
ディオも彼女に同意する。
他の二人も頷いたのを見て、クリティスは少し考え、そして同じように首を縦に振った。
「そうだな。私たちが首を突っ込む問題でもなさそうだ。
しかし、指名手配状態の私たちが直接警備団に通報するのは無理だ。
とりあえずあの男に相談してみよう」
五人は、一旦調査を切り上げて教会の外へ出る事にした。
皆、思い思いの足取りで暗い地下室を後にしたが、その直前、リシェルアが「あっ」と小さな声を上げる。
クリティスはそれに耳ざとく気付くと、振り返った。
「…何だ？」
「これ、落ちてたんだけどー…」
そう言って、床にしゃがみ込んでいた彼女は立ち上がり、そっとこちらに何かを差し出した。
手の平に載るほどの小さな紙切れ。そこに、奇妙な文様が描かれている。

……いや。
それに、クリティスは見覚えがあった。そして、リシェルアも見覚えがあるはずだった。
「召喚の魔法陣…！
もしかしてこれは、希望の箱の連中が使っていたあの紙ではないか？」
本来、周到な儀式を行ってからでないと使う事の出来ない高等召喚を、紙切れに魔法陣を描き呪文を唱えただけで使用していた、希望の箱。ルシアニアの塔でリーダーを逮捕した後、その紙はすべて天空界の警察に押収されたはずだ。
「どうして？どうしてこれが、亜魔界のこの国に…」
「……この罠の仕掛け方といい、エヴァスタ教会跡を彷彿とさせる要素がちらほらあるのが、非常に気になる」
クリティスは、リシェルアと顔を見合わせた。
「…希望の箱の残党がいたのかもしれない。彼らが天空界を下りて、この国に潜伏しているという可能性もある」
「そんな……あら？」
リシェルアが、俯き手元の紙に目を落とした時、再び声を上げた。
それから、その紙をひっくり返し、裏側を明かりで照らす。
「ねえ、裏にも何か描いてあるわー」
促されるままにそこをみると、蛇を思わせる奇妙な模様が描かれていた。が、それはクリティスにも見当がつかず、リシェルアと共に黙り込む。
「……魔法陣、か？しかし、こんな様式は見た事がない」
「そもそも、魔法陣の裏に魔法陣なんて、おかしいわー。紙の節約のためかしら？」
「…組織が崩壊したばかりで資金難だと推測すれば、考えられなくも…ないような……」
再び沈黙した時、地上の方から、連れの呼び声が聞こえて来た。話し込んでしまっていたことに気付いた二人は、慌てて部屋を出る。

「とりあえず、それはリシェルアが持っていてくれ。まだ連中の姿を見たわけではないし、不確定事項が多すぎる」
階段を駆け上がりながら頼むと、リシェルアはこくんと頷いた。

5

その夜、丘のレストランへ行くと、あの覆面男が相変わらず何も頼まずにクリティスたちを待ち受けていた。
教会であった出来事を話すと、男はさして動じもせずにひとつ頷き、
「わかった。警備団の方には、俺の方から手配しておく。ご苦労だった」
あっさりとした口調でこちらをねぎらうと、約束通りにディオに報酬を渡し、そのまま去って行ってしまった。
「……え、これで終わり？」
拍子抜けしたエドルが、ディオの前に置かれた無地の封筒を見つめてぼんやり呟く。
「教会と王室との癒着の証拠、まだ見つかってねーのに。てっきり、もっと探せって言われるもんだと思ってた」
「まさかあの野郎、教会関係者が殺されてたってこと、知ってたんじゃねえだろうな」
「…そうかもしれないな」
ディオのいらだち気味の声に、クリティスは応えた。
「癒着の証拠云々というのは口実で、あの遺体の有無を私たちに確認させるつもりだったのかもしれない。…なぜ、自分で行かずにあえて私たちを利用したのかはわからないが…なにはともあれ、これでこの国は奴の目論見通り、大騒ぎになるだろうな」
「あーはいはいめでたしめでたし。…で、おれらはこれからどうすればいーんだよっ」
腑に落ちないのか、エドルも不機嫌な態度でテーブルを叩いた。リシェルアが、彼を咎めるように横目で見て、
「後は、警備団の警戒が解けるのをじっと待つしかないわねー。どのくらいかかるかわからないけど…」

「結局待つのか…」
「事態が進行しただけ、何もしないでいるよりはましだ」
クリティスは、呑気に夕食の注文をし始めた。それに倣って他のメンバーも、次々に夕食を頼み始める。
「…そういえば」
隣りのリシェルアが、そっと耳打ちをしてきた。
「あの魔法陣の紙の事、覆面の人に言いそびれちゃったわね。みんなにもまだ言ってないし…どうしましょう」
言われて、クリティスも「あ」と呟いた。あれを男に見せれば、面白い話が聞けたかもしれない。思わずこめかみに指を当てた。そして、夕食が運ばれてきたところで悩むのをやめ、リシェルアに言う。
「忘れていたものは仕方がないな…それに、エリスティアに言うとややこしくなるかもしれない。ここは黙っておいて、なかったことに…」
「ちょっと、二人で何こそこそしてんの？」
うさんくさそうに声をかけられ、二人は思わずびくりと肩を震わせた。
「あたしを差し置いてガールズトーク？ずるいよ、あたしも混ぜてよっ！」
「ガールズトーク…おれもちょっと聞きたいかも…」
「お前ら…」
目をきらきら輝かせて、詰め寄ってくるエリスティアとエドル。呆れ顔でそれを見ながら、口をもぐもぐ動かしているディオ。
「面白いお話じゃないと思うわよー。
この国の政界情況および今回の依頼の総括を、論議してたところだからー」
「「……」」
あの興味津津と言わんばかりだった目が、途端に曇って垂れ下がった。
「ねー」ととぼけた笑顔でこちらに同意を求めてくるリシェルアは、

内心ほくそ笑んでいる事だろう。彼女の二人に対するあしらい方には、いつも感心してしまう。と同時に、その手の話になるとこちらに丸投げしてしまう二人には、ほとほと呆れてしまう。

「せーじの話かあ…」

「せーじなんて、人間が勝手にやってればいいじゃん。神様は遊ぶのに忙しいんですうー」

「神の一族は遊びが仕事なのか」

ディオの突っ込みに、エリスティアはきょとんとした顔で答えた。

「神が遊べなくなったら、困るのは人間の方じゃないの。だって、神の仕事は世界を守る事だもん。遊ぶ暇もなく世界を守らなきゃいけない状況っていうのは、すなわち…」

「…なるほど。よっくわかった。確かに困るな…」

いつになく素直に頷いたディオの頭の中に浮かんでいるのは、おそらく、人類の間で長い事語り継がれてきた伝説の数々だろう。神によって選ばれた勇者が神の支援を受けながら、魔王を打ち滅ぼすという類の。

「ね、困るでしょ？魔王なんかが出て来られたら。まあ、魔王の出現以外にも、世界を守らなきゃいけない状況なんていっぱいあるんだけどね。例えば、白銀の時代に起こった大戦争で、古代兵器に魔界の大陸分断されたときとか。琥珀の時代に、意思を持った『予言書』が予言を成就させようとしたときとか」

そう言って、エリスティアはにっこりほほ笑んだ。隙のない、食えない笑みだった。

場の空気が暗く沈んだのを感じ取ると、エリスティアは大きく息をつき、

「まあ、万が一これからなんか起きても、何とかなるよ、たぶん。なんてったってあたしが創った世界だからね！ちょっとやそっとじゃ壊れないんだから！」

「…今ので余計不安に…」

「どーゆー意味っ？！」

毎度のことだが、会話がずれ始めてきた。「とにかく、」とクリティスは無理矢理話を引き戻し、
「長い間状況が変わらなければ、いっそのこと強行突破という手もなきにしもあらずだ。本当はしたくないのだが…。今は、大人しく待つしかない」
念を押すように言うと、エドルはしぶしぶ頷いた。他の者からも異論はなく、ただ自分の夕食を食べる事に専念している。
とは言うものの、この国を出るのはいつになることやら。
どこか一抹の不安を抱えながら、クリティスも、皆に倣って食事に手をつけるのだった。

再会

夜が更け、街の明かりもひとつ、またひとつと減ってゆく頃。
足音が廊下を駆けて来たかと思うと、カイ王子の居室にノックの音が穏やかに響いた。
「カイ王子様、王子様。いらっしゃいますか」
「なんだ」
長年聞き慣れたしわがれ声に、カイ・ヴォールナ・フォーラス王子は、自ら扉を開いて訪問者を招く。
「ただ今、アクス王子様のお部屋を使用人に掃除させておりましたところ、このようなものが見つかりましたので、ご報告に参りました」
そう言って、初老の執事は白い封筒を取り出した。封筒は真新しく、表にも裏にも何も記されていない。
「父上は何と言っていた？」
「いえ、既にお休みになられておりましたので、まだ何も。万一の事も考えて、封筒を私の方で調べさせていただきましたが、特に仕掛けはないようです。中には手紙が一通。亡き王子が遺した物であると思うと、私がフォーラス王様や王子様に先んじて拝見するというのはあまりにも恐れ多く感じましたので、こちらの確認は致しておりませぬ」
「……そうか」
封筒を受け取ると、王子はソファにもたれて中の手紙を取り出した。封筒と同じ真っ白な便箋には、こう書いてあった。

『神の住まう家は荒れ果てた。
九つの魂、飢えたる竜。神の裁きを待ち焦がれ、満ちて欠けてまた満ちるとも、いつまで経っても満ち足りぬ』

王子は、手紙を取り落とした。
「…王子、どうされました？」
「っ警備団の長を呼べ！」
呆けていたかと思えば突然立ち上がり、カイ王子は執事にそう命じる。一瞬、執事は唖然としていたが、すぐさま一礼してそそくさと部屋を出ていった。
そのまま王子は、窓の外を見つめて待機していた。しかし、警備団長が来る前に、招かれざる客が現れたようだ。
「…王族の部屋にノックもせず立ち入るとは、不届き極まりないな」
再び扉の方を振り返るカイ王子。
先ほど執事が閉めたばかりの扉がいつの間にか開いている。
「ご気分を害されたのであれば、申し訳ありません。ただ、近々フォーラス王の名を背負う方とは到底思えぬほど取り乱したお声が聞こえて来たもので、つい不安になってしまって」
柔らかく澄み切った、包容力を感じさせる声音。それは、開いた扉の前に立っている女性が発したものだった。
ゆったりとした紅いローブの裾が、絨毯にまで流れている。武神であるディアン神を象徴した剣の刺繍が、胸元を飾っていた。後ろ頭に挿された金属の髪飾りが、動くたびに涼しい音を立てる。
傍らに灰色のローブで身を包んだ護衛を佇ませたその女性――フィスカ・イーリス大司祭は、優しく、しかしどこか表面的な微笑みで言った。
「どうやらただ事ではなさそうですね。「亡くなった」アクス王子からの贈り物かしら？」
「そんなバカな事があるか！おそらく、先日の戴冠式に乱入してきた連中の仕業だ。
くっ…どうやら、余計な事を嗅ぎまわっているようだな、放浪人風情共が…」

「余計な事とは？」
「貴様も、白々しい態度を…。教会の事に決まっているだろう！」
王子は、執事から受け取った手紙を封筒ごと、投げるように彼女に渡した。
おもむろにそれを流し読みした大司祭は、笑顔を崩さずに、丁寧に封筒の中に手紙を戻す。
「なるほど…それで、警戒をさらに強めるよう命じるために、警備団長をお呼びになったのですね」
「そうだ。あの役立たずめ…いつまで奴らをのさばらせておくつもりだ」
苛立ちを抑えきれず、王子は部屋の壁を拳で叩いた。
それを薄目で眺めながら、大司祭は少し声量を落として言う。
「…また、予知夢を見ましたわ」
王子は勢いよく振り返ると、期待の眼差しを彼女に向けた。
「やっとか！それで、どんな夢だ？戴冠が無事に済む夢か？」
「ご期待に添えず申し訳ないのですが、まだ王子様の晴々しい戴冠の光景は見えませぬ。
昨晩見たのは、星の夢」
大司祭は窓に近づき、夜空を見上げた。
「このように、夢の中でも窓から空を見上げておりました。
すると、一際明るく輝く星が天を流れて、このフォーラス城に落ちたのです」
「…星が、我が城に？
それは良い夢なのか、悪い夢なのか」
「それは、私にもわかりません」
ローブの裾を翻し、彼女は従者の傍に戻った。
「ですが、これからこの国に、何かただならぬ事が起こるというのは確かな模様。
ゆめゆめ気を緩めませぬよう、ご忠告申し上げておきますわ」
「ふん…貴様に言われなくともわかっている」

「それと」
まるで悪戯でもしようというような、おどけたウインクを王子に見せる大司祭。
「王子がご戴冠あそばされた暁に、お寄せくださるという当教団への「ご寄付」ですが、本部の方から「承知した」との報が入りましたので、よしなにお願いいたします」
「ああ。今後の後援を一層期待していると伝えておいてくれ」
「かしこまりました」
優雅に礼をすると、イーリス大司祭は足音も立てずに部屋を出て、姿を消した。
「……相変わらず不気味な尼だ」
吐き捨てるように言って、王子は窓に目を向けた。
夜空には、溢れんばかりの星の粒が輝いている。大司祭の言った、「星」とは一体何のことなのか。
「…何であろうと、僕の王位は絶対に誰にも渡さん。星であろうと、実の弟であろうとな」

城の廊下を歩きながら、イーリスは従者に語りかけた。
「乱入者たちは今、何をしているのかしら」
「城下の内と外に二手に分かれているらしく、警備団の目を上手くすり抜けているそうです。ですが、互いの連絡は途絶えており、門の警備が厳しい限りは、しばらくどちらも動く事ができないでしょう」
従者の答えには応じず、イーリスは暗い廊下を歩き続ける。そして、小さな声で呟いた。
「…この国の玉座の後継者が誰になろうと、教団に「寄付」できるのであれば構わないわ。それがフォーラス家以外の人間であろうと、「亡き」王子であろうと。

亜魔界神教会の者も既になく、今、私を止められる人間は誰一人としていない…乱入者たち以外には」
二人は裏門を通り、敬礼する警備兵を背にして城の外に出た。
「教団と王族との繋がりさえ作る事が出来ればいい…そう、それで私は…」
「……」
不意に、従者が前触れなく立ち止った。
「…何か？」
振り返ったイーリスが問うと、彼は微動だにしないまま、フードの下で答える。
「いえ…少々不快な「におい」がしたような気がしたのですが、どうやら気のせいだったようです」
「……そう。
本当に気のせいなら、いいのだけれど？」
再び歩き始めた従者をじっと見ながら、イーリスはわずかに眉を顰めた。だが、従者の方は平然として彼女の横に立つ。
「仮にそれが何かであったとしても、大司祭様にはこのわたしが、指一本触れさせません。現に今は「におい」も消えております。ご心配召されぬよう」
「ふふ…心強いこと」
イーリスは柔らかく微笑んで、彼と共にまた歩き始めた。やがてその二つの背中は、星明かりさえも届かない暗闇に溶けていく。
誰もいなくなった夜道に、微かに草を揺らす音が響いた。

2

「兵士の数が増えてるわ…」

日差しもだんだんと強くなり始めた正午直前。昼食を取るために街中に出た時、いつもは背中に垂らしたままのフードを深くかぶったリシェルアが、街中を眺めて呟いた。

クリティスも、普段身に着けることのない長いマントを翻して、そっと周囲を見回す。彼女の言う通りそこかしこに、暑そうな鎧を着込んだ警備兵がだるそうに巡回していた。

「変装してきて正解だったな」

口元まで巻いた長めのストールの中で、低く呟くディオ。彼の異名の元にもなっている額の傷は、似合わないバンドの下に隠れている。五人の中でも一番雑な変装の彼は、あの覆面の男ほどまではいかないものの、一際怪しかった。

先ほど、その格好を見たエリスティアから、開口一番に「ディオ、変」と言われていたが、彼はそれを「うるせえ」と一蹴して、まったく気にもしていないようだった。曰く、「これは適当にしているから変なのであって、本気を出せば別人になれる」とのこと。本当なのか苦し紛れの言い訳なのかはわからないが、どうせこちらが何を言ったところで耳を傾ける事はないだろう。

「だがこれでは、ますます街の外に出るのは難しいな。どうせ、門兵も増員されていることだろう」

「誰だよ、あの男の仕事を引き受ければ早く街の外に出られるようになるなんて言ったのは」

そう言ったのは紛れもなくエドル自身のはずだが、彼は自分の事などまるで棚に上げて口をとがらせている。

なるべく人目につく場所を避けて、五人はいつもの丘のレストランへと辿りついた。店内に入って兵士の姿がないのを確認すると、一斉に深くため息をつく。

「このくそ暑い国で、厚着しなきゃなんねえ羽目になるとは…」
席に着くなり、ディオがストールを乱暴に引き解いた。割と色素の薄い肌に汗の粒が浮いて、銀髪が張り付いている。
暑いのは苦手だとぼやいていたのは、この国に着いてすぐだっただろうか。そんなことをぼんやりと思い出していると、視線に気づいた彼に睨まれ、「さっさとマント脱げ。見てるだけで暑苦しい」と言い捨てられた。
大人しくその言葉に従いマントを脱ぐ。それを簡単に畳んで、背もたれに引っかけた時だ。
店の奥…調理場の方が、にわかに騒がしくなった。
昼食時で店が混んできたためかと初めは思っていたが、どたばたと音と声はしているのにいくら待っても店員が注文を聞きに来ない。
今までホールで忙しく働いていた店員がすべて店の奥に引っ込んでしまい、それきり出て来なくなっていたのである。
「すいませーん！」
「おーい、注文まだー？！」
「いつまで待たせんだよ！」
やがてあちこちのテーブルから、焦れた客の怒鳴り声が飛び交い始めた。また、席への案内を待って入口で立ち尽くしている者もいれば、諦めて席を立つ者もいる。
「…せっかく必死に警備の目をくぐって来たってのに、今度はこれかよ…」
成長期真っただ中のエドルが、空きっ腹を抱えてぐったりとテーブルに突っ伏した。そんな彼を慰めるような目で見つめながら、少なくなったグラスの水を飲み干す相方。
「違う店に行ってみるー？」
「そーだねー…いつ食べられるかわかったもんじゃないし」
満場一致で頷く一同。
脱いだばかりのマントを再び羽織り、クリティスはおもむろに立ち上がった。続いて他の四人も、それぞれ支度を済ませて腰を上げた

…が。

客の怒号と厨房の喧騒の中で、忙しくこちらに向かってくる足音が聞こえた。

客たちのものとは違ってどこか焦りを感じるその音に、顔を上げ周囲を見回すクリティス。しかし窓の外にも入口のあたりにも、それほど慌ててホールに入ってくる者はいない。

（…店の奥からか…？）

疑問に思ったクリティスがそっと調理場の方を覗きこんだ時、それは突如ホールの方へと飛び込んで来た。

3

「うわあ…昨日より兵士増えてるよー…」
木陰から城下町の門を盗み見ていたウィミーネが、困惑しながら言った。それを聞いたエフィルたち三人は、顔を見合わせる。
「どうしたんだろう。僕たちがなかなか捕まらないから、本腰を入れてきたのかな？」
「でも困ったわ。これじゃ、ますます入れないじゃない」
「いや、入る方法はあるんだ」
はっと顔を上げて、エフィルとラズマはイルファに視線を集める。
「実は昨日ウィミーネに、街に入るもうひとつの入口を見つけてもらった。
郊外に、レストランの建っている丘があるだろう？」
一斉に、街のはずれにある小高い丘を見つめる四人。
「丘の外側には川が流れていて一見入れそうにないんだが、昔使われていたらしい橋が一本掛かっていて、そこを渡れば丘の裏から街に入れる」
「もちろん丘の裏側も城壁に囲まれてるけど、橋の傍にボロボロの扉があったんだー。わたしが空から入って内側から鍵開けちゃえば、何とかなるよね？」
「見張りはいないの？」
エフィルが尋ねると、イルファは少し首を捻ってから、
「昨日はいなかったが…これだけ警戒がきつくなってるってことは、そっちにもいくらかいるかもしれないな」
「でも、正面の門から突破するよりはるかにましだよ。
まずは確認だけでもしてみよう」
ラズマの提案に従い、一同はそっと門の陰から抜け、城壁の外を回って丘の裏へと向かった。

イルファの言った通り、丘の裏の城壁には、伸び放題の蔦が絡まり傾きかけた古い鉄格子の門がついていた。数人の警備兵がおり、時々雑談をしたり、いかにも暇そうに欠伸をしたりしている。

四人は目を合わせて頷くと、それぞれの得物を取り出して奇襲を仕掛けた。

「うわああっ?!何だ貴様らっ!」

「こ、こいつらもしかして……!」

「怪我したくなかったら、さっさと引っ込みなさい!」

エフィルがまず率先し、大剣を振りかざして威嚇した。それに慄いた兵たちを、イルファが電光石火の動きで次々と気絶させていく。

「いと高き天に仕う風の神よ!」

ラズマの呪文が響き渡ったかと思うと、突風がこちらに向かってきた兵たちを吹き散らした。城壁に背中を叩きつけられて意識を失う者もいれば、気絶はしないものの怖じ気づき、何か負け惜しみのような言葉を怒鳴りながら逃げていく者もいる。

「ウィミーネ!今の内に!」

「うんっ!」

警備兵たちのすべてが気絶し、あるいは逃げて行ったのを確認すると、エフィルは翼人の少女を呼び寄せた。

ウィミーネはその白い翼を大きく広げると、羽を散らしながら宙を飛ぶ。城壁を越えて反対側に降り立ち、鉄格子に手を掛けた。

「えーと……うん。別に鍵が必要なわけじゃなさそうだね」

そう言って、扉を開けようと錠に触れる。だが、扉はいつまで経っても開かない。

ウィミーネは急に表情を険しくすると、今度は両手を使って錠をがちゃがちゃと引っ張り始めた。

「ど、どうしたの?」

「なんかこれ、サビついてて開かないよーっ!」

格子の隙間から覗いてみると、どうやら金属製の小さなかんぬきが、錆びついて膨張し引き抜けなくなってしまっているようだ。小さな手で懸命に引っ張ってはいるが、かんぬきは僅かな金属音を立てるだけ。

「木だったら剣で壊すこともできたけど、さすがに鉄じゃ無理だわ…」

「まずいな。早くしないと増援が…」

兵士が逃げて行った方向を睨んで、イルファが苦々しく呟いた。ウィミーネはますます焦って、力任せに金具を揺らしている。

「お嬢さん、失礼いたします」

何か助ける方法はないものかと悩み始めた時、ふと、ウィミーネの後ろに人影が現れた。

あまりにも気配が薄く、いつ近づいてきたのかもわからないほどだ。四人は一瞬、反応を忘れて唖然としていた。

黒いスーツに身を包み見事な白髪を頭に頂いたその老人は、ウィミーネの横からおもむろに手を伸ばす。それほど力を入れたようにも見えないのに、錆びたかんぬきはカタン、と外れた。

老人は門を引くと、エフィルたちを導くように手を差し伸べる。

「どうぞ、こちらへ。

警備兵はわたくしめが引き止めておきます故、皆様は真っ直ぐに丘をお登り下さい。そこからは、わたくしの手の者がご案内いたします」

「…な、何者かは知らないけど、迷ってる場合じゃなさそうね」

横手に現れた警備兵らしき人影を見やって、エフィルは即座に頷いた。

「それじゃ、ここは頼んだわ」

「お任せ下さい」

四人はスーツの老人に背を向けて、橋を渡り丘の木々の間に紛れた。

「あの人、大丈夫かなあ」

心配そうに後ろを振り返るウィミーネ。

「警備兵が、無実の市民に手を出す事はしないと思うけど…それにしても、何者なんだろう？」
「彼は、私たちのオーナーですよ」
顔を見合わせていると、今度は若い女性の声がした。
振り返ると、エプロンドレスに身を包んだ女の人が、こちらに微笑みかけている。
「エフィル・トレークさんですね？ここからは、私がご案内します。付いてきて下さい」
「え…えっと…」
こちらが何か質問を投げかけようとすると、彼女は口元に指を当てた。
「ご質問は、後でオーナーの方にどうぞ。私は彼に案内役を頼まれているだけなので、おそらくお答えできかねます」
エプロンドレスの彼女に導かれ、一行は丘の反対側へと回った。
「こちらへ」
辿り着いたのは、どこかの建物の勝手口。中に入ると、閑散とした部屋が目の前に広がった。
家具は木製の棚がいくつかと、テーブルと椅子だけ。棚には洋服が押し込められている。
「ここはもしかして、『フォレストフォーラス』じゃないか？」
部屋を見回して、イルファが呟いた。エフィルは首を傾げて「フォレストフォーラス？」と尋ね返す。
「そうです。ここはレストラン『フォレストフォーラス』です」
代わりに答えたのは、勝手口の扉に鍵を掛けて部屋の中心に移動した、エプロンドレスの女性。
「ちなみに、私はここの店員です」
「実はかねがね、このレストランに足を運んでみたいとは思っていたんだが、まさかこんな形で来られるとは想像もつかなかった。これも、ディアン神のお導きかもしれない…そう、君と俺とはこうして出会う運命だったんだよ！」

「ところで、どうしてあなたたちは私たちを助けてくれたの？」
イルファの戯言が終わるのを見計らい、間を置かずにエフィルは彼女に問うた。彼女はイルファをスルーして、エフィルに近づく。視線の隅に項垂れているイルファが少し映ったが、あえて彼には触れないでおいた。
「先ほども申し上げましたが、オーナーに指示されたからです。とは言っても、オーナーもあの方にご命令を賜ったようですが」
「あの方？」
エフィルが眉をひそめた時、後ろから扉を叩く音が聞こえた。
追手かと思い身構える。しかし、女性店員が扉に近づき、耳をそば立てて尋ねた。
「オーナーですか？」
「ええ、追手は来ていませんよ。開けてください」
店員は「はい」と一言答えると、勝手口の鍵を外した。すると、さっき見た時と比べても少しも乱れていない、スーツの老人が現れる。彼はドアを閉めて元通りに鍵を掛けると、椅子に腰かけてひとつ、ため息をつく。それから、涼しげな笑みを浮かべた。
「さて皆様、お怪我などはされていませんかな？」
「え、ええ、大丈夫よ。さっきはありがとう」
老人――このレストラン『フォレストフォーラス』のオーナーのねぎらいを、戸惑いながら受け止めると、彼は「それは良かった」とゆっくり頷いた。その柔らかな、しかし凛とした物腰や振る舞いに、ただならぬ人物だということを感じ取り、四人は唾を飲み込む。
「……どうして、私たちの事を知ってるの？」
一呼吸おいて、ずっと聞きたかった事を尋ねると、オーナーはゆっくりとこちらを向き、語り始めた。

4

「ほっほっほ。坊ちゃまからお聞きしております故」
「坊ちゃま?……もしかして」
ラズマが呟くと同時に、オーナーはいかにも嬉しそうに、大きく頷いた。
「左様。アクス王子様のことにございます。それにしても、「数日の内にあの門からやってくるだろう」とお聞きしてはおりましたが、まさか二日で来られるとは…いやはや、誠に行動力と決断力に富んだ方々ですな」
照れたエフィルは、その穏やかな瞳から少し目を反らして、胸を張った。
「即断即行が私たちのモットーだもの」
「主にエフィルだな。俺はもう少しよく考えて動くタイプだ」
「何よ、私が何も考えてないって言いたいのかしら?!」
「ふふ…坊ちゃまがああしてお変わりになったのも、あなたたちのおかげかもしれませんな」
オーナーは、小さな目をますます細めてこちらを眺めた。
「わたくしは、マクレイド・ハーレスと申します。七年ほど前まで、坊ちゃまのお世話係としてお傍にお仕えさせていただいておりました」
「立ち居振る舞いに隙がないなと思ってはいたが、そういうことだったか」
王子の側近ともなれば、主人を守るために何かしらの体術を身につけていてもおかしくはない。だからさっきも、「警備兵を足止めする」と何の躊躇もなく言う事ができたのだろう。
「定年で退職してからは、趣味も兼ねましてこのようなレストランを開き、オーナーを務めつつ坊ちゃまのご成長を遠くから喜んでおりましたが…」

老人の表情が、ふっと沈んだ。
「一年前、王子が失踪しその後にお亡くなりになったという話を聞き、それからというもの、大きな喪失感に常に苛まれておりました。若くして亡くなったアクス王子を差し置いて、わたくしがこのようにのうのうと生きていて良いものかと…できることなら、王子の代わりにわたくしが神に命をお返ししたいと。
しかし、今から一ヵ月ほど前の事でしょうか」
彼は、背筋を伸ばすと顔を上げた。今までの暗い表情はなく、口元を引き締め厳しい顔をしてこちらを見る。
「懇意にしていた政治家の方から、「カイ王子が、王位を得るためにアクス王子を亡き者にした」という話を聞いたのです。
初めはわたくしも、噂にすぎないと思っておりました。王族と教会の癒着によってその活動を抑え込まれている議会が、そのような噂を流してカイ王子様を貶めようとしたのだと。
しかし、同時期に行われた亜魔界神教会の閉鎖とイーリス大司祭の不穏な行動を知ると、わたくしも徐々に、何かがおかしいと疑い始めました」
「イーリス大司祭の不穏な動き？」
マクレイドは、厳かに頷いた。
「イーリス大司祭が、ここ一ヵ月、頻繁にカイ王子の私室への出入りを繰り返しているそうです。それも極秘裏に。
教会と王族との癒着は昔からありましたので、教会の使いの者が王室を訪れるということは以前にも度々ありました。しかし、大司祭自らが王室を出入りするなど前代未聞…。
戴冠式直前になっての教会の閉鎖とも絡めて考えると、王子と大司祭が密かに何か行動しているとしか思えなかったのです」
「ちょっと待ってよ。亜魔界神教会の閉鎖って何？」
ウィミーネが彼の話を遮り、皆を見回した。
「一ヵ月前から、住宅街にある亜魔界神教会が閉鎖されたんだ」
それに答えたのは、ラズマ。

「市民には何の知らせもなかったそうだから、寝耳に水の話だったろうね」
「ええ。神父様や僧侶たちも行方知れずで、教会に籠って修行をしているのだとか、神聖都市アトリクスの亜魔界神信仰教会本部に研修に行ったのだとか、様々な憶測が飛び交っておりました。しかし昨日、ようやくその真相がわかったようです」
「え？」
マクレイドは、声をひそめた。
「皆様はもうお気づきになられているでしょうが、わたくしはこの店に、アクス王子を匿わせていただいております。王子がわたくしの元を訪れたのは、戴冠式の直後でした。それからは、王子はここを拠点として、皆様がお戻りになるのを待ちながらお一人で活動なさっていました。その活動の一つが、教会閉鎖の真相を暴く事。
教会が閉鎖された理由は、神父様や僧侶たちの殺害を隠匿するためでした」
言葉を失うエフィルたち。
「彼らを殺した人物についてはわかりませんが、大司祭が関わっている事は間違いないでしょう。そして、そこにカイ王子様が噛んでいる可能性も浮上する…
なぜ彼らを殺害したのか、カイ王子様やイーリス大司祭が何をしようとしているのか……アクス王子は現在、それらを調べておられます」
「……驚いたな」
イルファが、感嘆のため息を漏らした。
「本当に、アクス王子が一人で？だとしたら、エフィルに負けないぐらいの行動力じゃないか」
「意志も強いわ。初めて会ったときは、あんなに弱そうに見えたのに」
「え、エフィルってば、仮にも王子様に弱そうなんて…」

歯に衣着せぬエフィルの言葉をウィミーネが慌てて止めようとしたが、マクレインは気を悪くするでもなく、にこにこと微笑んでいた。
「お一人…と申しましたが、厳密にはたったお独りで動いていらしたわけではありません。微力ながら我々もお手伝いさせていただいておりますし、教会の件に関しても、他の協力者をお用いになっていたようです。
けしてお独りで抱え込むのではなく、周りの者と協力するということを大切にしている方ですから」
「ふうん…他にも協力者が…？」
エフィルが首を傾げた、その時だった。
突然、勝手口が乱暴にノックされたのである。
「もしかして、追手？」
ウィミーネが怯えて、イルファの背中に隠れた。ラズマがそっと扉に近づき、耳を澄ます。
「……そうみたいだね」
「ふむ…煙玉を撒いて逃げて来たのですが、もしかすると後ろ姿を見られたのかもしれません」
「どちらにせよ、このレストランはあの門から一番近い建物なんだし、真っ先に捜査が入ってもおかしくなかったな。
どう動く？」
こちらを見て、指示を待つイルファ。エフィルは少し考えてから、部屋のもう一つの出口…調理場へと続く扉に目をやった。
「ここで暴れるわけにはいかないでしょう。逃げるしかないわ」
「それでは、わたくしが時間を稼いでおきます。皆様は速やかにホールからお逃げください」
オーナーは、調理場への扉を開けて従業員たちを全員呼び出した。
彼が指示を与えると、彼らは慌ただしく扉を塞いだり、証拠品を隠すために王子の隠れ場所である倉庫に向かう。
「彼らはレストランの店員であると同時に、わたくしの良き理解者でもあります。

さあ、今の内に」
「ええ、あなたたちも気をつけて。ほとぼりが冷めたら戻ってくるわ」
四人は、マクレイドたちを背にして調理場へと出た。すると、ホールの方が何やら騒がしい。
「ああ、そうか。店員たちが店の仕事を放棄して僕たちのサポートをしてくれているから…」
「ちょっとお客さんには申し訳ないよね…これが原因で、今後のレストランの評判が落ちなければいいんだけど」
罪悪感はあるが、今は自分たちが逃げ切る事が先決だ。切りかけの野菜や盛り付けている途中の皿などを横目に、エフィルたちは調理場を駆け抜けた。
「ホールの方から警備団が来ていない事を祈るのみだな」
不吉な事を言い出すイルファを無視し、エフィルはホールと調理場とを隔てるカーテンをやや大げさに掻き分けた。
イルファの予想は運よく外れた――が。
四人はここで、思わぬ再会を果たしてしまったのである。

5

「「な……」」

五人と四人、計九人は、混乱極まるレストランホールでお互いに見合ったまま、絶句した。

「な…なんで、あんたたちがここに…」

長い沈黙の末、まず初めに口を開いたのは、赤毛の長身の男。

「なんでって…め、飯を食いに来ただけなんだけど」

深緑の瞳の少年が、白い翼をはためかせて答える。

「こんな最悪のタイミングで鉢合わせるなんて」

頭を抱え、同じ翼人族の金髪少女が唸った。

「最悪のタイミングって、何の事ー？」

小首を傾げてきょとんとしている、黒髪ショートヘアーのほんわかとした娘。

互いが互いの状況を認識できていない状態で、皆、次の行動を起こしあぐねていた。

「…ウィミーネの言う通り、こんな完璧なタイミングで鉢合わせるなんておかしいわ」

が、我に返ったエフィルが咄嗟に背中の剣に手を掛けたことで、一

気に場の空気が張り詰めた。
巻き込まれる事を恐れた他の客たちが、テーブルや椅子を押し退け我先にと店を出ていく。あっという間に静寂に包まれたレストランホールに、彼女の凛とした声が響き渡る。
「私たちを待ち伏せてたんじゃないでしょうね？」
「は？何だそれ」
もともと不機嫌だったディオの眉間の皺が、一気に増えた。
それを見たイルファが、あからさまに動揺しながらエフィルの服を引く。
「わあああおち、落ちつけエフィル！さっき「飯食いに来た」って言ってたじゃないか！」
「何ビビってんのよイルファ。でかい図体でそんな腰の引けた恰好して、みっともないわねー」
「仕方ないだろう！彼はその道では悪名の高い…」
余計な口を滑らせかけたところで、ディオが鋭く光る闇色の目をイルファへと向けた。「ひいっ」と情けない声を上げ、彼はこそこそと仲間たちの一番後ろに隠れる。
「…そういえば、戴冠式の時に真っ先に武器を抜いたのがあなただったわね。それに、「悪名」高いときたわ。
つくづく私の道義に反する男ねえ」
「俺にとって、てめえの道義ほどどうでもいいものはねえな。
かかって来るならさっさと来ればいいのに。その悪名高さを、目に物見せて教えてやるよ」
「ディオ、貴様も貴様だ。煽るんじゃない」
臨戦態勢に入ったディオを後ろへ押しやって、クリティスはエフィルたちに問うた。
「こちらからも聞くが、お前たちはどうしてそこから出て来た？」
「ふんっ、あんたたちに教えてやるような――」
「警備団に追われているんだ。理由はまあ、君たちも良くわかってると思うから言わないよ」

撥ねつけようとしたエフィルを抑え、苦笑交じりに答えたのは、ラズマ。
「…ふむ。そこの小娘よりは話が通じそうだな」
軽蔑しきった切れ長の目でエフィルを流し見るクリティス。憤慨するエフィルをウィミーネが抱えて留めているのをよそに、ラズマと対峙した。
「初めまして。僕の名前はラズマ。
先日の戴冠式の時にエリスと会ってるんだ。僕の事は聞いてるかな」
「ああ…確かアトリクス出身で、創造主教の僧侶だとか」
「そうそう。本来なら僕だけじゃなくみんなで自己紹介をし合うべきなんだろうけど、面倒くさいからそこは省くよ。
というか、そんな時間ないしね」
今にも欠伸をしそうなけだるげな声と目つきで、ラズマは淡々と語る。
「実は、今も裏の勝手口に警備兵がいるんだ。いろいろあって、レストランのオーナーと店員たちが食い止めてくれているところ。
悪いけど、通してくれないかな」
「私はもちろん構わない。後ろの連れも…まあ、そこに一名むくれている男がいるが、今お前たちと関わっても得する事はないとわかっているはずだから、大丈夫だろう。
…だが」
クリティスはもう一度、こちらを射殺すのではないかと思うほど険呑とした視線を向けてくるエフィルを見た。
「このままでは、こちらが何をしなくとも、そこのエフィルとかいう女が勝手に喧嘩を吹っ掛けてくるのではないかと思うのだが」
「……エフィル」
ラズマは困った顔を仲間の娘に向け、諭すような声音で語りかけた。
「向こうは何もしないってはっきり言ってるよ？それに僕たちも、彼女たちをどうこうしてる場合じゃないし」
「で、でも……」

ラズマに弱いエフィルは、急に威勢を失って眉尻を下げた。
そこに追い打ちをかけるように、店の奥の方から、何かを蹴り飛ばすようなけたたましい物音が鳴り響く。おそらく扉が破られたのだろう。女性店員の悲鳴や、警備兵のものと思しき怒鳴り声も聞こえる。
「来るぞ！」
カーテンの陰から調理場を覗いたイルファが、鬼気迫る表情で叫んだ。エフィルはその声に弾かれるようにして立ち上がると、一度クリティスたちを睨む。
「言っておくけど、あなたたちを信用したわけじゃないわ。いずれ化けの皮ひん剥いてやるんだから！」
そう言い捨てると、「行くわよ！」と仲間たちに一声掛け、大慌てでレストランを出るエフィル。その後にイルファ、ラズマと続き、最後にウィミーネが申し訳なさそうな顔で、「ごめんなさい…」と零して去って行った。
「…怖い女だな…」
遠くなるエフィルの背中を眺めて、エドルが小声で呟く。
クリティスは、自分の手荷物を抱え直すと彼に言った。
「放心している場合ではない。私たちも行くぞ」
「――そうか、おれらもやべーじゃん！」
エフィルたちも警備団に追われていたが、クリティスたちもまた、警備団に目をつけられているのである。
すかさず五人は、荒れ果てたレストランホールを後にした。間もなく後ろから、男たちの怒号が聞こえてくる。
「――って、なんであんたたちも追いかけてくんのよーっ？！」
やがて丘の中腹で、別れたばかりの四人と合流した。振り返ったエフィルが、驚愕の声を上げている。
「こっちも警備団に追われてる身なんだよ！」
「警備団に追われてるですって…？！」
ディオの返しに目を見開いた彼女は、逃げながら、勝ち誇ったよう

な声音でこう叫んだ。
「つまりあんたたち、人様に言えないような犯罪をやらかしてたってことでしょう！
ほら見なさい！私の正義の目はごまかせないわよ！」
「「「お前のせいだーっ！！」」」
エドル、ディオ、エリスティアの息のあった突っ込みが、見事なハーモニーを奏でて蒼天に高らかに響いたのだった。

6

「あー…じゃあ、まず、自己紹介をしようじゃないか」
険悪な雰囲気の中、無理矢理笑顔を作った赤毛赤目の男、イルファ・アリゼルがそう提案してきた。
ここは、先ほどのレストラン『フォレストフォーラス』。しかし、ホールではなく従業員の休憩室だ。警備員に破られた勝手口の扉が壁に立てかけてあり、丸見えの外からさわやかな午後の風が吹いてくる。荒れた室内を、エプロンドレス姿の店員が掃除している。
しばらく市街を逃げ回ったクリティスたちは、警備兵を撒くと、なし崩しにエフィルたちに付いてここへとやってきた。レストランのオーナーだというスーツの老人はにこやかに自分たちを出迎えると、誰何もせずに黙ってこの部屋へと通してくれた。
「話し合うには、まずお互いを知らないと」
「相手の事知らなくても、喧嘩ならできるわよ」
「頼むから喧嘩をすることから離れてくれないか」
こちらから顔を反らし椅子の上でふんぞり返ったエフィルが、苛立たしげに呟く。それを早口で諫めて、イルファは再びぎこちない作り笑顔を続けた。
「それじゃあ、まずは俺から。
トレジャーハンターのイルファ・アリゼルだ。オルド・アリゼルの息子だって言ったらピンとくるんじゃないか」
「まさか、「雷光のオルド」？！」
エドルが、勢いよく身を乗り出した。
「「鳴神の剣」をハントしたあのオルドの事か？！」
「そう、それ。ちなみに、これが「鳴神の剣」だ」
イルファは腰から両刃の剣を鞘ごと外し、テーブルに置いた。クリティスが顔を近づけて見ようとしたところを、エドルに真っ先に掠め取られてしまう。

「まじ?まじで?!これホンモノ?!」
目をきらきら輝かせて鳴神の剣を眺め回すエドル。今にも持ち逃げしそうなその威勢に気押されて、イルファは「あ、ああ」とたじろいでいた。
「ってことは、刃から電気出んの?!どうやって?!」
「や、あの、説明してやりたいのは山々なんだけど、まずは自己紹介を…」
イルファが困り顔で声をかけても、エドルは剣に目を奪われたままでまったく話を聞いていない。仕方なく、クリティスが次に名乗り出た。
その後流されるようにして皆、名前と年齢程度の簡単な自己紹介を行っていく。ただしエリスティアは自分が創造主であることを口にせず、「エリス」とだけ名乗って本名も明かさなかった。またクリティスや他の連れも、それに口出しすることはしなかった。言ったところで、向こうが信じるとは到底思えないからである。
一通り自己紹介を終えたところで、今度はラズマが自分たちのいきさつについて説明を始めた。
「僕らは一年前から四人で旅を続けててね。この国を経由して関所を抜けようとしたところで、ある人に出会ったんだ」
「ある人?」
ラズマは、一旦話を止めて仲間たちを見た。それから、勝手口付近に佇んでいるオーナーに目配せをする。
見られた者たちは何も言わなかったが、ラズマはそれで了解を得たと判断したのか、話を続けた。
「――アクス・ヴォールナ・フォーラス王子。近々この国の王位を継ぐ、カイ・ヴォールナ・フォーラス王子の双子の弟君さ」
「あー、やっぱ双子だったのか」
突如口を挟むディオ。
「そんな話をどこかで聞いた事があったんだが、戴冠式の時に一人

しかいねえから、おかしいとは思ってたんだ」
そういえば戴冠式の時、ディオがそのような事を口にしていたのをふと思い出す。
「そこまでくればもうわかると思うけど、僕たちが今回首を突っ込んじゃってるのは、所謂王位継承争いっていうやつなんだ。
この国の王位は王族年長の男子が代々継ぐ事になってるんだけど、カイ王子とアクス王子は双子だから、どっちが王位を継ぐかで長年散々揉めてたそうだ」
その争いはずっと定まらずじまいであったが、一年前、転機が訪れた。
アクス王子が数人の共を連れて狩りに出かけた際、そのまま行方不明になってしまったのである。
警備団が死力を尽くして探したがまったく足取りが掴めず、共の者の死体が狩り場で発見されたことから、王子も死亡した可能性が高いと判断された。国民には「アクス王子は魔獣に襲われ亡くなった」と伝えられ、捜索も手詰まりになり打ち切られてしまった――
「……っていうのが、王族からフォーラス国民の間に公表された話だよ」
「そんな好都合な偶然があってたまるかっての」
エドルが、すかさず吐き捨てた。
ラズマも頷く。
「でも、僕たちは「死んだはずのアクス王子」に出会ってしまった。それも、カイ王子の手先に襲われているときにね。
それで怒ったエフィルがカイ王子の悪行を暴くって言いだして、戴冠式の時に乱入してばらしてやろうって計画を立てて……あの日に至るわけだ」
「なるほど、お前たちの事情はわかった」
目を閉じてじっと話を聞いていたクリティスは、顔を上げると彼らに尋ねた。
「それで、肝心のアクス王子は今どこに？」

「ここを拠点にして動いてるみたいだけど、まだわたしたちも再会できてないんだー」
ため息をついて首を振るウィミーネ。
「戴冠式の時、わたしが捕まっちゃったせいでアクス王子とも離れちゃって…」
「あんたのせいじゃないわよ。だって、ウィミーネが捕まったのはそっちのせいだもの」
エフィルが、じろっとこちらを睨みつけて来た。
「あたしたちのせいー？」
「そうよっ。そこのエルフにウィミーネが突き飛ばされたところを、警備兵に取り押さえられたのよ！
あんたたちがあそこで乱入してこなければ、今もこんなおかしな事態にならずに済んだのに！」
「話がややこしくなるから、戴冠式の時の事は蒸し返すなって」
どたばたとエフィルを抑え込む仲間たちを見つめ、クリティスはその怒りが自分に向けられている事も構わずに大きく頷いた。
「…もしかしてあの男…」
「ええ、その通りでございます」
独り言のつもりだったクリティスの言葉に反応したのは意外にも、静かな微笑みを湛えて佇んでいたレストランのオーナー。
一同が振り返ると、彼は「余計な口を差し挟んでしまい申し訳ありません」と一言断り、
「あなた方がこのレストランで出会った、あの覆面のお方…あの方こそが、アクス王子にございます」
「失礼だが、貴方は…？」
「申し遅れました。わたくし、数年前までアクス王子のお世話係兼執事を努めてまいりました、マクレイド・ハーレスと申します」
深々と腰を曲げる、ハーレスオーナー。
「何よ。あんたたち、アクス王子に会ってたの？」
エフィルが素っ頓狂な声を上げた。

「昨日、そいつから仕事を引き受けたんだよ。亜魔界神教会の潜入調査をしてくれってな」
「王子の代わりに教会の調査をしていたのは、君たちだったのか」
納得したように頷くディオとイルファ。
ラズマがテーブルに上半身を乗り出し、こちらに尋ねてきた。
「こちらの方でも、亜魔界神信仰教会がこの王位継承騒動に絡んでるって話は掴んでたんだ。ただ、その証拠が見つからない。おそらく王子も、それを掴むためにあんたたちを教会へ送ったんだろう。それで、結局どこまで掴んだんだ？教会関係者が殺されてたって話みたいだけど…」
「わかったのはそのぐらいだぜ」
エドルが、肩を竦めて答える。
「神父と僧侶が全員殺害されてた上に、地下に遺体を隠されてた。腐乱の進行具合から見ても、おそらく死後一ヵ月ってとこかな。教会関係者の中で生き残っているのは、イーリス大司祭一人だけ」
「そういえば…」
ウィミーネが、マクレイドに視線を向けた。
「イーリス大司祭が、ここ一ヵ月頻繁に王室を出入りしてるって話もあったよね」
「今回の事件の最重要人物は、彼女だな。一体どこまで関与しているのかわからないが」
難しい顔で俯くクリティス。
エフィルが背もたれに大きく寄りかかり、「あーもう！」と大きな声を上げた。
「聞けば聞くほど、アクス王子が不憫だわ。ようは、カイ王子とイーリス大司祭が共謀して、アクス王子を亡きものにしようとしてたってことでしょ？」
「まだそうとは限らないけどね」
「とにかくまずは彼に会って、どのくらい情報を得たのか確かめるべきだな。教会関係者の殺害の目的に関しても、現時点ではよくわ

からないし」
頷き合うエフィルたち。彼女たちの今後の活動方針は決まったようである。
クリティスたちはそれを見ると、顔を見合わせた。そして、
「それじゃ、ここらへんでおれらは帰らせてもらうよ。
あんたたちの活躍を、陰ながら見守ってるぜ」
真っ先に立ったエドルが、満面の笑みで手を振った。それに倣い、四人もガタガタと席を立ち宿に帰る準備をし始めた――が。
「……何言ってんのよ？」
踵を返した背中に、冷たい女声が投げかけられる。
「ここまで情報を共有した以上、わたしもあなたたちも他人の振りをするわけにはいかないと思わない？」
「い…いや、別におれたち、向こうにチクるとかそんな事をするつもりは一切…」
「そういう問題じゃないわ。
空気を読みなさいって言ってるのよ。普通こんなひどい話を聞いたら、「自分たちも協力する」って気分にならないかしら」
無茶苦茶である。
「全然ならなかったので帰ります」
「あんたたちには、正義心っていうものがないのっ？！」
「前に言ったじゃねえか。お前の信じる道義なんざどうでもいいって」
心底嫌そうに彼女を見下ろしディオが言い捨てたが、それでもエフィルはしつこく食いついてくる。二人が言い争いを始めると、今度はウィミーネが口を開いた。
「どうせ街の外には出られないんだよね？それなら、宿で肩身の狭い思いをして待ってるより、ここにいて協力し合う方が安全だし、早く解決するんじゃないかな…」
「え、ちょ、ウィミ」
イルファが、妙に慌ててその口を抑えようとした。しかし、エフィ

ルは彼の顔を手の平で押し退け、無理矢理ウィミーネから引き剥がしてしまう。
だがしかし。
「エフィル。彼らは元々無関係の人間なんだし、これ以上巻き込むのはどうかと思うよ」
次にラズマが、あきれ果てて反対意見を主張すると、
「ええーっ…」
エフィルは、見る間に今までの威勢を失って眉尻を下げた。
「戴冠式の時だって、元はと言えばエフィルの勘違いが発端だっていうじゃないか。これ以上迷惑を掛けるわけにはいかないよ」
「あ、あれは――」
「エフィル」
咎めるような彼の視線を受け、彼女は面白いほど大人しくなってしまった。
改めてこちらに身体を向けると、丁寧に頭を下げるラズマ。
「いろいろと巻きこんでしまって、本当にごめん。
それから、アクス王子の依頼で教会の調査をしてくれた事も含めてお礼を言うよ。ありがとう」
「まあ、それもこれも成り行きというものだろう。エドルも言っていたが、無事にこの件が済むことを祈っている」
当たり障りのない言葉を返し、クリティスも軽く会釈をした。顔を上げ、イルファのほっとしたような笑顔と、ラズマとウィミーネの微笑み、それからエフィルのむっつりした不満顔を順に眺める。
そして、再び勝手口へと足を進めたが――

7

「――あ」
今まで黙って事の成り行きを見守っていたリシェルアが、何か思い出したように声を上げた。
それから、おもむろに手荷物の中を探り始める。
「これ、あたしたちが持ってても仕方ないと思うからー…」
そう言って取り出したのは、先日教会を調査した時に見つけたあの魔法陣の紙切れ。
「昨日、教会で拾ったのー。事件の解決に役立つといいんだけれどー」
「何なに？何それ」
興味津津の目つきで、彼女の手元を覗きこむエリスティア。
「おいおい、いつの間にそんなもの手に入れてたんだよ」
呆れてこめかみを押さえながら、相方の動きを目で追うエドル。
リシェルアがそれをラズマに手渡すと、彼は怪訝な表情で礼を言った。しばらく表の魔法陣を眺めていたが、それが何を意味するものなのかわからない様子だ。後で説明を付け加えた方が良いかもしれない。
だが、ラズマが皆の注目の中、何気なくそれを裏返した時。

「「「――白蛇教団……！！」」」

三人の声が、重なった。
ラズマとエリスティア、そしてもう一人――

「…ディオ？」
想定外の人物が顔色を変えた事に驚き、クリティスは間の抜けた声で彼を呼んだ。
しかし、彼は応えない。それどころか、まったく周りが見えていないような虚ろな目で、ただただ紙切れに描かれている蛇のような紋様を見つめ続けている。
「これが、本当に亜魔界神教会に？」
ラズマが、動揺を隠せていない声色で尋ねてきた。
リシェルアが頷くのを確認すると、彼は唸って黙り込んでしまう。
「白蛇教団って…？」
「亜魔界で活動してる宗教団体の一つだよ」
ウィミーネの問いかけに、エリスティアが神妙な面持ちで答えた。
「と言っても、宗教団体っていう表現が正しいのかはわからないけどね」
「へー…名前に教団って付いてるのに、宗教団体と言えないとはこれいかに…
……ちょっと待て。その言葉、どっかで聞いたような気がするんだけど」
思いきり眉をひそめたエドルに、エリスティアは大きく頷いた。
「白蛇教団は、神やそれに準じる存在を嫌悪し否定する無神教組織。つまり、亜魔界版の希望の箱ってところだね」
「な、な、何なのよその、神やそれに準じるうんたらとか、希望の箱っていうのは」
説明を求めて周りを見回すエフィル。すると、ラズマがエリスティアに代わって話を続けた。
「ようは、何も信仰していない事を信仰する組織さ。場所によって名前が違うだけで、希望の箱も、同じ目的で活動してる組織だね。希望の箱は最近大きな動きを見せて結局解散したけど、白蛇教団は設立当初からずっと地下で目立たず活動を続けてる。だから一般人は知らない人がほとんどのはずだし、創造主教の上層部もあまりそ

の規模を把握していない。かく言う僕も、名前ぐらいしか知らなかった」

「希望の箱が解体したのを聞いて、その仇討ちをしようとしてるのかしらー？」

リシェルアが、ラズマに渡した蛇の紋様を見つめて首を傾げた。しかし、エリスティアが首を左右に振る。

「ううん、違うと思うな。同じ思想を持ってるとは言え、希望の箱と白蛇教団は仲良くなかったみたいだから。

それに仲が良かったなら、この間希望の箱が蜂起した時に支援したりすることだってできたわけだし」

「…一ついいか？」

ふと、イルファが控えめに手を挙げた。そちらに顔を向けるクリティスたち。

「さっきから妙だと思ってたんだが、あんたたち、どうしてそんなに白蛇教団とやらの事情にやたらと詳しいんだ？一般にはほとんど知られていないし、それはおろか、情報を集めているはずの宗教界上層部の人間もわかっていないような団体なんだろう？」

「え……」

クリティスは、思わずエリスティアたちと顔を見合わせた。それから皆、「しまった」という表情で首を竦める。

「確かに…希望の箱が引き起こした事件に関しても、天空界の朝廷は一般に公表していないはずだ。

それを、どうして？」

ラズマも、こちらの顔を覗きこんできた。エドルが苦し紛れにごまかし問い返す。

「じゃ、じゃあなんでラズマはそういう情報知ってるんだよ？お前、創造主教会の上層でも何でもない、下っ端僧侶じゃねーか」

「僕の場合は、ちょっと特殊なんだよ。本来アトリクスの大教会で修行の身にあるはずの僕が、こうしてエフィルたちと旅をしていることからもわかるようにね。

だから、教会の情報部からこっそりいろんなことを教えてもらえるんだ」

「本来の教会の仕事でも、サボって絵を描いてた生臭僧侶だけどな…」と、彼の背後で独りごちているイルファ。

ラズマはしばらくこちらをジト目で眺めていたが、口を頑なに閉ざして開こうとしないのを見ると、残念そうにため息をついた。

「まあ、いいや。誰にだって言いたくない事はあるよね。

それに、君たちはどうせここで僕たちと別れ――」

「そのことなんだけど、気が変わったよ」

エリスティアが、至極平然とそう言った。

もちろんこちらの意思など確認せずに、だ。

「はあっ?!お前、この期に及んで何を…」

不平の声を上げかけたエドルの口を手で乱暴に塞ぎ、彼女はまるでクリティスたちなどいないかのごとく、見向きもせずに続ける。

「白蛇教団が関わってると知ったら、無関係ではいられないよ。仇討ちとはいかなくても、希望の箱が倒れたことで何か行動を起こそうとしてるんだったら、なおさらね」

「むむーっ、むううううっ!」

エリスティアの手の平の中でエドルがなおも抗議している。だがクリティスはというと、うって変わって物分かり良く黙っていた。

あの紙片を彼女が見たら、まず間違いなく食いついてくるだろうと、元から予測していたからである。その予測は一応リシェルアにも伝えておいたはずだが、何を考えて彼女がこの場でそれを渡そうと思ったのかはわからない――いや。

もしかすると、自分たちと違って彼女は、初めからエフィルたちに協力するつもりでいたのかもしれない。

ちらりと横目を向けてみたが、彼女は依然として真意の読めない笑顔を浮かべていた。しかし仮にそうだとすると、いつも皆の言い分に黙ってつき従っている彼女にしては、珍しい…

「…リティス!ちょっと、聞いてる?!」

ぼうっと思案に暮れていると、エリスティアの怒鳴り声で意識を引き戻された。
「そんな大きな声を出さなくても…」
「で、あんたは協力するの、しないの？」
「しないと言っても、どうせ認められないのだろう？」
「当たり前でしょ！」
ため息をつきたい気分に駆られたが、リシェルアの傍で人をも殺せそうなほど不機嫌な表情をしながらそれでも沈黙しているエドルをみると、同情心が勝ってそれすらも出なくなってしまった。
「ということで、あんたたちのお手伝いをしてあげることになったよ！感謝してね！」
「それは、ありがたいんだけど…でも、何でまた…」
「返事は？！」
「は、はい。よろしくお願いします」
疑問を口にする事も許されず、強引に頷かされたラズマを気の毒に眺める。だが、元々こちらと協力するつもりだった彼らに文句はないだろう。エフィルもウィミーネもイルファも、どこか腑に落ちないような顔をしながらも黙っている。
ふとずっと立ち尽くしたままのディオが気になって、目だけをそちらへ向けた。
「……ディオ、どうした？」
「え……」
彼は一瞬たじろぐと、少し宙に視線を漂わせる。それから、「なんでもねえよ」と一言だけ返してきた。
どう見ても何でもなくなさそうだが、それを問いただす前に彼はクリティスの傍を離れ、遠くの椅子に座ってしまう。全身からこちらを拒絶するような険悪な雰囲気を醸し出しているのでわざわざ聞き出すのも憚られ、仕方なくクリティスは諦めた。

二人の王子

日差しが橙色になり、暑さもだいぶ和らいでくる。
薄暗い部屋の中で、フィスカ・イーリスは椅子にもたれて瞳をつぶっていた。傍らで、灰色の従者が石像のように佇んでいる。
「…最近、あまり先の事が見れなくなったわ」
やがて瞼を開いたフィスカは、従者に語りかけているとも独り言とも判別の付きづらい声量で、そう零す。ややあって、従者がそれに問いを返した。
「先の事とは？」
「数日中に起きそうな小事は良く見るの。けれど、それより先の出来事がぱったりと夢に出なくなったわ。
今私が知りたいのはむしろそちらの方なのに、上手くいかないものね」
ふう…と悩ましげなため息をつき、サイドテーブルの上の水差しに手を延ばすフィスカ。すると従者がその動きを制し、代わりにグラスに水を注いだ。
礼を言って受け取り飲み干すと、彼女は再び黙想に入る。
「先が見えないのは、不安ですか」
重い静寂を破って、従者が再び問うた。
フィスカはしばらく黙想を続けていたが、やがて苦笑する。
「そうね――昔は、ずっと先の未来が見えても何の役にも立たないし、つまらないと思っていたわ。
でも、いざ見えなくなると戸惑うわね…」
そして少し間を置き、
「このところ、夢の最後は決まって同じ展開なの」
小さな声になって、語り始めた。
「夢の先を見ようとするといつもいつも、とてつもない光が私の前に現れて、包み込まれるのよ。

溢れんばかりの生と、溶けて消えてしまいそうになるような輝きに満ちた「何か」に恐れおののいて、先が見れなくなってしまう。そして、目が覚めてしまうの」

「生と輝きに満ちた何か…ですか」

おうむ返しに呟いた従者に、フィスカは微笑みを投げかける。

「長年夢見をしているけれど、こんなことは初めてだわ。わたしもまだまだ経験が浅かったのね」

しかし、すぐにその笑みを止めて目を開くと、

「……こんなことは言いたくないけれど…まるで、神か何かのようだった」

「神の存在に恐れおののいた、と？」

心内を探るような従者の言葉を、フィスカはきっぱりと否定した。

「いずれ…いえ。すぐにでもあのような光、はね除けてみせる。そして、必ずその先を見るわ。

その先には、きっと私の信じる未来があることでしょう」

席を立ち、窓辺に近づくフィスカ。西日は、今にも地平の向こうに零れ落ちてしまいそうなほど大きく、揺らめいていた。

（…あの光はまるで、南の国の太陽のような――）

「ここか…？」

分厚い衣服を身に纏い、人となりを判別できそうな部分をことごとく隠した覆面の男――アクス・ヴォールナ・フォーラスは、自分を照らし出す西日を避けるように民家の陰に潜み、じっと前方を伺っていた。

目の前には、この住宅街に住んでいる市民すら気にも留めていないような小さな家が、一軒建っている。少し古風なレンガ仕立てのその家は、持ち主が夜逃げして久しく、ずっと空き家になっているはずであった。

しかし、内部に人の気配がする。
（昨夜は勘づかれて追跡に失敗したが、もし、ここがそうなら――）
今突入すれば、イーリス大司祭を尋問することができるかもしれない。
アクスはぐっと地面を踏みしめ、前に進むために前傾姿勢を取った。
しかしそのまま、また動きを止める。
頭に浮かんだのは、数日前まで共にいた少女たちのこと。自分の存在を殺され、そして命をも奪われようとしていた日々を送っていた自分に、一緒に戦うと言って勇気を与えてくれた者たちのことだった。
そう、自分は独りではない。
「……」
アクスは、握っていた拳を解くと静かに踵を返した。
まずは、仲間と合流する方が先だ。それに、自分は「切り札」でもある。ここで姿を現しても返り討ちに遭ってしまっては、それこそすべてが水の泡になってしまう。
せっかくのチャンスだが、今は――
覆面の中で唇を噛み、空き家を離れて角を曲がった時だった。
「うわっ…」
いきなり人が飛び出て来て危うく衝突しそうになり、足を止める。
咄嗟に謝り顔を上げて、絶句した。
「これは失礼。もしや、「お亡くなりになられたはずの」アクス王子ではございませんか？」
目の前にいたのは、灰色のローブを身に付けた男。
イーリス大司祭の傍らにいつも付いている、あの従者。
「な……どうして――？！」
大司祭と共に、あの家にいるはずではなかったのか？まさか、あの家が隠れ家だというのは、自分の思い違いだったのか？
「大変申し訳ありませんが、わたしの元にご足労願えますか？
いやなに、王子様を煩わせることはございません。お目覚めになっ

た頃には、既に到着している事でしょう」
彼の言葉が終わる直前。突如、アクスの目の前を真っ暗な闇が覆い尽くした。
「こ、こ…れは…」
どこからともなく現れたその暗闇はアクスをあっという間に絡め取る。闇に身体を囚われると、今度は強烈な眠気が襲ってきた。まるで意識と身体が溶けていくような感覚。成す術なく眠りに落ちるアクス。
最後に呟いた従者の言葉を、彼が聞く事はなかった。

「まだあなたたちを、合流させるわけにはいかないのです。今はまだ…な」

2

フォーラス王国に来て、三度目の夜が来た。
その夜は特に蒸し暑く、寝付けなかったので、クリティスは勝手口の外に出て夜風に当たっていた。レストランの地下倉庫では、エリスティアたちが寝苦しそうに寝返りを打っているところだろう。
アクス王子は、未だ帰ってこない。皆夜更けまで起きて待っていたのだが、諦める者が続出し、結局寝入ってしまったのだ。
さして涼しくもない湿った風を受けて立っていると、後ろから地下階段を昇ってくる足音が聞こえた。振り返ると、
「あ、クリティスー」
身体の力が抜けるような声がして、月明かりの中にリシェルアの姿が現れた。クリティスが開け放していた扉をくぐり、そっと隣りに立つ。
「うーん、あんまり涼しくないかもー…」
不快そうに眉を下げて、可愛らしく小首を傾げるリシェルア。
「クリティスも、寝苦しくてここにいたのー？」
「ああ」
短く小声で答えると、彼女も「そう」とだけ応えて、後はじっと月を見上げていた。
まっさらな満月。雲も少なく、月が明るすぎて星明かりがかき消されてしまっているほどだ。明日も良く晴れることだろう。
「そういえば、」と、リシェルアが話し始めた。
「クリティスは、どうしてエリスティアと一緒にいるのー？」
何を意図した質問なのか捉えかねて、クリティスは眉をひそめた。
「どうして、と聞かれても…天空王に依頼されたからとしか」
「でも、あなた、他にも何か理由があるでしょう？」
はっと、一瞬呼吸が止まる。
隣りに顔を向けると、いつもの柔らかい笑顔はなかった。彼女の使

う炎の色とは正反対の、穏やかな青色がこちらを見つめている。
「どうしてそう思う？」
「エドルから聞いたわ。天空界で…ローグの森でエリスを助けた時、彼女と諍いがあったって。
それ以前にもあなたは彼女にこだわっている節があったし…」
青白い月明かりを反射して、一層澄んだ青色を瞬かせるリシェルア。
「彼女が創造主だと分かった時も、あなたはあまり驚いていなかった。きっと、神かそれに準じる存在だという事を予測していたのね？」
「……」
こちらの無言を肯定と取り、彼女は続ける。
「どうして彼女を追っていたの？どうして彼女と一緒にいるの？」
――――ああ。

忘れかけていた事を、思い出した。
けっして忘れていてはならないのに。

「――い、――」
「え？」
ふと零した呟きを、リシェルアがかろうじて聞き取って聞き返してきた。
クリティスは彼女の顔を正面に見据えると、今度ははっきりとした声で尋ねる。
「「黒い天使」というのを、知っているか」
「……いいえ、聞いたことないわー。
何かの伝説かしら？」
リシェルアが首を捻るのを見て、クリティスは「そうか」と小さく返した。
考えてみれば、まだ十五にもいかない彼女が知らないのも無理はないだろう。なにせ――五十年も前の話なのだから。

「それと、エリスティアとに何か関係が…？」
「……いや」
ゆっくりとかぶりを振るクリティス。
まだ訝しげに見つめてくるリシェルアに、今度はこちらから問うてみる。
「ところで、どうして私の事など聞きたがるんだ。少なくとも、お前とは何の関係もない」
「クリティスの事を、もっと知りたいから」
リシェルアは、再び真っ直ぐな瞳をこちらへと向けた。
「クリティスだけじゃないわ。本当は、ディオの事もエリスの事ももっと知りたい」
「どうせ、エリスを神界に送ればそれまでだと言うのに？
言っておくが、この仕事が終わっても、お前たちと慣れ合う気などはない」
「そうだとしても、知りたいの。
むしろ、あたしが一人になるために」
珍しく彼女は語勢を強めて早口に言い、すぐに少し俯いた。
一人になるために？
「今はまだ過去から抜け出せないけれど、このままじゃ駄目だっていうのはずっと前からわかってたわ。
だから、あたしは自分で動かなきゃ――」
その時、リシェルアの声を遮って、彼女が閉じた扉の向こうから物音がした。がたんと、木製の何かが動く音だ。
誰かが起きて椅子にでも座ったのだろうかと、クリティスはそっと扉を開いた。が、従業員控室に人の姿はない。
二人は目を見合わせると、夜風に当たるのを止めて地下へと戻った。
それから一応、皆が寝ている事を確かめ……
「……ディオがいないわ」
入口に立ったまま一人ひとりの寝顔を見ていたリシェルアが呟いた。
だが、地下室から外へ出る場所は二人が今降りて来た階段しかない

はずだ。だとすると、
「さっきの音は、ディオが厨房の方へ出た音か」
再び階段を上がり、勝手口とは反対側にある、厨房へ続く木の扉を見つめる。
「今から追いかければ、追いつくかもしれないわねー」
「…追う気なのか」
くるっと踵を返したリシェルアの横顔を見やって、クリティスはため息をついた。
「さっきも言ったでしょうー？」
彼女は、扉の取ってに手を掛けて微笑む。
「みんなの事、もっと知りたいの」
その固い決意を帯びた瞳に、クリティスは言い返す間もなかった。

「…こんな真夜中に、どこまで行くんだ、あやつは」
レストランを出てディオを追い、ようやく見つけて後をつけ始めたは良いものの、いつまで経っても止まらない彼の足に、クリティスは辟易していた。
こんなことなら勢いに任せてリシェルアについてくるんじゃなかったと今更後悔しても、既にレストランは遠い。
「おまけに、夜だからといって変装もなしにふらふらと歩きまわるとは」
「あたしたちも変装してないから、そこはどっこいどっこいだと思うわよー？」
「私たちは物陰に隠れて後をつけているから問題ない。しかし、奴は道のど真ん中を、警戒もせずにうろついているから困る。現に、私たちにも気付いていない」
ぼやいて、クリティスは前方に揺れる銀髪に目を向けた。淡い月明かりを浴びながら前を行く背中は、どこか頼りなく、儚げにさえ見

える。
やはり、先ほど白蛇教団の印を見た時から様子がおかしい。いつもであれば、ただ歩いている時でさえ常に不穏な気配を漂わせ、人を敬遠させるほどだというのに。
「あ…海だわー」
リシェルアの何気ない呟きで、クリティスははじめて、ディオと自分たちとが港に近づいている事に気がついた。微かに、波の音と潮の香りもする。
港ですることといえば、船に乗る事だ。だが、こんな深夜に動く船など漁船しかない。一体、彼は何をしにここへ来たのか。
しばらく様子を伺いつつ足を忍ばせていると、ディオは漁港のはずれにある、今は何もない停泊場で立ち止まった。
灯台やかがり火の恩恵も薄く、ただの暗闇の中から不気味な波の音が規則正しく響いてくるだけの静かな場所。その中で、彼は潮風に銀髪とストールをなびかせながら、北を見つめてぽつんと立ち尽くしている。
「何……してるのかしらねえ…？」
「まったくわからん」
彼が何をしでかすつもりなのか、一瞬たりとも見逃すまいと目を凝らし続けていたが、彼は棒立ちのまま、一向に行動を起こす気配がない。というよりも、むしろそうするために…漁港からの景色をただ眺めるためだけに来ているようにも思えた。
「海が見たかったのかしらー？」
「こんな、真夜中の海をか？つくづく奴の感性が疑われるな」
「感性は十人十色よー。真っ暗な海だって、独特の雰囲気があっていいわよー」
「ふん」
二人で他愛のない推測を語り合っている間も、ディオは微動もせずに佇み続けている。
まさか、一晩中ここに居続けるつもりなのだろうか。

吹きすさぶ潮風が身にしみて来た頃、リシェルアが、控えめなくしゃみを一つした。
「…戻るか？」
「うん…そうねえ。
ちょっと、眠たくなってきちゃったし…」
普段よりもさらに眦の垂れた彼女は、素直に頷いて立ち上がる。
ディオを置いて停泊所を離れると、クリティスはふと思い立って、尋ねてみた。
「で、奴の事について、何かわかったか？」
「うふふ。
意外と、海が好きって事がわかったわー」
暗がりの中でリシェルアの顔を覗きこんでも、いつもの笑顔があるだけで、その答えが本気なのか冗談なのかはわからない。
「…ディオもだが、お前も大概謎の多い奴だな…」
そして、あの女も、だが。
クリティスの独り言は、風と波の音にかき消されて、どこかへ飛んでいった。

南の国の夜明けは、まだ遠い。

3

アクス王子がカイ王子一派の情報を仕入れて帰って来ない事には、動きようがない。
クリティスたちは狭い従業員控室の中で、フォレストフォーラスの店員たちがふるまってくれた朝食を食べながら嘆息した。
「どうしちゃったのよう、アクス王子は…」
エフィルの小さなぼやきに、パンをもぐもぐ咀嚼しながら答えたのは、いつの間にか港から帰って来ていたディオ。
「逃げたんじゃねえの？」
「口に物入れながらしゃべるなっ！それに、そんなことあるわけないじゃない！」
「その根拠のない反論は、どっから出てくるんだか」
「あんたこそ、彼の何がわかるってのよ！」
いがみ合う二人を見て、誰かが「朝から元気だなあ」と皮肉を零した。
出会った瞬間からそうだったが、正義感の強いエフィルと汚い仕事も憚らず行なって生きてきたディオは、殊に馬が合わないらしい。
昨日からお互い、何かにつけては言い争っている。
「でも、本当にどうしちゃったのかな」
「探しに行きましょうか？あんな不気味な格好してるから、意外とすぐに見つかるかもしれないわー」
「ぶ、不気味って…けっこう直球だね、リシェルア」
柔らかい微笑みからキツイ言葉を吐いたリシェルアに対して、なれなれしく肩を抱いたイルファが苦笑する。
リシェルアを挟んで彼の反対側に座したエドルが、パアンと派手な音を立ててその手を叩き落とすのを見ながら、クリティスは口を噤んで考え込んだ。
「どうした？」

「いや…今のリシェルアの言葉が気になってな」
まるで何事もなかったかのように、きょとんとこちらに声をかけてくるエドル。クリティスは、未だにディオと言い争っているエフィルに向かって言った。
「アクス王子の格好、忍んでいるつもりなのだろうが、確かにかえって目立つ。
…もしかしたら、捕まったのかもしれん」
「「「ええええええええっ!?」」」
エフィルとウィミーネ、イルファが、驚愕の声を上げた。
「不気味って、一体どんな格好をしてたんだ彼は…」
呆れて額を押さえているのはラズマ。ディオはくるっと彼に向き直ると、あけすけに答えた。
「すげえ不審者」
「あんな格好してたら、確かに誰でも眺めちゃうわー。それか、わざと視線を反らすか…」
「あれで忍んでるって言われても反応に困るよな」
続いてボロクソにこき下ろすリシェルアとエドル。エフィルたち四人は苦い表情で絶句した。
「マ、マクレインさん…」
すがるように王子の元世話役に目を向けたイルファだったが、彼はゆっくりと首を横に振った。
「わたくしも、それでは目立つのではと一度進言させて頂きましたが…いつになくアクス王子がお気を強く持っていらしたので、そのお心意気を削ぐ気になれず」
「マクレインさんんんんんん」
責めるような声を上げるウィミーネに、マクレインは一言、「力及ばず申し訳ありません」と呟き黙ってしまった。
「た、助けに行かないと！」
食べかけの朝食を残し、大慌てで立ち上がるエフィル。しかしクリティスは、彼女の動きを片手で制してゆったりと紅茶のカップを口

に付けた。
「まあ待て。あくまでもこれは、証拠のないただの推測にすぎない。それに、捕まっていたとしても居場所が特定できない。牢屋はお前たちが先日壊したばかりだし、そもそも、奴らにとって「存在してはならない」はずのアクス王子を、人目につくような場所に拘束しておくわけがないだろう」
「じゃあどうするのよ」と、思考の行き詰まったエフィルが大層不機嫌に詰め寄ってくるのを再び手で制して、クリティスは一同を見回す。
「そうだな…ここは王子を待つのを諦めて、とっとと動き出した方がいいかもしれないな」
「王子が捕まっていたとしても、あてもなく捜し回るより、関係者に接触して居場所を吐かせた方が早いね」
ラズマも、スケッチブックと画材を抱えて頷いた。
「となると、目標はカイ王子ってことか？」
「カイ王子に近づくのは難しいだろうな。だが、イーリス大司祭になら近付けるかもしれない」
王位継承権があろうが無かろうが、カイ王子は一国の王子だ。居場所は当然城だろうが、そうとわかっていても警備団、近衛兵等護衛が厳しい。一方、イーリス大司祭は教会にも戻れず、かといって堂々と城にも居られないから、どこかに身をひそめているはずだ。また身をひそめる以上、護衛も少数でなければ目立ってしまう。
「ふうん。居場所さえ突き止めれば、イーリス大司祭をとっ捕まえるのは簡単ってことね」
「そうだ。…が、大司祭程の人物なのだから、少数と言えど護衛は腕の立つ者を選りすぐってつけているはず。
これはもう、各々気を引きしめろとしか私には言えん」
「大丈夫だろ。この人数で行けばなんとかなるって」
エドルがいっぱいになった腹を満足げにさすりながら能天気に応えるのを聞きつけ、クリティスは横目で彼を見下ろした。

「何を言っているんだ。さっきも言った通り、あくまでも「アクス王子が捕まった」という話は推測だ。全員で向かってしまっては、アクス王子と入れ違いになった時に困るだろう」

「…え、じゃあ」

「ここに残る者と、大司祭を捜索する者とに分かれる。残る者は王子と会うまで待機して、王子が帰ったらこっちに合流してほしい。王子がもし捕まっていたら、捜索するメンバーは情報を得次第ここに戻ってくること。

まあ、残るのは二、三人で良いと思うが…」

そう言って、クリティスはもう一度皆を見回した。

「じゃあ、僕は待ってるよ」

真っ先に片手を上げ、名乗りを上げたのはラズマ。

すると、エフィルが「は?」と怒鳴り声を上げた。

「わたしが行くんだから、あんたも行くのよ!」

「裏口から見た丘の下の景色がけっこう良くてね」

「つまり、絵を描きたいからここでサボっていたいってことじゃないの!こんな時に何言ってるのよ」

「君が行くから僕も行かなきゃならないなんて理屈、分かんないよ」

「そ、それはっ…ああもう!とにかく、あんたはあたしについてくればいいのよ!」

あー…

「わかった。ならこうしよう」

クリティスは、少々甘酸っぱい匂いのする言い争いに口を挟み、双方を交互に見た。

「エフィルとラズマはここに残る。そうすれば問題ないだろう」

「そうだよね。そもそも、エフィルが行かなきゃならないって理屈も変だよね」

「え、でっ、でもっ、わたしは――」

どもるエフィルの肩を、ラズマが軽く叩いた。

「まあまあ。君も最近気を張り過ぎてるから、ここはイルファとウィミーネに任せて、二人でちょっとサボっちゃおうよ」
「ふ、ふたっ…！？」
エフィルは「なぜか」顔を少し赤らめると、しおらしく縮こまって小さく頷いた。最後に、「し、しかたないわね」と言い訳をするように付け足しながら。
ちょろい。が。
「二人には…ああいや、エフィルには申し訳ないが、こちらからも一人置いていく。
はっきり言って、捜索には何かと邪魔なのでな」
クリティスは、ちらりとテーブルの端にいる人物を見た。
そして、なぜ名指しされたのかよくわかっていない、ぽかんとした表情のエフィルに耳打ちする。
「まあ、菓子さえ与えておけば邪魔はしないだろうから、あとは若いお二人で」
「ど、どどっどどどどういう意味よ？！」
目に見えてうろたえる青春真っただ中の少女はさておいて、クリティスは他のメンバーに号令をかけた。
「さて、私たちは王子と大司祭の捜索だ。
今更不満を言う者はいないな？いたら刺す」
「さすが氷海様、鮮やかなお手並みで。最後の脅しも含めてな」
いつものように天敵である月傷から皮肉が飛んだものの、この決定に不服を唱える者はいなかった。冗談のつもりだった脅しのせいではない、と思いたい。
「くれぐれも、命令が意に沿わないからと言ってだだをこねたり、つまらないからと言って勝手に商店街に買い物に出かけたりしない事」
「このいちごジャムおいしい！ねえ、どこのジャム？」
「自家製でございます」
「ホントに？！」

「…主に、そこで我関せずを装っている女のことを言っているのだが」
先ほどから口元に赤いジャムを付着させたまま、会話にも参加せずにパンをほおばっている自称創造主をもう一度睨んで、クリティスは低い声で唸った。
「もぎゅ？！」
「もぎゅじゃねーよバカ。お前、最初から全然話聞いてなかっただろ」
「はあ…朝から皆してこんなノリで、ホントに大丈夫なのか」
イルファの呆れ果てた声に、一同は思わず苦笑するのだった。

4

「アクス王子を捕らえた？よくやったわ」
朝だというのに相も変わらず薄暗い部屋の中で、起きたばかりのフィスカ・イーリスは、寝具の傍らに佇む従者に微笑みかけた。
「はい。大司祭が夢見を行っている間、このあたりをうろついていたようなのでご同行願いました」
「大司祭と呼ぶのは止めてもらえるかしら、クルト」
急に声色を突き放すような冷たいものに変え、フィスカはクルトと呼んだ従者を睨んだ。
クルトは動じもせず、「これは失礼」と感情の読めない声で応える。
それに満足すると、フィスカは枕に背もたれて話を続けた。
「さて、彼をどうしようかしら」
「フィスカ様の意のままに」
「そうね。このままひっそり始末してもいいけれど、先日の戴冠式の騒ぎもあって城も民も動揺しているから、彼を偽物として祀り上げて公開処刑を行って、鎮静化を図ることにしましょう。
また舞台に乱入されては困るから、彼の仲間たちはそれまでに…」
フィスカの表情が、大司祭と今まで呼ばれ慕われていた人間に似つかわしくない、歪んだものに変化する。
「承知いたしました。アクス王子の処分方法と警備をさらに強化する旨、カイ王子に伝えておきましょう」
淡泊に伝達内容を復唱すると、クルトはゆっくりと闇に消えた。文字通り、背負っていた霧のような闇の中に消えたのである。
「本当に不気味ね」
イーリスは、いつぞやカイ王子がイーリスの去り際にしたように、眉をいぶかしげにひそめた。
「教団も、どうしてあんな正体の分からぬ輩を囲っているのかしら。まあ、使えるから良いのだけれど」

そうして、シーツの隙間からするりと抜けて出ると、欠伸と伸びを一つずつした。

わずかな明かりの灯る廊下を足早に抜け、次期フォーラス国王候補カイは分厚い鉄の扉の前に立つ。

つい先ほど、イーリス大司祭の従者から「弟君を捕らえた」との報告を受けたばかりであった。大慌てで来たためか軽く息切れがしていたが、それを整えるのも構わずに、民衆の目を引かぬように羽織ってきたマントのフードを取った。

カイは、ものものしい扉を両手で開くと、すぐ目の前に現れた格子ごしから牢の中を覗き込む。その口から、驚愕とも嘆息とも取れる言葉が漏れた。

「…まさか、まだ生きていたとは」

「久しぶりだね」

牢の向こうからは、歓喜とも皮肉とも取れる声が返ってきた。

フォーラス王国の二人の王子は、一年ぶりに再会した。

「俺の部屋に置いておいた手紙は読んでくれたかい？」

「やはりあれはお前だったのか。

どこまで嗅ぎつけた？」

「どうかな。少なくとも、あんたが予測してるぐらいの事は知ってると思うよ」

アクスは浮かべていた笑みを消して、刺すような目でカイを睨んだ。

「…どうして亜魔界神教会の神父たちを手にかけた？そんなことまでしなくても、イーリスと手を組んでいるなら教会を黙らせるのは簡単だったろうに」

「そこは大司祭の望みでな。

僕としては、協力者が亜魔界神教会でも教団でもどちらでも良かったのだが」

「教団？」
不思議そうに問い返してきたアクスを、カイは鼻先で笑う。
「なるほど。そこまでは知らなかったということか」
「教団とはなんだ？一体あんた、何をしようとしている？！」
「僕の目的は、何も変わっていない」
カイは、息巻く弟を下目に見ながら言った。
「この国の王になる。それだけだ」
「…っ人を殺してその上に立とうとする人間に、本当に人のための国が作れると思ってるのか？！」
一瞬ひるむも、アクスは負けじと言い返した。
「あんたも、俺と一緒にマクレインの教育を受けて来たはずなのに、どうしてこんなに食い違ってしまうんだ…！」
「僕に王になる資格がないというなら、お前はどうなんだ」
ぐっ、と格子を握り、カイは同い年の弟を睨みつけた。
「気が弱くて周りに利用されてばかりで、結局存在まで消されて追い回されている。
自分の意見もまともに主張できず、動く事も出来ない臆病者に、誰がついてくるというんだ！」
「……」
押し黙ってしまったアクスを背にし、カイは踵を返して扉を開けた。
「兄貴」
切なく、どこか懐かしい響きで弟の声が追いすがるが、それを振り切り部屋を出ると、後ろ手に扉を閉める。
それから、冷たい扉に寄りかかってうなだれると、自分にしか聞こえないほどの小声で、ゆっくりと独りごちた。
「だから、僕は、国王になろうと思ったのに…なのに、お前は…」

「やあ。順調じゃないか、気持ち悪いぐらいに」
「なあにが順調だ。こういうのは「予定外」って言うんだ。まさかオレの管轄に引っ掛かるなんて油断してたぜ。ぜってー来ねえと思ってたもん」
朝の光の真っただ中、商店街に佇む喫茶店。二人の青年が屋外の席で、お互いまったく違う表情で顔を合わせていた。
澄ました顔の一人は、相手のふてくされた顔をさも楽しげに眺める。
「あれの気まぐれは、僕たちの理解の及ばないところだからなあ。ご愁傷さま。せいぜい上手くやってくれ」
「で、お前は一体何しに来たんだよ。まさか、からかいに来ただけとか言うつもりじゃねーだろうな?!」
「いやいや、応援と言ってくれ。適当に口を挟むぐらいしかしないけど」
「やっぱからかいに来たんだろーが!」
ぎろりと澄まし顔を睨む、ふてくされ顔。しかし相手の反応がないと見るや、背もたれに片腕をかけて足を組み、空に向かって大きくため息をついた。
「でも、向こうの反応は一応あったんだろう?君の目的はもう変わってるんだから、前の目的はすっぱり捨てて、そっちに専念したらいい」
「わーかってるって。今更前の仕事には執着してねえよ。あーあ。せっかく今まで頑張ってたのになー。散々タラシこんであそこまでオトしたのになー」
「未練たらたらじゃないか…」
コーヒーカップを持ち上げながら、澄まし顔は呆れ顔になって、ため息をついた。中身をおもむろに飲み干すと、きっちり自分のコーヒー代だけをテーブルにおいて、立ち上がる。
「じゃあ、がんばって」と言い残して去ろうとする彼に、ふてくされ顔はますますふてくされた。
「まじでお前、「応援する」だけなのな…」

「ああ、そうそう応援と言えば。
あの子…ほら、休暇中のあの子。昼にはここに着くかもだってさ」
ふてくされ顔は、大して感慨のない声音で「あっそ」と頷いた。
「そりゃよかった。
お前も、せめてここのメシおごるとかさあ」
「ああやだやだ。君はほんとに、欲望だけは強いんだから」
「うるっせー！もう帰れ！」
澄ました背中に、ふてくされ切った怒声が大きく飛んだ。

真昼の救出劇

フォレストフォーラスにエリスティア、エフィル、ラズマを残して、クリティスたちは朝食の後、早々とイーリス大司祭の捜索に出発した。

街の喧騒はいつも通りだが、警備の数はますます増えている。六人は集合場所を適当に決め、出来る限りの変装をすると、二人一組になって調査をはじめた。

「小さい国と言えど、隈なく捜すには手間がかかるな。目星はついていないのか？」

ペアになったイルファが、サングラスの向こうから視線を投げかけてくる。クリティスは流し目を返すと、モノクルの位置を直しながら思考を巡らせた。

「悪いが、ないな」

「地道に捜すしかないか」

「だが、国教の大司祭なのだから、知名度は国王と同じ程度だ。つまり、民の誰もが知っている。

いくら変装をしていても、どこかで噂は立っているだろう。もちろん、私たちもしかり…だが」

モノクルの中で紫の瞳を右に動かすと、クリティスは耳と神経を尖らせた。ほどなくして、イルファも同じくしゃべるのを止め、意識をそちらに向けていた。

皆と分かれた辺りから、数人に見張られている気がする。もしかすると、街に出てきた時から既にばれていたかもしれない。

クリティスは視線だけをイルファに向け、低く小声で問い掛けた。

「さて、腕に自信は？」

「美しい女性の前で、「ない」なんて言えるわけがないだろう。

世に聞く氷海様のお気に召すかはわかりませんが、お望みとあらば雷光の剣舞、御覧に入れましょう」

「住宅街の西はずれまで誘導する。あそこなら人が来ない」
小さく頷き合うと、二人は表面的な雑談を交わしながら住宅街へと足を運んだ。

「やべーやべー！めっちゃつけられてる」
口ではそう言いながら、あまり焦燥の雰囲気のない無表情で、エドルが耳打ちしてきた。
「どうする？撒く？」
「そうねえー…ここは人気が多いから、上手く撒けるかもしれないけれどー…」
リシェルアがちら、と不安げに、気配の向こうに視線を送ると、隠れるのが下手な警備兵が一人、慌てて身を隠すのが一瞬見えた。
「誘い込んでから眠ってもらうって方法もあるわ。撒いた後にまた見つかっても困るしー」
「じゃあ、とっとと潰すか！」
「そんなおっきな声出したら、気づかれちゃうわよー」
指をパキポキ鳴らしながら大声で気合いを入れたエドルの脇腹を、リシェルアは軽く小突いた。

港からほど近い無人の岩場で、ディオとウィミーネは既に追跡者との戦闘に入っていた。
「水のつぶてよ！」
呪文を唱え出したウィミーネの傍らで、魔力銃を撃ち込むディオ。
水の小さな弾と魔力の大玉が、兵士達に向かって乱舞する。
「くそっ、近付けん」
敵の一人が、いらだたしげに舌打ちした。

ディオの魔力弾は特に、相手に当たらずとも地面に着弾すれば四方八方にはじける性質のため、うかつに足を動かせないのだ。
「あんな銃の使い方をする奴なんて、初めて見たぞ！弾の性質もさることながら、それを発想する性質も悪い！」
「おいウィミーネ、俺達褒められてるぞ」
「わたしを一緒にしないでよ！」
そもそも褒められてないし、と突っ込むが、本人はまったく聞いていない。鼻歌でも歌い出しそうな表情で、銃弾をばらまいている。
「何をしている！近付けなければ魔法か銃で応戦しろ！」
「はいっ」
上官からの叱咤が飛ぶと、兵たちは口々に呪文を唱えはじめ、銃に魔力石を装着し始めた。
しかしウィミーネは、させじと唱え続けていた水弾の魔法を打ち止め、今度は虚空に印を結んだ。
「輝く光の結界は、我等に仇なす全てを阻み…」
「ちっ。低級汎用結界か」
隊を率いる長は、さっと剣を横薙ぎにして、味方の呪文を止めさせた。そして、口元だけの笑みを浮かべる。
「しかし、これで娘は攻撃できない。貴様一人の弾丸ならば、抜け切るのは容易だ。
さっさと投降すれば、罰はまだ軽いと思うがな」
ウィミーネは、結界を維持しながら苦々しく顔を歪めた。
低級汎用結界は、会得や使用方法が簡単な分、呪文を唱え続けなければ維持できない結界だ。しかも、今張っているのは対魔力用なので、物理的な衝撃には非常に弱い。ディオの攻撃を抜けて切り掛かられると、簡単に解けてしまう。
「はっ」
ディオが、鼻で笑うのが聞こえた。思わず目を向けると、余裕の中に狂暴性のかいま見える笑顔が　、潮風に吹き付けられる銀髪の合間から覗いていた。

彼は銃を構え直し、魔力増幅能力の切れた魔法石を岩の間に転がす。
素早く新しい石を装着すると、
「なめんな」
ゆったりとそう吐き捨て、引き金を引いた。
あまり速度の速くない、大きな魔力弾が一発飛び出す。兵士たちは左右に分かれてそれを難無く避け、地面に着弾するのを見つめた。
「なんだ？今のヘボい弾――」
敵の誰かが吹き出した直後だった。
弾の当たった地面が、いきなり爆発したのである。
先にディオがばらまいていた、はじける弾とはわけが違う。文字通りに爆発し、岩場が、避けた兵士たちの足元ギリギリのところまでえぐれているのだ。
「あ、ありえん…」
隊長がぽかんと口を開け、銃を片手で弄んでいるディオを見た。
「瞬時に魔力を練り直して、違う性質の弾に変えるなど…威力も、とても銃とは思えんほど強い。
銃の造りもさることながら、恐ろしい射撃技術だな」
「あれ？今度はけなされてる？」
不機嫌になるディオ。呪文詠唱中のウィミーネが、素直に褒め言葉として受け取れと突っ込めるわけもない。
「練った魔力が銃になじむまではトロいけど、安定すれば徐々に速度が上がるぜ。これが人間に直撃したら、どうなっちゃうのかなーっと」
月傷の銃士が再び銃口を前に構えると、警備兵は皆一斉に後ずさった。追い撃ちをかけるように、彼は自分と兵たちとの間に一発、先程の弾を撃ち込む。
「くそっ、退け！」
弾丸が爆発する前に、上官は部下たちに撤退を命じた。我先にと逃げ出す彼らの背後でまた、轟音を立てて岩場が砕ける。
警備団の姿が見えなくなると、ウィミーネは結界を解いてディオに

近寄った。
「ふー……。
わざわざこんな弾使わせやがって。とっとと尻尾巻いて逃げりゃいいものを」
銃を握った両手をだるそうに下げて、彼は大きく息を吐いた。
「すっ、すごいね、今の。
銃って、正直あんまり強い武器だと思ってなかったから、びっくりしちゃった」
「使う人間の実力によって、威力が目に見えて変わる武器だからな。そこら辺は魔法と似てるが、銃を使う時の魔力の練り方放ち方は、魔法の時のそれとだいぶ違う」
疲れた足を引きずって歩きながら、ディオは黒い愛銃の調子を確かめるように眺めた。
「しかも、」
パン、パリン、と立て続けに澄んだ音がして、銃から魔法石の欠片がぱらぱらと落ちた。砂粒ほどにまで砕けた欠片が海からの風に乗って飛んで行くのを見ながら、ディオは続ける。
「…とまあ、ああいう派手なのになると二、三発撃っただけで、質の高い魔法石でもこのざまだ。
相当訓練しないと思うような威力は出ないし金はかかるし。他にもいろいろ理由はあるけど、総合的に見ても魔法や他の武器に比べてリスクは高いから、使いづらい事この上ないのは確かだろうな」
「ふうん…」
あまり銃に触れた事のないウィミーネには、難しく聞こえた。ただ単に、魔力を小さく凝縮して放てばいいという話ではないということだけはわかったが。
「でも、そんなリスクの高い武器を、なんでディオは使ってるの？」
「んー？いや、物ごころついた時から持ってたってだけで、特に深い理由はないな。
妙な二つ名をつけられるぐらいには上達したし、今更他の武器に変

えるつもりもあんまりない。魔法はそもそも、種族的にも合わないし」

「物ごころついた時から…」

ふと、ウィミーネは左腕を押さえた。

ディオが立ち止まり、不思議そうにこちらの顔を覗きこむ。

「あん？怪我か？」

「う、ううん、大丈夫だよ」

ディオはイケメンだからそういう仕草されると照れるな、などと頭の隅で思いながら、左腕の「力」のことを、ディオたち五人に昨日の自己紹介の時に教えていなかった事を思い出した。

「…この常夏の国で、よく長袖なんか着てられるな」

押さえた左腕の袖を見て、ディオが顔をしかめる。それを「あはは…」と苦笑いで受け流し、ウィミーネはまた歩き出した。

「…物ごころついた時から…」

もう一度、ディオの言った言葉を繰り返すと、無理矢理顔を上げて振り返る。

そして、精一杯の笑顔で声をかけた。

「大司祭と王子を見つけなきゃ！早く街に戻って探索ー！」

「探索は後回しだ後回し！先に休憩させろ！疲れた！」

「もー、子供みたいにだだこねちゃだめだよー！」

2

リシェルアは動かなくていい。
商店街の裏通りの、誰も気に留めていないような行き止まり。高い塀の上に上がったエドルが、こちらの手を取って引き上げながらそう言った。
無言で首だけ縦に動かすと、リシェルアも塀から下を見下ろす。少しして、ゴミの散らかった不潔な道に、ばたばたと男たちが駆け込んできた。
「おかしい、ここにいると思ったが…」
上にいるという発想には至らないのか、いつまでも左右をきょろきょろ見回してしている警備兵たちが滑稽で、思わず微笑みが零れた。
「どうします？遠くには行っていないと思われますが」
「標的は男女二人のガキ。見かけた連中の中でも比較的簡単そうな奴らだ。今見失ってもまあ、なんとか…」
無意識か、上官を中心に兵士たちが固まって相談を始めた。
傍らの白い翼が、持ち主の心境を表すように膨らむ。戦いに入る前はいつもそうだ。軽い興奮状態なのだろう。
小動物が毛並みを逆立てているような感覚なのだろうかと考察していると、その背中がゆらりと動いた。
エドルが、塀を蹴る。
額を突き合わせている警備団の後ろへと、彼はしなやかに降り立った。音一つ立たないその動きは、まるで猫のようだ。小動物という例えも、あながち外れていないのかもしれない。
「では、一旦――なっ？！」
着地を見守ってから瞬きを一度した時、既に警備兵の一人がエドルの一撃を受けていた。相手は大きく吹っ飛び、後ろにいた二人を巻き込んで倒れる。
「ど、どこからっぐぅっ…！」

しゃべる隙も与えず、傍の兵士の鳩尾を蹴り飛ばすエドル。すぐさま腰からダガーを抜くと、そのまま次の兵士の斬撃を受け流した。
一瞬怯んだ彼の身体に、潜り込むようにして体当たりをする。
残りは、隊長とおぼしき者一人…かと思いきや、最初の兵士に巻き込まれて倒れた二人がよろよろと立ち上がっているのが、リシェルアの視界の端に映った。片方は魔法を使う素振りも見せている。リシェルアは少し考えると、口の中でごく短い呪文を唱えた。
「行く手阻むは炎の風」
「うわあっ」
「ぎゃっ」
たちまち二人の横から熱風が吹き、彼らは気を失った。
エドルがこちらに流し目を送るが、非難の色はなかったので胸を撫で下ろす。
「な、何っ?!」
部下の悲鳴に、上官が気を取られた。その隙をエドルが見逃すはずがない。
彼は地面を蹴って素早く近付くと、立て続けに斬撃を繰り出した。
上官はかろうじて迎撃したが、手元も足元も覚束ない。何度か剣戟を繰り広げると、エドルがいきなり胴に向かって蹴りを放った。
それを相手が避けた瞬間、凄まじい反応速度で距離を詰める「疾風」。腹に拳の一撃を入れてから、とどめの手刀を首筋に落とした。
つむじ風が通ったかのような、あっという間の一戦。倒れている警備団にも、何が起こっているのかわからなかっただろう。
「お疲れ様ー」
塀の上から、ダガーをしまう相方に声をかけるリシェルア。
「ま、これでしばらくは安全に動けるかな。他の隊に見つかったらそうもいかないけど…」
「にゃーん」
「……いきなり変な声出すなよ」
エドルは、何の脈絡もなく猫の鳴き真似をしたリシェルアを、怪訝

な目で見上げてきた。
「にゃーん」
「いいから、さっさと降りてこいって」
「にゃあーん」
「…もしかして」
真下に寄って来ると、呆れた表情を浮かべるエドル。
「降りれない…とか？」
「にゃー…」
リシェルアは、困った顔で頷いた。
「それならそうとはっきり言えっ。
あーもー、手間のかかる…」
「エドルが猫みたいだなって思ったから、猫の真似しただけよー。
にゃー」
「意味がわかんねーよ」
毛づくろいをするように頭を掻いた彼は、木に登って降りられない子猫を受け止めるために、両腕を大きく広げてくれた。白い翼も、柔らかく広がってふわふわと羽根を零していた。

「イルファ！」
「雷撃よ、敵を引き裂け！」
クリティスの合図に、イルファが呪文で応じた。
イルファの手から迸った稲妻は、二人を追って来た警備兵の先鋒を打ちのめす。
残りの者が銃を構えると、二人は彼らに素早く詰め寄り切り捨てていった。
ただの格好つけかとスルーした、先程のイルファの台詞は、どうも虚勢ではないらしい。鳴神の剣という業物になかなか見合った剣捌きをするので、クリティスは陰で、感嘆の溜息をついていた。剣舞

と言うには、少し大胆でがさつな動きだが。
「噂通りの優雅さだな、氷海。惚れそう」
おまけに、敵と刃を交えている最中にこの余裕の軽口である。
「断る」
先日と同じ台詞でふってやると、クリティスは最後の兵の銃をレイピアで弾き飛ばし、その鼻先に切っ先を突き付けた。
「殺しはしないが、仲間と同じように痛い目に遭いたくなかったら、さっさと消えた方がいい」
相手は歯噛みをすると、気絶した仲間を置いて逃げて行った。
二人は同時に剣を納め、周りの様子を視認する。人気のないところを探して住宅街の深いところまでやってきてしまったが、ここからどうするか。
「せっかくだから、ここから探索してみるか？」
「そうだな…本当は、商店街の裏通り辺りを探索しようと」
「おはようございます奥さん。
重そうなお荷物ですねー。お持ちしましょうか？」
「……」
そそくさと主婦らしき街人に近づき、声をかけるイルファ。話を打ち切られたクリティスは、いささか不機嫌に彼の背中を睨んだ。
「旦那さんは今日はお仕事ですか？あなたみたいな美しいご婦人がいつも隣にいるなんて、さぞかしお幸せでしょうねー」
「まあ、そんなお世辞を」
ナンパなのか聞き込みの手口なのか、いまいち判別の付けづらいトークで、イルファは主婦から話を聞き出す。一通り話を終えると、彼は荷物を婦人の家まで運んで行った。
「ここからさらに道二本向こうに行ったあたりに、家主が夜逃げした変な空き家があるそうだ」
戻ってくるなり、何事もなかったかのように淡々と、得た情報を告げる。
「ほう。鮮やかな手並みだな」

「ちなみにストライクゾーンは、十から四十まで、手広くカバーしております。
でも、クリティスだけは特別だ。例え五十を越えていようと、その麗しい容姿と優雅な剣舞の前には…あ、待ってくれ！せっかくの渾身の口説き文句なのにっ！」
戯れ言は聞き流して、クリティスは情報通りに、二本の閑散とした道を横切った。
「待ってって！せっかくかっこいいとこ見せたのに台なしじゃないか！」
「どこが。端から見ていたら、人妻を必死で口説いているだけにしか見えなかったが。
それより、あやしい空き家というのはあれか？」
クリティスは、そっと曲がり角の石造りのアパートの陰に身を潜め、視線の先を指差した。小走りで追いついたイルファが、「ああ」と頷く。
「煉瓦造りの赤い屋根。あれみたいだな……えっ」
「！」
二人は、目的の家の小さな窓を注視した。
硝子の向こうに、人影が映っている。近所の子供が入り込んでいるにしては、大きすぎる。
二人は近付いて確認してみる事にした。クリティスは扉に張り付いて聞き耳を立て、イルファは窓から中の様子を窺う。事情を知らない者が見ればすこぶる怪しい光景だろうが、仕方がないし辺りに人はいない。
「なんだ。この窓、磨り硝子になってて全然見えないじゃないか。そっちはどうだ？」
小声で残念そうに呟くイルファ。問いには返答せず、クリティスは扉に、エルフ特有の長い耳を立て続けた。
「……の地下に……従え…イーリス大…」

イーリス。扉の向こうから聞こえた声は、確かにそう言った。
「もしかして、当たりか？」
クリティスの顔色の変化を見たか、イルファが苦笑いを浮かべる。
「会話の内容はわからんが、イーリスという単語は聞こえた」
これは、突入して確認してみてもいいかもしれない。
横目だけをイルファへ向けると、彼は大きく頷いた。
「まず、他の連中を呼ぼう。算段はその後で」

3

六人は集合場所に舞い戻ると、クリティス・イルファの先導に従って住宅街の空き家に集まった。太陽は空の一番高い場所で、厳しい熱線を放っている。

「あれがそうなのか？」

確認するように問うてくるエドルに頷きだけを返し、クリティスは空き家に近づくよう、他の五人を促した。

「本当にイーリス大司祭が隠れていると決まったわけではない。ただ、その可能性が高いというだけだ」

「で、突入するってか。もし違ったらどうする気だよ」

突っかかってきたディオをうっとうしく見やる。

「どちらにしろ、ここは家主が夜逃げして、今は「持ち主が居ないはずの」家だ。関係のない人間がいたとしても、役所に届け出て正規に住んでいるわけではないのだから、ごまかす手立てはいくらでもある」

「ふん」

そっぽを向いてしまったディオにクリティスは首を竦めると、了承を得るように一度五人を見回した。そして、扉を三回ノックする。反応は、ない。

「すんませーん！役所の者ですがーっ」

エドルが半分面白がって、口から出鱈目を叫んだ。クリティスは非難するように彼を睨む。

「出てこねーな」

「役所の者だなんて言ったら、もっと警戒されて居留守使われちゃうに決まってるわよー」

リシェルアに咎められると、彼は身体を縮こませて黙った。

…仕方がない。

「やっぱり突入強行か？」

ふーっと、長い溜息をつくクリティス。そこからこちらの覚悟を読み取ったか、イルファが扉の前に立って指示を待つ。
すぐに突入するのもいいが、その前にできることもありそうだ。例えば家の周辺を調べることで手掛かりが得られるかもしれないし、近隣の住人にこの家について尋ねる手もある。
「いや、まだだ。先にやることが…」
それらを連れに説明しようとして、はたと、クリティスは動きを止めた。
「どうしたの？」
五人が不思議そうにこちらを見ている。だが彼らの声には耳を傾けず、長い耳が捕らえる遠くの異音をじっと聞き取っていた。
これは――爆発音？
「なあ、あれ…煙じゃね？」
よそ見をしていたエドルが、彼の目線より少し上を指した。その先には丘がある。そう、クリティスたちが活動拠点にし、エリスティアとエフィル、ラズマが留守をしているはずのフォレストフォーラスがある丘だ。
一同の顔色が、さっと青ざめた。
ウィミーネが翼をはためかせて宙に浮く。片手をかざして煙の出所を確認し、声を張り上げた。
「フォレストフォーラスから煙が出てる！あと、警備兵っぽい集団が下りてきてるよ！」
「エフィルたちは？！」
イルファが動揺のにじむ声で、怒鳴るように訊いた。ウィミーネはしばらく目を凝らしていたが、首を横に振る。
「わかんない…警備兵は装備でわかるんだけど。お客さんも紛れて下りてきてるから、見分けがつかないよ」
「くそっ」
苛立たしげに吐き捨てるイルファ。しかし、考えなしに助けに向かうほど無鉄砲ではないようだ。焦りを抑えようと、深呼吸をしてい

る。
「レストランの中で交戦している可能性もあるな」
だが、今から助けに向かったとしても、下りて来た警備団と鉢合わせてしまう。既に三人がフォレストフォーラスから脱出していた場合でも、すれ違いになってしまう不安があった。
クリティスは少し悩むと、空中待機したままのウィミーネに声をかけた。
「ウィミーネ。どのくらいの高さまでなら飛べる？」
「二階建ての家の屋根までなら上がれるよ」
「住宅街を、空から一通り見回って来てほしい。エリスたちが逃げてきていれば、まだ街の広場の方には出ていないはずだ。ただ、あまり目立つような飛び方はするな。警備兵に怪しまれては困る」
ウィミーネは強く頷くと、翼を一度大きく前後させて、一気に上昇した。それから空き家の屋根に降り立つと、周りを見回してから再び空を舞う。
ウィミーネの姿が遠くなると、クリティスたちは詰めていた呼気をゆっくり吐き出した。
「…ここでお前が続いて飛んでくれれば、効率が上がるのだが」
「いやだね」
視線と口調で、玄関先に座り込んだエドルを責める。だが、彼は取り付く島もないといった様子できっぱりと拒絶した。
「前から思ってたけど、お前のその翼はアクセサリーか何かか？」
「ふ、うふふっ」
ディオの皮肉に、リシェルアが耐えきれず噴き出した。吊りあがった目を彼女に向けるエドル。
「ご、ごめんなさーい。
でも、そろそろ言っちゃってもいいんじゃないかしらー？」
「えー？！」
相方の提案に不満声を上げるが、クリティスたちが納得いかない表

情を見せていることに気がつくと、眉を寄せてばつが悪そうに目を反らした。そして、篭った声で「言いたければ言えば」と言い捨てる。

了承を受けたリシェルアは、本人に代わって事情を語り始めた。

「あのね、エドルはねー……空を飛ぶのが、すごーく下手なのー」

少し間を置いて、ディオが「は？」と聞き返す。

「下手…って、どのぐらいだよ」

「んっとね、空に浮かぶことはできるんだけど、その状態を維持できなくて、すぐに墜落しちゃうのよ」

それは、空を飛んで生きる動物にしてみれば致命的な事だろう。翼人であっても、墜落してしまうとなればその度に怪我をする覚悟が必要になる。なるほど、迂闊に翼を使う事ができないわけだ。

「それは…確かに使えねえな」

ディオがまず納得して、二、三度頷いた。

「でも、翼人族ってかなり幼い頃から飛ぶ練習をするんだろう？」

「サボってたらこうなりましたが何か」

「…あ、ああ、そうなのか」

開き直ったか、ぶっきらぼうな低い声で答える翼人の少年。尋ねたイルファはその剣幕に押されて、それ以上訊こうとはしなかった。しかし、クリティスはそんなものに怖気づくこともなく、更に質問を続けた。

「もしかして、足が速いのは…」

「ああそうだよ！飛べない代わりに、足を使えるようにすればいいって考えた結果だよ！悪かったな単純で！」

こちらがみなまで言う前に、エドルは片足をダンッと踏み鳴らすと、声を荒げた。その横で、リシェルアがなだめるように頭を撫でている。

「実はエドルって、あたしと初めて会った時に、空を飛ぶのを失敗してるのよー。その時からずっと根に持ってるみたいで、今後一切使わないって言って。

うふふ、使わなきゃ上手くならないのにー」
「うるせー！」
ようは、惚れた娘に失態を見られたのが嫌で、二度と使わないと誓ったという事だろう。エフィルといいエドルといい、最近こういうのが多いなと、クリティスは遠くあさってを眺めながら思った。
すると、その視線の先から見覚えのあるシルエットが近づいてきた。
ウィミーネである。
「た、た、ただいまっ！！」
大急ぎで翼をはばたかせて戻ってきた彼女は、はあはあと短く呼吸を繰り返しながら口早に告げる。
「エフィルとエリスを見つけたの！道は教えたから、今こっちに…」
「着いたああ！」
ウィミーネの言葉が終わらないうちに、二人が曲がり角から姿を見せた。
こちらも相当走ってきたのか、しばらくまともに話せない状態だったが、徐々に落ち着いてくると、代わるがわる状況の説明をはじめた。
「警備団の奇襲を受けたのよ。それもいきなり」
「いきなりすぎて、食べてたスコーン全部置いてきちゃった」
「店員と客は全員逃がしたわ。マクレインさんも最後まで残るって言ってたけど逃がして、私たちも外に出て…フォレストフォーラスが爆破されたのはその直後だったわね」
「スコーンの後にはハイビスカスティー出してくれるって言うから、楽しみにしてたのにぃ」
「途中まで三人で逃げてきたんだけど、警備団の追跡がしつこくて」
「スコーンのミックスベリージャムはしつこくなかったのにね。案外あっさりで、でも味はしっかりあったよ」
「ラズマが囮になって、今あいつらを撒いてるところなの。一応目印は落として来たけど、…大丈夫かしら…」
「あっ、そういえばスコーンの前に食べてたシフォンケーキもねー」

「エリスあなた、さっきからうるっさいわね！お菓子の話しかしてないじゃない！」
一通り説明を終えると、エフィルはエリスティアと口喧嘩を始めた。
それを割り込むことで止めて、クリティスは話をまとめる。
「なるほど、わかった。あとエリスはしばらく黙れ。
エフィル、警備兵はどのぐらいいた？」
「てんやわんやだったから、よく見てないけど…ざっと五十はいたんじゃないかしら。」
「五十ぐらい…」
ならばエリスティアの魔法でなんとかなっただろう、と言いかけ、クリティスは胸中で舌打ちした。
エリスティアは、自分からその強大な力を使うことは決してしない。
おそらく「造物主」としての立場によるものだろう。彼女に魔法を使わせるためには、対価、所謂捧げ物が必要なのである。
そのことを二人に伝えるのを忘れていた。
「こちらの動きは完全につつぬけだな」
イルファが渋い表情で呟く。
「五十もの兵が、たまたまフォレストフォーラスを襲ったとは思えない」
クリティスたちが離れるのを見越して、まずは活動拠点を潰す魂胆だったのだろう。
「あいつら、意地でもオレ達を捕まえる気だな。なりふり構わなくなってきた」
「ふん。ならこっちも、とっとと尻尾を捕まえねえと」
空き家を横目に、不敵に笑うディオ。エフィルとエリスがつられるようにそこを見上げた。
「ここがそうなの？」
先程エドルに返したのと同じ返答をして、クリティスは続ける。
「まあ待て。ラズマが戻って来ないことには…」
そう言った矢先、道の向こうから、一つの足音がぱたぱたと駆けて

来るのが聞こえた。
「…来たな」
「ラズマ！無事だったのね！」
エフィルの歓喜の声に、ラズマがはにかみを返して感動の再会…そうなれば、良かったのだが。
彼は必死の形相で姿を表すなり、速度を緩めずこちらまで近付いてきた。息を整える間もなく頭を片手で抱え、痛恨の一言を放った。
「っごめん！撒き切れなかった！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9919g/

ワールドメイカー

2011年11月20日19時33分発行